

榛 嶺

創立80周年記念誌



群馬県立渋川高等学校



渋川中学校校歌

川窪千峰 作詞
平岡均之 作曲

Conbrio
Tempo di marcia

ほのほのやまのしずまりて あけしくにはら かみつけの
とーきむかしを そのままに すーめるみそらを かけりゆく
こがねの とーびーを しるしーとーし き
ぜん と たーつ や わ がーぼ こ う

渋川中学校校歌(旧制)

一、はげ炎の山の鎮りて
明けし国原上毛の
遠き往古をそのまゝに
澄める深空を翔りゆく
黄金の鷄を徽章とし
巍然と立つや吾母校

二、一州に野を展げたる
全き姿や赤城嶺の
高きに向ふ衝天の
吾等が意気を入知るや
雄飛怒海内に
輝け毛野の歴史こそ

三、いづ巖に激し淵となり
百河を合し東に
久遠の流れ大利根の
時代は移れ掲げたる
不変の理想目指しつゝ
極知れぬ行手かな

四、見よや榛名の嶺に懸る
日は燦爛の紅の色
燃ゆる血潮に若人の
生命も揺げ渋川の
丘も響かむ雄叫に
母校の栄誉いや挙げむ

(昭和三年十一月五日
御大典記念として作成)



渋川高等学校校歌

佐藤春夫 作詞
信時 潔 作曲

力強く 約112

じ ゆう ー の こ みん しゆの たみぞ あ
た ら し き ぶん か のく に に わ
れ ら い く わ か きい のち を あ
ま そ そ る お お きにも に て た
く ー ま し く つ ちにねをはり ひ
た す ら に し んりをさせり き
み ー み よ や しぶ か わ こうとう がっこうの け
ん じいっ せん い き た か し こ
ころすな お に

渋川高等学校校歌

一、自由の子 民主の民ぞ
新らしき文化の国に
我等生く若き命を
天そゝる大樹にも似て
たくましく土に根を張り
ひたすらに真理を指せり
君見よや渋川高等学校の
健児一千意気高し心素直に

二、まが学舎は榛名のふもと
居ながらに出るわしく
門を出て何を見たる
悠々と大利根流る
川波は光たゆたい
おごそかに希望に向かう
君見よや渋川高等学校の
健児一千意気高し心素直に

(昭和二十七年一月十五日)
校歌発表演奏会

新校歌制定の経緯

波高校歌『自由の子』の歴史は、昭和23年、旧制渋川中学校から新制渋川高等学校に変わるとき、心機一転、校歌も時代を反映した新しいものにしようという声当時の生徒会を中心に上がったときに始まります。その声に賛同し、協力してくださったのは当時職員をしていた宮本篤先生で、当時すでに大詩人であった佐藤春夫先生に作詞を依頼したいという生徒達の考えを実現してくれたのです。

佐藤先生にお会いした宮本先生は「生徒が集めた1万数千円のばら銭を袋に入れて『お恥ずかしいが、お金はこれだけしかありません。生徒達の熱意に免じて是非校歌を作ってください』とお願いしたところ、余りの世間知らずにびっくりなさった様子だったが、やがて感動の面持ちで『尊く美しいことです…お引受けしましょう』と承諾していただいたときは涙が出るほどうれしく有難かった…生徒達のあの純粋な気持ちが無ければ大下宇陀児氏の紹介があったにせよ決して引受けては呉れなかっただろう」(『渋高50年史・下巻』*1 107ページ)と、述懐されています。

そして、作曲者は佐藤先生の紹介で信時潔先生に決まり、昭和27年1月、ついに私たちが歌っている校歌が完成したのです。

新校歌制定記念発表会における生徒代表祝辞

群馬県立渋川高等学校新校歌制定記念発表会*2に、多くの名士と共にその祝辞を述べさせてもらえることができるのは光栄であります。終戦後早や7年、旧日本帝国は無謀なる侵略を起こし、その結果文化は破壊され、社会機構は混乱し、人心・動揺は筆舌以上のものがあったことは、我々、歴史的時代に、人生に於いて最も感受性の強い青春を過ごしてきた現代青年は、自らの経験をしみじみと味わって来た所です。社会的混乱は、いやがおうでも此の静しゆるなる学園にも染み込んで、学生の動揺も又、余りにも良く知って居る如き物でありました。

学生の動揺の原因は多々発見できるでしょう。併し渋川においては、校歌がなかったと云うことが一つの原因ではなかったでしょうか。

渋高として一つになることが出来なかったことは、色々な障害を引き起こしました。校歌がなかったからこそ、渋高を意識することも渋高団体生活の味を感じることが出来なかったのです。

今、我々は絶大なる喜びのうちに新校歌発表会に参加することが出来ました。この校歌は我々の手によって出来たものであります。この事実は永遠に我々の誇りとなるでしょう。この校歌は我々自身のものです。よって我々はこの校歌の精神にそむいてはなりません。諸君、校歌を口ずさんでください。渋高全生徒の熱と意気とが表れて居るではありませんか。

自由の子 民主の民 新しき文化の國に 我等生く ひたすらに真理をさして

諸君、さあ歌おう。声のあらん限り歌いましょう。この歌声は、日本至る所に居る我々先輩に通ずることでしょう。手を組み合って渋高生は前進していることを、この歌声に乗せて、我々の大先輩と無数なる後輩につげようではありませんか。

最後に、私は渋高生代表として、此の新校歌を作って下さいました佐藤、信時両先生に心から感謝致します。又、此の発表会に当たり、中央より我々のためにわざわざおいで下さった柴田、小林*3両先生に感謝致します。

さらに、此の日の感激の陰に数知れぬ努力を惜しまなかった縁の下の力もちとも云うべき先生、並びに生徒に心から感謝致します。

群馬県立渋川高等学校生徒代表 木暮 幸一

*1 45ページから50ページにも校歌制定の経緯が詳しく記されています。

*2 昭和27年1月15日

*3 東京芸術大学・柴田陸先生、女流作曲家・小林福子女史

榛 嶺

創立80周年記念誌

群馬県立渋川高等学校

校訓
質実剛健
堅忍持久



本校舎



正面玄関



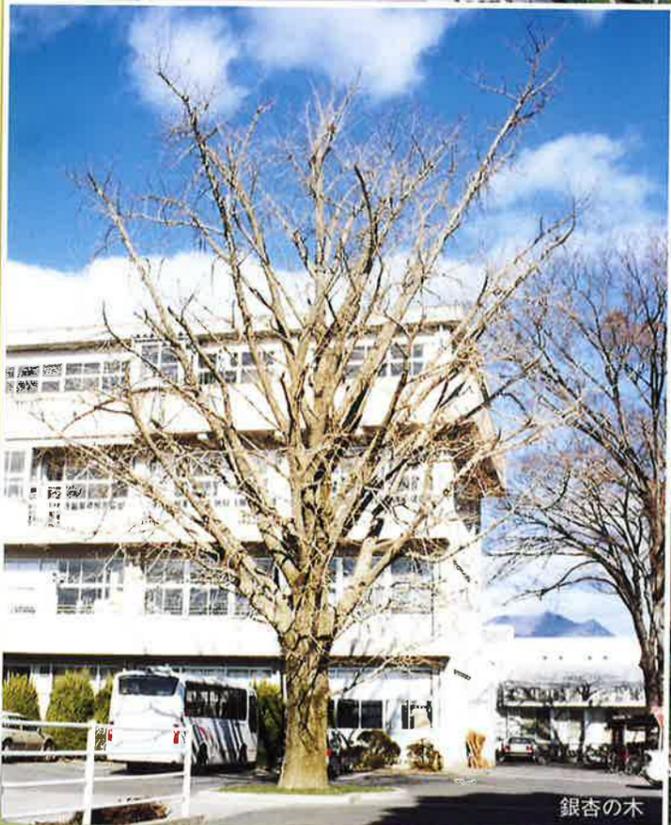
音楽教室



体育館・格技場・北校舎・部室棟

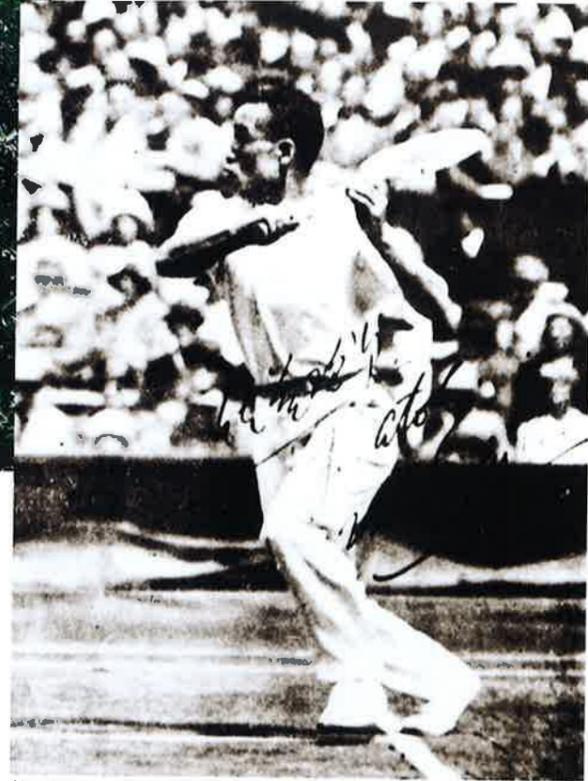


波高校草デザインの元
深山榛(みやまはん)の木の實



銀杏の木

佐藤 次郎 像



佐藤 次郎選手の勇姿

久遠之碑(全3卒久遠の会寄贈 昭和56年)



渋中・渋高校歌之碑(創立75周年を記念して)



堅忍持久の像
(旧21④卒久遠会寄贈 昭和63年)



創立七十周年記念式典



旧記念会館

創立70周年記念事業の一環
記念会館(榛嶺会館の増改築)



新記念会館



旧正門

創立70周年記念事業の一環
正門の移設



新正門



定時制
閉校記念式典



定時制閉校記念碑



定時制授業風景



定時制教室の灯り

歴代校長



初代
杉原九郎
大正9年3月～大正12年3月



2代
湯澤徳治
大正12年3月～大正14年9月



3代
樋口安一郎
大正14年10月～昭和3年3月



4代
中曾根都太郎
昭和3年4月～昭和6年7月



5代
高見勸次郎
昭和6年7月～昭和16年3月



6代
長岡禎利
昭和16年4月～昭和18年4月



7代
小林熊光
昭和18年4月～昭和20年3月



8代
平野武夫
昭和20年4月～昭和25年3月



9代
狩野道美
昭和25年4月～昭和33年3月



10代
井関保
昭和33年4月～昭和35年11月



11代
小池 愨
昭和35年11月～昭和40年3月



12代
竹園 一
昭和40年4月～昭和44年3月



13代
飯塚二郎
昭和44年4月～昭和46年3月



14代
梶原堅二
昭和46年4月～昭和51年3月



15代
水穴再喜
昭和51年4月～昭和55年3月



16代
佃和朋
昭和55年4月～昭和58年3月



17代
原 弘
昭和58年4月～昭和60年3月



18代
八高 進
昭和60年4月～昭和62年3月



19代
荒井英一
昭和62年4月～平成元年3月



20代
中村英一
平成元年4月～平成5年3月



21代
北爪藏次
平成5年4月～平成7年3月



22代
今井郁男
平成7年4月～平成9年3月



23代
板倉美知久
平成9年4月～平成12年3月



24代
富田祥男
平成12年4月～

歴代
同窓会
会長



初代
中曾根 満寿雄
大正14年卒(旧制 1回)



2代
角田 儀平治
大正14年卒(旧制 1回)



3代
狩野 半平
大正15年卒(旧制 2回)



4代
飯野 藤好
昭和2年卒(旧制 3回)



5代
北村 英吾
昭和4年卒(旧制 5回)



6代
真下 玄永
昭和8年卒(旧制 9回)



7代
佐藤 直
昭和9年卒(旧制 10回)



8代
神保(青木)俊二郎
昭和17年卒(旧制18回)



9代
川崎 富三
昭和19年卒(旧制 20回)



10代
大塚 修平
昭和24年卒(全日制 1回)



11代
石原 尉行
昭和24年卒(旧制 25回)



12代
堀江 明朗
昭和27年卒(全日制 4回)

歴代PTA会長

代	氏名	在任期間	代	氏名	在任期間
初	鈴木 国彦	昭和22年度～昭和28年度	15	橋本 光彦	昭和60年度～昭和61年度
2	増田 彦七	昭和29年度～昭和32年度	16	斉藤 修	昭和62年度
3	由利 太郎	昭和33年度～昭和36年度	17	石附 周行	昭和63年度～平成元年度
4	真下 玄永	昭和37年度～昭和40年度	18	角田 登	平成2年度
5	木暮 武太夫	昭和41年度～昭和43年度	19	都丸 博行	平成3年度
6	佐藤 直	昭和44年度～昭和46年度	20	堀口 靖之	平成4年度
7	浅見 四郎	昭和47年度～昭和49年度	21	福田 肇	平成5年度
8	川島 尚	昭和50年度	22	堀口 勝弘	平成6年度
9	川崎 富三	昭和51年度～昭和52年度	23	中野 具昭	平成7年度
10	大塚 修平	昭和53年度～昭和54年度	24	高塚 茂	平成8年度
11	榎本 清茂	昭和55年度～昭和56年度	25	梅山 政道	平成9年度
12	羽鳥 一郎	昭和57年度	26	鴻田 直宣	平成10年度
13	羽仁 素道	昭和58年度	27	梅澤 明	平成11年度
14	小淵 光平	昭和59年度	28	中村 勉	平成12年度～



刊行を祝して

創立80周年記念事業実行委員長(同窓会長) 堀江 明朗

我らが母校渋川高等学校の前身である渋川中学校が大正14年3月に、第1回の卒業生を世に送り、以来80年の風雪が校庭の桜の幹に歴史の重さと年輪を刻んだ。

渋高同窓会では平成9年6月7日の総会で80周年記念事業についてのお願いと決議をした。

平成10年6月6日の総会で「80周年記念事業検討委員会」を結成し、同年9月5日以降は「80周年記念事業実行委員会」として準備を進めてきた。

さらにこの機会に80年の歩みを記録にとどめるべく、記念誌部会を設けて記念誌を発刊することになり、記念事業の集大成として、このたび『榛嶺—創立80周年記念誌—』発行に至った次第である。

教育の府として母校渋高は永遠であり、これと共に存在する同窓会もまた同じである。80年の長きにわたり、先人諸兄が大きな遺産として血と汗で遺してくれた今日の渋高あるいは同窓会は、我々の手によってより立派なものとして発展させ、後に続く世代に遺し伝えなければならないのである。

この記念誌も次の100年、200年の第一歩、礎になるものと考え次第である。

大正、昭和、平成にわたる激動期を時代と共に生き抜いてきた渋高は、約2万人の卒業生を社会に送り出し、それぞれの分野での活躍が、渋高の評価を高め、母校発展の原動力となっていることは疑いのない事実であり、この80年にわたる卒業生の足跡を改めて想起することは渋高人として意義深いことであろう。

もとより同窓会の企画であるが、同窓会が卒業生と母校を結ぶ組織体であり、母校愛の下に個々の卒業生を結集して親交を深め、渋高意識を通じて母校を支援賛助することを目的とした団体であれば、この歴史をたどると共に過去の足らざるを覚えつつ21世紀にむかって全卒業生の結集を目指し、母校の発展を願って理想に邁進する同窓会でなければならない。

本誌が、80周年に当たり、温故知新の古訓にあるごとく、初心にかえって母校翼賛の情熱を燃やすために、何らかの裨益するものがあれば、望外の喜びである。

なお、本誌発刊に当たっては、記念誌部会員各位およびPTAそして事務局の方々、さらに編集を委託した上毛新聞社出版局の方々等々に多大な努力と尽力をいただき、その熱意により上梓できたものである。

ここに改めて各位に深甚の敬意と謝意を表したい。

終わりに全渋高関係者のご健勝とご多幸を祈念し、より多くの方々が全員参加の同窓会に結集されんことを心から希望して刊行の辞に代える次第である。



記念誌の刊行を祝って

校長 富田 祥男

このたび創立80周年を記念して『榛嶺—創立80周年記念誌—』が刊行されました。これを機に本校や教育の歴史をふり返ることは、来るべき90周年、さらには100周年という我が校の将来像を考える上で、大変意義深いものがあると考えております。

国土が狭く資源の乏しいわが国が国際的に現在の地位を獲得しえたことには、教育の力が大であったと、今日では誰もが認めています。しかしまた一方で、青少年の凶悪犯罪や社会的エリートたちによる不祥事などが頻発し、大きな社会問題にもなっています。

これらの問題への対応とともに、21世紀の国際社会の変動や環境問題を考えた場合、独創性豊かな知産産業や付加価値産業の振興を図ることが、日本にとって必要となってきます。ここにこそ、新たな学校教育が果たすべき使命があるのです。

そのために、学校自身がこれまでの横並び主義や偏差値中心から脱却して、教育の中身やシステム、教育課程などを見直していく必要があります。

創立以来、本校からは約2万名の卒業生が巣立ち、政・財界をはじめ教育・文化・スポーツ等各般にわたり、^{とらもく} 矚目の活躍をしていることはご案内のとおりであります。

80周年事業は、現校舎における最後の大きな事業となります。

県当局や同窓会関係各位等のご尽力により、本校は、平成13年度から現校地において、校舎の全面改築という大建築事業が始まり、15年度から、生徒たちは新装成った素晴らしい学舎で学ぶことになっています。

今回の記念誌は、創立70周年以降の年譜、同窓諸兄の母校への想い（寄稿文集）がその主たる内容であります。それは、まさに「渋高健児の青春譜」であり、北毛の要たる本校の「歴史書」ともいべきものであります。

この記念誌を手にしたとき、渋中、渋高で学んだ誇りや喜び、先輩・後輩とのふれあいがよき思い出となって沸きおこり尽きることはないでしょう。また、本校の歴史から今日に生かせるものを見いだしていただけるものと自負するものです。

終わりに、『榛嶺—創立80周年記念誌—』が関係各位のご尽力により、刊行の運びとなりましたことに心から感謝申し上げるとともに、同窓各位が今後ますますご健勝でご活躍されることを祈念いたし、ごあいさついたします。



時の流れ

PTA会長 中村 勉

創立80周年、心よりお祝い申し上げます。PTAで再び母校へ行くようになってから、校門に入って自然と足が向かうのはテニスコートです。在学中は、佐藤次郎の胸像の前でボールが見えなくなるまで仲間と練習に明け暮れたものです。30年以上の時間が流れた今、その当時の仲間の2世たちも同じコートで汗を流し、頑張っ素晴らしい結果を出してくれています。私と同期である篠原君の長男、和隆君が、中島君と全国インターハイで準優勝という活躍をしてくださいました。国体少年の部では、保科、岩崎、新保君たちが全国に渋高の名を轟かせてくれたことは、記憶に新しいところ。私も地域の少年団で小学生とソフトテニスを毎週やっておりますが、健康で情熱の続く限り、かかわりあっていきたいと思う今日このごろです。

大正、昭和、平成と時代が移り、その時々^{とどろ}の思想や世相は大きく変化してきましたが、校訓である「質実剛健」「堅忍持久」の精神は、「文武両道」を目標とする渋高健児の心の支えとして、80年の長い間脈々と受け継がれてきたのではないのでしょうか。

今日のめまぐるしく変化し続ける社会にあって国の内外でさまざまな問題が起こっています。国内にあっては、家庭や学校、社会において日本人としての資質が問われるような事件が多発しております。戦後日本は豊かになったといわれますが、真の豊かさとは何かを改めて考える必要があるように思われます。

これから何かをやらうと燃えている若人の表情はいいものです。平成4年に「県高校総体総合2位」に輝いた当時の生徒たちの表情は実に素晴らしかったでしょう。自分を信じて決断をし、表現をすることが若人の行動の原動力ではないでしょうか。未完成の若人には完成へ向けての活力が秘められています。校歌にあるように「自由の子」「民主の民」として大地にしっかりと根を張って、これからの時代を見据える、明るく懸命な渋高健児が、大樹となることをPTAを代表して在校生に望みます。

80年という歴史の重みは、教職員各位のご尽力と、同窓生、PTA皆様のご努力があったからこそと深く敬意と謝意を表したいと思ひます。今後も本校の発展を皆様と共に、心をひとつにして願うものです。

言葉整いませんが、『榛嶺—創立80周年記念誌—』の発刊をお祝いし、祝辞といたします。



祝 辞

教育振興会長 櫻澤 功

西暦2000年の記念すべき今年、『榛嶺—創立80周年記念誌—』発刊を心よりお祝い申し上げます。

一口に80年と言っても、在校生はもとより、卒業生、教師、関係者の心血を注いだ情熱と努力があったからこそ今日がむかえられたものと、敬意を表する次第であります。

私も、本校を卒業して早 30年余がたちました。思い起こせば私が入学した当時は、木造校舎とコンクリート校舎が同居し、風情のある講堂があったことを記憶しております。運動部の部室においても、入学当初は校舎東側の陽の当たらない薄暗い所に見ていましたが、校庭南に移転し、今では校舎北側に立派な建物になっているのを見ても、時の流れを感じずにいられません。部活動に精力を傾けた多感な青春時代を過ごした渋川高校も、今ではハード面、ソフト面において当時とは比較にならないくらい充実しているのを見ると感慨深いものがあります。

現在、PTA役員、教師の中にも、同年代や同時期と一緒に過ごした先輩、後輩が多数いて活躍していることは心強く、また、頼もしく感じている次第であります。

さて、21世紀を来年（あす）にひかえ、今日大きな構造的変革期を迎えております。学校教育においても教育改革が推進されており、生徒一人ひとりの「個性」や「能力」を尊重しながら、国際化、情報化、少子・高齢化等、社会変化や地球環境問題などの今日的な課題に主体的に対応できる能力を育成していくことが求められています。

北毛の雄、渋川高校においては、「質実剛健」「堅忍持久」の校訓のもと、時代に即応出来る人材育成にますます邁進することと確信しております。

先輩諸兄におかれましては、母校と後輩に対しまして特段の御支援、御協力をお願い申し上げます。

さらなる10年に向けてますます発展することを願い、関係各位に対し御礼と感謝を申し上げ、甚だ言葉整いませんが、『榛嶺—創立80周年記念誌—』発刊の祝辞といたします。

目 次

刊行を祝して	創立80周年記念事業実行委員長 堀江明朗
記念誌の刊行を祝って	校長 富田祥男
時の流れ	PTA会長 中村 勉
祝 辞	教育振興会長 櫻澤 功

母校への想い 同窓生からの寄稿文集	7
-------------------	---

北毛の雄 この10年間の歩み	103
学校の沿革	105
年表（70周年以降）	107
進路の記録	113
特別活動の顕著な成果	123
新聞記事・写真で見る渋高の活躍	133

資料・学校現況等	153
現教職員名簿	155
卒業生数	156
学校現況	157
指導方針	157
職員組織	158
生徒の状況	159
歴代生徒会長	160
学校施設	161
年間行事予定	162
入学者教育課程表	163
創立80周年記念事業実行委員会名簿	166

編集後記



母校への想い

同窓生からの寄稿文



草創期の母校

旧制中学1回卒 岸 恒 雄

この文章は、創立70周年の「渋川高校新聞」特集号より、御本人の意向に従い、そのまま転載したものです。

まえがき

昭和41年、この年は、私の最後の勤務校である太田高校の校長として、主宰した同校の創立70周年記念式典を挙行した年である。はしなくも、本年母校の創立70周年に当たり「学校新聞」に寄稿を依頼されたが、時の巡り合わせに感慨無量を禁じ得ないものがある。

「県立」渋川中学校の誕生

大正9年、郷土の先覚の卓見によって渋川中学校が開校された。当時の旧制中学が、大方前橋中学の分校として、或いは町立として開設されたのに対し、わが渋川中学校は、生まれながらにして「群馬県立」として設立をみたことは、地域の要望に応え、その存在に将来の期待をかけた証左に他ならないと思ひ、その識見に敬服したいと思う。校歌にある「黄金の鵝」は、斉藤勘二先生の考匠であり、白線三本の帽子は、共に生徒のシンボルであった。

恩師の面影と指導精神

初代校長として任命されたのは、杉原九郎先生である。先生は、時の群馬県知事大芝惣吉の嘱望によって、前橋高女校長から転補されたときいていた。東京帝大出の山口県人であり、体躯小なりと雖も眼光炯々として人を射るの観があった。今に伝わる校訓、「質実剛健」は同校長の唱導するところであり、私たちは、終始一貫、この指導精神によって教えられ、鍛えられた。常々、「君等は第1回生として渋中100年の基礎を創るのだ」と諭されておられた。三大節式典の日は、文官大礼服を着用して、校地の北東隅に在った公舎から北の正門を通り、「人力車」で出勤されたのは、蓋し偉観であった。

ところで、教科課程は一応編成されていたと思うが、先生は、数学も教えれば英語も教える。地理を教えると思えば図画も教えるといった有様であった。漸く専門教

科を専門に教えていただけるようになったのは、第3年を迎えた頃と記憶している。

第2代校長は、太田中学の教頭から着任された湯浅徳治先生である。太田中学第3回の卒業生で広島高師出身で数学を進んで教えられた。体軀堂々として圧するの感があった。指導法にも卓越されていたが、前校長と対照的に「学力向上」に意を注がれた。

私たちクラスの優秀な者が3人、四年修了で上級学校に進学した。即ち角田儀平治君が旧制仙台二高に、吉田徳次君が東京商大予科に、丸岡茂雄君が陸士予科にと4人受験して3人が見事合格した。進学率75%、當に県下随一の合格率を示した。近年母校の諸君が年々大学進学の結果を挙げていると聞き喜びに堪えないが伝統の発祥を思いうかべ一層の精進を願って已まない。

ここで大正14年卒業の年上級学校に進学した在京者によって組織された「止水会」に就いて触れておくことにする。在学当時、国漢の先生であられた本間健治先生が、攻玉社中学に在勤中機関誌「明鏡」と共に命名されたもので私たちが交互に幹事として編集に当たった。現在の東京支部の源泉とも言えよう。余白がないので詳細を記し難いが当時の恩師の名だけを挙げておこう。歴史の新井信示教頭、英語の徳山慶三郎、国漢の長尾輝景、生物の岸三郎、地理・図画の斎藤勘二等々（敬称略）。

入学試験と校友会活動

入学後、速くに組織された校友会は、それ自体生徒の自主的活動の母体と考えられ、会則の作製、運営等生徒をして為さしめたのは、今日思えば卓見と言う可きであろう。

初めての入学試験は、4月に行われたが、前橋、高崎、碓氷、佐波等から応募があり、定員50人に対し志願者200人に奈々とする厳しい関門であった。科目の一部に毛筆での解答を要求されたのも今は昔。寄宿舎の建設が成る迄、遠方出身者の一部は、真光寺の庫裡に厄介になったようであったが、その後高崎中学等に転校していった。佐藤次郎選手が入学してきたのは、それから2年後で、高橋新次君と組んで県下にその名をはせた。私は剣道部に属していたので、万能であった彼をして入部させようと勧請したことがあったが、成功したら彼はウィンブルドンには行けなかったことになる。先輩がいなかった私たちは、4年生を先頭に何時も県下大会、関東大会



県立渋川中学校（旧制）第1回卒業記念写真（角田眞三郎氏蔵）

に出場を余儀なくさせられたものである。

戦後、学校は中学から高校へと様変わりしたが、勉強も厳しかったが運動競技も豊かに楽しくやってきたと懐かしい思い出が残っている。

間借り教室と校舎校庭

凡そ、学校が新設される場合、既存の教育施設、寺院等を問わず殆ど間借りから始まるのが通例である。木造の渋川北小の東端3室がそれで職員室、教室、柔道場であった。待望の新校舎が現在地に建設されたのは大正10年で剣道場でもあった控室、寄宿舎、講堂等が整備されたのは、それに続いてのことであった。木造校舎の表玄関に植えた記念の松は、六本松から大八車で運んできたものであり、指揮官は古稻善太郎教官であった。吾妻川原からの砂利運び、校庭の石拾い等々遅く建設の仕事に汗を流したのも思い出である。

あとがき

私たち、入学を許可された者50数人、卒業した者四修を含め36人、大半を失い現存する者僅か11人。最年少17歳0カ月で卒業した私も既に82歳を過ぎた。記憶の衰え、記述に正鵠を欠くもの多々ありと思うが術もない。

先ごろ、教え子から一幅の軸が贈られた。「老驥伏櫪志在千里、烈士年暮壯心不已」と。諸君は、母校創立70周年に際会し、徒らに時の永きを誇ることなく、自己の大成に精進されるよう願うものである。

質実剛健をモットーに

旧制中学2回卒 堀口吉七

私の渋中時代は、大正10年から15年で、その間の世相は、第一次欧州大戦が終わり、国際連盟が発足し、入学した年の11月には、原敬首相が暗殺され、また日英同盟条約は終了となりました。次の年には、ワシントン海軍軍備制限条約、中国に関する9カ国条約の調印があり、次の年にはメートル法が実施されました。5年生の時、中国では孫文がなくなって、蒋介石が後を継ぎ、北伐が開始されました。国内では治安維持法が公布され、学校に陸軍現役の将校が配属されることとなり、衆議院選挙

法が改正され、男子普通選挙が実現しました。

渋中は大正9年創設されましたが、それまでは渋川近郷の人たちは高崎、前橋の中学へ電車等で通学していました。私の姉3人は高崎まで通学しましたが、私の時には渋川に中学校が出来たのでとても嬉しく、早速応募しました。募集人員50人でしたが、応募は200人近くあったと思います。入学者は高小修了者の方が小卒より多く、渋川町内より、近隣市町村の人たちの方がずっと多い構成でした。新校舎はまだ出来上がらず、北小学校東校舎東端の教室で授業が行われました。4月末には新校舎が落成し、8,000坪の広い敷地に木の香りもかぐわしい10教室2階建ての校舎、100坪の雨天体操場、校長官舎、済美寮と称する寄宿舎、そして軽石だらけの広い運動場に私たちは引っ越しました。校庭は樹木もなく、軽石ばかりで、人の行かない所は雑草が生い繁り、私たちは放課後、バケツを持って軽石を拾い、もっこをかきで整地作業をよくやったものです。雨風が吹くと、翌朝にはまた軽石がいっぱい出てきて、いつ果てるともなく軽石拾いは在学中の5年間ずっと続きました。

校長の杉原九郎先生は山口県の士族出身で、小軀ではありましたが、眼光鋭く古武士の風格を備えておられ、渋中を立派な校風を持った学校にしようと願われ、「質実剛健」をモットーに、渋中の将来は諸君の双肩にかかっている、と激励されました。そんな訳でわれわれ同級生の間に裸足が流行し、冬でも履物をはかない、裸足のまま校庭に飛び出してフットボールやテニスをしたり、数キロある学校への往復も裸足という人もいました。冬でも教室には暖房用の火鉢を入れないというのは、質実剛健の気風です。現代の女学生が真冬でも脛を出して歩くのとは訳が違う。

また、剛健旅行というのがあり、1年の時は学校から赤城山頂まで1泊で徒歩で往復をし、翌年には草津まで徒歩で往復旅行をしました。とても暑かった。最後の修学旅行は金沢でしたが、そのころは不況で修学旅行費の積立てが出来ず、旅行に行けない友人が幾人かいました。

先生で思い出されるのが、国漢、歴史の本間健治先生。温厚篤実、よく生徒の面倒を見て下さいました。私の家の裏にお住まいでした。漢文の長尾輝暉先生。書を書いていただき、今でも額に入れて私の家に飾ってあります。英語の徳山慶三郎先生。「イング」の愛称で生徒に親ま

れていました。博物、音楽、体操の岸三郎先生。好学の努力家で目をパチパチされる癖があるので「パチ」と言われていました。配属将校の古稻先生。軍事教練で厳しい指導をいただきました。皆、立派な先生だったと今思い出します。友人では敷島の狩野半平君、石北父君、今成善文君、亘博君等々忘れられない友ですが、皆、鬼籍に入ってしまった。1年後輩ですが、佐藤次郎君はスポーツ万能選手で、なんでもよく出来ました。特に庭球は同期の高橋新次君と組んでしばしば県大会で優勝され、渋中庭球部の基礎を築かれました。四修で早大に入学され研鑽されて世界的な大選手に成長されました。当時世界第3位で、デ杯戦出場途中、印度洋で夭折されたのは誠に惜しまれます。

卒業の時、徳山先生が、「誰かこの中で将来講堂を寄付する者がいるか」と問われた時、「ハイ、私がやります」との気概をもっていました。その時は黙ってこらえました。その思いはずっと後まで続き、昭和58年でしたか体育館が新築された際に、グランドピアノを寄付することが出来ました。講堂の寄付には及びませんでした。ひとつ学校にご恩返しが出来たと思っております。

私は91歳になりましたが、母校で鍛えられた質実剛健の根性を忘れることなく、今でも毎日会社に出勤し現役でやっております。友人たちは1期生で2人、2期生が私を含めて2～3人が残るのみとなりました。私たちは、その後続く後輩たちを含めて、大望、即ち、「金鶏輝く中学として、僕らは毅然と立つ也。我が母校」との気概をもってやってきました。多くの有能な人たちが戦争でなくなりました。後に残った私たちはへこたれることなく、先輩に恥じることはないよう頑張りたいと思います。戦争に負けたからと言って、いたずらにペコペコすることはありません。中国にどんなに脅かされても自己の信念を曲げず、毅然として自己の信念を主張する台湾の李登輝さんは立派です。あの方は若い時日本の教育を受けた方です。

日本人がしっかりすることが、アジアの、世界の平和と安定、そして繁栄につながることで。そのように生きることが、祖国のためになくなった戦友たちに対する私たちの役目だと思います。80年たった今、母校の庭に立つと軽石だらけだった庭はすっかり整備され、幾多の有能な青年たちを長い間育て続けた母校に感謝の念がわきます。これからもこの母校はしっかりと生き続けてゆ

くでしょう。80周年おめでとう。

最後に私の処世訓を記します。

- 1つ、親に孝行しなさい。
- 2つ、ちょっとやそっとのことで、へこたれない身体と筋金の入った根性をつくり上げなさい。
- 3つ、自分の仕事に没頭し、精一杯働きなさい。
- 4つ、無駄を省いて貯金しなさい。
- 5つ、御国のため、郷土のためには、分に応じた散財をしなさい。

毎日、朝夕、御先祖の霊に感謝し、以上の事を誓い、今日一日をしっかりと努めなさい。明日も努めなさい。明後日もまた、努めなさい。

半月、1カ月、半年、そして1年、2年、5年、10年、そして20年、30年、40年、50年、60年、死ぬまで務め続けなさい。

この行事、一隅を照らす立派な人生の一生です。

渋川高等学校と私

旧制中学4回卒 土屋敏夫

旧制県立渋川中学校に入学したのは大正12年4月です。定員が100名になった次の年なので高崎金古方面よりの入学者もあり友人も多くなり楽しい学校生活でした。

昭和3年、卒業と同時に群馬県師範学校本科第2部に合格し、昭和4年3月、同校を卒業し吾妻郡沢田小学校に赴任し、同校に2ヵ年訓導とし勤務。昭和6年4月より母校渋川小学校に転任し、昭和21年3月長尾小学校に移るまで同校に16年間勤務でした。その間6年生の担任が多かったので受験生も多く渋高に入学した者も特に多い。戦時中は高等科生を引率、関東製鋼工場に出勤2交替制で、午前の部2時間、午後も同じで、生徒は毎日2時間しか学課の勉強が出来ないので進学希望者は夜私の自宅で特訓指導し受験させました。

この間の教え子は現在それぞれ社会で活躍しています。

私の家庭では渋高卒業生親・子・孫の3代渋高の卒業生です。先般同窓会より表彰していただきました。

渋高同窓会の記念行事の際は、委員として募金を集め

るのに協力致しました。

平成6年には「洪中洪高校歌碑」の歌詞の揮毫を依頼され大任を果たささせていただきました。これは私にとって一生の記念となりました。

私は榛東中学校校長まで義務教育に41年間、退職後洪川教育委員会社会教育指導員2年、私立洪川家政専修学校講師として満10年間勤務で、70余年教育に関係しました。

榛名女子学園の篤志面接委員として平成11年まで30年間となります。先般法務大臣より感謝状と記念品を賜りました。

現在満89歳です。私は教育関係の一生でした。

現在も洪川市並木町に在住しております。朝夕犬を連れての散歩で洪高の周囲を散歩しております。私の入学当時若木だった桜も老木となりながらも、毎年美しい花を咲かせており、校庭での若者たちのテニスの音を聞き、運動場での元気な姿を見て懐かしく思っています。

終わりに洪高の益々の発展と人材の育成に努めて下さることを祈念いたします。

あのころの思い出

旧制中学12回卒 青木定吉

この度、創立80周年行事としての、記念誌の発行おめでとうございます。私は今年の1月で満80歳を迎えました。私の生まれたころ母校が創立されたわけです。当時の若かりしころの思い出を綴ってみようと思います。それはまず入学する時から始まります。当時は現在の63制と異なり、小学校6年生で受験したのです。合格発表は今のよう、卒業してからではありませんでした。6年生の授業中に先生から中学校を受験した者は今から発表を見に行ってくるように言われました。合格した者はよいのですが、不合格者は授業中の教室に戻るのだから、まことに決まりの悪い思いをしなければなりません。子供への配慮などということは、みじんもありませんでした。なんとか合格した私ですが、旧制中学校の5年間、無事とは言えませんが、どうにか卒業する事ができました。何故無事と言えないかの理由は、これからの在学中の思い出の一頁の中に記してみます。その前にうれしい

というか、恥ずかしいというか、在学中の最も忘れられない話をしてみます。それは、5年生の時です。当時は年に1回の校内弁論大会が催されていまして。その年の大会に私が選ばれたのです。寝耳に水と申しましょか、実に驚きました。他に優秀な生徒が多く居たのにもかかわらず、私のような者が何故選ばれたのか、一瞬とまどいました。しかし、先生に指命されたのですから断るわけにもいきません。それからは大会の前日まで演説の内容を夜も寝ずに暗記しました。忘れもしませんその演題は、「生計に苦しむ我が日本人」というものでした。昭和10年ごろの我が国は、軍備に力を入れ、国民の生活は不景気のどん底でした。その演説内容を全部申し上げるのには限りがありますので、最初の部分だけを申し上げます。——昔、仁徳天皇は、「高きやに登りてみれば煙立つ 民のカマドわにぎわいにけり」とお歌いになり、国民のカマドに炊き上る煙の多きを見て、国民生活の豊かになりしを、お喜びになった——。という話から始まりました。現在は、薪で炊かないで電気釜の時代だから煙が出ないのではなく、本当に生活が苦しく、不況の中にある事を幾つか例を上げて演説しました。その時私は最上級生で、しかも今で言う番長のような生徒でしたので、私自身さぞ落ちついて話ができると思い、堂々と壇上上がったのです。しかし壇上に上ると同時に目の前が真っ白になってしまい、何も見えず、足はブルブル震え、何を話したのか、全くわからずに終わってしまいました。幸い原稿だけは丸暗記してましたので、一語一句間違え事なく話すことができたので内容が大変良かったとの講評をうけましたが、この時程、人前で話をする事の難しさを痛感した事はありませんでした。今後は人前での挨拶とかまとまった話など絶対すまいと心に誓いました。しかしこの経験が後の私の人生の上に大いに役立つとは、この時は思いもしませんでした。今は亡き中里先生には心より感謝いたしております。

次に第2の思い出をお話します。当時本校の校訓は「質実剛健」でした。ために真冬でも生徒の上履き使用は認められませんでした。先生は革の上履きをバタバタと音をたてておりましたのを思い出します。当時の校舎は右に傾いて、柱で支えるほどの老朽校舎でした。廊下はすり減って、釘があらちらちらにとび出していたので、靴下は一日でボロボロになってしまいます。ために毎日靴下を履きかえなければならず不経済極りなし。では、

靴下を履かずに登校すればと思われるでしょうが、靴を履いて登校するのが校則になっていましたので、校舎の中では靴下かもしくは裸足で過ごす以外方法はありませんでした。靴を履かずに登校する場合はその理由を明記し、許可をとるために「下駄履届」を提出する事になっていました。故に下駄履き事件というストライキが起きたのです。質実剛健の範を垂れるべき先生が革の上履きを履き、生徒は靴下か裸足でいなければならなかったのも、当時の教育方針のひずみとでも申しましょか。結果、後に上履きの許可がとれることになったのです。

次に第3の思い出を話します。それは大根切り事件と申します。当時の教育は軍国主義華やかな時代でしたので、学校教育は軍隊教育の延長のようなものでした。教育の自由など全くなく、言論の自由も奪われたのです。食糧事情も大変悪い時代でしたので教育実習という名目で野菜作りをさせられました。それは良いのですが、われわれ生徒が下校した後に何者かに大根が抜かれるのです。畑の周囲は農家ですので近所の人が抜いたとは思われません。ここでは誰が取ったとは言えませんが、実習科目の収穫物を勝手に自分の家の惣菜に使われたのではいかげなものか、と抗議しました。しかし学校側に聞き入れられることはありませんでしたので、ついにストライキを起こし、授業放棄して八幡宮の裏山に集結し、私が生徒全員の中央に立ち、今回のストライキの理由を、アジ演説してたところを木陰で先生たちに聞かれてしまったので、当然のことながら首謀者が私であることが分かり、無期停学の処分になったのです。当時は停学処分など恥ずかしい行為だとされましたが、理由が正当だったので当時はもちろん、今でも決して恥ずかしいことだと思っておりません。ただただ時代が違っていましたので、今でしたら英雄扱いを受けたらろうと思います。今になって思えば若気の至りと申しますか、純真な若かりしころの良き思い出となりました。尚在学生諸君に申し上げます。私が在学中先生によく言われたことがあります。「若い時でなければ勉強する機会もなく、今勉強しなければ将来必ず後悔すると」——。全くその通りです。私は旅行が趣味で、この年になるまで各国を旅しましたがその時に痛感したのが、英語の時間にもっと一生懸命勉強すればよかった、ということです。外国へ行くと英語が万国共通語ですので、いずれの国のフロントでも英語は通じます。何か必要な物を頼みたくても、また聞き

たいことがあっても英語ならば通じます。つくづく英語を勉強しておけば良かったと情けなく思うことすらありました。今諸君の英語の勉強は、さぞかし高度なものと思います。この英語の科目を一生懸命勉強しておけば、将来必ず役に立つはずで。各国が交通や通信の発達と共に、身近になった現代だからこそも重要な教科であるにちがいないのです。もちろん他の教科も同様に、勉強することは若い時だけです。社会に出れば、勉強をしたくても、生活する事が急がしく、今の諸君のようにその事だけに時間をつかうことは不可能に近いことです。学生の時だけです。将来後悔のないように一生懸命勉強してください。何か説教がましくなりましたが、私のつたない経験から一言申した次第です。終わりに、母校の益々の発展と、学生諸君の益々勉強に精進されることを祈念してペンをおきます。

密かに眠っていたプロペラ

旧制中学16回卒 針塚友三郎

いまも、校舎の一隅に掲げてあるとのこと。

見たいと思ひながら、かれこれ40年になる。

はじめて知ったのは、昭和10年(1935)に、入学試験を受けたとき、理化室(物理・化学室)の天井のところに掛けてあるのを見たように思う。

当時、発動機も保存されていた。本校舎の東端から、北側の理科棟へ通じる渡り廊下のかど地に、1坪(3.3平方m)ほどの小屋に置かれていて、生徒によく見えるように工夫されてあった。大きくて、重たそうで、これが天に昇ったとは思えなかった。

終戦で復員し、すぐその10月に、理科の教師として母校に勤務した時、連合国軍最高司令部(GHQ)は日本国民に対して、「直ちに航空機の研究・開発・教育・製造・保有・飛行等のいっさいを禁止する」との命令を出し、教科書にあった飛行機の図は墨で塗りつぶすように指示され、模型飛行機のような小さいものから、展示してあるプロペラや発動機まで、すべて処分「せよ」であった。

校長から「片づけてほしい」と申し渡されたので、あの重い発動機を、鉄くずとして関東製鋼(現大同製鋼)

に、引き取っていただけるかどうか、事務室に問い合わせを依頼してみた。鉄くずとはいえ、当時は貴重な物資(家庭にある不用なナベ・カマまで供出させられていた)。とにもかくにも会社は、学校の困惑を理解され、さっそく数人の工員さんが、トラックに丸太を3本と大きな滑車を乗せて来校し、手ぎわよく搬出してくれた。

——世界にその名を知られていた「航空技術研究所」をはじめ、大学の航空学科も即時廃止され、航空・宇宙関係の試験・研究に携っていた学者や技術者は、職を失うことになった。またすべての飛行機製作所は閉鎖され、工作用精密機械は、連合国(戦勝国)への賠償に指定されるとかで封印されるなど、進駐軍の占領政策は、日本の航空宇宙産業に徹底的な打撃を与え、それが講和条約の締結まで、数年間に及んだ——。

米軍は、日本の飛行機を、どれほど恐れていたのか、余りにも報復が見え見えの措置だったように思う。

今日の航空宇宙産業の遅れは、この致命的な空白からの苦難な再出発を、余儀なくさせられたことに起因するものと考えられる。

さて、プロペラは合板製で、どうにかひとりで担げることがわかった。そこで、11月上旬のある暗い夜、肩に担いで自転車に乗り、市街地を迂回して、自宅(当時は中村に在住)の前の蔵へしまった。緊張と疲労のためか、冬でも汗が流れていた。

けれども翌朝、父に見つかってしまった。

「天下晴れて返す日が来るまで、秘匿したい」と理解を求めた。歳の差は40余年だが、そこは父と子。

「わかった隠そう」

ところが、その月末に父は脳出血で急逝。

やがて、昭和26年(1951)になって、講和条約が話題になり始めて思い出し、母に質したところ、父からは何も聞いていないとのことだった。

父ならどこへしまうのか、亡き父の気持ちになって探してみた。

薄暗い蔵の2階の天井に横たわる太い梁の陰に置かれてあった。それとわからないように、ハトロン紙で丁寧に包まれていた。

いよいよ条約締結の日、事情を初めて聞いた物理部の生徒の何人かが、学校から歩いて我が家に受け取りに行き、今度はムキ出しのまま堂々と、渋川駅前を通り、四ツ角、警察署前(当時は正林堂の西隣の店の西)、そし

て拍手で迎える部員に手渡した。

今日から占領下ではない——。

—— 渋中陸上競技部の黄金時代 ——

旧制中学17回卒 登坂 秀

私にとって渋中は当然進むべき学校であった。

昭和5年、私が小学校1年生の時、叔父二人が旧制渋中に在学していた。その翌年、上の叔父は早稲田大学へ進んだ。下の叔父が4、5年生の時、ある日の早朝、二人の教職員が私の家に来てきた。渋中4、5年生の間に不穏の空気があり、同盟休校に入るといふ。叔父がその首謀者の一人と目され説得に来たという訳である。この叔父の友達に庭球の佐藤三郎選手がいた。昭和8年県下中等学校および明治神宮大会庭球シングルスに優勝した方で、同じ石原の出身だった。改築前の豊秋小学校下庭のコンクリート壁に向かって練習している姿を知っていたので、渋中の庭球はすごいと思っていた。佐藤次郎選手の話と共に渋中は庭球で天下の有名校になっていた。

私が入学したのは2.26事件直後の昭和11年4月だった。昭和初期の恐慌の後でもあり、経済的にも大変な時期であった。農村経済更生運動が開始され、失業救済の農村振興土木事業が行われるような状況で、中学校への進学者はごく少数だった。私の出た豊秋小学校では男子50余人中、渋中2人、他校2人の計4人だった。渋川小学校は別として古巻、金島等農村部からの入学者は少なかった。そのころの定員は1学年100人だった。県内における旧制中学校や高等女学校は数も少なく、先生も生徒も大きなプライドを持っていた。

当時、北関東に大学は無く、群馬県では桐生高等工業学校、栃木県では宇都宮高等農林学校、茨城県では水戸高等学校が最高の学府だった。

卒業するまでの5年間は、戦争の危機迫る時であった。昭和12年夏、北京郊外で蘆溝橋事件が発生し、日中戦争が始まった。ヨーロッパは第二次世界大戦が始まり、日独伊三国軍事同盟が調印され、世はまさに軍事体制へと動いていた。満蒙開拓義勇軍として、小学校の同級生数人が旧満州に渡った。国家総動員法が公布され、警防団がつくられたのもこの時期であった。

学校の周辺は、真光寺や渋川小学校(現渋川北小学校)はおおむねそのままだが、学校の北側は一面の畑地から、今では渋川市立北中学校や住宅地になり、昔の面影はない。渋川町付近では、浅野カーリット群馬工場は既に操業していたが、関東電気精錬(現大同特殊鋼)渋川工場や関東電化工業渋川工場は、この時期に操業を開始した。

当時の渋中生は白線の入った学帽をかぶり、敬礼は拳手の礼と決められていた。柔道、剣道が正科にあり、軍事教練が必須の科目であった。生徒は服装や態度でいつも厳しい指導を受けた。制服は冬は黒、夏は霜降り、生徒の多くは渋川市中之町の富加津洋服店等で作った。富加津洋服店は学生服が専門で、男女共にこの店を利用する生徒が多かった。靴は学校のすぐ南の杵淵靴店で作った。腕の良い靴屋で、編上靴や陸上競技用のスパイクシューズを作ったり、靴の講釈を聞いたりして懐かしい店だった。教科書、参考図書、文具等は正林堂書店か峰岸書店だった。正林堂は運動着やテニス用具のようなスポーツ用品も扱い、下校時に何となく立ち寄り店でもあった。

当時の学校教育で特徴的なことは、中等学校以上の学校に、軍事教練が教科として課せられていたことである。現役の陸軍将校が配属され、学徒の資質向上と国防能力の増進ということで軍事的基礎訓練が行われた。

この配属将校制度は、戦争が間近になって始まった訳ではない。大正11年軍備縮小計画にのっとり、時の陸軍は関係各省と協議し、大正14年4月、陸軍現役将校学校配属令が制定された。この制度は大学、高等専門学校、中等学校等すべての学校に適用された。配属将校のいない学校の卒業生は、軍隊に入ってから幹部候補生になれなかった。つまり他の特別な教育を受けなければ、将校や下士官になれなかったわけである。教練の成績によって士官適、下士官適が決められていたとも言われていた。

1年生になると38式歩兵銃が各生徒に渡された。この銃は当時陸軍が使っていたもので、一年生の身体には少し大きく重く感じられた。そのため特に身長の高い生徒には騎兵銃が渡された。この銃と帯剣の装備で各教練から部隊教練まで、一通りの訓練を受けた。

高学年になると実弾射撃訓練が行われた。八幡神社の裏山で、今の県立青翠高校のあたりだ。標的に向かい、

左眼を閉じ、静かに引き金を引いたあの衝撃……。学校教育で実弾射撃の訓練をするなど、今考えれば何と恐ろしい教育であったことか。

県下中等学校全校が参加する大演習では、一回は箕郷町から高崎市方面へ、一回は尾島町から太田市方面へ出動し、実戦さながらの訓練を行った。

5年生だった昭和15年の晩秋、県下中等学校鍛錬行軍に参加した。渋中からは生徒10人の参加だった。百キロ行軍とも言われ、コースは群馬県庁—玉村—新町—藤岡—吉井—富岡—安中—高崎—県庁前。途中雨に降られる悪天候の中を夜を徹して進む強行軍だった。志気を鼓舞するが如く軍用機が飛来した。大した疲れも感じなかったが、これも質実剛健、堅忍持久の渋中精神のなせる業か。

渋中入学後最初の授業が体操だった。運動帽を持参するのを忘れていた。体操教師は川島先生だった。帽子を忘れてきた者に罰としてグラウンド一周が課せられた。一周は私が一番速かった。名前を言えと言われ「登坂です」と答えた。高源地かと聞かれた。叔父二人も陸上競技部だった。早速部員となった。とにかく陸上競技が好きだった。

1年生の時にベルリンオリンピックが開催された。夜、蚊帳の中でラジオ放送に耳を傾けた。田島直人選手が三段跳びで優勝。西田、大江選手の棒高跳び、村社選手の10,000_m、5,000_m競走での活躍にじっと聞きいった。陸上競技の記録映画「民族の祭典」は、その後何度か見たがああ感動は忘れられない。

入学後はじめての大きな行事は、開校記念日の全校マラソンだった。上級と下級でコースは違ったが、卒業するまでに全校生徒が5回走ったことになる。上級生は学校—中村—八木原—小倉—行幸田—学校の道順だった。当時は自動車の数も少なく、麦畑の中を白いユニフォームが長い列を作って走った。真光寺のゆるい坂道が身にこたえたのは私一人ではないだろう。

教育の方針が勉強だけでなく、今以上に心身の鍛錬に力を入れていた時代だから、学芸会などもあったが、年中行事といえば体育関係のものが多かった。春の陸上競技大会をはじめ武道、庭球、相撲大会等が開かれた。

運動会は11月2日と決まっていた。赤城、榛名、妙義、白根の各団は、赤、青、黄、白の各団旗のもとに優勝を争った。選手団の対団リレーを最後に競技は終了するが、

そのあと、軍装した5年生が校庭の東西に分かれ、銃火を交えながら突撃戦をもって運動会を終わるといったものだった。

当時の運動部は部の数は少なかったが、各部とも県内では強い方で意気盛んだった。中でも陸上競技部の活躍はいつも注目され、県下中等学校大会では優勝か準優勝で輝かしい伝統を誇っていた。渋中陸上競技を県下一に育て、黄金時代を築いたのは川島菊五郎先生である。

私が3年生だった昭和13年、県下中等学校陸上競技大会では、4、5年生の上級は準優勝、3年生以下の下級は優勝し、総合で優勝となった。この原動力は3年生の活躍だった。1,500m競走の栗原高次君、走り高跳びの佐藤茂樹君の優勝をはじめ、同級生の諸君が各種目に上位入賞した。栗原、佐藤両君は、この年埼玉県長瀬で開かれた関東中等学校大会で、抜群の成績で優勝し、新聞のスポーツ欄を飾った。

この年、川崎市で開催された全国年少者陸上競技大会では、佐藤君が走り高跳び2位、福田實君が110mハードル2位、原沢富一君が400m競走3位、登坂が三段跳び4位だった。この大会は、今の中学生大会のようなもので、年齢制限があり、社会人も参加できた。400mリレーにも出場したが、さすがに全国大会、予選で最下位だった。

昭和15年、5年生の私は陸上競技部主将だった。この年の県下中等学校大会では、栗原君が1,500m競走1位、原沢君が400m競走1位、佐藤君が走り高跳び1位のほか入賞者が多数いた。私は三段跳びで2位となってしまう肩身の狭い思いをしたが、それほど渋中の競技水準は高かった。

当時も駅伝やマラソンに人気があったが、紀元2600年記念団体競走はこの年だけのものだった。その昔、新田義貞の旗挙げにちなんで、太田—前橋のコースを、スタートは走者1人、途中で走者が順次加わり、最後は10人でゴールした。太田からは長距離のエース栗原君が走った。私は駒形駅前から加わり県庁前まで走った。

昭和16年3月、私たちは卒業した。進学する者、就職する者、進路はまちまちだったが、2、3年のうちにほとんどの者は軍隊に入り、戦場に向かった。終戦となり、戦地から還った私は、大勢の同級生が戦死していることを知った。特別攻撃隊で南の海に散った都所静君をはじめ、今は亡き学友の姿が思い出されてならない。

昭和11年から16年まで。何事につけ厳しい時代だったが、楽しく過ごすことのできた5年間の渋中生活は、私たちに限りない力を与えてくれたと思っている。これからも若さを失わず、頑張りたいと思っている。

—— 私の目から見た現代渋川高校生 ——

旧制中学18回卒 神保俊二郎

私はかつて運輸関係の企業に奉職していた。その会社が某路線バスの通勤・通学の定期券を発売しており、月末近くになると、渋川市内の高校から、前橋・高崎の在学高校生が大勢定期券の購入にやって来た。

それぞれ学校の制服を着用していたので何処の生徒さんであるか判るのであるが、それぞれその学校のタイプと言おうか、校風というか、就学している学校が分かるような気がした。2、3人で揃って購入に来社し、係が券を作っている間に、渋高の生徒、渋工業、渋女、西校生等々が待っている間の態度・会話にそれぞれ特徴があり、何校の生徒であるか大体的見当がついた。例えば二人の友人と定期券が出来るのを待っている女生徒は、洗練された服装と方言の少ない言葉ではあるが、賑々しくて前橋のMスクールの生徒であることが分かる。地元N校の女生徒は華やかさは変わらぬが渋川地方の言葉丸出しで、少しも飾るところなくあっけらかんに声高で話したり、面白そうに笑っている。渋川女子高の生徒でこの路線バスを使う人は、ほとんど榛名山麓の地域から渋川に通学してくる人なので、育った環境と農村地帯であるために普段使っている言葉を無意識に出す生徒も多かった。教室や商店に買物等に立ち寄る時は、丁寧な言葉遣いになるが、気の許し合った友との語らいにはつつい、上州弁のベェベェ言葉が出てきてしまうようだ。渋川市内のK校の生徒はこれも大変明るく、明朗な態度の人が多いうように感じた。

わが渋川高校の生徒たちの私の受けた印象はどうだったろうか。

渋高生二人揃って購入しに来て、お互いの会話が他校の生徒と比べてすこぶる少ないような感じがした。顔を見合わせて会話することも少ないし、ただただ頼まれた定期券が出来上り、現金を支払って帰るとい

いようである。

券を扱う事務の女性も「渋高の人はおとなしいですね」と言っている。私がこの状況を知った時に脳裏をかすめたのは、渋高の生徒たちは受験勉強に追われ、疲れているのではないだろうかということであった。今一緒にいる友人も同じ大学を受験するかも知れないとなれば、簡単。「君は僕の敵だ」との考えも出てくる。「話をして僕が君を利させるのはいやだ」という狭い気持ちをもって

いるのではないだろうか。確かにこの当時の渋高生は県内でも上位にある進学校であった。2、3年生が夏休み中から、進学塾の夏期講習に参加する生徒も多いたとか聞いていた。1年くらいの浪人生活はいとわないう気風が漂っていたということも聞いた。上級学校を受験をするということは、合格というレッテルを受けることによりわが人生の行方がほぼ決定付けられるということが言えると思う。

世間的に人の目から見て、経済的にも、地位的にも恵まれ、人のうらやむような環境にいる人に「君は恵まれた生活で、羨ましいよ」と言ったら、そのご当人は「私はあなた方が遊んだり、旅行して若い人生を楽しんでいた時に、脇目も振らず、夜の時間も惜しんで勉強していたのだから今の環境は当然の事と思っています」と明るい顔をして言葉を返したということを知ったことがある。然しその人は今は同級生同志で仲よく寄り合い、楽しい仲間同志の付き合いをしているということである。

私は約60年前の旧制中学卒業である。当時の同級生は昭和12年4月に102人入学したが、毎年4月に組編成替えがあったために同級生全員、姓から名前、出身地迄も知悉していた。これは中学生生活で、お互い切磋琢磨することを心掛けていたからであった。読み書きの知識を身につけるだけならば独学でも、通信教育でも、勉強すればよいのであるが、独学と学校教育の差異は、お互いに腹を割って話し合い、意見を闘わせ、時には長時間、端から見れば、口論のように見える場合の討論を行えるか否かにある。己の非は友に質させ、友に間違いあらば、真実を知らせ、お互いに正しい人生を歩むための研鑽をし続けたのである。言い換えれば学校は将来の、生涯の友を選ぶのに最適の場である。それなのに友人を敵視するような狭い心の持ち主であってはならないのである。

現在の高校生活は3年間。350人の友人の内から話し合える友を探し求めるのは非常に難しい環境にあると思

うが、友と語らい、笑い、また時には涙を流し合っ

ての生活が人生80年の間にどんなに大切なものか、よく噛みしめてみて欲しいものである。昭和7年に始まった満州事変から支那事変へと戦争に向けて、日本の国民生活は徐々に疲弊して行く時代に中学生を送り、卒業の年は大東亜戦争に突入した時であり、国民精神発揚・国家総動員法の施行等々国家を挙げての戦争遂行の時代となってしまった。そのため在学中には農家への救農・救護。食糧増産のための学校農園の開墾、手伝い等々に刈り出された時代であったが、進学組と、家庭就職組とに別れていても組との間には何の屈託もなく、お互いの友情は深く育まれていた。2泊3日の赤城種畜場への勤労奉仕・草津白根山への泊まり掛けの笹の実採集作業、秋には民泊も兼ねての軍事演習訓練等々、勉学を志した学校生活は極端に減らされたものだが、友情の絆は余計に強まり、深まって行った。星空の下、友と互いに身の上を話し合う機会は非常に多かった。学習の時間は少なくなっても、反面に得られた友情の固さはの学校生活の一番の収穫であったと今も深く信じている。

私の家は並木町北小通りであるので、朝夕、小・中・高校生の通学路に当たるが、朝はほとんど全員が忙しく登校するので、肅々とまた黙々と、学校へ向かって急いでいる。帰校時は三々五々、渋高生ばかりでなく、工業の生徒も、また北中の生徒も3年生くらいになると体格も宜しく、高校生並みの人もおり、高校生と見間違えるようなので、この人が何処の生徒か分かり難くなった。特に夏季は、白シャツと軽装の為に分らない。前述したように、黙々とした人もおるが、またにぎやかに道いっばいに広がって下校する人たちもあり、何の屈託もなく楽しそうに話し笑っている。友人を“君は僕の敵だ”と思うような沈鬱な顔をして歩いている人も少なくなった気がする。私が会社で定期券を扱った当時より20年近く経過し、渋川地区全体の高校生が皆明朗になってきたのならそれに越したことはない、と思っている。

以上は私の個人的見解ばかりで感じた事柄を述べたものであり、現在の在学の高校生諸君から「そんなことないよ」と反論されることが多々あると思っている。多くの人から反論されることを願って、あえて思うがままに筆をとった次第である。

俳句と私

旧制中学18回卒 木暮剛平

私は50歳を過ぎてから、文字通り「50の手習い」で俳句を始めた。沢木欣一先生の句に心ひかれ、先生が主宰されている『風』という結社に入会させていただいて20有余年。句作にふけったり、良い俳句を読んだりしているときは、仕事のしがらみ、人とのしがらみから解き放たれ、それにひたすら集中できる。俳句は生きるあかし、心のオアシスとして、いまでは私に欠かせないものとなった。

もっとも、50になって突然、俳句に興味を覚えたわけではない。きっかけは、旧制渋川中学2年生のときだった。教科書に載っていたのが、与謝蕪村の有名な一句、「春の海ひねもすのたりのたりかな」——これを先生が級友に音読するように命じたところ、彼は間違えて「ひねもすの、たりたりかな」と読んだので、クラス中が大笑いになった。その後、彼には「タリタリ」というニックネームが付けられた。みんなが「おい、タリタリ君」と呼ぶ。そんなことがあって、俳句というものはすごく楽しいものだな、という印象が私のなかに強く残ったのである。

社会に出てからは仕事も忙しく、俳句との付き合いは途切れたが、それでもずっと関心は持ち続けていた。そして、50歳になって俳句にやすらぎを求めようになったのである。こんな素晴らしいものと出会えたのも、旧制渋川中学時代の友人、「タリタリ君」のおかげである。

『萩一枝活けし書斎や古稀迎ふ』

タリタリ君に音読を命じたのは、国語・漢文の高野弘先生だった。私は高野先生に2年生から5年生までの4年間、主任教師として担任していただいたが、先生はまだ30そこそこの若さで、とても厳しい方だった。私たちは俳句だけでなく、芭蕉の『奥の細道』も暗記してしまうようにと命じられたりした。おかげで文学に興味を持つことができたのだから、こんなにありがたいことはない。すすめられて国木田独歩の全集を片っ端から読み、全巻を読破したのも懐かしい。小田原にお住まいで、神奈川の県立高校長を最後に引退されたが、私が小田原に

近い茅ヶ崎に住んでいる関係もあって、親しくお付き合いさせていただくことができた。残念ながら10年ほど前に亡くられたが、そのとき、先生が愛読されていた限定版『源氏物語』を形見分けにいただき、いまでも大切にしている。

茅ヶ崎海岸では毎年七月の早暁、寒川神社の大神輿を先頭に、近郷の神社の神輿40基が集まって、乱舞しながら海に分け入る勇壮な浜降祭が行われる。ぜひ一度、一緒に見物にゆきましようと話していたのに、それが果たせなかったのが心残りだ。厳しかったが、優しい先生だった。「若いうちに勉強しなさい」と口癖のようにおっしゃっていた声が、いまでも聞こえてくるような気がする。

『海に入る神輿鳳凰羽ばたけり』

もう少し高野先生の話が続けよう。私は座右の銘は何かと聞かれたとき、「行不由徑」と答えることにしているが、この「行くに徑によらず」という言葉も、渋川中学時代に高野先生に教えていただいたものである。その意味は、外を歩くときには裏道や抜け道を通らずに、堂々と大通りを行くということ。表の道は、たとえ回り道に見えたとしても、平らで正しい道である。これに対して、一見近道のように見え、変化に富んだ魅力的な道に見えても、小道というものはいつかは行き詰まってしまう。つまりは大道を歩めということを教えているのである。

この言葉を高野先生に教わったとき、聞き忘れたのか、それとも失念してしまったのか、出典が不明でずっと気になっていたのだが、後年、それは『論語』であることが判明した。論語はご承知の通り、孔子が議論し答述した言葉を記録したもの。そのなかにこれは子游の言葉として紹介されている。子游が武城という町の長官になったとき、孔子が「信用のおける人物を得ることはできたか」と尋ねたところ、子游は「澹台滅明なる者あり。行くに徑によらず。公事にあらざれば、未だかつて儂の室に至らざるなり」、澹台滅明という男がいますが、彼は常に大道を歩むことを心がけていて、公務のとき以外は私の部屋にもやってこないほど公明正大な人物です、と答えたそうだ。ここから転じて、公正なこと、行為に表裏のないことを意味するようになったという。

私はこの言葉を、いつも忘れないで、自分の行動を決

めるときの指針としてきた。常に王道を行こう。小細工は弄せずに、まっすぐに正々堂々と。これは経営者としての立場にも通じるところがあり、しばしば私の判断を助けてくれた言葉でもある。

『砂漠にも峠ありけり雲の峰』

話は前後するが、私は勢多郡赤城村に生まれた。三原田尋常小学校から旧制渋川中学に進んだが、赤城村から渋川までは片道6*。その道を徒歩で、あるいは自転車で通学した。いま自動車で通ると、なだらかで平坦な道に感じるけれど、実はこの道には相当の起伏がある。厳寒期、上州名物の空っ風が吹くなかを、逆風について通うのは決して楽なことではなかったが、このとき鍛えた足腰のおかげで、その後、病気らしい病気をしたことがない。しかも私はこの通学の道で、四季折々に移り変わる故郷の自然を、しっかりと脳裡に刻むことができた。春には黄金色のエゾタンポポの群生に出合い、初夏には紫色の清楚な桐の花に見とれるなど、自然の美しさを心ゆくまで堪能したのである。

また、学校ではよくテニスをした。渋川中学は日本庭球史上、不世出の天才プレーヤーといわれた佐藤次郎選手を出した学校で、テニスは「校技」といってもいいほど盛んに行われていた。そんな環境のなかで私もテニスに熱中し、旧制高校では選手としても活躍した。会社に入ってからテニス部に所属したりしたが、年を取ってからはテニスからゴルフに転向している。かつて実業団対抗ゴルフで、ハンディ18で個人優勝したのもいい思い出だが、これも渋川中学時代にテニスで身につけた技術が、プラスになっているのかもしれない。

石川啄木の歌に「ふるさどに入りて心傷むかな道広くなり橋も新たらし」というのがあられるけれど、東に赤城、西に榛名、南西に妙義と上毛三山を望み、南は関東平野に向かって開ける風光明媚な赤城村の景色は、いまでも昔のままである。思えば私は、自然に抱かれて育ち、自然に鍛えられた。俳句をひねっていても、脳裡に浮かんでくるのは故郷の自然である。そんな感傷にひたることができる故郷を持つことは、何にもましてありがたい。

『呼応して蛸鳴けり母の国』

生まれ育って19年。郷里を離れて、渋川中学の同級生たち10人と、旧制新潟高校の受験に出かけた。私の目指

す文科の競争率は14倍。いま思っても、大変な難関であった。雪の降りしきるなかを、鈍行列車は新津・亀田と停車し、やがて新潟に到着する。この駅名を逆から読んで、級友一同、愕然とした。

「ツイニ ダメカ タガイニ」——みんなそろって討ち死にかと、しょんぼりしたことを覚えている。幸いに全滅とはならず、二人が合格。私もそのうちの一人として、生き残ることができた。

時代は戦争に突入した直後。しかし、米どころ新潟は食べ物に恵まれていた。私は相変わらずテニスに熱中しながら高校生活を楽しんだのだが、東京や京都といった都会の学校に進んでいたなら、とてもこうはいかなかっただろう。荒海に浮かぶ佐渡、砂丘が二重三重に山をなして続く雄大な景色、「砂丘に続くグミの道」と寮歌にも歌われた美しい寄居浜。文芸春秋の社長になられた池島さん、日本鋼管の社長をされた山城さんなど、諸先輩との出会い。東京に出るまでの2年半の新潟生活は、渋川時代とはまた一味違った青春を、私に与えてくれた。

『止みてまた降り来る越路時雨かな』

私にとって、句作は自分のなかに隠れている創造する心を磨くことである。そして、物事の核心は何かを見抜く目を養うことである。そこにあるものを眺め、そこに潜む本質を確認する。それは経営の判断にも通じるものであると、私は思っている。

私が携わっている広告の世界では、広告効果の50%から75%はキャッチフレーズの力であるとよく言われる。そう思って広告を見ると、良いキャッチフレーズには俳句調のものが多く感じるのだが、これは少しひいき目に過ぎるだろうか。俳句の五七五のテンポとリズムが、広告のキャッチフレーズに適しているように思えない。「言葉多くは品少なし」と言ったのは種田山頭火だが、短い文に思いのたけを込めて語るこそ、コミュニケーションの基本ではなからうか。

私も俳句を趣味として、やがて4半世紀になる。いま、その入門の動機を振り返ってみると、広告人として「言葉の感性を高めることができた」という願いが、心のどこかにあったように思う。私が参加している結社の主宰者・沢木先生は「俳句は単純、新鮮、そして余情深く」といわれる。難しい言葉はごまかしがきく。知識や教養をひけらかそうとすると臭くなる。観念的で通念に汚さ

れた言葉は、人の心に響かない。単純に、新鮮に、そして深い余情。これは私の目指す生き方そのものでもある。俳句はそのときどき、私と私の仕事を支えてくれた。そんな素晴らしい俳句に親しむことを教えてくれたのは故郷の自然であり、渋川中学の友であり、教師であった。いま私は、そのすべてに深く感謝している。

『青き串木の芽田楽賞けり』

こがねの鶴を

旧制中学19回卒 嶋村忠夫

私の卒業当時は1学年が2クラスで東組と西組に分かれ、合計の生徒は100人くらい、つまり1組が50人内外だった。私は西組で、5年生だけは別校舎で静かに(?)学習できた。

私たちの担任の先生は高橋渉先生で英語の先生だった。私は学習成績は悪く、特に英語は駄目だった。高橋先生はネクタイをよく変えてこられ、「これはね。その日の天気に合わせているんだよ」と話された。当時としてはおしゃれだったかも知れない。私たちは先生のアダ名を「マッコウ」とつけた。マッコウ鯨に似ているということで、高橋先生と呼ぶ人はほとんどいなかったと思う。「マッコウ」で通っていたのだ。生徒の中には職員室に入ってアダ名で呼んでしまったという笑えない話もある。背は失礼ながら余り高くはなかったようだが、さっそうと歩いておられた。

東組の先生、担任は木野内先生でアダ名は「アチャコ」と言われた。両先生とも先輩がつけたのだと思うのでお許し願いたいし、今でも私たちには「マッコウ」「アチャコ」で通っている。このアダ名はけいべつしているのではなく、むしろ親しみをもっているのだからで非常になつかしい。アチャコ先生には私を含めて第二人が教えてもらったので、嶋村君とか嶋村とか、私の担任でなくてもよく覚えていて下さってうれしかった。ちなみにアチャコ先生は、漫談師だったかのアチャコによく似ている風貌豊かな先生で、授業が楽しかった物理の先生である。

もう一人有名な先生に岸三郎と言われる博物の先生がおられた。温和な怒ってもコワくない方だった。岸先生

のあだ名は「パチ」であった。同窓会員名簿によると、大正9年から昭和36年まで渋中に在職と記録されている。半世紀近くもおいでになったということだろう。ある時悪友が、ドアが開くと黒板ふきが落ちる仕掛けをして岸先生の来るのを静かにまっていた。悪友たちの思惑どおり、見事、毛のうすいパチ先生の頭に当たったが平然としておられた。ニコニコ笑っている様子だった。先生にすれば私たちは子、いや孫のような存在だったのだろう。教室がうるさくなるとよく白墨をそのうるさい生徒に向かって投げた。お年の割には(?)命中率がよかった。蛙などをよく解剖した。気持ちが悪かった。

5年卒業の年になると、期末試験の結果が廊下によく張り出された。記憶も遠くなるが、多分模造紙を横に半分に分けてつなぎ、一番から順次書いてゆく。成績のよい10人か20人は大きい字で、その他は小さい字で、多分最後の成績も書いてあったと思う。「やってくれたな」というので悪ガキの生徒たちは思いを募らせ、ある日その紙を跡かたもなく破いて捨てた。ひどい悪意というものでなく、つまらないものを張っていただいたものと思ったのだろう。私も破いた一員だったかどうか、それは言わないことにしよう。ところが先生もなかなか頭がいい。ある日突然その成績順位一覧が旧木造の体育館の我々の手の届かない高いハリにはりつけてあるのだ。「いや、たまげたな」と言って悪童どもは校舎の裏から長い竹の棒を持って来て背をのぼし、それを引きずり降りし破いて捨ててしまったのだ。先生と生徒のイタチゴッコはそう長くは続かなかった。先生は降参したのだ。おとがめはなかった。生徒の中には残念だったと思った者もいたかも知れないが、大方の生徒は拍手をしたものだった。それから私たちの在学中はなかったと思うが現在の状況は存じない。

さかのぼって4年の時、5年生がとんでもないことを考えだした。校舎の裏の高土手に大部分の5年生が腰を下ろし4年生一人一人に歩き方の悪いものを全員で見せて指導するのである。私は右肩があがった歩き方をするので、少し気取っていると思われたのだろうか。何回か歩かせられた。「気をつけー。前へ進め」という号令がかかる軍隊調に2、3人ずつ歩くのだ。5年生は興味半分だ。「先輩」の誰かが「嶋村よし」というと私はその広場(?)から帰れるのだ。私に「よし帰れ」と言ったのは、多分田部井緑郎先輩だったような気がする。

その後日談だが、田部井さんは師範学校に進学し私も師範学校に入学したが、その時も同様なことがあり田部井さんを中心にして渋中の先輩に助けられた(?)ことが何回かあった。

5年生の初めだったと思うが、先輩の狩野博一さんが海軍士官のスタイルで学校に来て話をされた。その潇洒な姿は忘れることができず、私もいつかという思いにかられたのも事実で、短剣が紺の軍服の下から光る姿は戦争というものを越えた“美”をもっていた。現実の私たちは食糧不足に悩まされ利根郡の糸之瀬村(現昭和村)の農家の手伝いに泊まり込みで手伝いにいった。うす暗い物置の2階に、冷たい風に混じって粉雪が部屋にまいこんでくる。4月だったと思うが寒さに震えていた。そこで仲間からタバコの吸い方を人生初めて習った。口の中だけで吐き出せばよかったのに、“のど”の奥まで吸いこんだからたまらない。その気持ちの悪いこと。私は二度とこんなことはすまいと階段から転げ落ちるようにして外の冷気、寒気に震えながら回復するのを待った。たった一服、それをなおすのに1時間もかかった。

1週間2週間、定かではないが、糸之瀬村の開墾で暗渠排水の仕事を終えて沼田市に着いた時、日本の戦争がだいぶ後退を始めたことを知った。太平洋の島々で激戦が繰り広げられ、飛行機や軍艦の撃沈される報も知らされた。これだともう将来は軍人になるのかも知れないとも考えた。

話は変わるがそのころは学校に配属将校が一人ずつ配属された。渋中には古稲准尉さんがおいでになって教練

の指導をされた。笑顔の優しい立派な、お年を召された軍人さんだった。ちなみに准尉というのは若い人には知らない人もあると思うので参考のために書くが、士官少尉の次、下士官の最上位、曹長の上で待遇は士官の待遇だ。下士官は上衣の上に剣帯をつるし剣を吊る。士官は上衣の下に、つまりズボンのベルトに剣帯をし剣を吊るすのである。これは陸軍でも海軍でも同じである。古稲さんは上衣の下、つまりズボンのベルトに剣を吊るしていた。つまり士官待遇なのだ。お年を召されていたように思われたが、さすがに鍛えられていただけに敬礼の仕方や号令の声は兵士の模範とも言えるべきで、士官学校にでもゆけば立派な士官、将校になられていたであろう。

私たちは古稲配属士官につれられて軍隊の基礎を教えこまれた。38式歩兵銃も持たされた。最後には学校の西の伊香保へゆく途中の訓練場で、実際に38式歩兵銃を使用して実弾の発射訓練をしたのだ。肩にずしりとくるある種の圧迫感、体が一步後ろへ下るような圧力、一発にはそれ相応の力があった。

話が軍事訓練にかたよるが、高崎の軍隊に体験入隊した。多分1週間くらいだったと思う。普通の兵と一緒にだったので大変だった。12、3人が1室のベッドに寝た。班長、室長は上等兵だった。上等兵になるまでには、早く入隊後5、6年かかるだろう。入った時が2等兵、次が一等兵、次が上等兵、次が兵長、次が伍長、軍曹、曹長、准尉という終戦時の位である。そしていよいよ士官になる将校になるのである。上等兵になれば、随分と

権力がある。終戦時には伍長勤務上等兵とか言うのがあって位は上等兵だが勤務は伍長なのだ。准尉になるまでには8階級か9階級が必要だから准尉ともなれば別室、一人部屋で、平時ならば神様のような待遇だ。しかし実戦ともなれば兵のまっ先に士官。少尉、中尉クラスとともに突撃をするのだ。私は後年、師範学校の3年の時に海軍予備学生を志願し入隊、士官候補生となったので、高崎の時のことが永久に忘れる事ができない。

大分、軍隊の訓練を書いたので方向転換して母校の事にもどろう。苦手は校内記念日のマラソン大会だった。学校から



同窓生有志による、5年生東組担任・木野内先生、同西組担任・高橋先生謝恩会(昭和38年頃)

筆者は前から3列目の向かって左から3人目

小学校前を走り正林堂、駅前から八木原で折れて北新道へ出る途中で通過票をもらう。認め印を押してくれた時もあったかも知れない。校門がせまいのでパンツのヒモがすり切れて、それをなおしている間にみんないってしまったのを見たことがある。私は長い走りは苦手だったので、町中の人が道路へ出て応援してくれるのが恥ずかしかった。それでも最後まで5年間走り通したような気がする。5年の時にそれはなくなったのか、まだもっと続いたのか定かではない。

長野大原という絵画の有名な先生がおられた。私たちは長野万という本名は略して雅号の大原、大原と呼びすてにしていた。ひどいものだ。この大原先生には個人的なことだが少し説明を加えておきたい。大原先生が小学生のころ、邑楽郡で（現大泉町？）私の父が小学校の教師をしていて、大原先生も教えたのである。不思議にもその大原先生に私の3兄弟が洪中で教えを受けたのである。大原先生は洪中においでになってから父に逢いに何度も私の家においでになり、私の書いた「八崎風景」などについてよく批評して下さった。また父の頼んだ「八崎春景」という絵は私が大切に保存しておいたが少し痛んできたようなので、北橋村の民俗資料館に寄贈して、いたまないようにしてある。いつか返してもらって分郷八崎の公民館か、洪中の榛嶺会館（？）にでも寄贈しようと思っではいる。大原先生は昭和3年から、25年まで22年間余、洪中にお勤めされたと同窓会誌にある。すでになくなられたが奥様とはしばらく年賀状等の文通は続いていた。

入学以来5年間、石ころ道を4、5^キ歩いて通った。足が痛いなど一度も思ったことはなかった。下駄でも通った。5年になって自転車を買ってもらった時は今の自動車を買った時よりもうれしかった。まだまだ思い出は沢山ある。下級生と利根川でまんじゅうを買って北橋支部のもとみたいなことをしたことも忘れられない。あのみんな、利根川で食べたまんじゅうは多分1個5銭か10銭くらいだったろうか。値段は定かではないが、うまかった。時にその時の写真を見ることもある。みんな若かった。

卒業後数年たって北橋支部（有志の会）で、岸先生と木野内先生を北橋のかめさだ屋にお招きして盛大に懇親会をして昔を語り合った。

これは後日談だが私は師範学校に入学し、3年の時学

徒徴兵猶予の期限切れのため海軍予備学生を志願し、入隊、士官候補生となり敗戦、教師となった。今、洪中卒業後50有余年、趣味や雑事、世間の人たちと仲よく生活している。現在短歌雑誌「地表」の編集同人、「未来短歌会」会員として短歌を勉強している。同窓会北橋支部の支部長を10数年しており、後輩にゆずろうと思うがもう少し、母校、なつかしい洪中のために続けたいとも思っている。「黄金のトビをしるしとしー」本部総会の、そして支部総会の時に歌う校歌は日本一の校歌だと思っている。そして現在の生徒は素晴らしい子どもたちであるように祈りたい。

—— 洪中時代を懐かしむ ——

旧制中学20回卒 青木三策

1. はじめに

何を書こうか迷った挙げ句、やはり素直に洪中時代を振り返ってみるのが80周年記念誌に最もふさわしいだろうということになった。同年代の学友と重複するかも知れないが、それぞれの生き方や感じ方があるだろうから気にしないで書くことにした。

2. 入学のころ

今（平成11年）からちょうど60年前の昭和14年4月、私たち洪中20回生は桜花爛漫の天下の洪中に夢と希望を膨らませて入学した。第3回に定員が100人に増員されて以来ずっと変わらなかったのが、当時としては稀な高倍率の2.5倍の入試で、しかも群馬郡北部（北群馬郡はまだ分かれていなかった）、勢多郡の赤城山西麓、吾妻郡全域の俊秀がどっと押しかけたので、かなりの激戦だったはずである。ところが入学した同級の諸君は皆のどかな風貌で、町や村の輿望を担ってきたような風も、難関を突破してきたような秀才らしさも感じさせない、いたって和やかな気風の仲間たちだった。もっとも入試は私たちの少し前から群馬県全部の中等学校で、筆記試験はなくなり、内申と口頭試問と身体検査だけになっていたから、受験とはいえ、運を天に任せて比較的のんびりしていたからだったかも知れない。

入学すると東組と西組に50人ずつ分けられ、1学年か

ら3学年までは毎年組替えが行われ、4学年、5学年は各人の進路希望により、東組が実業組、西組が進学組に分けられた。今でも学友全員の名前と顔と性格を懐かしく思い浮かべることができる。

入学後間もなくの4月20日、開校記念日の長距離競争（マラソンの学内正式名称）が行われた。校門を出て四ツ角を駅の方に下がり、前橋街道を低学年は中村あたりから、高学年は半田から上って高崎街道に出て再び四ツ角を通過して学校に戻る。駆けっこの苦手な私は一年生の時からずっと最終ランナー、つまりビリを通した。四ツ角の近くに住む知人のおばさんの話によると、毎年私の通過で四ツ角の観衆が解散したとのことである。

数年前、古い荷物を整理していたら中学1年生の時の「修養手帳」が出てきた。洪中に赴任して間もなく初めて私たち1年西組の担任になられた山崎吉郎先生が、熱心に手帳の有効利用法を指導された真摯な姿が今も目に焼き付いている。先生は私たちの1学年が終わると間もなく病に倒れ、帰らぬ人となった。その手帳の最初の頁に校訓として、和親勉強・校則遵守・明朗快活・質実剛健・報恩感謝の5カ条が記入されていた。とくに質実剛健は洪中健児の誇りで、真冬でも校舎内は裸足で通さなければならなかったのが、机の下で両足を擦り合わせていた記憶は今でも実感として残っている。

3. 小学生のころ

小学校は洪川小学校（今の北小）に通っていたが、あのころは学習は学校だけで行うものと決めつけており、家に帰れば遊びと食事と就寝だけという生活だった。多分、私だけでなく大多数の仲間がそうだろうと思う。おかげで川で鮒を釣ったり、山で鳥や虫を捕ったりするノウハウを幼い頭で考えながら会得できた。また、近所の年長から年少までの少年たちでたむろして遊び回り、山車祭りやどんど焼きなどの地域社会の行事にも積極的に参加することによって社会性も身につけることができた。次に私だけの特殊事情だったかも知れないが、活動写真のチャンバラが大好きでほとんど毎週、友達を誘っては映画館に入りびたり、猿飛佐助から近藤勇に至る講談的な徳川時代の歴史に強くなっていた。しかし中学生の観劇は校則で厳禁されていたので、小学生として観た最後の映画はあの有名な愛染かつらだったように思う。

あのころは講談本にしても探偵小説にしても漢字には

すべてルビが振られていたので、画数の多い難かしい言葉でもすらすらと読むことができた。友達と遊べない時間は読書で過ごしたことが多く、私たちの世代が漢字や難しい言い廻しに強いのはこのせいだったろう。

4. 中学校時代の学習

中学校に入ると私自身の学習に対する取り組み方がらりと変わった。「知ることは楽しみなり」という言葉もあるようだが、人文系、自然科学系いずれの教科も、今まで知らなかったような高度の知識が、私たちの生活に身近に結びついていることを習得できて興味津津であった。薪割りにおけるくさび現象や、重い物を動かすときのこの原理など、日ごろ行っていた作業の理屈がよく理解できたことなど好例である。

しかし小学校の時と違って話の内容が高級であり、学習量も多いので教科の進み方も早い。教室内だけの学習では全てを理解することはとても無理であることを悟った。先生方は復習するよう指導されていたが、私の性分として一度学習したことをこつこつ勉強するという復習にはあまり熱が入らず、初めて知ることの喜びを味わえる予習の方に力を入れた。それによって教室での先生の講義にも親しみを覚え、理解も深まったような気がした。

5. 放課後の楽しみ

小学生時代を遊びに徹してきた私が、中学生になって急に勉強家になりきれない訳がない。遊びも大好きだった。学習は一人でもできるが、遊びやいたずらには仲間が必要である。次々と新しい遊びを発想する遊びの天才のG君、好人物で遊ぶことなら何でも付き合ってくれるH君などが放課後の親友だった。農家から農耕用の馬を借り出して早駆けしたり、振り落とされたり、ある時は馬が勝手に麦畑に入り込んで麦を食い荒らしたり、汗顔もの思い出も数限りなく浮かんで来る。

よく学び、よく遊べを旨とした。先に遊び始めると面白くて止められないから、学んだ後で心置きなく遊ぶことにしていた。乗馬や山遊びは休日が主だったが、週日は夕方から宵にかけて翌日の予習をすませ、夜更けてから悪童連の溜り場になっていたG君の家に出掛けるのが日課だった。2階の窓から川縁の映画館や楽器店などの盛り場を望むことができ、解放的な気分になりながら学

校の噂話や人生について喋っていた。深夜、皆で近くの銭湯で多少あか臭くなった最終風呂で温泉気分を想像しながら、憧れの旧制高校寮歌などを放吟したのも楽しい思い出であるが、G君もH君も今は鬼籍に入ってしまった。

若いころは体も頭も活力があるので時間の使い方もうまかったらしく、1日も1週間もかなり充実していた。学習や友達との遊びのほかには部活や読書にもたっぷり時間を使うことができた。喧嘩に負けたくない一心から柔道部に入り、本人は全然強くなれなかったが、たくましい先輩や同級生に恵まれ、力強い思いで中学生生活を過ごすことができた。

読書も小学生時代の漫画や講談から卒業し、文学青年ぶっていた年長の従兄の影響を受けて夏目漱石はもちろん、田山花袋や泉鏡花なども読みふけり、果てはトルストイやシェークスピアなどの外国文学全集まで手を伸ばしたが、どこまで理解できていたかは怪しいものである。

6. 担任の先生

再び話を学習に戻すが、私たちのクラスは比較的数学に強い連中が多かったように思う。2年の春から数学の奈良寿雄先生が千葉県から洪中に赴任されて私たちの学級の担任になられた。当然、数学は奈良先生に御指導いただいた。当時の数学の教科書は1学年と2学年で1冊、3学年から5学年までの分で1冊だったと思う。奈良先生の教え方は大変ユニークで、その章の基本的事項だけを分かり易く、みっちり教え、「わかったか」と聞くから生徒は「わかりました」と答える。「それでは先に進もう」ということで、5学年までの分が3年生のうちにすべて終了してしまった。その後は比較的易しい問題集が与えられ、各自のペースで進めるよう個々に指導された。易しい問題を自分で解くことによって基本的事項がどのように応用されるかの理解が深まり、さらに高度の問題への挑戦も可能になった。最も高級だと評判の岩切(著者の姓)の代数と幾何の参考書もかなりの余裕でマスターすることができた。奈良先生は今も千葉県で御健在である。

2学級だったのでもう一方のクラスの担任は今亡き美術の長野万先生だった。最近、シルバーサービスで都内の美術館を無料で観賞したり、海外旅行で著名な美術館を訪問したりする時、多少なりとも芸術を理解できる

ような気分になれるのは長野先生の薫陶のたまものと感謝している。

7. 戦時色

私たちの学年の標準生年は大正15年である。生まれて間もなく年号が変わり、正に戦前唱われた「昭和の子供よ僕達は」である。「サイタサイタ」に始まる国語読本は軍国主義教育の表徴であるような文章を目にすることもあるが、私の体験では小学校でも中学校でも誰一人「戦場へ行って華と散りなさい」と言われた先生はいなかった。教科書の中身を思い出してみても、誤った歴史観や世界観の記述はあったが、極端な軍国主義に走らせるような文章は私の記憶にはない。にもかかわらず、昭和6年の満州事変、昭和12年の日中戦争、昭和16年の太平洋戦争と否応なしに戦時色が濃厚になり、私自身も国のためには死なねばならぬと覚悟するようになっていった。それは学校教育によるのではなく、例えば新聞社の懸賞当選歌や映画挿入歌などの過激な戦意高揚の歌詞が私たちを軍国少年に誘い込んで行ったように、社会の風潮、とくにマスコミの影響が大きかったのではないかと思っている。

8. 勤労奉仕

私たちの中学時代で特記すべきは社会奉仕活動である。戦争のために働き手が応召された農家の手伝いが中心であったが、おかげで麦踏みが始まり、麦刈り、田起こし、田植え、稲刈り、芋掘り、大根引きと一応の野良仕事を体験した。中学3年の時だったから昭和16年の夏、大戦開始の寸前で食糧米の不足が深刻になりつつあったころ、草津の奥の白根山中腹の熊笹が一斉に実をつけた。米と同質の澱粉であり、しかも60年に一度の事として天祐ではないかと喜ばれ、夏休みの最中ではあったが、学校からの呼び出しに応じて勇んで笹の実採集に出かけた。1週間、草津に滞在したが生徒にとっては再びの天祐。連日の雨降りで笹の実採りの山登りは一日半だけで、あとは温泉宿で楽しい夏休みを過ごすことができた。

昭和18年の1月には榛名湖で明治神宮大会(今の国体)のスケート競技が行われた。県下の中等学校の高学年の生徒が湖畔で合宿し、リンクの雪払いや雑巾掛けを命じられた。昼間だけでなく、夜半に雪が降り出すとたたき起こされた。その年の3月上旬に旧制高校の入学試験を

控えていたのだから、今だったら教育ママが怒髪天を衝く大事件になったろうが、当の本人は受験勉強から解放された気分アルバイトを楽しんでいた。

9. 受験

当時も受験雑誌に熱中したり、夏休みや冬休みに東京の予備校で勉強する受験生もいたろうが、私自身は文部省の定めた中学校の教科をきちんと理解していれば、文部省の監督下で行われる国立(あのころは官立)の入試は合格できるものと素直に信じていたので、特別に取り立ての受験勉強は行わず、数学にしても英語にしても定評のある参考書の問題を自宅でクイズを解くような気分で学習していただけだった。やはり私の予想通り、氷磨きから2カ月後の旧制新潟高校の入試に合格できた。当時の中学校は5年制だったが、私たちのクラスからは旧制高校(帝国大学つまり国立総合大学の教養課程のような学校)に2人、陸・海軍の士官養成学校(陸士・海兵)に各1人、高等商船学校に2人の計6人が4学年修了で進学している。今、同窓会名簿の中学20回のわが友の欄を見ると、卒業後直ちに家業を継いだり、実業界に進んだ連中も洪中精神を発揮して、堂々と社会に貢献しているし、進学率から見ても全国有数の名門校と比べて遜色のない実績を示している。いうまでもなく進学は人生の一里塚に過ぎず、社会に出てからが本番であるが、思わず大声で自慢したくなるような素晴らしい同級生もたくさんいる。

私は大学卒業後、技術開発の道を進み、敗戦からの復興、高度成長そして現在の不透明変動時代と共に歩いて来たが、洪中時代に「よく学びよく遊べ」を遵守したこと、よい先生とよい友達そしてよい環境に恵まれたこと、さらには質実剛健・明朗快活の校訓が今でも洪中精神として心身に染みついていることなどが人生の支えだったと確信している。

10. 東京同窓会

最後になったが、東京同窓会の近況を紹介する。3年前に前会長の木暮剛平先輩(中学18回卒、電通相談役)から私が会長を引き継ぎ、本部役員、母校職員の多大な応援を得ながら、顧問、副会長、総務・会員・財務・親睦の4部門の担当役員および年次幹事で会の運営の充実と会員間の連絡を図っている。特に狩野征次事務局長

(高校8回卒、プロネート社長)の献身的な奉仕には会員一同深く感謝している。東京同窓会は東京・埼玉・千葉・神奈川の首都圏在住の約2,500人(平成10年版同窓会名簿による)の同窓生を会員とし、母校との連絡を保ちつつ、会員相互の親睦と向上を図ることを目的としている。毎年3月の総会には本部役員や母校校長も迎え、毎回約100人の会員が出席、引き続いて行われる懇親会では世間話や思い出話、情報交換から商談までと何でも自由に上州弁で語り合える気軽な雰囲気を楽しんでいる。夏には会員の家族や渋川女子高校同窓会の有志も多数参加する夏季納涼会を開催している。去年(1999年)は総勢160人で、晴海埠頭に碇泊中の豪華客船「日本丸」で湾岸の夜景と世界一流の料理も楽しみ、大盛会だった。

洪高同窓会の益々の発展と東京同窓会への御協力に期待して筆をおく。

— スポーツに見る昭和18年 —

旧制中学20回卒 宮崎 守

昭和16年12月8日勃発した太平洋戦争も3年目に突入、戦況は激化、必ずしも日本に利あらず進展した。山本五十六連合艦隊司令長官の戦死(4月)、アッツ島日本軍守備隊(山崎部隊)の玉砕(5月)、遠藤部隊(郷土出身者で編成)がダンピール海峡で全滅という戦局下、戦意高揚の決戦標語「撃ちてし止まん」を全面に掲げ、国民の志気を鼓舞し、決戦態勢への気運を高めるべく学校にもいろいろな指示、命令、規制が出された。学校でもそれらの対応策についてどんなにか頭を悩ましたことだろうと推測される。正に戦時体制下の学校運営のあり方を問われる時代に入っていたのである。スポーツにおいても輸入スポーツは廃止され、種目、競技会等すべて戦時色強きものに改定され、実施されるようになった。

この年、スポーツ関係で体験したいくつかの思い出をたどり、中学校時代最後の年を振り返ってみたいと思う。

◎明治神宮国民錬成大会(冬季大会)

昭和18年1月22日から24日まで右の大会が榛名湖で開催された。大会の3日間は、たまたまスケート(フィギ

ユア)を持っていた関係で補助員(連絡員)に指定された。着順票と計時票を記録室(水上のテント)へ運ぶ係だったので身近で選手達の言動を見ることができ、何か親しみを感じ、とても楽しかった。今でもあの場面が浮かんでくる。

印象深かった選手では菅原和彦(苦工生)内藤晋(明大)山下勝久(早大)広川孝昌(朝鮮松都中生)の名があげられる。特に菅原と広川は中学生でありながらよく健闘した。菅原は10,000^円優勝、広川は1,500^円、5,000^円の2種目に日本新記録を樹立して見事優勝という快挙を成し遂げた傑物であった。女子は縄手満喜子(満州)が圧倒的に強く、個人優勝も果たした関係からか他の選手の印象は薄い。黒のユニホーム姿の縄手は正に王者の貫祿十分な選手だった。なんといっても圧巻は錬成的、戦技的種目として考え出された耐久レースであった。

○コースは1周2,500^円、整備不十分。

○滑走距離は15,000^円、コース6周。

○重量物は各自5kgをリュックで背負う。

○競技方法は団体地区対抗、北海道、東北、関東、中部、朝鮮、満州の6地区で、1チーム5人編成。

30人の戦士が同時出発で出発点をとび出したが、その壮観さは従来のスケートの観点から遥かに飛躍したもので、水上大会には珍しい壮絶という感じがした。正に戦時色の強い、国民錬成大会にふさわしい競技であった。戦後スケート界の復活は目ざましく、昭和22年から国体、23年からインカレがスタートした。内藤、菅原は国体で4連勝、菅原(日大)はインカレで3連勝を果たし、世界へと羽ばたいた。昭和26年内藤はダボスで行われた世界選手権500^円で43秒0で見事優勝、世界のスプリンターとなった。昭和27年菅原は第6回冬季オリンピック(オスロ)に出場。10,000^円で見事第7位と健闘した。このころから、特に日本選手の活躍に興味を持ち、新聞記事を見るのが何よりの楽しみになった。あれから何年経ったのだろうか。今でも日本選手の活躍をテレビや新聞で見るのが何よりの楽しみである。

◎剣道段位制が等位制となる

昭和18年4月のある日、中野秀雄君(中郷出身)とこんな会話をしたことがある。いよいよ中学校生活最後の年だ、有意義な1年を過ごしたいな。ところで剣道も5年間習ったのだから、せめて初段を取って卒業したいも

のだと二人の意見は一致した。早速剣道部の仲間に入れていただき準備を進めた。時に戦局も激化、武道の戦場化が叫ばれ、戸外試合が奨励される時代であった。既に昭和17年3月には大日本武徳会会長に東條英機首相が就任し、戦時色の強い組織づくりは完了していたのである。昭和18年4月、従来の段位制を廃し、等位制とし、5等(初段)……1等(5段)となり、称号は、範士、達士、錬士としたのである。昭和18年6月27日、等位制になって初めての審査会が前橋の武徳館で行われた。その意義ある大会に2人は出場し、見事念願の合格を果たし、喜びを噛みしめたものである。たまたま群馬県剣道史にこの日の受験者数、合格者数が次のように載っていた。

1等(なし)、2等(17人で3人合格)、3等(41人で9人合格)、4等(107人で69人合格)、5等(373人で162人合格)、総計438人受験、243人合格。このことは、中学校時代の貴重な思い出の一つである。この時取得した5等(初段)が土台となり、戦後復活した剣道にも足を踏み入れ、昭和55年11月14日教士の称号を授与された。現在は教士5段であるが、稽古の方は休眠状態である。

◎手榴弾投げと私

昭和18年9月12日、中等学校青年学校訓練体育大会が沼中を会場にして実施された。参加校は、洪中、沼中、利根農、中之条農と利根郡、吾妻郡、群馬郡(北部)の青年学校の代表。種目は、戦場運動、剣道、柔道、銃剣道であった。大会の名称、内容、共に戦意高揚をねらったの大会であり、正に戦時色豊かな行事であった。私は戦場運動の手榴弾投げに出場して第2位になった。銃剣道は洪中が圧倒的に強く第1位だった。永井長治君、金井美晴君、村上勇君の活躍が懐かしく思い出される。当時青少年の総合的な体力増強をねらって制定された体力章検定、種目は6種目で、100^円走、2,000^円走、走り幅跳び、重量運搬走、手榴弾投げ、懸垂であった。3段階制になっており上から上級、中級、初級と各種目毎に規定されたタイム、距離、回数があり1種目でも落とすとその級に判定されるという厳しいものであった。

同級生で上級取得者は、浅見道雄君(故人)と私の二人(共に庭球部)、しかも4年生、5年生と2年連続取得ということで同級生からはうらやましがられたものである。4年の時のバッジは銅を主体に作られておりどことなく重量感があつたが5年の時のバッジは、ジュラル

ミン主体のため軽々しく価値のない物になった。これも物資不足の折、止むを得ないことだったのだろう。同級生たちは手榴弾投げと重量運搬が一番苦手だと言っている者が多かったが、私はこの2種目、簡単に上級をクリアすることができた。上級の合格ラインは45^円だったと思うが常に55^円以上は投げていたと思う。手榴弾投げは軍隊へ入隊(昭和20.6.10、東部第38部隊~高崎~)しても自信を持っていた種目の一つだった。入隊して間もなく中隊内で班別対抗の競技会が開催されたが、私は手榴弾投げに出場、見事第1位となり班長に喜ばれた思い出がある。手榴弾投げと私の思い出は、ほかにも沢山ある。労しなで勝てる手榴弾投げは、私の大好きな種目だった。

◎佐藤次郎選手胸像の供出と庭球部の廃部

伝統ある洪中庭球部出身の第一人者、佐藤次郎選手(世界第3位にランクされた)、の功績を讃え、建立された胸像の除幕式が行われたのが昭和10年7月24日であった。それから8年の間、洪中のシンボルとして、校地南東の隅でテニスコート、校舎を見つめ続けながら母校の発展を願っていたのである。その胸像が7月17日には戦時物資として供出されることになり、壮行式が行われた。勝つためにはといいながら、もったいない事をするなど思わずにはいられなかった。胸像とお別れの記念撮影ということで撮ったのがこの写真、今となっては貴重な写真である。



佐藤次郎選手胸像供出
伝統の庭球部廃部直前の写真
(昭和18年7月)

中央無帽で鉢巻き姿が私、次郎選手の甥の忍君の顔もある。今は亡き同級生二人(中野秀雄君、島田秀興君)と下級生の面々である。

この写真を見る度に当時の事を思い出しても懐かしい。開校以来花々しく活躍し、幾多の名選手を生み出してきた洪中庭球部、廃部直前の写真である。

9月13日胸像供出の日、2学期より伝統の庭球部は廃部となり洪中庭球部の火は消えた。部員はそれぞれの道を歩んだ。私も卒業までのわずかな期間、戦場運動種目に興じながら、放課後の時間を過ごした。庭球部さようなら。世相は決戦標語「撃ちてし止まん」と共に戦争へ、戦争へと流れていたのである。

○参考文献

洪高50年史・昭和史全記録・群馬県剣道史
日本のスケート発達史

一 怖そうで優しくかった先生方 一

旧制中学20回卒 南雲香伺

母校創立80周年、おめでとうございます。

記念誌をつくるので、回想を寄せよ、とのご指示をいただきましたが、私が、群馬県立洪川中学校へ入学したのは、いまを去る60年前のことで、記憶は既に「雲か霞」の彼方に、それもかすかに見えるくらいで——呆けてきてるんだろう——と言われるかも知れない、まことに心許ない一文になると思いますが、お許し下さい。

想えば随分と昔のことで、同窓会々員名簿を眺めても、われわれ20回の卒業は少しページを繰るとすぐに出てしまう。名簿の隅に辛うじて載っているという感じ。

私たちのころは定員100人(二クラス)ニクラスではありません。

ですから、この記念誌を手にする大部分の方々には、どこかの学校の昔語りのようで、ご理解に苦しむこともあるでしょう。

昭和20年(1945)より前のことで、時代錯誤は承知の上で、先生方のことなど少し誌すことにいたします。

昭和12年(1938)7月7日、中国北東部の「盧溝橋」爆破事件に端を発した「日支事変」…のちに日中全面戦争に拡大…から2年後の昭和14年4月、私は晴れて群馬県立洪川中学校に入学を果たした。

明治村(現吉岡町)に育った田舎者の私にカルチャー・ショックはその入学式を待たずにやってきた。

合格発表の日に、自分の受験番号を発見して、喜びを胸に校門を出ると、待ち構えていたのは、旦那風から小

僧さんたちまでが、「おめでとう、おめでとう」と叫んで、手に持ったチラシを渡すではないか。

手にしてよく読むと、制服や教科書・文具・鞆・靴の注文をもらうためのものでした。

当時、制服や革靴は既製品はなくて、全部オーダーメイドだった。そのころの子供にとって、注文服や注文の革靴などは、夢のようで、まさに青天の霹靂だった。

ところで、待望の注文制服は入学式に間に合うはずもなく、いま考えても思い出せないで、青木三策君に電話で確かめたところ、「俺は兄貴のお古だったからね」との返事だったので、私も兄貴のお古で、注文服の最初は霜降りの夏服であったのだと思います。

さて、入学式も無事に済んで、緊張して「1年東組」の教室に入り、先生の指示でそれぞれの机が決まり、着席した。

そこで先生が、「私がこのクラスの担任である」と、いろいろ新入生の心得や注意を述べられ、おおかた終わったところで「ときに、お前たちに尋ねるが、嫌いな学科があるか？ あつたら遠慮なく言ってみろ」。教室はシーン。先生はさらに、

「だれも何も言わないところをみると、皆嫌いな科目はないんだな」

とタタミこんでこられた。

そこで、オズオズと手を上げたのが小生

先生「立って言ってみろ」

小生「ハイ！ 図画です」

みるみる、髭を立てた色白の顔が紅潮してきて、

先生「理由を言え！」と大音声。

困ったことになってきたけれど、仕方ない。

小生「思う通りに描けないからです」

先生「当り前だ、お前たちが思い通りの絵が描けてたまるか。おれは絵の先生だ」

しまったと思ったが、すでに後のまつり。

小生「スママセン」と平謝り、こともあろうに洪中一怖い（別名・ブルドック、略で、ブルと言われた）と呼ばれた図画工作担当の長野大原先生その人だったので（大原先生のご子息孝夫さんは全日制1回卒です。もう一度、孝夫さん「スママセン」）。村の先輩の上級生には、アトが怖いゾーと忠告される始末でした。

その当時の中学校で家庭訪問という制度があったかど

うか知らないが、その後いち早く小生宅へ長野先生が現れ、父とかなり長時間話し、やきものを作っている父と何か通じるものがあつたのでしよう。先生も父も、その件については一言も無いので、かえって気になって仕方がなかった。間もなく4月下旬(?)恒例の開校記念日行事の全校マラソン大会が開かれることになった。

新入生であるわれわれに、マラソンについての注意をし終え、解散の声と同時に、

「南雲、チョット来い」

いよいよ何か言われるのかと怖れながら、前に立つと、先生「お前は走らなくていいよ」

小生「どうしてですか」

先生「お前、心臓が悪いそうじゃないか。お父さんが、そう言っていたぞ」

この先生の一言で、私は5年間開校マラソンは全部不参加で通し、5年の時、ゴールで記録を書いている所に先生が見えて、「一度も走らずに卒業になるのは、君が初めてだよ。君が記録をつくったね」と大笑しておられたのが、すごく印象に残っています。

それにしても、自分が70歳過ぎて満足いく作品は出来ないもので、また、出来ないからこそ、一生追い求めて続けてゆけるのが芸術の道なのだとおっしゃった長野先生との出会いを思い出します。

はじめに述べた通り私たちは、戦争下の5年間、洪中生活を送ったので、取り巻く社会の環境は年々ではなく、月単位で変化してゆくような気がしていました。

金銀銅の供出から、寺院の鐘楼から梵鐘を下ろして工場へと運ぶ。食糧は砂糖が最も早く失くなり、今川焼の小豆餡がさつま芋の餡に化けたり、万事がこんな風に変化するのに従って、農家への勤労働員で、米や麦の穫り入れや種蒔き等、いまの部活の代わりみたいなものです。

5年生になると別荘行きです。本校舎から離れた白亜のモルタル塗り（当時としては珍しかった）平家の2つの教室だけある、小さな建物です。

そのころは、何しろ皆若い者ばかりのこと、年中腹ペコで、弁当は10時ごろに食べ、多くの者は半分残して昼にそれを食べるのだが、10時に全部綺麗にしてしまった者は昼飯が無い。そのうちに誰かが、学校の上の方、伊

香保と原町方面の道の分かれ目辺りに、「だんご」を売っている店があると言う情報をもたらした。何人かが、昼休みに校庭から抜け出して「だんご」を買いに行ったところ、売り切れ……。10時ごろでなければ駄目だということだが、10分休みではどうしても行ってこれない。元気のいい誰だったかが、窓から授業中に出て行ってしまった。幸いに窓をまたいで、すぐに外に出られる（ようになっていた）ので、先生が黒板に向かって、書き始めるのと同時に、ヒラリと行ってしまった。翌日からは皆でお金を出して買ってきてもらっていたが、たちまちにエスカレートして、中学生が全部買ってしまふと噂になったらしく、これが先生に知れるところとなってしまった。

当時の担任は奈良寿雄先生（数学・現在千葉県成東町で御健在）が、ある日、昼の弁当が終わった時

「君たち、授業中に団子屋へ買いに行くそうじゃないか」

生徒は無言……。

「天網恢々、疎にして漏らさず。と言ってね。君たちの誰かが毎日のようにだんご屋へ入るのを、黒岩先生（剣道）の奥さんが、裏の窓から見ていて、先生から私に知らせてくれたんだ」

生徒、シーン。

「黒岩先生が、ソツと私に報らせてくれたからよかったけれど、校長先生にでも告げられたら、みんな停学ダゾ」

頭を垂れたまま……。

「それにしても、私に内緒で『だんご』を食っているなんて、ひどいぞ。先生にも教えてくれよ」

ここで教室中大爆笑。

以後、だんごはピタリと止めました。

こんな優しさのある奈良先生が、大変な硬骨漢であったと知つたのは、卒業して幾星霜、10年くらい前のこと、東京在住の青木三策君ほかに、郷里からの参加者を含め19人で、千葉県・九十九里浜の宿に奈良先生を囲む会を開いた、その宴席でのこと。

「われわれが5年生の時は昭和18年、アメリカを中心に英・仏・蘭その他の連合軍と日本の戦争は苛烈な戦況にあった。当時、各学校（中等学校・大学・高専等全部）に軍から配属将校が来ていて、軍事教練が正科であ

った。わが校には近藤大尉なる野戦帰りで、右手の指3本吹き飛ばされている人が配属されていたが、余りにも恐怖の軍事教練なので、こともあろうに、われわれ5年西組が、教練の時間を批判して、サボタージュをしたのです。怒った近藤大尉は、クラスの90%以上に丙・丁の評価を下した。

注 通知表の記載記号

甲 乙 丙 丁 (われわれのころ)

|| || || ||

優 良 可 不可 (後に変更)

後にこの評価は訂正され、格上げされたが、どうしてなのか、われわれにはその間の事情は一切知らされていなかった。

宴席で奈良先生に、その件についてお伺いした、という訳です。

先生「そんなことがあつたね。アレは大変困ってしまった問題で、というのは、君たちが間もなく軍隊に行つて、教練の点が悪いと幹部候補生になれないんだ（将校になるための軍隊内の制度）。あのころの配属将校の権威は校長さんでも適わないくらい強くてね。だから、私は先生を辞めさせられるのを覚悟の上で、近藤大尉とやり合つて、ようやく翻意してもらつたんだよね」

とのお返事。半世紀近く経つて謎が解け、先生の温情に改めて感激したものです。

5年生になった時（昭和18年4月）、国語の小松恭己先生が着任されました。

全く先生らしくない気さくな方で、友人等と何度もお宅へお邪魔して、美味しいお菓子（このころはお菓子は極めて貴重になっていた）など、奥様（千年夫人・現在90歳で子持村北牧でご健在）からご馳走になったものだが、先生は長らく県の学務課におられ、現場の教師をするのは初めてであったとか。小松先生の思い出については、長いおつき合いをした下級生の方々をお願いすると、山形生まれの先生が遠く離れた群馬へ、どうして赴任されたのか（級友の都丸博君など昭和19年、米沢工専に入学して、いつも夜行列車で渋川から一晩かかると言っていた）不思議に思っていたものですが、10数年前のこと、東京で一緒の会に居た浦野匡彦先生（二松学舎大学学長・理事長）に、会議終了後の雑談で、「先生、

二松学舎を出た小松恭己さんをご存知ですか」とお尋ねしたところ、先生いわく「知ってるなんてもんじゃない。彼とは同級生で、親友なんだ」

そこで、どういう訳で、山形県人が群馬に落ち着くことになったのか教えて頂いた。

先生いわく「それは俺のせいなんだよ。実は、卒業したら、この俺が、群馬県庁に勤めることに決まっていた。ただ、前年に、官費の留学生試験を受けてあったんだが、まさか合格するとは思ってもいなかった。それが、卒業も間近になったころ、合格通知が来てしまった。俺はあわてて、群馬県へ就職を断りに行ったが、いまごろになって、断られても困るとお叱言をもらい、急いで小松に代役を頼んだ。そして気前よく、彼が引き受けてくれたと言う訳です」で氷解!

因みに、群馬へ帰省するごとに、罪滅ぼしに、自転車に乗れない小松先生を県庁まで迎えに行き、後に乗せては紺屋町（いまは何町ですか）へ飲みに行ったそうです。

紙数をオーバーしているので、甚だ不得要領なはなしを終わりにいたします。最後に、

「何事も、100年経てば歴史になる」と、司馬遼太郎さんも言っています。

わが渋川高校もあと20年で、消え去る心配のない歴史上の金字塔を打ち樹てることになる訳で、関係者の皆様に、ご壮健で頑張ってお下さるよう、切にお願いして筆を擱きます。

灰色の中学時代 ～いくつかの思い出～

旧制中学21回卒 深井正昭

母校が創立80周年を迎えるという。記念誌の刊行で寄稿の依頼を受けたので、戦時下、灰色の中学時代の思い出をいくつかたどってみた。

昭和15年の入学

昭和12年7月に勃発した日支事変（日中戦争）が泥沼の様相を呈し、戦争の影がしだいに暗く忍び寄って来た昭和15年4月、憧れの渋川中学に入学できた。この年は紀元2600年という大きな節目の年に当たり、国を

挙げての奉祝行事なども行われた。今さかのぼって数えてみると、母校創立20周年という年でもあったが、なぜかこちらの方は記念の行事などは何も行われなかったと思う。

前年まで1学年2学級100人の定員であったが、この年から1学級増えて150人になり、入学試験も内申書と口頭試問、体格検査のみとなり、一番の頭痛の種であった筆記試験が免除されて入学できたので、えらく得をした気分であったが、学力があっても内申書で落とされてしまった受験生は不運であったと思っている。体格検査では運動能力検定もあり、徒競走や立幅跳びなどがあったことを覚えている。

クラスは、従来の東組と西組に新たに「中組」が設けられて3クラスになったが、教室が間に合わず「中組」の生徒は、校舎北側の薄暗い物置のような教室に入れられて、増築工事が完成するまで惨めな思いをしたものである。

援農作業

日支事変（日中戦争）が始まって3年が経過、物資の欠乏も目立ちはじめ、米 味噌 砂糖など生活必需品が切符制、配給制になってきた年の入学である。国では食糧増産を叫びながらも、農家では働き手の主や男が軍隊への召集を受けて出征してしまい、農作業には著しい手不足が生じていた。

その手不足を補うため、遅れがちな農家に対し勤労奉仕が割り当てられた。麦刈り、稲刈り、田畑の除草、芋掘り、客土作業等々で、鎌の使い方、研ぎ方もおぼつかない生徒であったが、度重なる経験によって浅鋤、唐鋤、テングなど結構上手に使えるようになって、一生懸命に汗を流したものである。

麦刈りは稲刈りと違って、麦穂の下方の茎をしっかりとつかまないと鎌が滑る。うっかりすると指を切ってしまう、痛い思いをしたこともあった。

薄く切ったコンニャク芋を竹串に刺して軒下に吊るす作業などもあったが、芋の灰汁で手のひらが真っ黒になり、いくら洗っても灰汁がとれないで往生した。

ただ楽しみもあった。それは10時や3時の休憩時間に応援農家で接待してくれるじゃが芋やさつま芋のおやつであり、時にはお昼に「銀しゃり」のご馳走にありつくこともあった。

行軍

「遠足」が「行軍」にとって変わったのはいつからであろうか。昭和15年の1年生の時は北橋村の木曾神社への遠足もあったが、戦争の拡大と長期化から「教練」の科目のみが強化され、やたらと「行軍」の行事も増えていった。

一番苦しく、欲にも得にも疲労困憊したのは、全校生徒で行われた「高崎護国神社を参拝する行軍」であった。往復60^分程だったか、今でも忘れられない寒くて厳しい行軍だった。学校出発は午前3時か4時ごろだったと思う。

伊香保からでは参加が無理なので親戚に頼んで泊めてもらい、朝と昼の2食分の弁当を作ってもらった。考えれば親戚でも迷惑であったと思う。渋川・高崎間の県道に添って行軍するのであるが、県道にはレールが敷かれチンチン電車が走っていた。昭和17年初頭の厳寒期だったと記憶にあるが、深夜の出発は氷点下10度近かったのではないだろうか。しんしんと肌に凍みる寒さだった。最初の小休止は「有馬」の停留所付近だったと思うが、寒くて足踏みをしていたものである。金古（群馬町）の市街地に入るに連れて電車のレールが県道の中央に敷設されていることも知った。堤ヶ岡村（群馬町）の高等小学校に着いたのは午前7時過ぎだったろうか。大休止して朝食をとった。しばらくして桑の粗糶薪で校庭に何か所か焚き火の輪を作って暖をとらせてもらった。中学校側の予定した措置であったのか、堤ヶ岡村の方々の好意であったのかは分からない。

護国神社には10時前に到着したと思う。参拝を済ませて帰途についたが、昼食はどこで食べたか記憶はない。片足を引きずりながら、なんとか母校に帰り着いたものであった。

ほかにも細い山道を行軍する榛名登山とか、荷重しての20^分行軍とか、耐熱 耐寒行軍、武装行軍など、いろいろの名目の行軍があって、軍事色の徹底した鍛練を強要されたのである。

大雪だ スキーで通学

毎年2月の声を聞いて節分の前後になると、必ず大雪に見舞われる。「節分」

とは良く名付けたと思う。30^分も積ると伊香保からのチンチン電車は不通になってしまう。

通学の電車が不通であるから遅刻は大目に見てもらえる。上級生から「今日はスキーで行くから」と連絡が入る。肩からのカバンが動かないように腰紐でしっかり結わえ、スキーの身支度、スキーを担いで集合場所になっている物聞橋に急ぐ。スキー通学はわくわくするほど楽しい。第1に始業時間を気にすることはない。第2にスキーを滑る楽しみがある。また、スキーを知らない級友たちに対して優越感がある。伊香保からの通学生に許された唯一の特権ではなかったかと思ったものである。

全員が集合すると、下級生から一斉に滑降を始める。滑り始めるや否やころんで雪まみれになる者、上手なテクニックで颯爽と滑る者、標高750^mから学校まで標高差550^m、距離は8^{km}だった。

六本松付近までは簡単に滑降できるが、御陰付近になると、すっかり緩斜面になり、またベタ雪になって、スキーの滑走面に雪が張りついて滑らない。ストックで雪を払い落としながら悪戦苦闘の滑走になる。八幡宮あたりまで降りると積雪量も少なくなり、スキーを脱いで歩いた方が早くなる。

学校まで1時間とちょっとでたどり着いたと記憶している。

明治神宮スケート大会

戦後発足した国民体育大会に匹敵する第13回明治神宮国民錬成大会冬季氷上競技会が昭和18年1月22日から3日間、榛名湖のスケートリンクで開催された。渋中は地元の中高等学校として氷上のリンク整備等を主力に、大会開催の裏方である奉仕作業を県から依頼（命令）されたとかで、上級学年は厳冬の榛名湖氷上において、大会成



第13回明治神宮国民錬成大会 会場の榛名湖で整備作業をする本校生（昭和18年1月）

功に精いっぱい、のり奉仕を展開したのである。

洪中50年史をひもといたら次のようなことが、年表に記載されていた。

- 昭17.12.28. 明治神宮冬季氷上大会奉仕隊結成式
- 昭18.1.15. 右大会開催に先立ち本校生徒氷上奉仕
- 昭18.1.22. 氷上大会見学夜間行軍

この記事にある夜間行軍は奉仕隊から除外された1年生に対し行われたのであろうか。

同年1月23日24日の上毛新聞には「大会の陰に咲く錬成の奉仕精神 挺身する洪中生」として、その活躍振りが報道されているが、内容は「洪中生の勤労挺身隊200名は午前3時半起床、5時から大会場の除雪に或いは木炭の運搬から諸施設の配備云々」とあり大会に大きく貢献している事が書かれている。

さらに同月29日の上毛には、「神宮氷上大会に際し洪中生の血のにじむような献身奮闘によってつつがなく終了したことに感激し、村田知事より感謝状に添えて記念品を贈呈する」と報じられた。厳寒の氷上で頑張った洪中生に贈られた記念品は何であったのか、残念ながら失念してしまった。

また戦時色の強い「男子団体耐久競争」15,000^米の競技種目は湖上に1周3,000^米のジグザグコースを作り、5^キ入り砂袋を背負い、巻脚絆を着けて5人1組で滑走する競走で、コースの設営、整水清掃（ホーキング）も洪中生が担当したのである。

後で聞いた話では、前年より岩手県や朝鮮（当時は日本領）と誘致を争い、県体協と伊香保町の強力な運動によって榛名湖に開催が決定したとのことであった。

当時、県下の中等学校でのスケート競技部は、洪中とはか1、2校であり、県下大会では常勝洪中であつた。この神宮大会では競技役員として参加した、岡谷市出身の往年の名選手潤間留十先生から、スケート部員がねんごろに指導を受けたことも忘れられない思い出である。

なお、戦後いち早く塩原先生の指導で復活した本校スケート部の活躍は目覚ましく、県スケート界のリーダーとしてその役割を果たすことになったのも、神宮大会における諸経験が縁になっていると思っている。

復員して卒業証書

中学4年生、昭和19年1月のある日、担任の岡田先生から放課後の職員室に呼び出され、珍しく椅子まですす

められた。話の内容は重大な戦局のとき、陸軍では優秀な下士官を養成し補充する特別幹部候補生の志願制度を新設した。海軍の予科練に相当し、飛行、船舶、戦車等の兵科がある。将来の希望もあると思うが、応募について家族と相談してみても、と熱心に勧められ「志願者心得」の印刷物まで渡された。陸士や海兵の受験はとても



陸軍特別幹部候補生 特幹生募集ポスター

おぼつかない。陸軍は直ぐにでも役立つ若者を必要としている。お国のためだ、憧れの飛行機にも乗れる、と気持ちも単純で純粋であつた。

空っ風の吹く寒い日、洪川国民学校（現市立北小）の講堂で身体検査を受けた。学科試験は2月16日、全国一斉に行われたが、どこで試験があつたのかさっぱり記憶にない。洪中からも同級生はじめ、上・下級生が大勢志願した。今、考えると学校に応募人員の割当てがあつたのではと推測できる。

3月中旬の合格通知には「水戸市外の航空通信学校に入校せよ」と書いてあつた。

郷里出発の20年4月4日、洪川駅前広場の壮行式に臨んだ。小林校長先生から激励の言葉をいただき、一緒に入校する中島勉（洪川）、齊藤實・齊藤勉（白郷井）、角谷保方（伊香保）君を代表し、「只今から元気に出発します。銃後は宜しく頼みます」と頬を染めながら大きな声で挨拶したと記憶する。

翌20年8月、終戦の詔勅は帯広飛行場で聞いた。苦しく辛い軍隊の体験もしたが憧れの新司偵にも乗れた。戦死した同期もいた中で、無事に復員できたことは幸運であつた。

20年の暮れかどうか忘れたが、学校から呼び出しがあつた。校長も諸先生も不在の事務室で、古稲の善さんから県立洪川中学校の卒業証書を有り難く、そして淋しくちょうだいした。

先生たちのニックネーム

入学後、上級生から最初に指導されるのは挨拶や言葉

遣い、マナーや仕来りなどで、ほかに先生方のニックネームも教えられた記憶がある。

先輩の宮崎守氏（旧姓佐藤・旧制20回卒）とはスケートを通じてご交誼をいただいているが、氏は孀恋村のスケート王国を築かれた生みの親でもある。昨年同氏から「洪中恩師ニックネーム一覧」をちょうだいした。昭和10年代後半のころ、洪中で教鞭をとられた先生が網羅されている。卒業後半世紀余を経過して、母校や先生方のことは特別のことでもない限り忘却の彼方になってしまっていたが、60年前の当時を思い起こすことのできる貴重な証明書でもあり、氏の確かな記憶力に脱帽したものである。

母校80周年記念誌の投稿文としては不謹慎のそしりを免れないが、母校を思い出し当時を懐古する「よすが」になるかとも考え、ボツを覚悟で敢えて一覧を掲げてみた。

- | | | |
|----------|---------|-------|
| 高見勘次郎先生 | (スーカン) | 校長 |
| 長岡 禎利先生 | (ジャガイモ) | 校長 |
| 平野 武夫先生 | (マンドリン) | 教頭 |
| 平瀬 俊雄先生 | (ロング) | 教頭 |
| 阿部 茂夫先生 | (タコ) | 英語 |
| 市川 一作先生 | (ガンジー) | 国語 |
| 小川 伊八先生 | (トツ) | 社会 |
| 金井繁次郎先生 | (ハンニャ) | 体操 |
| 木野内与四男先生 | (アチャコ) | 物理 |
| 菊地巳代吉先生 | (ヘッチ) | 体操 |
| 岸 三郎先生 | (パチ) | 博物 |
| 黒岩 勝雄先生 | (マンモス) | 剣道・農業 |
| 小松 恭己先生 | (ヤギ) | 国語 |
| 古稲善太郎先生 | (ゼンサン) | 教員・書記 |

- | | | |
|----------|---------|-------|
| 佐藤 英一先生 | (ヨリ) | 数学 |
| 沢村 米蔵先生 | (カメレオン) | 国語 |
| 塩原 正孝先生 | (エンゲン) | 保体 |
| 下田 真次先生 | (モルモット) | 国語 |
| 関 亀太郎先生 | (カメサン) | 柔道 |
| 高野 弘先生 | (ニットラ) | 国漢 |
| 高橋 渉先生 | (マッコウ) | 英語 |
| 長寿 良行先生 | (オマーラ) | 国語 |
| 角田 昭先生 | (オイセ) | 社会 |
| 奈良 寿雄先生 | (ダイブツ) | 数学 |
| 中川 友吉先生 | (イナゴ) | 英語 |
| 中里 仁兼先生 | (コンボー) | 公民 |
| 長野 大原先生 | (ブル) | 絵画 |
| 原沢 亨先生 | (ウス) | 地理 |
| 原田 三郎先生 | (カッパ) | 物理 |
| 春山 基二先生 | (チョクトツ) | 事務・工作 |
| 藤井 重男先生 | (マッペン) | 教員 |
| 堀口 庫吉先生 | (ポコ) | 教員 |
| 本名 正吾先生 | (ゲタ) | 国漢 |
| 町田 覚蔵先生 | (ヤギ) | 国漢 |
| 宮下文次郎先生 | (ブンチャン) | 化学 |
| 八木原維三雄先生 | (イロ) | 地歴 |
| 山崎 吉郎先生 | (カバ) | 地歴 |
| 吉村 哲夫先生 | (ボンジ) | 数学 |
| 中村 実先生 | (オッポ) | 英語 |
| 今井勇次郎公仕 | (ホテイサン) | |
| 本間千代太公仕 | (チヨタ) | |

今春、帯広時代の戦友会があつた。軍隊の先輩のK元少尉は岩手県立福岡中学（二戸市）出身で木野内先生は恩師であり、当時は新婚ホヤホヤであだ名は「ブルドック」、軍国主義的校長と意見が合わなくて群馬（洪川中学）へ転動したらしいと聞かされた。60年も経過してアチャコ先生になる前のニックネームを知るところとなり、世の中は狭いなあと感じた次第であつた。



伊香保在校生による送別会

我が追懐と次代への願い

旧制中学21⑤回卒 関 久一



本校が大正9年4月に県下で6番目の中学校とし賑々の声を上げてより80周年となる。感無量です。幾多の変遷ありて、富国強兵推進時代に移る最中の昭和15年4月、小生は入学した。この年に1クラス増えて、

東・中・西組の3クラス編成となった。服装は戦前期より続き冬期は黒服で夏期は霜降り服、帽子は3本白線で黄金の鶏の校章をつけたものをかぶり、気分はまだ旧制中学校歌の歌詞の通りで質実剛健を旨とし日々を過ごしておりました。当時の校長先生は5代目高見勘次郎先生(スーカン)で科目は修身を担当そして主任の先生は原沢亨先生(ウス)で科目は地理の担当でした。その年の11月末に本校舎東側に2階建て4教室が増築され、小生たちの組は階下新教室に移動となり、気分転換にもなりましたが、国勢が刻々と日中戦争から太平洋戦争につながる暴風期に入ったため、日毎に軍事教練、食糧増産の一環として勤労奉仕に駆り出され、勉強時間は減る日々となりました。一方では学業半ばで陸・海軍に志願が募られ、数多くの友達が転出していったので、実質的に学校生活を(青春も)謳歌する状況では無かったという想いでした。小生も少しは質実剛健を旨と進む所存で卒業後、国土館専門学校(現、国土館大学)に入学しましたが、半年ほどで昭和20年8月15日の終戦となり、すべての世様が180度転換して戸惑うばかり。気持ちの切り替え、そして言論の自由な社会の波に乗るまで相当の時間を要したものでした。

小生は、何時の世でも身も心も健全であればあらゆることに即応出来る、そして生きて行けると考えております。それにはまず身近な事、柔道を通して混沌とした社会を乗り切れる若者、青少年の育成に努めて行こうと思ひ、父の跡を継ぎ、時が過ぎた今では幸いにも次男(昭、50年全卒)が小生の後を引き継ぎ、現在に至っております。

平成11年4月に孫が本校に入学出来、不図も親子4代、父・亀太郎(柔道教師・昭和3年3月より昭和20年11月ま

で勤務)小生、(昭20年旧制5年卒)長男・智久(昭46年全卒)、次男・尚之(昭50年全卒)、孫・澄人(平11年入学)がお世話になっております。

北毛の地に伝統ある母校の指針に従い、多くの先輩が世のために尽され残してきた足跡を大切に、現在の世界情勢に対応する日本の対外政策、国内の政治、経済、福祉等の行政に向かって行く一員となるよう、これから進学して社会に進む在校生諸君、勉強に運動に励み、多いに北毛の雄・洪高を盛り上げることを望みます。

振れ振れ洪高!

今を生きる

旧制中学21④回卒 大塚昌之

「働くとは、はたの者をらくにすることです」と言われたのは、ソニーの前会長さんだそうですがまさに名言だと思っている。

退職して11年、この間10年は嘱託として、社会教育指導員、社協事務局長の仕事に従事してきた私であるが、自分自身、この名言を全うしてきたかと思うと、それ程の働きはしてこなかったように思う。

それは、新しい仕事のやり方の吟味が工夫されていないためだと、今でも思っている。

「人生70古稀」を迎え、早、1年以上経過した今日……。8世紀のころ、唐の詩人、杜甫が長寿は人類共通の願いですが、「古来稀なり」と言われ、当時としては70歳まで生きるのは極めて珍しいことであったそうです。

しかし、今や我が国では超高齢化社会に突入し、男女共に平均寿命は延びて、人生80年の時代がやってきました。昔から考えれば夢のような時代です。私は、現在、たまたま福祉ボランティアの仕事や青少年赤十字賛助の育成に携わっていますが、さまざまな会合の中で、老いを楽しく元気で充実した日々を送らねば長生きしてもあまり意味がないと思っております。年を重ねただけで人は老いない、理想を失う時に初めて老いが来る。いつまでも情熱と信念と希望を持ち続け積極的な生活することをモットーとしたい。

さらには40歳代から、自分は老後に何をしたいか、どう生きたいかを考え、その準備をしておくことが大事で

あると言われてきました。老後こそ、自分の趣味や、キャリア、長年の夢を実現出来るバラ色の時ではないかと思う。

教職を退職して無趣味な私は、今からでも遅くはない、今を生きる自分の未来に夢を託していくような余裕を、そっと何時も、密かに持ち続けていきたいものであると思います。……時の流れと共に時代も大きく変わっていくでしょうから……。

実は、去年の8月7日東京周辺洪高同窓生の集いがあり、東京湾晴海埠頭の日本丸豪華客船上でパーティーが開催された。東京洪高同窓会(青木三策会長)の懇親会である。この会合にわれら、旧制21回卒の久遠会の面々も、青木会長さんをはじめ、東京方面同窓生の役員の方々のお誘いにより25人ばかり参加した。懐かしい昔話に花を咲かせ素晴らしい一言につきる会合であった。

そうした年齢こそ違え、同世代に生きた同窓の友との語らひは、今でも心の中に刻みこまれている。こうした旧制中学時代のグループ、我が久遠会の仲間たちとも年一回は歓談している。職場でも、グループ団体でも、仲間同志でも、いろいろな席での会合でも遠慮のいらない何でも話せる世界というものがあるが、私たちのこのグループはご多分に漏れず、その一つである。

その中で誰かのちょっとした励ましの言葉、あるいはジョーク等が、70歳を越えた年代の者にとっては、それが仲間同志の語りかけ、問いかけであったにせよ、子供と同じで、そこにお互いの感動の変化を与え、心と心の触れ合いを通じ、雑談の中にもこれからの航路を示唆しているような気がする。つまり同窓生特有の良さである。

私たちのこの会の仲間も、定年でやめた者、その後、民生委員、地域の区長、福祉関係の仕事、赤十字を中心としたボランティア活動、まだまだ第一線で企業経営している者、サラリーマン、実業家、商社マン、医師、社長、農業経営者、自営商業等、さまざまであるが、それぞれの経験を積んだ者同志のザックバランな話し合いというもの、こくがある。自分の知らなかったものも出てくるし、自然、自然の肩の凝らない交流の中に触れ合いを感じ、人間の可能性が引き出されてくるだろうし、ただ単なる「なあなあ」の関係だけでなく、よい人間関係がさらに深まっていく。何時までも新鮮なユートピアを求めて精いっぱい生きたいものである。

話は変わるが、最近各所で地震や災害も起きている。「備えよ常に」ではありませんが、年齢が増してきた今日、普段次のような物を揃えておくことと便利であると、医療関係に勤めている友人から言われた。それは救急箱(懐中電灯、三角布、体温計、ガーゼ、ピンセット、ハサミ、消毒薬、脱脂綿、包帯)である。トランジスタラジオなども、スワー大事の時に役立つので、すぐ目の付くところに置いておくことを指摘された。

このように年を取り今を生きていく上にはさまざまな事が展開されてくるが、何よりも自分の健康保持と現況をつぶさに把握していく必要があると思われる。

ある調査によると日本人の平均寿命は、男性が76.4歳、女性が82.8歳だそうで日本は世界一の長寿であるとのこと。この平均寿命とは、おぎゃあと生まれた赤ちゃんが何年生きるかということである。

今、日本では100歳以上の人は、8,000人近いと言われている。毎年1,000人近く増えている現況だそうで、昭和38年には、150人くらいだったようだから、36年間で約60倍になっていることになる。また、世界人口は現在60億に近い。昭和40年ごろは約30億人と言われていたから、30年強で世界人口は倍増している。

そして現在は、日本は平和であるとは言え、景気の低迷、世界の不況、日本経済の危機、現代社会を生き続けていくためには、同志の結束は必要欠く可からざるものがある。

洪高第19代校長、荒井英一氏(故人・私の同級生)の在任時、私たち同窓生有志が集い、昭和63年6月に現校舎中央玄関に「堅忍持久」という当時の学校目標の一つをブロンズ像に刻み、現生徒に未来の希望を託しての意味をこめて建立、寄贈した。これは、荒井校長をはじめ久遠会としても母校を思う気持ちの表われであると思っている。

さらには、私共卒業50周年を記念し、1995年6月25日に細やかではあるが、思い出として記念誌(同窓の友集)を発刊した。名称は『旧制群馬県立洪川中学校第21回卒業生同窓会、久遠会』。現洪高にも10冊寄贈してある。若干骨子を紹介したい。

洪中校歌に始まり、不肖私の発刊に寄せて、同窓生46人が「洪中時代の思い出」として、太平洋戦争真っただ中の学園風景、当時の学校生活の様子を投稿してくれた。非常に貴重な体験談や学徒動員時代の事など、どの

同級生も皆、忘れ得ぬ日々の出来事として記載してあった。加えるに昭和16年から終戦までの学校の歩み、行事の主だったものも掲載した。

代用食「笹の実」採集、戦闘帽に黒線、中等学校の制服統一、学徒勤労奉仕の実施、明治神宮国民練成大会冬季大会（昭和18年1月24日）、榛名湖水上大会、大会の陰に咲く錬成の奉仕精神、挺身する洪中学徒の、タイトルで当時の上毛新聞に掲載された記事ものせていただいた。懐かしい思い出の1コマを綴った冊子に出来あがったと思う。末永く大事にしていきたい。

同級生は本当にいいものだと思感、あの戦時中の悲しみも、辛さも一緒に、皆、今振りかえれば良く耐えて頑張ってきたとの一言に尽きる感がある。ページの最終に載せた校庭での全員の記念写真（昭和19年3月撮影）は、当時の顔、顔、顔であった。

私は現在、日本赤十字社群馬県支部奉仕団に所属しているが日赤傘下の地域奉仕団のご婦人の活躍には目ざましいものがある。

今、日本長寿社会の現実の中で何よりも大切なものは健常者によるボランティア活動だと思う。

この活動は、その人の自由意志によって行動されるものであり他からの押しつけではない。まさに現今の社会を生きていく上での金字塔である。

そこでこの活動のポイントは、サービス提供者も受ける側も、お互いが気持ち良く、心が通じる活動に発展していくことが大事であると思っている。

自ら進んで奉仕をしたり社会事業などに参加することであるが、自分勝手になく社会性のある活動、相手との信頼関係は是非共持ちたいものです。みんな幸せを願っ



東京同窓会招待参加の帰途
久遠会メンバー（柴又帝釈天本堂前にて 1999.8.8）

て——住み良い世の中にしていくために——。私自身も今後出来る範囲で微力ながら活動を続けていきたい。それには、70歳を過ぎた今、健康でなければ何も出来ない。「日常の心と体の健康づくりに努めよう」を相言葉に頑張っていこうと考えている。

先日、東京は新宿の新企画出版社から出されている、『健康づくりのポイント』を読む機会に接した。1. 1日3食栄養バランスを考えた食事をとる。2. 適度な運動を習慣づける。3. 生活のリズムを整える。4. 休養をとり、心と体の疲れを解消する。5. 節煙、禁煙、節酒を心がける。6. 歯と歯ぐきの健康に注意する。7. 何でも相談できる、かかりつけ医を持つ等々……。この中で私もいくつか該当する項もあるが、全部はなかなか到達していない。

何はともあれ健康保持の参考にして、二度とない人生をよりよく生きていこうと思っている。

花の美しさは、その花が精いっぱい咲くから人間の目に大変美しく映ってくる。人間もやはり、精いっぱい行動することによって、その姿は尊く美しさを増すであろう。

「こう生きて居るも不思議ぞ花の陰」（小林一茶）。私たちはお互いのつながりによってまた多くの人たちの恩恵により今日があることを緊々と感じる。来年は新しい21世紀の幕明け。

この記念すべき年に洪高創立80周年記念誌が発刊されることは、誠に意義深く益々の洪高の発展の一助に寄与するものと確信し私の拙文を終わらせていただく。

—— 忘れ難いあのころの思い出 ——

旧制中学21④回卒 都丸和栄

洪川高校創立80周年記念誌発行ということで、特別な時代に旧制洪中の4年間の学生生活を過ごした事は、私の人生にとっても忘れ難いことなので、学校にお願いして重い筆を執ることに致しました。

私も71歳の高齢者となりましたが、戦後54年が経過して、戦中派の世代としてその激動期を生き抜いて現在があるのも、洪中4年間の戦時教育の是非はともかくとして質実剛健の学校の気風を受け、心身の鍛練、忍耐力の

養成等、困難に堪え得る精神と肉体の基礎を母校は培ってくれたと思います。

戦時色が濃くなった、昭和16年4月母校洪川中学へ入学しました。私の家は赤城村（当時は横野村）で学校まで5^{キロ}ありました。山坂のある砂利道で、通学手段は徒歩でした。雨の日も、風の日も、頑張り通して歩きました。通学が辛いと思ったことは一度もありませんでした。

「少年よ大志を抱け」の言葉通り、大きな夢をふくらませながら入学当時は、勉学にいそしんだ記憶があります。

入学した年、昭和16年12月8日、日本軍の真珠湾攻撃のニュースを教室で先生から聞いて私たちは手をたたいて、喜んだような記憶があります。当時私たち13歳の純真な少年は、まだ物事の判断力はありません。ここに日本も、いよいよ太平洋戦争に突入したのです。これを境として、私たちの中学生活は大きく変化して行きました。

太平洋戦争を勝ち抜くための、「軍国教育」、「八紘一宇」、「大東亜共栄圏」、「聖戦」、「鬼畜米英」、「欲しがりません勝つまでは」等の言葉を頭の中にたたき込まれ、戦争の勝利を信じておりました。

数々の思い出がありますが、私が1年生の時に着任した長岡禎利校長は、朝礼の時に生徒を上半身裸にして、乾布摩擦を毎朝励行させて、生徒を鍛え上げ、質実剛健を地でゆく個性の強い校長でした。また学校行事の中に軍国調がどんどん取り入れられ、耐熱行軍、連合演習、防火訓練、戦勝祈願をこめて、護国神社往復、集団勤労作業、予備士官学校への行軍実施、軍人による査閲等、数え切れない程の軍国教育が行われたような記憶があります。授業の中に軍事訓練が取り入れられ、昭和18年に東部第38部隊（今の高崎市）から、ハリキリ軍人の近藤大尉が配属将校として着任、38式歩兵銃を担いで、厳しい軍隊教育で生徒を絞り上げましたが、泣き事と言う生徒も居なかったように感じております。後に太平洋戦争で戦死したお話を聞いた時、また近藤大尉が軍刀を引き下げて、校舎の中の廊下を闊歩した姿を思い浮かべ、痛ましさを禁じ得ません。

その中であっても、3年間は何とか勉強が出来たような気がします。戦時教育の中にもユニークなことがありました。先生をあだ名で呼ぶことです。今の高校はどう

なのでしょう。本名を忘れて、あだ名だけが、記憶に残っております。例を上げれば、英語の発音の上手なマッコウ先生、姿勢のよい歴史のチョクトツ先生、色男の歴史のイロ先生、大男の剣道のマンモス先生、頭が光り輝き目がぱっちりした生物のパチ先生、アチャコのような顔をした物理のアチャコ先生など、今になると懐かしい思い出です。

昭和19年になると太平洋戦争も激しさを増し、日本軍も敗色濃厚となった年です。私たちはそれを知る由もありませんでした。学校も戦時一色となりました。戦闘帽子に国民服そして巻脚絆が当時の中学生スタイルでした。ほとんど勉強らしい勉強は出来ず、私たち4年生は、昭和19年6月学徒勤労奉仕作業が始まりました。私は農家の農作業奉仕のため、利根川川場村の生品と言う集落のKさんの家へ1週間程度寝泊りして田植えの鼻取り（牛を引いて水田の代かきをさせること）をやったり、養蚕用の桑を高木（利根郡地方は寒い地域なので霜の害を防ぐため桑が高木に仕立ててある）に登って切り取る作業などでした。私の実家も農家で、養蚕も田植えも経験がありましたので、抵抗なく作業が出来ました。Kさんの子供さんは私と同世代で、長男の方と姉妹二人、三人で一緒に農作業をして、楽しく、それが一つの青春の思い出だったのかなと心の中の記憶に残っております。

今度の思い出の手記を書くのに当たり、55年ぶりに、Kさん宅を訪問しました。今浦島のような気持ちでした。Kさん御夫妻は亡くなり、娘さん二人は嫁がれて、Kさんの御長男Nさんは健在でした。55年前の過去に思いを馳せながら、思い出話に花を咲かせて、語り合うことが出来、懐かしさを禁じ得ませんでした。

半世紀の時の流れは、すべてを変えてしまいました。利根の寒村だった川場村が、現在では群馬県でもユニークな村政を施行していて、文化・観光・福祉施設を持った近代的な農村に変貌しました。しかし武尊の山の麓の紅葉を眺め、川のせせらぎの音を聞き、自然の豊かさを感じとりました。そこに住む人の人情は、55年前と少しも変わらぬ温かみを持っていて、これが日本人だなどの思いでした。

勤労奉仕作業も終わり、昭和19年7月には中島飛行機（株）尾島工場へ、学徒勤労員で配属されました。B29爆撃機による、本土空襲も激しさを増し、学校も戦時一色となりました。私たちは尾島工場で、戦闘爆撃機

「銀河」の翼の部品を造っておりました。中学生が、当時時代の先端をゆくドイツ製の工作機械の旋盤を駆使して、ジュラルミンの製品を削っていたなど、今考えれば、中学生でよくこんな仕事が出来たのかと不思議に思います。

隣接する太田工場がB29の爆撃を受け、防空壕に避難した時、ふと空を見上げてみると、B29を迎撃する日本軍の戦闘機が撃墜され、木の葉のように墜落する姿が見えました。この時、私は戦争の怖さを初めて知りました。寄宿舎生活も粗末な食事で、育ち盛りの私たちには空腹の毎日であったような気がしました。

戦時非常措置で、5年の修業年限が4年に短縮され、昭和20年3月、戦時下の中で母校旧制渋川中学校を卒業しました。その年の8月15日、太平洋戦争は日本軍の無条件降伏で終結しました。

その後55年間、農業に従事しておりますが、自分の人生において、生き甲斐のある仕事を一つやりたいと考えておりましたので、40歳の時に、赤城村の議会議員に立候補しました。幸運にも選挙戦を勝ち抜き、以後5期20年もの間議員を務めさせていただき、地域社会の発展と、地域住民の福祉の向上に貢献出来たのも、洪中時代に、質実剛健と、堅忍持久の教育を受けたおかげと感謝しております。

最後になりましたが、東西冷戦構造が崩壊したとはいえ、地域民族紛争等、戦争の火種は世界各地に存在しているように思えます。戦争体験者の一人として、今後も戦争体験を風化させないよう努力しなければならぬと考えております。私は平和の尊さ、有難さを心から痛感している一人です。

戦争の惨禍を二度と繰り返すことなく、戦争を知らない次世代の皆さんに平和と民主主義を、永遠に守り続けることを願います。

伝統ある母校渋川高校の益々の発展と、職員生徒皆さんの御活躍、御健勝を祈念申し上げて、思い出の手記の筆をおきます。

—— 思い出の済美寮 ——

旧制中学24回卒 安 斎 洋 信

私は、まさに青春時代の真ただ中といっても過言でない時代を、旧制渋川中学校「済美寮」で過ごした。昭和18年（1943）4月から昭和23年（1948）3月までの5年間である。

.....
夢多かりしあの頃の
思い出をたどれば
なつかしい友の顔が
一人ひとり浮かぶ
重いカバンを抱えて
通ったあの道
.....

ペギー葉山の「学生時代」に誘われ、50数年前に思いを馳せながら渋高80周年記念誌にペンを取ることにした。

懐かしの舎監の先生方

「済美寮」に入寮した昭和18年（1943）4月から10年の歳月がうつろい、私は昭和28年（1953）4月より群馬県公立高等学校教員に採用され、県立富岡高校に赴任した。富岡高校にも寄宿舎があり、図らずも舎監を経験する機会に恵まれた。そこで、舎監の仕事の重さと責任の大きさを身をもって知らされた。改めて10年前のわが身を振り返り、大変なお世話をいただいた舎監の先生方に深い敬意と感謝を捧げ、ここに謹んで、その先生方とらびに愛称をご紹介させていただく。

中里 仁乗先生（公民）＝コンボー

舎監長として、寮の規律から個人の生活面まで、きめ細かく指導していただいた。

古稲善太郎先生（教練）＝ゼンサン

常に軍服姿の准尉殿。特に、会計面でお世話になった。

木野内与四男先生（数学）＝アチャコ

テスト前には、よく舎監室に数学の質問にゆく。人間味豊かな先生。

黒岩 勝雄先生（剣道）＝マンモス



昭和18年度済美寮の舎監・生徒
（前列右2人目から）富沢光男、田村清明、萩原久也君、古稲善太郎先生、中里仁乗先生、小林熊光校長、木野内与四男先生、黒岩勝雄先生、安斎洋信、柴田光彦君
（注）黒岩徹君と宮崎輝君は退寮して不在

竹刀を持たせたら日本一の大男。孀恋出の同郷なので目を掛けていただいた。

針塚友三郎先生（物理）＝カップ

生徒と寝食を共にし、人生を語る事が大好きの先生。影響受けること大なり。

ハングリーの時代

舎監長の中里先生より「寮生は泊まり込みで農村に勤労奉仕……」との思いもよらぬ達しがあったのは、入学した昭和18年（1943）1学年時の晩秋のことである。

当時は太平洋戦争の真只中。多くの壮年の男たちは戦場や軍事産業に狩り出され、町も村も極端に労働力不足であった。中学生も出征兵士の留守家庭を優先して勤労奉仕に出掛けることになり、特に寮生は学寮の食糧不足をカバーする狙いもあり、農家に泊まり込んで作業をすることとなったのだ。

そのころ、校門を入っての突き当たり右に、寄宿舎（名称、済美寮）があった。同期の仲間には、萩原久也君・故宮崎輝君（長野原）、富沢光男君（岩島）、田村清明君・柴田光彦君（中之条）それに黒岩徹君と小生（孀恋）・疎開転入で関真君（六合）等の面々、いずれも通学できない吾妻出身者だった。

戦争も日々苛烈となった。アツツ島の玉砕などが伝えられ、校庭の一隅にあるテニスの名選手・佐藤次郎の胸像までも供出されて大砲の球に変わり、多感な生徒たちを悲しませた。

食糧品も次第に乏しくなり、入寮歓迎会の特別メニュー・肉ジャガを最後にして、再び食卓に肉らしい物が乗ることはなかった。育ち盛りの私たちにとって、米より芋のほうが多い一膳飯では、とうてい足りようもなかった。時折家から送られてくる炒り大豆を分け合って、ポリポリ噛み空腹を補いながら机にかじりついてた。農家に頭を下げて着物とチェンジした大豆。しみじみと親の有り難さを実感したのもこの時だった。

寮生の多くは農作業の経験はなかったが、ハングリーをしのげるとあ

ってか、この勤労奉仕はある面での楽しみでもあった。麦刈り、田植え、芋掘り、稲刈り等の農作業を一通り経験した。さらに私は、田植え前の代かきで馬の鼻取りをも体験した。晩秋には、田んぼ改良の暗渠排水工事にも協力した。

地域も広く、小野上村、子持村、赤城村、榛東村、吉岡村などと渋川周辺の農村をひと巡りした。まさに、県立渋川農業中学校であったのだ。

今にして思えば、得がたい貴重な体験であった。実はこれが、後年の小生の俳句づくりに多に影響を与えてくれたのである。

春耕のまだ柔らかき土不踏



昭和20年度 済美寮の全景と舎監・寮生たち先生方
中央 平野武夫校長、
左端 左から 古稲善太郎先生、中里仁乗先生、
右端 左から 木野内与四郎先生、賄い婦のご主人

小石嚙む鋤だましつ春田打つ
 鳥雲に汗の居残る鍬洗ふ
 石一つとりて棚田の落し水
 研ぎあげて鎌の刃匂ふ草紅葉
 雲に問ひ雲に応へて冬田打つ
 などなど

農村俳句の原点もこの体験に起因するところが多い。
 はからずも

小石嚙む鋤だましつ春田打つ
 の句が、平成元年第25回上毛文学賞の受賞句となったことは一生の思い出である。

同窓の友の絆の強さ

話は変わるが、ハングリーの寮生活は、将来の健康にさらに重大な課題を残すこととなった。平成2年(1990)9月3日、同僚・宮崎輝君が心不全で急死した。あの元氣な輝君が……と驚くと共に、E君の言葉が頭をよぎった。医師になったE君はよくこんなことを言っていた。「人生80年というが、昭和1桁の私たちには無理かも知れぬ。と言うのも、育ち盛りの栄養不足から血管や内蔵が脆いから」と。

ご家族からの御依頼もあって、同級生の中野卓也君が編集の中心となり、茂木秀夫君が表紙絵を描き、3回忌を期して「宮崎輝君回想録」を出版することになった。小生も「済美寮の思い出」の一文ならび追悼句を贈らせていただいた。

そして、平成4年(1992)9月、

『真実一路——我が追憶の宮崎輝君——』というA5判300頁の立派な「宮崎輝君回想録」が完成し、このうえない供養となった。また、この時ほど、ハングリー時代の友の絆の強さを感じたことはなかった。

飽食の時代奢らず終戦忌 洋信

思い出のチンチン電車

旧制中学24回卒 飯島健児

昭和18年4月7日、県立渋川中学校に入学した。
 朝よりこちよい春風が吹き、中学校と渋川小学校の



間は桜並木にて、両方の花びらが花吹雪となり、一面花片を敷きつめた地面上を歩きながら、中学生になったうれしさを噛みしめて一歩一歩校門に近づいていた。

制服は正林堂にて買った木綿の黒の上下にて、帽子には黄金の鶏が光っており、渋中に入學した感激はいやが上にも高まった。入學生168人にて我々仲間ではイロハは誰だろうとよく思案した。

そのイロハも昭和23年、中學卒業の時には200人以上となっていた。それは戦争のため疎開生の入學志気がありだんだんに増えていったためであった。

普通ならば青春真っ盛りの年代であるが、われわれがすごした渋中時代はまさに激動の時代であり、渋中・渋高を通じて5年間にこれほど激しい変化はなかった時であった。特に昭和20年8月の終戦の前橋では、我々よりも先生方の対応が大変苦しい時であったと思う。

そんな慌廢の時代になんの問題もなく學校生活を送ってこれたのも、当時の先生方の愛情ある努力のおかげであると今でも感謝している。

そんな學校に通學した乗り物は、小生はチンチン電車であり、現在の群馬にはどこにも存在しない過去の乗り物となつてしまひ、線路のあつた道をとおつても、ここに電車が走つてたことすら想像も出来ない現状であるが、小生の家から(現・群馬町)渋川に通學するにはこの電車によるしかなかつた。渋中生活を懐古するのにこのチンチン電車を忘れることは出来ない。この思い出を通して渋中時代にふれてみたいと思う。

当時の渋中生は、町内の者は徒歩通學が主体であり、交通機関の沿線に住んでいる場合は交通を利用し、他は自転車通學。それ以外の草津・長野原・六合村等遠方の人たちは學校の敷地内の寄宿舎や町での下宿生活を余儀なくされた。交通機関には東武電車の高電(高崎—渋川

20.9km)、前電(渋川—前橋14.5km)、伊香保電(渋川—伊香保12.6km)があり、他は汽車通學(上越線・吾妻線)、省営バスであつた。

乗物通學といつても電車(1両)の定員30人乗りに100人近くが乗り、真ん中などに入ると呼吸も満足に出来ず、窒息寸前のものであつた。そのため、真ん中はいつも下級生で、上級生は出入り口に近いところに乗つていた。また電車の前の口からは女子學生、後の入り口から男子學生と、なんとなくきまつていた。

高電は、渋川—高崎間を70分から80分くらいで走り、

①渋川新町

高崎方面に向かい平沢川に2つの橋が併架された橋を渡つて長塚町へ通じた。

②長塚町

現在市営駐車場。

③石原

交換場があり、現在石原眼科駐車場の一部、平形眼科の南側に人力車夫の住居があり、そこに電話が設置されていた。業務連絡用。

④行幸田

田ん圃の真ん中にあり樋口旅館入口の看板と電柱に停留所のみ。

⑤有馬

交換場であり民家に電話設置してある。

⑥小倉

現在の四ツ角南川に近い手前周囲桑畑。

⑦北野田

カーブの手前通過の際、停留所のしるしがないとわからない(新しい停留所)。

⑧下野田

重点箇所 渋川より電車の臨時便など下野田止りであつた。

停留所の両側には商店街があり近くに映画館、荒物屋、洋服仕立屋、角藤旅館などかなりにぎやかであつた。

⑨田中

乗客がいなくて素通りする。

⑩北下

地名は南下だが北下停留場となつており交換場があり電話も設置されていた。

⑪陣場

停留所前に商店があつたが乗降客少ない。

⑫野良犬

交換場あり停車時間が長い。伊香保温泉の湯治客が車掌の「野良犬」の呼び声に腹をかかえて笑うのには同じ電車に乗る者として恥ずかしいおもひをした。

⑬清里

大きな四ツ角にあつた。

⑭金古

かなり後にできた。利用客も渋川方面・高崎方面の學生が主。

⑮金古四ツ角

ここを金古としていた。民家に電話がある。

⑯足門

周辺が一面桑畑、東側に一軒高橋家あり。電話設置され交換場がある。

金古町足門・国分村引間・冷水方面の乗降客多かつた。

⑰観音寺裏

信号所がある。

⑱棟高

交換場があり、社宅二軒、変電所に3台の発電器。

⑲三ツ寺

現安中線と交差急勾配の下り坂の左に染物屋あり。この地点を紺屋の坂(三ツ寺の坂)と称した。

⑳中泉

交換場があり民家に電話を委託。

㉑福島

信号所のみ、田んぼ、畑多い。

㉒大八木

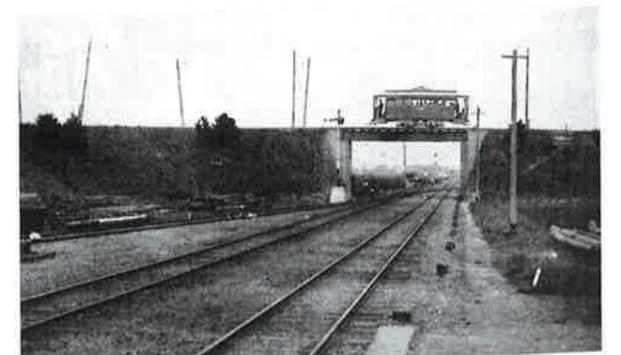
西側の民家に電話委託・交換場あり。

小田島田んぼと称し(大八木たんぼ)路線一直線。

㉓追分

三国街道との分かれ。

㉔飯塚



信越線と立体交差し高崎倉庫の裏手を迂回し再び高崎街道に戻る。

現在は痕跡なし。

②⑤住吉町

現在は広い四ツ角に一変した。

②⑥相生町

高崎神社入り口。

②⑦本町1丁目

道路の真ん中を走行。

②⑧本町2丁目

商店街。

②⑨本町3丁目

交換場あり、電話あり、特に三差路で大きく曲がりながらの交換場で、角に東電があった。

③⑩田町3丁目

繁華街、江戸時代にお江戸見たりゃ高崎田町と言われた。

③⑪大手町

東側に郵便局、警察署があったが戦争中の強制移動で空地化、現在音楽センター入り口。

③⑫新町交番前

駅からの突き当たり交番あり

小生同級生の田子君が勤務しており、東京からの帰り道に時々立ち寄った。

③⑬高崎駅前

向かって右側に2つの線があり、切符売り場、待合室が設置されていたが現在は大規模歩道橋が駅に直結され痕跡なし。

途中これだけの駅に停まった。この高崎線歴史について渋川市教育委員会の資料を参考しますと、「三国街道 慶長6年(1601年)佐渡金山の開発に伴い



江戸幕府が三国街道の整備に力を入れ、近世初期の三国街道は中山道本庄宿から分岐し玉村一総社一大久保一八木原一渋川に至る佐渡奉公街道が主であった。慶長3年井伊氏が居城を箕輪から高崎に移すと渋川から箕輪に通ずる箕輪道に変わって、中山道を高崎城下で分岐し金古宿を経て渋川宿に至る道筋が整備された。この金古宿経由の交通量が増大するのは近世前期までさかのぼると考えられる。――」

このように高崎を起点とする道筋が本街道となって越国大名もこの道を通りした。このような街道に徒歩から、かご・荷車・馬車・人力車と交通手段が以下のように変わっていった。

渋川一前橋(明治23~43年馬力、明治43~昭和31年電力)

渋川一高崎(明治26~43年馬力、明治43~昭和28年電力)

渋川一伊香保(明治43~昭和31年電力)

渋川一沼田(明治45~大正7年馬力、大正9~昭和9年電力)

渋川一中之条(明治45~大正9年馬力、大正9~昭和9年電力)

このように最初は鉄道馬車が走ってから電車で替わり、人々にとってかけがえのない交通機関であったが大正7年高崎一渋川の上越線開通による変化、自動車時代到来により、チンチン電車も昭和29年から31年にかけて廃線となった。この電車は京都市がロンドンから購入した電車を譲り受けたもので運転席にはMADE IN LONDONの刻印があった。

現在、この道にはかつてそんな電車が走っていたのかと思うほど痕跡も残っていない。満員の電車ではあったが当時の渋中・渋高の生徒にとっては最大のコミュニケーションの場であり、上級生、下級生と皆仲良く運命共同体的な要素を含んでいた。現在の東京同窓会長も高電通学者であり、われわれ高電通学者には共通の話題であり、また懐かしい顔ぶれ、良き学友でもあり、大変素晴らしいことだと思っております。

このわれわれの母校が大正9年4月、1学年50人で渋川尋常高等小学校の一部を仮校舎として開校してから80年経過して現在の渋川高等学校がある。その間多勢の卒業生を送り出し、その人たちが社会に大いに貢献してきた。ここに80周年を迎えるにあたり、今後とも社会の礎となる人たちが多勢育ち、100周年、150周年、200周年と発展されますよう心より祈念しております。

二つの記念碑

旧制中学25回卒 石原 尉 行

校歌の碑が、校門を入ってすぐ右側にあります。高さ1.8m、幅3m。正面向かって左に渋中、右に渋高の校歌が彫られていて、裏の碑文(趣意書)の原案は中野卓也先輩、そして土屋敏夫先輩が揮毫され、平成6年3月27日に除幕式が行われました。この碑の建設にあたっては最初、戦中戦後の動乱期に教鞭を取られた小松恭己先生に薫陶を受けた「同窓生」、「火焰の会」、「定時制の会」等のグループが、「小松恭己先生を偲ぶ会」を組織し、その13回忌を期して「校歌の碑」を建設しようと準備を進めていました。その後検討した結果、碑に対して小松先生個人の顕彰という面が見られるということで、「渋中、渋高の校歌を後世に残す」として同窓会で建設を進めることになりました。多くの卒業生を輩出した本校の同窓生、在校生の心のシンボルである校歌を石に刻み、心に刻み、いつまでも母校を思い、いつまでも語り継がれ、歌い継がれることを、心から願って建設されたものです。小松先生は、私の家のすぐ北側にお住まいになっており、個人的にも同じ隣組としておつきあいも多く、この碑が建てられたことにより、より先生への思いがつのるものであります。

働学修己とは、平成10年3月14日、渋高定時制課程閉校記念式典のあと、記念碑除幕式が行われたその碑文であります。いくつかの碑文候補のなかより、委員会の会議の席上、全員一致で決定したものであり、まさに卒業生の思いの凝縮である、素晴らしい言葉だと思います。私は昭和20年2月、東京で戦災に遭い、母の実家がある渋川へ疎開して参りました。当時は、家業も定まらず毎日のように母の仕事の手伝いで、榛東村の群馬県綿羊協会へ原料と製品の運搬に自転車を通ったり、畑仕事の手伝いをしており、あまり学業に専念できませんでした。当時、定時制が開校していたら、きっと定時制進学を選んでいただいていたのではないかと思います。その定時制課程も、平成10年3月に、47回目の卒業生を送り出し、50年の歴史に幕を閉じました。

私は、同窓会役員として、いつも卒業式(同窓会入会式)に参列しております。毎年厳粛な内にも、高校生

らしいすばらしい式典が挙行されております。その式典のなかで、感動するのは、在校生の送辞、卒業生の答辞であります。特に定時制卒業生の答辞には、いつも心を打たれます。代表者は会社員あり、自衛官あり、時には女性の時もあります。平成10年には、10人の卒業生を代表したAさんの答辞には目頭が熱くなりました。平成6年に定時制課定の閉校が決まり、7年より3学級となり、毎年1学級ずつなくなり、最後の卒業生10人で過ごした1年間、きっと、思いもひとしおのものがあったことと思います。Aさんも、いまでは幼いころから夢みた看護婦さんとして頑張っていることと思います。閉校記念碑の碑文「働学修己」正に心にしみる言葉であり、定時制課定卒業生、全員の定時制教育を語り継ぐあかしであると思います。

同窓会役員在任中、この二つのすばらしい記念碑の建設に関係できましたこと、立ち合うことができましたことは大きな喜びであり、感激であります。この二つの碑が同窓生、特に、在校生の将来に大きな励みになればと、心から願うものであります。

渋川高校讃歌

旧制中学25回卒 猪熊 重二



最も多感な青春の4年間、私を育て、生かしてくれた旧制渋川中学校。しかし、私はこの中学校に対し、昭和23年の4年生修了後現在に至るまで、何の感謝の言葉を捧げることもなく、また、何の報恩の行動をとることもなく、過ごしてきた。

今、人生の終焉も近いこのごろ、渋川中学校の4年間の日々が、私の生涯を貫く人生の機軸であったことを、しみじみと思い出す。

母校に対する私のこの思いを書く機会を与えて頂いたことに、心から感謝するものである。

渋川中学の思い出

渋川中学校は、当時もそして今も、そのすべてが、私の心の願いにかなうものであった。

学校は、渋川の町並みの北西の高台にあって、雄大な気宇にひたることができた。木造2階の愛らしい校舎の2階の窓からは、北に谷川岳を、東に赤城山を、そして南西には榛名の山を、荘厳に眺めることができた。段差のある校庭も、私にとっては自由に遊び廻ることのできる広大な庭園であった。

このような自然環境の中であって、その校風は「質実剛健」であった。貧しい農家出身の私にとって、華麗な校舎も、ハイカラな先生も、富裕な友人も、すべて不要であり、異質なものであった。

渋川中学校の先生方も、そして学友たちも、窮乏の世相を反映してか、質素な服装であって、それを意に介するでもなく、ひたむきに理想を追い求めていたように思う。そのことが、私には心底うれしく、「この中学校は俺の中学だ」という確信をわき上がらせた。

中学校の4年間は、最初の1年半と、後半の2年半とに峻別される。前者は、太平洋戦争のただ中にあり、後者は敗戦の混乱期であった。

戦時下の中学生生活は、その時点では、辛く苦しく悲しい日々であった。

登校途中で、米軍機の機銃掃射を受け、路傍の防空壕に避難し、機関銃のバリバリという発射音が、近づく恐れ遠ざかると一息つき、ようやく爆音が消えた後、壕から這い出して学校に通ったことも何回かあった。

また、山奥の、誰が焼いた炭かも知らぬ炭俵を、背負板にくくりつけ、狭い急な山坂を背負い降ろす仕事を、何日も続けさせられたこともあった。

さらに、軍事教練で、広い校庭を、何にも這って前進し、最後に立ち上って、銃剣で藁人形を突き刺す訓練を、何回も何日も繰り返しやらされたこともあった。

これらのすべては、天皇陛下のためであり、不滅の神国日本のためであり、この目的に全身を捧げることが、少年たりといえども日本国民としての中学生の至高の義務であった。

昭和20年夏の敗戦。神=天皇は消滅し、人々にとって、自己を律するものは、それぞれの内心の呼び声だけとなった。「自律」「自由」は、混乱・放縦と紙一重であった。

キリスト教は、戦勝国の宗教として、日本国中に布教活動を展開し、私たちの心の中に、一条の光を投げかけるかの如くであった。しかし、冷静に考えてみると、国

家権力と一体となって勢力を拡大する宗教というものに、一体どのような宗教性を認めることができるのだろうか。世俗の政治権力と結合した宗教には、宗教としての価値や権威を承認し得ない。バイブルの文言の素晴らしさに心惹かれながらも、キリスト教に帰依しきれなかった所以である。

その対極において、社会主義・共産主義が、目覚ましい政治理念を説き、また、人間主義を掲げて、私たちの前に躍り出た。戦争中の単純で狂信的論理に比して、この人々の説く確信の論理は、いかばかり新鮮であったことか。中学生を含めて、多くの国民が、革新の大義に身を投じた。しかし、これらの政治勢力の現実の行動様式は、あまりに非人間的であり反民主的であった。理論と現実の落差の大きさを前に、私は、この革新の大義に対しても、傍観者の立場に終始せざるを得なかった。

かくして、当時の中学生の多くは、書物も少なく不自由な経済生活の中で、抱えるべき思想も信仰も獲得し得ず、魂の漂泊者として、道を求めて苦海を流浪していたように思う。

大学生生活の思い出

昭和23年春、中央大学予科に進学した。大学生となり、渋川という地方の小都市から、首都東京への転換は、私にとってすべてが目新しく、驚きの連続であった。しかし、大都会の混沌と遊興の中であって、私の心は、ひたむきに渋川が、また子持村や敷島村が懐かしかった。

今でも、川口市と赤羽との間を流れる荒川にかかる鉄橋を、列車で通過した時の心の動きを忘れ得ない。渋川を出て、列車がああ鉄橋を渡る時「ああ、またあの東京砂漠に戻るのか」と思うと、自然に涙が溢れてきた。逆に、列車が赤羽を過ぎてああ鉄橋を渡る時「ああ、群馬へ帰るのだ。群馬の山や田畑、友人のいるところへ、今帰るのだ」と思うと、心が天にも昇る喜びで満たされた。

しかし、今は、新幹線が、音も高らかに鉄橋を渡り切っていく。

ところで、東京は、反面において、私の学問的精神形成に、大変に役立った。知識の宝庫のような教授もいたし、後輩を指導することに無上の喜びを感じる先輩もいたし、それ以上に、勉学に没頭する多くの学友がいた。また、大きな書店が軒を連ねて、所狭しと書物を並べて

いた。

現在の高校生がどのような書物を愛読しているか私は全く知らない。しかし、50年近く経過した現在でも、その当時読んだいくつかの書物のことが忘れられない。

- ・『出家とその弟子』(倉田百三)
- ・『惜しみなく愛は奪う』(有島武郎)
- ・『愛の無情について』(亀井勝一郎)
- ・『わが詩わが旅』(吉田絃二郎)
- ・『地上』(島田清次郎)
- ・『嘆異抄』(唯圓)
- ・『新約聖書』

などのような文学・宗教関連の書物から、

- ・『共産党宣言』(マルクス)
- ・『フォイエルバッハ論』(エンゲルス)
- ・『反デューリング論』(エンゲルス)
- ・『家族私有財産国家の起源』(エンゲルス)

などの社会科学関係の書物も、砂にしみ入る水のように、私の心の中に溶け込んでいった。

そして、何よりも私の心に残ったのは、

- ・石川啄木
- ・若山牧水
- ・吉井 勇
- ・島崎藤村
- ・萩原朔太郎

などの短歌や詩であった。何十年を経た今でも、折にふれて、ふと口をついて出てくる歌や詩は、私に生きる力を与えてくれる。

大学在学中に、私がいささかでも人間的に成長し得たとすれば、その要因は、渋川中学4年間の生活にあると思う。渋川中学における生活は、私に、渋川中学出身者であること、群馬県人であること、帰るべき故郷があることを、教えてくれた。私は、大学4年間、常にこれを自覚し、誇りとし、行動の基準として生きてきた。その結果として、東京の汚濁にも誘惑にも、そして権力志向に墮すこともなく真摯に日々をおくることができた。

弁護士となって

昭和38年、弁護士となった。私は、この地上に法の支配する楽園を創り出すための一助になりたいと考えたからである。

法とは正義であり、正義とは公平である。現実の社会

に充滿する不公平・不平等を除去し、いささかでも公平な社会を創り上げるためには、万人に平等に適用される法が、あまねく社会に行き渡ることが必要である。40年近い弁護士活動の中で、私はただひたすら法、すなわち正義、つまり公平の実現のために全力投球してきた。

自己の全智全能を傾けて、独善的裁判官と闘い、また権力の具現者である検察官と闘ってきた。しかしその成果には見るべきもの余りに少ない。今顧みて、もっと法理論を学ぶべきであったし、もっと身体を動かして現場第一主義に徹すべきであった。

近代市民社会において、法は、庶民が絶対君主や教会権威と闘うための唯一最大の武器であった。私は、群馬の人々の胸に脈々と流れる反権力の理念に基づき、多くの若い人々がこの戦列に参加されることを切望している。

参議院議員となって

私は、縁あって、昭和61年から平成10年まで12年間、参議院議員を務めることができた。そこで、学んだことも多い。

第1に、政治が取り組むべき課題が、無限とってよいほどに多いことである。

第2に、官僚組織が、この無限大の課題についての情報を継続的・計画的に収集し独占して、優越的地位を保持していることである。

第3に、行政権力を抑制監督すべき政治勢力が、自己の保身に追われて、何ら官僚支配を是正できないというところである。

わが国の政治状況がこのようなものであるとき、真に国民のための政治を確立するためには、国民自らの決断による主体的政治参加が不可欠である。

国民の政治参加は、一つには行政情報のすべてを国民に公開することを要求し続けることであり、二つにはあらゆる社会活動にボランティアとして参加し行動を起こすことである。

私は、渋川高校の在學生・卒業生を問わず全ての関係者が、積極的にこの政治参加に加わって欲しいとこいねがう。そして、私も、一市民として、国民のための政治の実現に、絶ゆることのない闘いを続ける決意である。

最後に、渋川中学に無限の謝辞を捧げて、拙文を終わる。

思い出の記 ～「故郷」によせて～

旧制中学25回卒 谷 玄 昭

「故郷」。言い知れぬ響きをもつこの言葉にしみじみ思うのは、山の姿、河の流れだろうか。

数年前、日本・中国・韓国三国の仏教者交流の大会が、日本を代表する仏都、京都・奈良の地を会場に開催された。戦後50年を経て、政治経済の面での関係も深く、人事交流も盛んな中韓両国だが、戦前戦中の惨禍の記憶がぬぐい去られたとは言えず、三国仏教提携の提唱がされてから、実現にこぎつけるまでの準備交渉の段階では、さまざまな問題をクリアしなければならず、第1回を北京で第2回をソウルで、そして一巡する第3回の大会が日本で開かれるまで、その当初からかかわった者の一人として、ほっとする思いに浸っていた。

東大寺での平和祈願法要を終えて、奈良市立の能楽堂でレセプションが催された折のこと、アトラクションを依頼した児童合唱団の澄んだ歌声が場内に流れ、日本の童歌や韓の民謡を含めて披露されていた。プログラムも終わりに近付いたころ、「兎追いし彼の山、小鮒釣りし彼の川」と「故郷」を偲ぶ歌詞を耳にしながら、ふと中国や韓国の人たちの席をみた。皆が聞きほれる表情とみとれる中、韓国代表団の主席を務める和尚の目許に、一筋の涙を見た。この人は、韓国仏教界でも学者としてまた、戒律を守るに厳格な人と知られ、推されて仏教界リーダーの地位に就かれた。小学校までは日本統治時代の教育を受け、話すのは苦手だが、ある程度の日本語は聞き取れるとのことだった。青年期を戦後の反日の風潮の中で育ち、日本文化は知識としては理解されるが、近世の歴史や現在のあり方については、非常に厳しい意見を持つ人だった。その人が、メロディもさることながら故郷の山河、ともに過ごした友との思い出、父母恩師への限りない感謝の念を歌い上げるこの歌に感きわまったのだろう、涙を抑えきれなかった情念を思い、脳裏に浮かんだであろうこの人の「故郷」の姿を想像し、人としての共感を抱きつつ「故郷」の存在感の重さを改めて思い知った一刻だった。

私が現住する武蔵野の一角調布深大寺から渋川までは

関越道で2時間余り、埼玉北部の丘陵を過ぎて関東平野に入れば、右に赤城左に妙義そして正面に榛名の山容を一望して、いつもながら故郷の山々に懐かしさを覚える。大戦もたけなわの昭和20年に真光寺に弟子入りしたころ、亡父と当時真光寺に住された故都筑妙大僧正が天台宗務庁でひところ席を同じくした。仏門に入るなら小僧生活は欠かせない、師匠として頼むなら都筑僧正をおいてほかに人は無いと思い、私の身柄を託した。父も前橋在上川淵村の寺に生まれ、9歳で東京谷中の名利天王寺に預けられたことから、私にも年ごろになったらしかるべき寺に小僧にやると事あるごとに言っていたから、さほど気にも掛けず環境の変化を受け入れた。もっともそれ以前に、父の本山勤務の都合で母と妹と三人して、父の実家の寺に2年間寄宿したので、上州の風は経験済みだったし、20年3月の東京大空襲は火中をくぐりはしなかったものの、超低空で侵攻するB29の機影に脅え、下町の火災を遠望したから、疎開の意味も含めての措置かと納得もしていた。前橋の寺に一度足を止め、近所の自転車屋で借りたりヤカーに行李1つと布団を積んで、父と共に渋川に向かったのだが、後に母の言うには「仮にも親と離れるのだからもう少し別れを惜しむかと思ったり、振り返りもしないでいそいそと行ってしまっ張り合い抜けしたよ」と少しばかり嘆きの言葉を聞かされたものだった。

渋川中学2年東組に編入されて、新たな学業生活が始まったと言いたいところだが、実情は既に戦争末期のひっ迫した状況で、授業もそこそこあったが大方は勤労働員、といっても工場で生産業務に就くには年齢も不足していたこともあってか、近隣の農家に派遣されて、桑畑の根っこ掘りなどをさせられたのを覚えている。当時、学童の集団疎開で、真光寺にも滝野川の小学校、そのときは国民学校と称したが、その児童が先生・保母さんともども寄宿していた。本堂で寝起きしているのだから、朝夕の勤行もままならず、もっぱら師匠の居間で教典読誦の初歩を習う毎日だった。春から夏に移るに従い、気温が上昇する。集団生活の常として、どう手を尽くしても衛生環境が悪化するのは避け難い。本堂の両側の部屋に大振りの切りごたつがあったが、それがのみの大巢窟で院代さんなど本堂に入るときは尻はしょりで、出て来れば着物を脱いでではなくようだった。たまたま風呂が小

判型の長州風呂で、週に一遍子供たちの着衣を煮沸消毒したが、終わってみれば表面のみしらみの残骸に厚く覆われているという有り様だった。

学校が近いというのは便利なもので、初鈴の鳴る間際の駆け込みも可能だった。食糧事情もあって、弁当持参といかないときは、寺に戻って代用食の諸・南瓜で空腹を満たすこともできた。手先は器用とはまちがっても言えないが、退屈しのぎに花輪の足を削っては、飛行機の模型を作った。ソリッドモデルとしゃれたいが、ボンド代わりにけなしの飯をへらして作ったそくいを糊にし、着色も色鉛筆という不細工な出来だったが、子供たちに与えると結構喜んでくれた。渋中と並ぶ小学校に、たしか青葉部隊と称したと思うが、輜重隊が駐留していた。早朝、号令とともに寺のわきの道を行進する兵士の姿は、草履に木銃竹槍で年ごろも40歳を過ぎていようか、所帯持ちの小父さんといった風情だった。学校での教練も、竹棹の先に座布団をくり付けて対戦車地雷に見立て、敵戦車と仮想する大八車に突入する訓練をしたこともあったか。7月だったか渋川にも艦載機が来襲し機銃掃射におびえる一瞬もあって、戦局の終末が近いことは薄々感じられた。8月15日は、誰もが記憶するように朝からの快晴で、正午に重大放送があるとのことで、ラジオの前に皆が集まって耳を傾けた。きんきんと響く声が玉音かと思いつつ聴いた終戦の詔勅については、多くの人々と感想を共にするか。一種の興奮と虚脱感が記憶の片隅に残るだけで、その日の午後、これからどうなるのかと思ひながら、校庭に集まったようでもあり、ぼうっとして過ごしたようでもあり、9月からの第2学期初めの時期を含む2、3カ月は、何を考へ何をしたのか忘却の彼方に去ってしまったようだ。

昭和20年12月、正式に仏門帰依の儀式、出家得度を受けることになった。母はどこでどう工面したのかもち米と小豆を用意してきた。師の僧正に院内の数人と、加えて同級生だった行幸田光運寺の大澤祐順さんと山子田柳澤寺の小川晃勝さんも参席して、晴れて僧籍に入り名も俗名の昭彦から、師の法名から玄の一字を頂いて玄昭と改めた。

この時期、いわゆる「吾ら墨塗り小国民」といわれる教科書抹消の作業が行われた。ラジオからは「真相はこうだ」と大東亜戦争の実態について、GHQお声掛かり

の放送が流れ、価値観の大転換の真っ最中だった。3年に進級し、中組に席を置くことになり、担任の若林一也先生の薫陶を仰ぐことになった。といえば格好が良いが、当時先生は20代の若さで、確か新婚ほやほやだったのではなかるうか。地元の級友は親しさもあってか、遠慮もなく先生の自宅に押し掛けて行っていたようだが、私はどこそこ疎開組のコンプレックスに災いされて、それでも2度3度はお邪魔したか。授業もそれなりに定例化してきたが、なにせ遊び盛りの年ごろで、活字中毒の気味もあって坂下町の方だったと思う貸本屋に入り浸っていた。書棚にある本はといえば戦前出版のもの、探偵小説全集で小酒井不木や夢野久作の味を知り、押川春浪の冒険小説に魅せられ、はては村上浪六に親しむという次第。親元に暮らしていれば眼も光っていようが、離れて暮らす自由を満喫する毎日だった。今思うと不思議だが、アメリカの作品を主とする洋画の封切り館が前橋・高崎に開場したのもこのころだった。レオ・マッケリー監督の「我が道を往く」を観たのも前橋セントラルと記憶している。級友の谷名洋三さんは、すっかりピング・クロスビーの甘い歌声にほれ込んでいたが、それが原因で美校卒業後大映洋画部に入社したのかも知れない。その後デザインを手掛け、近年は陶芸に心を傾け、殊に備前焼きの素朴で且、力強い風格を愛でて、窯をもったこともあったが、一昨年急逝された。現代人でありながらひょうひょうとした風格の人柄は惜しんで余りある。日本交通公社の出版部門で手腕を発揮した和田恒夫さんには随分と切符の手配ではお世話になった。フジテレビにいた丸山一保さんは、先年ベートーベンを題材に、聴覚を失っていたと言われる楽聖の真の肖像に迫る一文を草され、話題を呼んだ。挙げれば尽くせない多くの友人に恵まれた1年であった。

忘れられない恩師に、長谷川真順先生がいられる。先生は歴史の担任でニックネームが婆羅門、真光寺の下手に所在する遍照寺のご住職であった。父との交友関係もあって随分と目をかけていただいた。遊びが過ぎて数学の試験で赤点を探り進級が危ぶまれたが、先生の専門の歴史は成績が良かった故か、なんとかクリアすることができたが、後日先生からはやんわりとお叱りをちょうだいし、この時は大いに反省したものだった。定年で教職をひかれてしばらくしてから、東京のご親戚に当たる寺のご住職と懇意であったことから、所用で上京された先

生と一夜懇親の席を同じくする機会を得て、宗門でどうやら働ける私を育てて下さったご恩に御礼を申し上げることができた。

最近では部活といわれる運動部、洪中では伝統を誇る庭球部に所属したが、するのはもっぱらコート^{コート}の整備と球拾いが仕事。あのころでも既に運動具店で硬式軟式のラケットが売られていた。前述の映画館の開場といい、種々物品の出回りといい、敗戦のもたらした精神的ショックは覆い隠せなくとも、日本の経済的余力は全く失われてはいなかったのだろう。そして少年たちの対応は、なまじいの虚脱に陥らず、現実を素直に受け入れるたくましいものがあつたといっても過言ではなからう。少なくとも、価値観の変容をみて、不信の念を抱いたことを除いては。私の個人的体験のみをいえば、次の年東京に帰ってからの状況が人格形成に大きく影響している。それはさておき、過去を顧みても洪川時代は少年の奔放な自由を許容するものであり、最も心置きなく過ごせた一時期であつたと言えよう。

4年生に進んだが健康に変調をきたし、医師の診断では軽い肺浸潤にかかっているといわれ、ちょうど父が深大寺に正住に就任したこともあり、親元に引き取られることとなった。22年の7月末、2年3カ月の真光寺での小僧生活と、洪中とも別れを告げて帰京したが、健康状態の回復が思わしくなく、復学した千歳中も休学を重ねるうち、学業継続の意志も薄れ自然退学となった。以後は独り勝手に学ぶだけの気ままだが慣いとなったが、遊び呆けていたようでも基礎的な力については、独学の不利も余り気にならず今日に至っているのも、洪中教育のお陰だろうか。僧侶の世界でも学歴はものをいうが、一般社会ほどの学歴優先ではない点も幸いしている。

昭和30年代に始まった在京同級会の誘いを受けて出席し、旧交を温める機会もいただいた。若林先生ご夫妻を招いて催される同級会は、毎年12月第1土曜を定例として既に30有余年、欠かさず開催されているのも、先生の人徳のしからしむるところか。人生の宝は、良き師良き友に恵まれることに尽きよう。その良き友も追いつ追いつ記憶が薄れつつあるのか、先年の会合で皆が試みに校章「黄金の鶏」を記憶をたどり書いてみたところ、真にあやふやな図像となった。頭の向きは左右ばらばらで、角の形も怪し気ななんと納まりの悪い金の鶏だったが、

閉会の前に恒例に歌う校歌は常に意気揚々として唱和されている。青春よ永遠なれとの願いをこめた歌声である。私を育ててくれたのは、小学校中学校を通じて5年を過ごした上州の風土であり、学歴を問われれば、誇りをもって群馬県立洪川中学校旧制4年中退と答えている。

子供のころ乱読した本の一冊に、徳富蘆花の「思い出の記」がある。内容は定かでないが、忘れ難い題名である。この拙文の題もそれに倣うことにしようか。

今、グローバリゼーションといわれ、IT革命の到来がいわれ、万事に西欧的論理に基づく競争社会への変貌が予測されている。日本の基盤を形作ってきた調和を求める相互扶助の観点は、過去の価値観として捨て去られようとしている。ぎすぎすした競争社会に果たして人間の幸福があるのだろうか。手を伸ばせば届く、形を実感し得る、村落共同体が有した温かな生活環境を、近代化のスローガンで捨て去って良いのか。故郷の山河に、友垣の交わりに、仰げば尊しと歌い上げる心を失って良いのか。故郷をもつ幸せをないがしろにして良いのか。初老の追憶だけが言わしむるのではない、東洋古来の伝統に因って起つ志を高めたいと願うものである。

—— 母校の思い出と法曹へのすすめ ——

高校（全日制）1回卒 萩原 剛

1 昭和23年3月、中学最後の卒業生200人が巣立ちそのうち90人が高校3年に編入された。私はその中の一人の高卒1回生である。

昭和20年8月15日、敗戦の放送を、とぎれとぎれのラジオで聞き、自分たちの物心ついた子供のころから、ただひたすらに戦争への道を歩み続けてきた大日本帝国がもろくも崩れ去り、180度価値観の転換を迫られるという未曾有の時代を迎えたのである。

その年の9月初め、われわれの学年は東、中、西の3組に再編成され学校工場や勤労動員で働いていた者も皆学園に戻った。ようやく学校らしい日課が組まれるようになり、ガリ版刷りの教材が配布され授業が始められることになった。

しかしながら民衆の生活は極度に疲弊しており、育ち盛りの我々はいつも空腹であつたことが思い出される。

それでも自宅から通学している者はまだしも、下宿生活を余儀なくされた遠隔地出身の者はいかんともし難く週末実家へ帰るのが何よりの楽しみであつた。

2 そんな世相の中でも学園生活は楽しかった。昭和21年に1級上の生徒が卒業するとそれからは上級生の居ない学園となったこと、担任の先生が木野内、小松、塩原の3先生で昭和24年春の卒業まで変わらなかったこと、そのためか級友全員が家族のように馴れ親しみ余りガツガツ勉強しなくても良かった時代的背景にも支えられて、貧しくはあつたが心豊かな学園生活を送ることができたと思う。

特筆すべき事は前記した3先生の、われわれ生徒に対する接し方であつた。それは教師以前の、人間的な味わい深い人格的なものによる教育であり、敗戦による価値転換によってかえって3先生がその人格形成をされた大正デモクラシーの自由と闊達さが静かに表面化し、教育の基本理念を支えていたのではないかと推測されるのである。

さすがの悪童たちも長期にわたる3先生の慈愛に満ちた教導により、誰一人はみ出すことなく無事それぞれの方向へ巣立っていくことができたのである。

3 後日談になるが、昭和23年卒業の同級生たちは昭和47年12月「炎焔の会」を結成し、以来毎春3先生をお招きして例会を持つこととしていたが、今日では小松、木野内、塩原と各先生が相次いで他界され寂しい限りである。

平成9年5月、洪中卒業50年、炎焔の会創立25年を機に記念誌「2・26の炎焔」を発刊し、恩師、同級生、物故者の遺族の思い出を集めて永遠に刻むこととした。さきの先生方を中心にした我々同級生の結び付きがどんなに素晴らしいものであつたかを物語るものであり、「炎焔の会」がいつまでも続くことを願う一人である。

4 高校卒業後半世紀を隔てた今、中学高校時代のこともは渺茫たる彼方の夢のように記憶も不確かなものになろうとしている。加えて、在京生活の長い自分にとって、母校とのつながりは東京同窓会への出席と「炎焔の会」に絞られ在郷の同窓から母校の消息を聞かせてもらうくらいになってしまった。

この機会を借りて何か母校の生徒諸君にもっともらしい言の葉を残すことができればと思案してみたが、名案が浮かばない。唯一、自分が68歳の今日においても現役

で元気いっぱい仕事に精出していることは、本当に喜ばしいことであると常々感謝しているの、このことにちなんで何か書いてみたい。

昨年末「炎焔の会」の在京者忘年会が催された、20数人の出席者中、現役は私を含め税理士の後藤光男、小沢俊夫両名の3人だけであつた。その他の駿秀は皆定年を迎え、その後の余生を気ままに送っている様子であつた。

混沌とした敗戦直後の大学生生活は、指針も定められない雑然とした状態であつたが、3年の春、司法試験という制度の存在を知り、おぼろげながらこれに挑戦してみようと考えた。どうしたらよいのかを模索したところ、学内にその受験生を指導する特別研究室のあることを知り、入室の試験期日が目前に迫っていたが、思い切ってこれに応募したところ、末席で合格した。これが私の受験地獄の始まりであり、昭和31年9月の合格まで実に丸4カ年を要したのである。昭和34年3月無事司法研修所を修了し、その年4月に弁護士登録を終え、今日まで40年を超えてこの道一筋を歩んでいるわけである。

5 21世紀を迎えようとしている今日、地球は益々狭くなり、1つの情報が瞬時に世界を駆けめぐる情報革命の時代に立ち至っている。

これから21世紀を生きる諸君は、世界を視野に入れた観点からその専門職を選択すべきではないかと思う。法曹の一角を担う弁護士の世界にも、さまざまな変革が要望され、ただ単に刑事・民事の法廷活動をしているだけでは済まされない競争時代が到来しようとしている。

昭和34年修了の同期生は、240人余にすぎなかったが、司法試験の合格人数も年々増加し、本年は1,000人を合格させようということになっている。

人生が、板戸の透き間から駿馬の掛け過ぎるのを見るように刹那的なものであつたとしても、確固たる意志をもつ専門職を選び、かりそめにも悔いのないものになりたいものだと思う。そのためには、青春の幾年かをその基礎づくりのために、情熱的に挑戦し続ける必要があるのではないだろうか。

弁護士という仕事は、そう経済的に恵まれるものではないが、自から律しつつ、常に人民の基本的な人権擁護を意識の中核において、権力に立ち向かう職業であることは、何ものにも替えられない尊い仕事であると思う。司法試験の合格者が多人数化すれば、弁護士が社会の各

層において活躍することとなる。日本の隅々まで民主・自由の精神が徹底され、争いのない平和な社会生活が実現されることが強く期待されているのである。

6 いささか我田引水になったが、母校の若々しい諸君に是非法曹への道をすすめたいと思い、駄文を書き連ねたものである。私が弁護士登録して前橋地方裁判所へしばしば出張するようになった昭和34、5年ごろ、群馬弁護士会の先生方は20人居るか居ないかであったように思う。本学出身者は第3回卒業の角田儀平治先生ただ一人であった。近年少しずつ法曹の道を選ぶものが増加しているように思うが上毛法曹会に参加している者も他高校の出身者ばかりなのが寂しい。母校の先生方にも法曹を志す若者の生まれる風土を壊成してもらいたいものと、切にお願いするものである。

に・るく ほのお 226の炎焔—活動の断片—

高校(全日制)1回卒 中野卓也

「……、炎焔の会、有名ですね」

小春日和の渋谷。立ち話をしていた主婦の会話からこんな言葉が流れてきた。2000年に創立80周年を迎える渋谷高校のことを話しているんだな。渋谷の同窓生かな……と勝手に想像しながら横を通り過ぎた。

我々のクラス会の活動は19,000同窓生の中では活発な方、と自負しているが、街の話題にしてもらっていると、うれしい。“有名”になったことで思い当たるフシがある。

平成9年(1997)5月、私たちは渋谷卒業50周年と炎焔の会25周年に万感の思いを込めて、500ページの記念誌《226の炎焔》を刊行した。

太平洋戦争真ただ中の昭和18年(1943)に群馬県立渋谷中学校に入学し、軍事教練の配属将校が幅を効かす中で、学業はそこそこに農村の勤労奉仕へ、学徒動員で学校工場へと駆り立てられていった。そして3クラス168人の教室は、米軍機の東京空襲から逃れてきた疎開組の編入学で膨れ上がり、200人を越える“いももみ状態”となった。

終戦は3年生の夏だった。日本列島は戦勝国の連合国

軍によって占領され、学園はリーダーのアメリカ主導で軍事色から民主カラーに塗り変えられていった。変わらなかったのは、極度の食糧難による空腹との戦い……。

そんな中で進められていった学制改革で昭和23年には新制高校が生まれ、私たちの学年は中学5年卒(旧制第24回)と、高校3年に編入した第1回卒とに分かれた。

そして戦後の時は容赦なく流れて、気が付けば“紅顔の美少年”たちも40歳代になった昭和47年の秋だった。日本画家として知られる赤城村の茂木秀夫君が初の個展を渋谷さとり百貨店で開いた。恩師の長野大原先生(ブル)も特別出品されたことで師弟展が話題を呼び、同級生たちも毎日、大勢詰め掛けて応援した。

「せつかくの集まりをそのまま解散、では惜しい。クラス会の旗揚げをやろう」。個展の打ち上げパーティーで、これからも折に触れて集まることを申し合わせた。炎焔の会の誕生である。会の名前はご存じ渋谷校歌の歌い出しの言葉を、栄光の高校第1回卒の特権(?)で無断借用した次第。

同じ年、期せずして東京炎焔の会も開かれるようになった。こちらは京浜葉在住組の伊豆の旅がきっかけ、と聞く。

卒業50周年記念誌への熱き思い

「炎焔の会の記念誌を出さないか。おれは思い半ばで逝った浦野正和君(渋谷教諭)のことを書きたいんだ」

ある年の伊香保温泉でのクラス会で、竹村恒男君(東京新聞横浜支局長)が私にこんな提案をしてきた。大賛成をして心構えを整えた。しかし、原稿の外に資金集めも伴う大事業には、行動を起こすタイミングがある……。そんなことを考えながら構想を巡らしていたある日、強烈なパンチ力を秘めた“巡り合わせ”に気づいた。

「そうだ。平成9年は渋谷卒業50周年と炎焔の会25周年が重なる。ここをセールスポイントにしたら級友たちの琴線に触れるかもしれない」。幸いその年までに2年あった。私は事務局の鈴江文男(元渋谷市総務部長)、後藤春雄(渋谷市助役)の両君と具体案を相談。文字通り激動の中で過ごした多感な中・高校生時代を、それぞれが切り取って“歴史の証人”になろう——と翌年の例会で記念誌づくりを呼びかけた。

尾を引く戦後の混乱の中で、中退したり、亡くなった、卒業を待たずに都へ帰って行った者もいた。でも例

え1日でも机を並べれば渋谷中の同級生だ。延べ総数は226人。そうした級友への思いも込めて、タイトルを《226の炎焔》とした。



記念誌は、I 炎焔の時代・II 思い出の記・III 墓碑銘・IV 恩師のページ・V 資料編の5部構成になり、巻頭アルバム・年表・同時代の教師と同級生名簿を加えた。

物故級友は在学中に他界した3人を含めて34人が確認できた。彼らは ①亡くなったのはいつか ②現在の連絡先は ③どこに眠っているのか——について丹念に調べ、残された肉親の言葉も添えて「墓碑銘」にくくった。夭折した友のことを気にしながら長年果たせなかった宿題を、ようやく文字にできたことで、「やっと戦後が終わった」思いである。

思い出の記は予想を大きく超えた74編(10編は物故級友の肉親から)が寄せられ、「学園生活」「戦時下」「学徒動員」「恩師・級友を思う」「通学路」「スポーツ」「郷愁」「卒業後」そして「遺家族から」とジャンル別に編集できたことは良かった。それにしても、卒業から半世紀を経たのに、よくぞここまで書いてくれた、と時々ページをめくっては感謝している。

旧制中学最後の入学組となった3年下のクラス会「こがねのとび」は、千葉県市川市に住む村上吉次郎君が会報《こがねのとびの集い》の編集を担当している。彼も疎開組(当時の明治村)の一人だが、第2の古里が忘れ難く、詩文集《渋谷・その周辺》3部作を自費出版したほどの“渋谷大好き人間”だ。

その《こがねのとびの集い》が100号の大台に乗り、連載中の“おもいでぐさ”が、「ああ中学190人の貌(かんばせ)」のタイトルで最近、1冊になった。(中野泰著)

記念誌の題字を受け継ぐ形で始めた我が方の会報《226の炎焔》は、まだやっと4号。後発としてはバックナンバーでは歯が立たないから、せめて中身の充実を目指すことにしよ

う。

記念誌は私たちのメッセージとして、母校の図書室をはじめ、級友たちの出身市町村や主な図書館にも贈った。同窓各位もどこかで手にしていただけたかと思う。

「校歌の碑」建立のロマン

あのころは個性的な教師が多かった。とりわけ私たちの学年にご縁が深かったのは、入学から6年間、持ち上がり担任をしてくださった、数学の木野内与四男(アチャコ)、国漢の小松恭己(やぎ)、体操の塩原正孝(えんげん)の3先生だった。

毎年、戸部経三君が住職を務める北橋村の玉泉院で亡き友の法要を行った後、堀越保君の伊香保グランドホテルと、大塚修平君(物故)の「かのうや」で交互に開く5月の例会には、いつも“揃い踏み”をしてくださった恩師も、昭和56年に小松先生が72歳で彼岸に旅立たれ、木野内、塩原の両先生も平成8年に90歳と84歳で亡くなられた。

遙かなる山形県が古里の小松先生は子宝に恵まれなかった(「いい種は増えにくいんだ」の“小松語録”懐かし)ことで、炎焔の会では「おれたちが子供になろう」と、同じように先生とのゆかりを大事にしている、4年先輩の「はだかの会」(小松先生の命名)、「こがねのとび」、定時制1回~6回生に呼びかけて玉泉院に墓碑を建立。併せて遺稿集を兼ねた《回想の小松恭己先生》を刊行した。そして、こんな後日物語も。



卒業50周年・炎焔の会25周年でクラス会専用の浴衣を着てご機嫌の級友たち(平成9年5月)



母校の創立75周年記念として、その折の余剰浄財を基金に渋川高校同窓会の名で校庭に「渋中・渋高校歌の碑」を建ててもらった。同窓会の記念集会やクラス会で歌い継いできた「炎の山」の校歌は、やがて我々と共に消え逝く運命になる。いとおしき旧制組のロマンを、せめて譜面付きで碑に残したかったのである。

私たちに、もう一つのロマンがある。小松先生も眠っている玉泉院に《炎の山》を建てさせてもらおうという構想だ。提案は薬学の小屋佐久次君(和漢薬研究所理事長)。

こちらのタイミングは、いつか。2000年記念はもう間に合わないので、2002年の卒業55周年記念に……。構想が実現すれば碑面には、あの日、渋中―渋高の学び舎で若き血潮を燃やした全級友の名前が刻まれるはずだ。

戦後の混乱と復興

高校(全日制)3回卒 杉山 弘

戦局も絶望的になった昭和20年4月渋中へ入り、1学期だけであったが、戦時下の中学生生活を体験した。その後、戦後の混乱、復興期を中学生、高校生として過ごした思い出を綴ってみたい。

1. 渋中への転入学

19年8月、当時東京の江戸川区で国民学校の6年生であった私は、山形県へ学童集団疎開をした。20年2月末、

中学入試のため親元へ戻ってきたが、3月10日の大空襲で被災。母親のつてを頼って、当時の古巻村八木原へ疎開した。願書を提出していた中学校も全焼。もちろん、入試も実施されない。そこで、渋中へは、転入学ということにしてもらった。新制高校も旧渋中が移行したので、フリーパス。こうして、私は、大学入試を受けるまで入学試験は、経験しないで済んだ。受験戦争に明け暮れている現在の子供たちからは、夢のように思えるだろう。戦中、戦後の混乱期ならではの出来事であった。

2. 戦時下の渋中の様子

こうして、渋中1年生となった。西組で担任は、国漢の市川先生(あだ名はガンジー)。私のような疎開組が多かったので、教壇のすぐ前まで机が並んでいた。当時については、辛い思い出が多い。鞆はもちろん、教科書やノートもない。鞆は、母が帯を解いて、帯芯で作ってくれた。反古紙をとじたものをノート代わりにした。

質実剛健を校風とする渋中では、ズボンにゲートル巻き、下駄や草履は厳禁だった。とって、靴など配給制で手に入る訳がない。上級生は、真光寺の境内に下駄を隠しておき、帰りに履いて帰るということをしていたが、1年生がそんなことすれば、すぐにピンタが飛んでくる。止むを得ず裸足で通学した。夏休み前など、融けたアスファルトの熱さが強烈で、今も足の裏に感触が残っている。

そうこうするうちに、先輩のお古の教科書を手にすることができた。たしか英語の教科書に、Look at the black points on the hills. They are fighters. They are bombers. という文章があったと記憶している。終戦後は、こうした部分を墨で塗り潰して使った。

学校の講堂、体育館には、旋盤などの工作機械が置かれ、上級生が勤労動員で兵器の部品などを造っていた。私たち下級生も農家で麦刈りなどの勤労奉仕をした。学校には、配属将校が派遣されていて、教練の時間もあった。吾妻川の河原に出かけて手ごろな小石を拾い、葡萄前進で手榴弾を投げる真似をした。

渋川にもグラマンの空襲があった。電化の工場などが機銃掃射を受けたが、近くの渋川駅も狙われ、上り線に

通じる地下道の階段に長い間その弾痕が残っていたが、今はどうなっているだろうか。

3. 戦後の混乱期のこと

そのうちに、新しい教科書ができてきた。これが粗悪な紙にタブロイド版で印刷したものを折り畳んだだけという代物で、自分で折り目に鉄を入れ、紐でとじて使った。

戦時中は、戦闘帽しか許されなかったが、白線入りの学帽に代わった。それを頭に冠ったとき、漸く戦争が終わったという実感がしたものである。

しかし、汽車通学の困難は、終戦後の方がかえって激しかった。超満員で、まともには乗れない。蒸気機関車の最前部や炭水車の上などは上等の方で、扉の閉ったデッキの外で手摺につかまったり、客車と客車の間に足を掛けて乗ったりとか、随分危険なこともした。遅れや運休は毎度のことで、長い間待ったり、歩いたりもした。

大変なのは汽車通学だけではなく。省営バス(現在のJRバス)は、木炭自動車で、お尻に大きな汽罐を背負っていて、それに薪を入れて走っていた。スピードは遅いし、故障が多かった。故障といえば、渋川と前橋、高崎、伊香保の間を走っていた電車のうち、とくに高崎との間の通称「高電」は、脱線、故障が多かった。授業中にぞろぞろと揃って教室に入ってくるのは、毎度のことであった。

4. 若き教師との出会い

このように、現在とは比ぶべきもない厳しい環境の下での勉学であったが、私たちにあって幸いであったのは、若さと情熱に溢れた先生方と出会うことができたことである。軍隊から復員し、また学窓を出たばかりの若い先生方が次々と赴任してこられた。数学の酒向先生は、軍靴を改造したスリッパで廊下を大きな音をたてて歩いていた。私の組の担任となったギャングこと化学の狩野先生、カップまたは針長の針塚先生は、軍服姿で赴任してこれら記憶がある。国語の飯塚先生は鼻音の説明でウグイスを例にしたのがあだ名となったと憶えている。英語の若林先生(ジャクリン)は、確か奥様と映画館新星座の近くに間借りしておられた。亡くなられた後藤先生も英語の担当で、上ノ町の実家に住んでおられ、物静かで怒った顔を見たことがなかった。煙草がお好きでニコ

チンのあだ名を奉った物理担当の都丸先生も亡くなられた。数学の登坂先生(トッチン)は、眼鏡をかけた愛嬌のある(失礼!)お顔で、弟さんが私たちと一緒にあった。

古くからの先生方の中にも、木野内先生(アチャコ)、小川先生(トツ)、長谷川先生(バラモン)、岸先生(パチ)、小松先生(ヤギ)など懐かしく思い出される先生方も多い。しかし、若い先生方には、敗戦後の日本の復興は、若者の教育からという強い信念と情熱を持っておられたに違いない。そして、それが私たちにとって、とてもまぶしく、新鮮に映った。もちろん、腕白ざかりの若者、隠れて煙草を吸ったり、映画館に入ったり、昼前に弁当を平げてしまうなどの悪さをするのはいた。しかし、現在のような学級崩壊やら登校拒否といったことは、全くなかった。一度、何が原因であったか、授業ボイコットが行われたことがあったが、一日で終わった。

さらに幸いなことに、これらの先生方には、酒向先生や若林先生のように、途中で他校に移られた例もあったが、高校卒業まで授業を受け、あるいはクラスの担任としてお世話になれたことである。先生方の発案で、私たちの学年だけ、東・中・西の3つのクラスの対抗で、放課後ソフトボール、テニス、サッカーなどを行い、担任の先生も競技に加わって楽しんだ。夏、榛名湖の林間学校へ行き、一緒に泳いだり、カッターを漕いだことも忘れられない。高校では、大学入試に備えて、手造りの問題で模擬テストを何度もやっていただいた。

5. 卒業と進学

26年3月に卒業した。卒業式で答辞を読む大役を仰せつかった。私が小学校3年の時に夫を亡くし、私を頭に三人の男の子を育てる苦勞をした母が大変喜んでくれた。成績では、私より秀でた人が何人もいたはずだが、あるいは、先生方に母の苦勞に対する心遣いがあったためかも知れない。

しかし、生まれて初めての大学入試には、見事に失敗。予備校へ行くことは、経済的に許されなかった。古巻村の新制中学の助教諭をしながら、受験勉強を続けることにした。1年生の理科と数学を担当した。受け持った生徒にとっては、大変な迷惑であったろう。今でも、申し訳なく思っている。

この間、県の教職員体育大会に、野球で北群馬郡の代表となり、決勝まで進んだ思い出もある。

二度目の入試に辛うじて合格し、上京した。田舎者にとって、東京での学生生活は、戸惑うことばかり。同じクラスに女子学生が7人もいたが、共学の経験のないこともあって、話しかけるのはばかられた。寮生活が一月くらいになったころ、皇居前広場の血のメーデー事件があり、警官隊が寮を取り囲む騒ぎに目を丸くしたりもした。

6. 母校との絆

26年の洪高卒業生で東京やその周辺に住む者が集まり、会の名を「榛嶺会」とした。洪中の校歌の4番「見よや榛名の嶺にかかる…」から採ったものである。毎年1月、最後の週の土曜日夜、秋葉原駅近くの小さな飲み屋を借り切って会を持つ。洪川在住者も何人か必ず参加してくれる。会の終わりには、肩を組んで、「火焰の山の鎮まりて、拓けし国原上毛の」を高唱する。洪高校歌は、「自由の子、民主の民ぞ」だが、私たちの卒業後にできたものである。

洪川高校東京同窓会では、この2つの校歌が歌われる。洪中OBと洪高OBがメンバーとなっているためである。この会には、洪高の校長先生や同窓会長もわざわざ出席して下さり、年々参加者も増えている。しかし、洪中校歌を歌う人数が年毎に少なくなっているのは淋しい。

在校当時は、開校記念日の全校マラソン大会が恒例行事であった。四ツ角を右折し、石原で左に折れ、製鋼のそばを中村まで下り、早尾神社、駅前と回って帰るコースであった。走るのが苦手で、苦しかった思い出しかない。63年、通産事務次官在任中に、母校からお話があり、マラソン大会の代わりに先輩の話の会を開いているとのこと。お誘いに応じて小1時間、ここに記したようなことを、「思い出すままに」と題して在校生の皆さんにお話をした。現状と余りに隔絶しているので、どこまで理解してもらえたかこころもとない。

その折、校内を案内していただいた。木造2階建ての校舎はもとより、入学当時、工作機械がうなり、切削油の臭いが鼻を突いた講堂や体育館も建て替えられていた。校長先生の宿舎や化学教室、生物教室も跡かたもない。わずかに当時の面影を止めていたのは、小学校との間の坂道の石垣と、校門に入って右手、かつての校長官舎の前の樺の大木くらいのものであった。今更のように、

50年という歳月の長さを感じたものである。

母校との絆

高校（全日制）3回卒 吉村（野村）博夫

2000年を間近にした秋、故郷の両親の墓前。榛名山を背に赤城、子持の山なみを見渡す景観は、半世紀たっても変わることなく映った――。

旧制洪川中学3年の時に母、翌年の新制高校1年の時に父が逝ってから50年。高校中退か……と、人生の岐路に立たされたが「俺一人でも生きなければ……ボーイズ・ビー・アンビシャスだ！」の気概を抱いて独立歩歩、貫徹したんだなあ、と、ふと墓前で回想した。

◇ ◇

人生には幾つもの岐路がある――。

1945年（昭和20年）。金島小学校から進学したが、周知の歴史的激動の年。上級生たちは軍需工場へ学徒動員、下級生は榛名山麓で農作業に動員され、授業といえば軍刀に見立てたこん棒を振り回す教練の日々。そして敗戦後の窮乏生活。スミで塗りつぶされた教科書、教材不足でまともな勉強どころではなかった。そこへ復員した若い先生たちのバイタリティー溢れた指導が、多感な年頃の生徒たちには強烈に映った。

スポーツ活動を勧められ陸上競技部に入ったが、ナリが小さく断念。中学野球が復活したところで洪中でも硬式野球部が発足、入部。足が速いのと強肩を買われ(?)で外野手からショートに。軽石ゴロゴロのグラウンドでタマがどこへ飛ぶやら転ぶやら…顔はアザだらけ。そのうえ「百本ノック」と称してシゴキ同然の特訓。気を失えば水をぶっかけられて息吹き返す…「甲子園出場」という目標があったからこそ取り組んだが、正直“コンチクショー”“ナニクソ!”と思った。

この中学から高校にかけての野球で培われた「根性」は、そのまま私自身、人生のバックボーンとなっている。

また、若い先生たちの「言葉」が、よりインパクトを与えてくれた。

針塚先生の「日記を継続すること」。今も習慣になっている。飯塚先生には「男は名誉、地位、財産を目指し

て頑張るものだ」と。狩野先生には「人生とは」と、夏の宿題に問題提起され、格言集や、西田幾太郎、親鸞上人と宗教関係、哲学といった小難しい本にも取り組んだ。「自分で立てた目標に向かってぶつかって行くのが人生だ」という先生たちの気迫を感じた。

こうした野球と恩師との“遭遇”が、人生の道しるべとなった。その道を後押ししてくれたのが「大学へ行け、学費は心配するな、お前の好きにやれ」と、理解してくれた兄たちの力だ。

中央大学経済学部に進み野球部に入ったが健康診断のツベルクリン反応陽転で1年間の運動禁止に。休部即退部の不運にあったが、この不運をバネにアルバイトに精を出し、ゴムひも売りから始めて高額物のセールスまで広げ、貯金もできた。多分に同情の押し売りだろうが、これが「商人（あきんど）になる！」決意を促した。卒業（1955年）と同時に「江戸の商道」を学ぼうと、わざと丁稚奉公の修業に織維問屋に入った。その臥薪嘗胆の最中、修養団体の実践倫理研究所の早起（朝起）会に参加していた時、吉村家のおふくろと知り合い「うちの養子にきてくれ」という巡り合わせに。勤めていた熊田商事を円満退社、「野村」から「吉村」姓に変わり東京・湯島で印章業を営む京永堂を継いだ。

“人間万事塞翁が馬”的なラッキーさも目立とうが、人生の岐路、逆境、節目……とそれぞれにクリアできたのは、根底に「人生の目標を定め邁進するバイタリティー」があったからだろうと、自負する。やはり月並みだが、「少年よ大志を抱け」の精神は忘れたくないもの――。

◇ ◇

否々……小難しく述べるのはガラじゃねえ!! ざっくばらんに普段着の喋りを――。

飲ん兵衛じゃねえがネアカなもんで、好奇心旺盛、ヤジ馬根性丸出しで突っ走っちゃうんさ……。

ナリはちいせえが「ネアンデルタール人」みてえな環境適応性とたくましが看板だいな。

だから洪高第3回卒の首都圏クラス会「東京久遠会」や町内会・交通安全協会・法人会・なんかの世話やkutたって、いっこうに苦になんねえよ。「久遠会東京支部」は昭和42年に誰言うことなく「ゴルフやんべえ」「たまにゃ飲まねえかい」なんて、やってるうちに生方宏治君を幹事長に、事務局を私の会社にして毎年一回、あるい

は節目ごとに寄り集ってんさ。

現役で頑張ってる人もいるけど、なからリタイヤして「久遠会」の集まりも年ごとに一人、二人欠けてさ…時の流れだいな。

町内会でも、他の会でもそうなんだけど、付き合いつつうのは大事だいな。近ごろ、自己中心主義のジコチュウ人間が目立ってサ、“ジコ虫”っていうらしいが、こんな虫ケラ、ヤダイね。

世間はネットワークをしっかりと、思いやりをバッチリ……。これが最高だんべえ。

そんなわけでサ、町内会の仕事や安全協会の役員だなんていって、地域の世話役をしたり、いちおう奉仕しているつもりなんだけど、おかげで毎日、席を温める時間もねえ……、なんてカッコいいもんじゃねえけど、その割に江戸川柳や都内の史跡巡りが趣味でサ、けっこう勉強?、してるんだ。自慢に言ってるんじゃないで、格言や歴史ばなしが商談で役立つってえことが多いだいな。

だからサ、若い人も「古臭い！」なんていわないで趣味を広げて大事にしたほうがいいよ。「古臭い」ついでに、いっちゃなんだけど、先輩、大先輩を大事にしたいネ。お説教めいたことやめるけど、コミュニケーションのひとつだネ、大事にしてよかったてえことが絶対あるネ。

両親や先祖の墓参りつつうのも、その心掛の表れだいな。CM風にいえば、

「ネットワークは広く、コミュニケーションは深く」ってとこかな。実行しなきゃ、いけねえんで、高校野球予選が始まれば応援に、またお墓参りにも行くつもりだ。

今を生きる「憂国の記」

高校（全日制）4回卒 山口 隆

(1)

副題を憂国の記としたのは、三島由紀夫の「憂国忌」が念頭にあるからである。

さて、私たちは昭和21年四月最後の旧制中学生として県立洪川中学校に入学した。今の人には理解しにくいだろうが、当時中学校に入るのは農村地帯では村の小学校

からほんの数人という時代である。私のときも三原田小学校から入学したのはわずか2人であった。隣の刀川小学校も2人である。入試倍率は約3倍と記憶している。敗戦直後ということもあって、国中が前年までの物の考え方、思想、行動、制度その他極端に言えば一切切をいわば全否定するようなそんな風潮が生まれていた。戦争に協力したという理由で、全国では数多くの教師が学校を追われたりもした。然し、一体国家が死にもの狂いで戦争をしているときに、それに協力しない教師なぞいるであろうか。日本だけではない、相手側の国にもおよそそんな教師はいないのである。何はともあれ、私たち多くの少年は制度が変わるなどということは露知らず、旧制高校の弊衣破帽に憧れたそんな時代である。少なくとも私は現在でも旧制高校に入れなかったことを残念に思っている。今にして思うと、本当に学制改革など必要だったのであろうか。それで本当に日本はよくなったのであろうか。西ドイツは、ナチスを生んだ土壌のひとつに教育制度があるのではないかという戦勝国の指摘に抗し、教育制度には手をつけさせなかったからである。ヘレン・ミアーズ（1900年生・米国白人女性・学者・GHQの諮問機関「労働政策11人委員会」のメンバー）は著書「アメリカの鏡・日本」の中で、日本の歴史・文化・伝統をわきまえないGHQの官僚たちが、我が国の制度・法律を次々と変えてゆく様を生々しく描いている。その最たるものは憲法であろう。ちょうど私たちの受験のころ、21年2月、占領軍からの憲法改正要求に対する日本側の草案が気に入らないということで所謂マッカーサー憲法（民政局スタッフによる英文草案）が政府につきつけられた。もちろんこれは国会において日本国民の意思というかたちで議決される。憲法学者で枢密院議長の清水澄博士はこの暴挙に抗議して自殺までしている。由来からみると現憲法はそもそも改正の対象ではなく、石原慎太郎のいうように、まず破棄すべきものなのかも知れない。小堀桂一郎（東大名誉教授）や渡部昇一（上智大教授）らは昭和27年4月28日（講和条約発行日）以前は占領下にあったのだから、それまでに成立した法律はすべて見直すべきであると主張している。ただし、占領下にあつては占領政策の円滑な遂行が最大の眼目であったからである。江藤淳は憲法という言論の自由な占領下では全く存在しなかったという研究を発表している。過酷な検閲が実施されていたからである。各新聞社

もみなその憂き目にあっている。日本人だけが悪いことをしたとして罪の意識を繰り返し植えこむと同時に、国内を二分し、指導層が悪く一般国民は被害者だったという分断作戦を徹底する。誤解がないように言うておくと、私はアメリカが悪かったと語っているのではない。戦争に勝った以上それは当然なのである。情けないのはそれを55年もたつていまだに信じている日本人そのものなのである。20年8月に戦闘行為は終わったが、戦争状態は続いており、日本国民に対する思想的な追撃戦（小堀桂一郎）が行われたとみるのが正しい。本当の意味で戦争が終結したのは独立主権を回復した27年4月28日なのである。現在の日本の状態をみるに、この追撃戦はアメリカの大勝利であったといわねばならないだろう。戦争が終わるや、民主主義がはじまった、自由が到来したとハシヤイだ進歩派・良識派の学者諸公の固有名詞をいま私は苦々しく思い出している。渡部昇一の『かくて昭和史は甦る』谷沢永一（関西大教授）の『悪魔の思想』は是非一読をすすめたい痛快な書物である。

(2)

日本人の目からみると、アメリカの占領政策は狡猾で、ものの見事に日本人の魂を骨抜きにしてくれたわけであるが、前に述べたように、アメリカの立場で考えれば、これは当然過ぎるほど当然なのである。過日、私はビル・トッテン（カリフォルニア出身・白人男性・(株)アシスト社長・「諸君」「正論」TV等において活躍中）と懇談の機会を得たが、アメリカは日露戦争が始まった明治37年に「オレンジ計画」を策定し日本侵略の準備を開始していたのだと指摘してくれた。今日ではこの事は広く知られるようになったが、余り知られていないのは、アメリカはただ単に計画を策定しただけではなく、この計画を生かして毎年毎年洗いがえを何十年も続けてきたということなのである。ウブで純情なのは日本だけである。世界とはそういうものなのである。思い出してみよう、明治31年、即ち日清戦争の3年後、アメリカはフィリピン・ハワイ・グアム等を領有した。フィリピンの領有に至っては、スペインから200万ドルで買収したのである。それ以前アメリカはスペインからの独立を叫ぶアギナルド一派を応援し続けた。てこずったスペインが手を引くや、アメリカは一変して昨日までの友であったアギナルド一派を徹底弾圧するのである。イギリスはとい

えば、既に明治維新の前からインドを手中におさめていたし、ビルマは明治19年、マレー半島は明治42年に領有していた。フランスのベトナムも、オランダのインドネシアも明治のころすでに植民地となっていた。だからこそ明治27、28年の日清戦争後日本が台湾を領有することを欧米列強は承認したし、日韓併合に至っては、日露戦争を背景に両国間の条約によって決まったものであるからしてこれも文句なく、しかもロシア南下に対する防波堤になるという思惑からむしろ喜んで承認したのである。大東亜戦争はこのような歴史の延長線上で見ないと間違えてしまう。今や全ては明らかであろう。要するにアメリカと日本の帝国主義同士の戦いなのである。双方とも軍国主義である。アメリカは自国の国民に正義の戦であると教えるために、日本を救い難い好戦国家、ファシスト、軍国主義者などと言ったのである。日本とて鬼畜米英と言った。考えてみよう、一体当時帝国主義でない国家などあったのであろうか。むしろ私は冷静に見ると、この戦いは日本の生存権をかけた戦いであつて、白人種から見れば、植民地もしくはそれに準ずる地位に甘んずべき有色人種である日本人がアジア解放という旗印をかかげたばかりに、あえて欧米の反撃をまねいた人種戦争でもあったと理解している。昭和26年5月3日、アメリカ上院軍事外交委員会におけるマッカーサー証言は興味深い。言うておくとこれは公式の証言である。彼は言う。日本の開戦の動機は8000万国民が生きるための安全保障の必要に迫られてのことであつたと。当時日本国内では検閲のためここまでの内容は知られることはなかった。マッカーサーはさすが歴史を知っていたと言うべきであろう。それにしても植民地解放を叫んだ日本は破れはしたが、結局のところ紆余曲折はあつたにせよ、ほとんどの植民地は独立を勝ち取ることができたのである。日本万歳ではないのか。

(3)

繰り返しになるが、日本を二度とアメリカに敵対させないというアメリカの痛切な決意はよく分かる。アメリカも多数の血を流して戦いに勝つたのである。この血を無駄にしないと覚悟するのは当然である。東京裁判がそのための、つまりアメリカの都合のよい考え方をする日本人をつくるための洗脳の舞台装置のひとつとなつた。この裁判に対しては当時から専門学者からの批判があつ

たし、今日ではインチキだったというのが定説となっているのではないだろうか。東京下町で十万人の市民を焼き殺し、原爆を投下した者が「人道の罪」で他人を裁けるものだろうか。しかしおそろべし、敗戦世代の多くの者がこの教育の呪縛にかかり、いまだに目が覚めないのである。私が心配でならないのは、今や政財官界のトップ層となったこの世代の人たちはDNAまで変えられたのではないかということである。私は日本の国益のためには、どんなことがあつても他国、とりわけアメリカとは固い盟友関係を保つべきだと思っているひとりであるが、このように、日本という国のアイデンティティを失い、歴史認識の浅い、大甘な国家を本当に相手が盟友と思ってくれるのであろうか。岡崎久彦（元外交官・駐タイ大使）は安保条約のどこにもアメリカが日本のために血を流すなど書いていないと指摘している。当然ではないか。日本がアメリカのために血を流す約束をしない以上これは常識である。現在日本および日本人に求められているのは国家としての、日本国民としての矜持ではないか。東南アジアに謝罪し続ける政府、金を出し続ける政府、それを望んでいる国民、歴史を知らないということは恐ろしいことである。一体アメリカがフィリピンに対し、イギリスがインドに対し、オランダがインドネシアに対し謝罪したのであろうか。南京大虐殺を中国は声高に叫んでいる。私には理解できないが、中国には主張し続ける理由があるのであろう。これについては東中野修道（亜細亜大教授）の「南京虐殺の徹底検証」を読んでほしい。当時の南京攻防戦には外国の新聞記者も多数取材に行っていて、当時彼らは何も報じていないという一事を知るだけで十分であろう。アメリカはアメリカでアイリス・チャンが大虐殺を叫んでくれることはちっとも迷惑ではないのである。

(4)

約束の紙面も尽きてきた。浪中に入塾して50年以上無為に、ただ忙しく生きてきた自分を私は恥じている。これからは国を憂い続けて生きようと決意している。もう少し続けよう。マッカーサーはさきの証言のなかで、「占領期間中に制定された諸法規は占領終了後には日本古来の文明に適合するように修正されてゆくだろう」と述べている。護憲派は、他人から与えられたものでも良いものは良いのだからと主張し、それが平和主義

者のあかしであると言う。笑止ではないか。一体世界に平和を望まぬ者がいるのか。護憲派だけが平和主義者なのか。一国の基本法は隣のオバサンからシャツをもらうのとは訳が違う。国家の尊厳というものがかかってないのである。三島由紀夫は遺書のなかで「日本はみかけの安定の下に、一日一日、魂のとりかえしのつかぬ癌症状をあらわしてゐる」と書いている。

しかしよい兆しも見えてきた。西尾幹二（電気通信大教授）の『国民の歴史』が昨秋発売され2カ月で65万部売れたというのである。7世帯に1冊という計算になる。私は日本の諸学校における歴史教育が本来の姿に戻ってくれるのを千秋の思いで待っている。私も及ばずながら昭和ヒト術の語り部として、益々学び益々語る決意である。（文中敬称略）

日ごろ思うこと ～後輩への語りかけ～

高校（全日制）4回卒 永井恒司



1. 併設中学校で学んだ影響

第二次世界大戦が終わった翌年の昭和21年に、私たちは旧制の県立渋川中学校に入学した。すぐにアメリカ軍による学制改革が実施され、その翌年から旧制中学校は新制の高等学校に替わった。私たちは県立渋川高等学校併設中学校の2年生になったが、ゆくゆくはこの中学校はなくなるのだから、下級生は入って来ない。つまり、中学校を卒業して、無試験で高校1年生になり、4年間ずっと最下級生であった。したがって、私たちがいかに変則的な学校教育を受けたか、履歴書を書くときいつも感ずる。また、この時期には、日本国憲法が純粹に、何の疑問も持たれずに国民に受け入れられ、私たちはそのような基盤で教育を受けたと思う。

そして直ぐ後に、自衛隊を設置することの是非とともに、憲法問題が議論されるようになった。私たちが高校を終えるころのことである。そのころすでに「レッドページ」というものが始まり、敬愛する英語の先生が学校を去って行った。これに対して、学生が立ち上がり、全員体育館に立てこもり、校長先生を呼びつけてつるし上

げるような過激な行動に出たのを記憶している。また、新しい校歌をつくったのも私たちのクラスであった。これも体育館に立てこもった行動に相通ずるものがあった。つまり、私たちの若い情熱が新校歌完成を導いたと言える。これらの活動は木暮幸一君という有能なリーダーがいたためであったことも記さねばなるまい。

私にとって、多分ほとんどの同級生にとって、このころのことが今日の私たちの精神構造の形成に大きな影響を与えていると思う。それを一口で言い表すのは難しいが、あえて言うならば、「心」にかかわることだと思う。これを装置や機械のようなシステムにたとえるなら、通常、システムはハードウェアとソフトウェアからなるものであるが、私たちの場合、さらに「心」が加わって人間としてのシステムが構築されているように思う。例えば、多くの同級生が、「ゴマすり」は不得手であり、上の者に盾つくことをなんとも思わない、というようなことがそうかもしれない。高校を卒業して50年もたつのに、同級生の文集「こがねのとび」が村上吉次郎君の世話で連綿と発刊され、この2月で109号に達している。いかに同級生のまとまりがよいか、如実に示している。このような例は珍しいのではないかと思う。

高等学校併設中学校は、全国的なものであったから、私たちの大学の同級生にも似たようなところがあって、先輩・後輩とは異なる精神構造をもつと思われるふしがある。クラスは35人の少人数だということもあって、まとまりもよく、元気がよかった。先生が、翌年のクラスは私たちのクラスに比べてずうっとおとなしいので、君たちはみんな病気か、と言ったくらい目立った。

2. 先進国の民主主義に学ぶ

「口は災いのもと」とか「あいつは一言多い」とか、とかく口数が多い人物は、日本では敬遠される。一般に、欧米ではそのようなことはない。したがって、会議の議長を務めるのに、かなりしんどいものがある。つまり、指導力に加えて、討論の交通整理の両方が大きな負担になるからである。議論が熱中してくると、何を話し合っているのか大体分かるとしても、詳細な内容まで確実につかむことは難しい。そして、いつ議論を打ち切るかが大事なポイントである。充分話させておけば、終わりはない。とって、早く切り上げたら不満が残る。私のように長々と続く会議は大嫌いな者には、辛抱が要る。た

だ、このような会議のよいところは、各人が何を考えているかよく把握できることである。日本では、会議は、お茶を飲みにくる場であって、そのためにだけ来るとしか思えない人が少なくない。そして、採決でもしようものなら、思いがけないことが起こる。その場では何も発言はないけれど、「根回し」が行われてちゃんと筋書きはできているのである。外国でも、このようなことがないとは言いきれない。でも、陰険さはあまり感じられない。

日本では、年寄りによく発言するが、若いのは黙っている。「あれは若いのに生意気だ」ということになるからである。ところが、欧米では、若いのがよくしゃべる。何て馬鹿げたことをいうのだろうと思うようなことを気にもせずに言う。でも年寄りが頭ごなしにそれを封じ込めるようなことをしない。若い人を育てる心遣いかもしれない。

通常、どんな言い合いをしても、あとくされを感じない。本質的に、会議で発言することは、自分の所属する組織のために貢献しているのだという思想があるからであろう。またそんなことは会議で言わなくてもよいのではないかと思うことも発言する。これも日本にはない民主主義かもしれない。会議が終わったときには、つかれを感じると同時に、実りある会議であったことをお互いに讃えあう。

大勢の人が集まっているときの発言やスピーチのマナーについても日本では気になることがある。パーティで、アルコールが入ったところに行われるスピーチに、参加者はあまり耳を傾けない。いかなる場合でも、人が話しているときは黙って聞く、というのが民主主義の基本である。結婚披露宴などで、誰も聞いてくれないのに、しゃべらされることがある。欧米ではうるさいと、周りのものに「シー・シー」と注意される。もしかしたら、話が固すぎるために聞こうとしないのかもしれない。よく日本人のスピーチは言い分けに始まり、欧米人の話し上手はジョークで始めるという。聴衆を少なくとも一度は笑わせられないようなスピーチはスピーチのうちに入らないとも言われる。

3. 「世界は二人のために」から「二人は世界のために」

今は、どこの国でも、国際化が叫ばれている。しかし、とりわけわが国では、手続や技術面の問題に目が向けら

れている感があり、最も立ち遅れているのは、意識の国際化にかかわることである。わが国での勉学を終えて帰国する留学生のなかに日本を嫌いになって去っていく人が少なからずいるとのことであり、大変残念なことであるが、これはやはり日本人の意識の国際化の立ち遅れと無関係ではなさそうである。

結婚披露宴などでよく歌われる「世界は二人のために」という歌は日本人的発想を如実に表現しているが、「二人は世界のために」に変わらねばならない。わが国の国際的影響力がこのように大きくなった今日でも、まだ「世界は二人のために」のような意識が通用すると思っただらまちがいである。つまり自分は世界の一員であるという意識を持たなければならない。例えば、海外で起きた航空機事故などの報道には、「遭難者の中には日本人はおりませんでした」のように、日本人のことはばかり気づかっている場合が目立つ。身内のことを気づかうのは、外国人も同じである。それなのにまっ先に自分のことだけを考え、既に身内に遭難者が出ている外国人のことに無関心であるとは思えないが、自分が世界の一員であるという意識が欠けているように思えてならない。

世界の一員であることの前に、日本の社会の一員であることを意識する習慣も身につけていないように思う。例えば、われわれはとかく自分の車や家の中は汚したくないが、外はゴミ箱同然に思っているように見受けられる場合がある。車外へ煙草の吸いがらをポイ捨てしたり、家庭のゴミ処理のマナーにも気になることが多い。欧米ではベランダなどに洗濯物が干してあるのを見かけることはないが、わが国では全く気にならない。大きなマンションが一面の洗濯物で覆われている光景は珍しくない。これは、環境はみんなのものであり、他人が見苦しく思うようなことは避けるべきであるという意識が乏しいからであろう。

4. 科学技術に関し「日本こそやるべきことは何か」

独創性の高い仕事をするには発想の転換が大事である。前例や先入観にとらわれない意外性が貴重である。こんなことが出来るはずがない、というようなことが、やってみたら実現する例は少なくない。また、カンやコツを軽視する傾向があるが、好ましくない。もちろん、ここでいうカンやコツは古典的意味あいのものではなく、情報化と高次元化の新時代に相応しいものことで

あり、いわばカンやコツのルネッサンスである。泥沼を避けて通り、形よくまとめることばかり考えている、新規な成果は生まれない。さらに、かなり前になるが、毎日新聞の「第二の敗戦」を考える」と題する社説のなかに、「新しい社会には、『人間尊重』とか、『個の確立』『多様性の重視』（内面的価値の見直し）『地球意識』といった意識の改革が伴うことになる。その上で、目標とすべきは人間を本当に幸福にするシステムの構築だろう」という感銘深い記述があったが、まさに新しい科学技術のあり方にも当てはめるべき事柄である。

日本は、第二次大戦後50年、産業立国という言葉によって示されるように、自動車をはじめ多くの加工製品を造って、輸出してきた。しかし、それが徐々に難しくなってきた。次に日本が生きる道は、「研究立国」とか「デザイン立国」とか、付加価値の高い仕事をして世界に貢献しながら、自らも糧を得ていくことだと言われる。すなわち「日本は世界の工場」から「日本は世界の研究所」へ転換し、「ものをつくらぬ日本どこへ行く」から「研究のない日本どこへ行く」へ意識を変えていく必要があると思われる。これが、「日本こそやるべきことは何か」に答えることにもなる。日本の科学技術は、欧米先進国の恩恵を受けて発展し、今日の高い水準に達した。これからは、自らの研究を通して発展途上国における研究や人材養成の援助など、国際貢献・国際参加に力を注がねばなるまい。

な ぜ か ～想いをはせる～

高校（全日制）5回卒 仙田 一 夫

まず校舎が汚いのはなぜか。また校舎につかえ棒があるなんて。いまどきこんな学校あるのかなと体育館に行けば床はつぎはぎだらけ。校庭には軽石があちこちたくさんあったし、入学試験は落ちる人はあまりいなかったし、ちぐはぐな想いであったことは事実だった。

あれやこれやで洪高に入った。当時はまだ旧制の中学の残党が居座っていたから、教えることに先生は難儀をしたとおもうし、確固たる教育理論なんて無かったのではなかるうかと思うし、現状のできる範囲が精いっぱい時代だったかもしれない。

ざっと年月を振り返って見る時50年、いささか霜鬢なりし今日このごろではあるが、筆をとるときさまざまな想いが走馬灯のように込み上がってくる。どんなことを書こうかな。先生のこと、そして高校生時代の仲間のこと。

でも当時の原風景をかいまみるのもなぜか。自分にとって書き残しておきたいような思いにかきたてられるのは、きっと自分が年を取ったせいかもしれない。

なつかしさのみが先走って、どこから導入部にしようか、とまどいなのですね。

上越線とチンチン電車は変な取り合わせである。でも当時の学生にとってなによりの足であったし、この足なくして学校へも登校できなかった。洪川駅から四つ角、そして北群馬信用金庫本店（今の中央公民館）を右に折れ、眞光寺の境内を通るやつもあれば、道なりに行くやつもいた。市内から通っている我々は通学生のなんとうらやましいことよと。

高校に入ったとたん男子校と女子校に分かれ、女の園なんて遠くになってしまった。市内の通学生にはそのことに淡い思いがあったような気がする。通学生が女子高生のこと、ほらにも、「チンチン電車の朝の満員なんてなんともいえないよ。だって吊り皮に手が届かないで、手と手がぶつかりあって、お互い顔を真っ赤にしたんだから」なんてそんな話、今思うと隔世の感がする。確かに洪高は進学校だから、遠くは吾妻から、なかでも草津から来てた者もいたし、なぜか前橋あたりから来ていた者がいたり、地域混成学校の感があった。

戦後間もないので、社会的にはさまざまな制約があった。食糧切符というものがあり、切符が渡されても子供心に割り当ての1食が足りず1食半食べた記憶があり、今思うと不思議な時代を黙々と生きてきたものだ。また配給米ではとても足りず闇米が横行しており、食べてゆくことの難しさをまざまざと実感したのもこのころだった。当時洪高に寮があり、入っている者はそれなりに苦労したのかもしれない。

着ている制服・帽子はなぜか高校生らしいのだが、記憶が正しいとすれば運動靴が配給だったのかもしれないが、靴を履いての登校はほんのひとにぎりのものだったかもしれない。「ほう歯」。どうに書いたかわからないが、ものすごく流行った履物だった。桐の台にほうの木歯をつけて、高さが10センチぐらいあったと思う。

カラコロカラコロと街を歩く姿が青春の響きとなって、いまでも思い出す度に鼓動となってよみがえる。考えてみると終戦そのものが当時の高校生にどのような形で心にあったのだろうか。今思うとわからないことだらけ。高校生なのだから少なくとも何かつかんでいたのかもしれないが、それすらも思い出せないでいる。

校風という中での議論と申せば、一言でいえば進学校であるということかもしれない。それゆえ難しい問題は避けて行こう。先生といえども戦前・戦中・戦後と昨日は右、今日は左とめまぐるしく生きてきたわけであるから、生徒であるわれわれは、先生は何をおもって教育を考えていたのだろうか。今思うと摩訶不思議である。そんな3年間、一本筋が通った生きざまが見えなかったのは今でも残念でたまらない。ただ救えるのは、戦争とはと問われた時、実体験があったこと、生きてきたプロセスを今の若者にどう伝えるか、そんな責任があるような気がしてならない。高校3年は確かに400人になんなんとする仲間と生きてきた、海軍大將になろうとかまた陸軍大將になろうとかの夢は無くなったが、当時の先生が日本は負けた、だがしかし君たち、将来の日本はこうあるべきだし絶対悲観してはいけない。こんな言葉を聞けなかったのがかえすがえすも残念でたまらない。混乱していたからかもしれない。今思い出してみても、かつての旧制洪中の生徒が夢見た伝統、そんなものに戦争という事件によりぽかんと穴が開き、その穴の中で生きていたのがわれわれの時代だったかもしれない。

今 に 生 き る

高校（全日制）6回卒 狩野 勝



我が母校、県立洪川高等学校の創立80周年心からお祝い申し上げます。

私は、赤城山の西山麓、赤城村津久田の生まれで、昭和29年に卒業した。

1時間か2時間に1本という電車通っていた。

戦争が終わって10年にもならない復興の時期であり、農村地域は現金収入のない大変な時代だったように思

う。

我が家も、養蚕やコンニャクなどを作った農業であり、秋の取り入れどきは、学校から帰るとすぐ手伝いをさせられたことを思い出す。「宿題がある」などと言っても「勉強は夜だ」と農作業が優先の時代だった。

田畑は段々で、収穫した荷物を背負って家まで運ぶので、何往復かすると高校生ながらたくたの疲れで、宿題などする気力がなかった。だいたい勉強は好きな方でなく、何といても模擬テストをやらされて、成績が廊下に張り出されるのには閉口した。

生家は、曾祖父が村長をし、父親が村会議員、叔父が市会議員等をやったせい、血筋として政治には子供のときから大変に関心があったように思う。

あるとき、高校の帰り道、隣の洪川北小学校の講堂で衆議院議員選挙の「立会演説会」が催されており、立ち寄った。学校帰りの立ち寄り、まして選挙演説会場などは、当然禁止されていたが、後方にもぐり込んで聞き入ったことがあった。

当時、青年将校といわれた30代の中曾根康弘、将来を嘱望された福田越夫、小峰柳太か小淵光平（故・小淵総理の父）の各氏の立会演説だったように思う。テスト期間中だったと思うが試験など忘れて、何か胸の高鳴りをおぼえ興奮した1日だった。政治家への夢を強く意識したときでもあったように思う。

上京して政治事務所のアルバイト

東京での学生時代は、アルバイトの連続であり、なぜか政治関係を好んで選び、政治事務所や選挙を手伝った。

まず最初は、当時の社会党書記長、浅沼稻次郎事務所で参議院議員選挙のアルバイトをした。東京駅東口、八重洲口の赤レンガのビルの地下にあったように思う。三輪寿壯、河野密、麻生良方、俳優の伊藤雄之助という顔ぶれが出入りし、新聞で見る人がこの人かと思った。

次いで、戦前の元大蔵大臣、賀屋興宣事務所を手伝うようになった。戦犯で巣鴨から出てきたばかりで、若い人と交わり、今の世相を知りたいと好んで学生と懇談した。いろいろな大学から学生を連れては訪問交流した。なぜか私とそのリーダー役をした。渋谷の東急本社の裏に別荘のような事務所があり、参議院議員、迫水久常、元文部大臣、松村謙三元大蔵大臣、植木康子郎、東急社長、五島慶太といった大物が出入りしており、これまた

胸が鳴った。

昭和34年の大学卒業時に、参議院議員前田久吉（当時産経新聞・関西テレビ・大阪放送・東京タワー各社長）の選挙を手伝ったのが縁で、国会の秘書となった。

当時の政治情勢は、政治家の汚職や腐敗がひどく、政治家の資金問題や政治の改革が大きく叫ばれはじめたときである。新聞は連日造船疑獄とか、政治家や財界人にかかわる汚職事件や不祥事を報道していた。

政治近代化への道

政治に金が必要なことはどの先進国でも同じだが、日本のように政治家に献金をする見返りに仕事をという不正行為は、先進国とは言えない、日本もこれを断たねばならないというのが大きな課題となった。

日本も、民主政治の先進国イギリスのように、政治資金のあり方を見直そう、検討しようという声が政・財界、学者等からわき上がった。

早稲田大学・吉村正先生の「政党近代化論」を指針として阿部真之助、村岡花子、長谷川才次、村田五郎といった人たちが政治浄化へと立ち上がった。そしてその中心となったのが前田久吉氏であった。

戦後の長い間、政界、財界でも誰かれとなく考え、憂慮されてきた“政党近代化”すなわち、政治資金の問題、組織の問題、派閥の問題等々に手をつけると共に、国民の政治意識の高揚を図る、一大国民組織を作るという構想である。何と素晴らしいことだ。私は、前田久吉氏の秘書からこの国民組織『自由国民連合』の結成に参画した。

英国の保守党のバックアップ組織・自由連合を参考にしたこの結成は、当時新聞にも大きく報じられた。私はこの自由国民連合の青年部長として大いに夢をわきたたせた。

日本青年海外派遣団員となる

昭和34年、皇太子様（現陛下）がご結婚されたのを機に、政府は全国の青年代表を諸外国に派遣して、友好親善と見聞を広めさせようとのもと、総理府主催「皇太子ご成婚記念・日本青年海外派遣事業」を計画し、昭和34年を第1回として公募した。

私は昭和36年の第3回青年海外派遣団員に選ばれ、25歳の若き日、夢の海外視察をすることができた。この当

時は、外貨の関係で自由に海外へは行けず、選抜されると新聞にも名前が出て、知事や親戚等からも饞別が寄せられるほど珍しかった。

出発にあたって、東宮御所に招待され、皇太子殿下、同妃殿下と親しく歓談、激励されたことが昨日のように思い出される。

横浜港から大型旅客船で出港、台湾から香港を経由してシンガポールに上陸。ここから陸路や飛行機で当時のマレーシア、ビルマ、タイ、カンボジア、ベトナム、インド等、3カ月間の友好親善の海外視察は、群馬の上毛三山にはぐくまれた青年に大きな夢と希望を与えてくれた。

戦場から遙か遠くの灯を望み、満天の星空を見上げながら故郷を想うとき、青雲の志をより大きくしていった。

皇太子ご成婚記念の日本代表ということで、当時はこの国でも大歓迎をしてくれた。北は秋田から南は沖縄までの各県代表12名（東南アジア第二班）の団員で、見るもの聞くものすべてが初めての感動を味わった。

そして、諸外国を見回し、祖国日本を想うとき、国の繁栄も、人々の幸せも、その国の未来は、良い政治、良い政治家に負うものと確信し、政治家への夢の実現に努力することを誓った。

断固たる決意は不可能を可能とする

家内の実家のある千葉県市川市に世帯をもって7年、昭和45年夏、翌年4月の統一地方選挙に立候補することを決意した。

“日本の政治を変えよう”。英国の保守党政治を支えるナショナルユニオン（自由連合）を模しての国民運動も限界を感じたからである。

政治は外からの改革ではなく、自ら政党の中に入って、内部から政党の近代化をしよう。それには、第一に金をかけない選挙をすること。第二は日常活動を展開すること。この二点を重点とする選挙への取り組みを始めた。そして、将来国政まで狙うには、まず県議会議員に挑戦しようと決意をした。

地盤、看板（知名度）、カバンの無い無名の36歳の青年が、当時金権千葉といわれ、県議会議員選挙で何千万円という金を使うのが普通だった土地で、全く金をかけない（金の無い）選挙戦を展開したのである。

政治の改革を訴え、街頭での“辻説法”だけの戦いでスタートをした。ボランティアの学生さんと、支援する

ご婦人が数人という、30年前の選挙では例を見ない選挙戦だった。

結果は、6,601票で次点、当選者とは数千票の差で負けた。しかし巷では狩野は3,000票くらいかと噂されていたので、我々としては、金を使わない無名の新人が6,000票台も獲得したのは予想もしなかった良い結果であり、ボランティアの学生と朝まで飲み、次回に期した。

しかし、日がたつにつれ、3人の子どもをかかえ、さてどうやって食べていくか。政治の道をこれからどう歩くのか。4年先までどう生活しようか——。元気な私もお先真つ暗になっていたある日、気分を変えて銀ブラでもと銀座に行き、三越デパートへ入った。

店内を一巡したところで、書画、骨董の中から一つの書の額が目にとまった。

それには——

一、断固たる決意は不可能を可能とする
一、周到綿密なる企画と、敏速勇敢なる実践は可能につながる

一、努力と忍耐の持続は可能を生む
と書かれていた。私は震えをおぼえた。そうだ、これだ。断固たる決意だ。絶対に政治家になるという今までの決意はどうしたのだ。“断固たる決意は不可能を可能”にするのだという強い情熱が再びわき上がってきた。即座にその額を購入し、座右の銘として歩む決意をした。

成せば成る

人間、断固たる決意を持ち、確たる信念を持って歩んでいると誰かが見ているもので、ある日、自民党千葉県支部連合会の幹事長から“君は群馬県出身だそうだが、これからも（千葉から）政治への道へ行く気があるのか。あるなら会おう”との電話があった。

指定されたホテルで会々と“千葉で政治をやるのなら千葉を知らなければダメだ。自民党県連事務局で働きなさい。給与はどのくらいか”との温かい言葉で、幹事長のいかつい顔が仏様のように見えた。

人には3回“運”があり、それをつかむことができるかどうかだと言われる。

自民党県事務局にお世話になって3年目、“運”が来た。チャンス到来だ。それは市長が病気のため引退、県議会議員の補欠選挙が行われるというのである。自薦、他薦を多くが名乗りを上げた中で、前回選挙の健闘が評価

され、自由民主党公認候補として立候補することができた。“当選”した。25年前の39歳だった。

群馬県赤城山の麓に生まれ、渋川高等学校を卒業して上京。“政治家になる”との決意のもと、“成せば成る成さねば成らぬ何事も 成らぬは人の成さぬなりけり”の不屈の精神で、ついに千葉県議会議員になることができた。“金権千葉”とまで言われた地域で、金も使わず、多くのボランティアの人たちとカンパでの選挙戦は、新しい政治への期待に、大きな一石を投じたものと思う。

以来県議会議員五期連続当選、第45代千葉県議会議員にも就任。そして平成2年“衆議院議員”に当選。国政に参画させていただき、国会二期間全力投球、無遅刻、無欠勤で、二期目にして、厚生政務次官として働く場を与えられた。

前回の選挙では惜敗し、今、捲土重来をめぐして、千葉県第五選挙区（市川市、浦安市）の皆様“政治は人なり、政治家である前に、その人間性を見ていただきたい”と、最後の訴えをしている（これが出版される頃は、選挙は終わっているかも知れない）

25歳の時海外で決意した“愛する国と人々の幸せのため、政治家として働きたい”との思いは少しも変わっていない。

感謝の日々

ふりかえると、政治浄化の道を一筋に歩いて来たように思われる。

衆院選出馬のパンフレットに使わせていただいた相田みつをさんの詩のように。

道
いちずに一本道
いちずに一ツ事
観音さまに助けられ
佛さまに守られて
曲りなりにも一本道
迷いながらも一ツ事

生まれ育っていない土地で、良き縁に会い支えていただいた多くの人たちへの感謝、今日あることの親、先祖、故郷の山河への感謝をこめて、仏壇に手を合わせての毎日である。

“一日一生”の精神で“今に生きる”ことだと思ふ。たった一度しかない人生を、大切に生きるために——。

時代の变化を鋭敏に読もう

高校（全日制）8回卒 永井英慈



創立80年の2000年の新春を迎え、私の生涯を顧みて、最も多感な青春の時期を母校渋川高校で過ごしたのだと思う。数々の光景が走馬灯の如く私の脳裏を流れて行く。40年余りの時の流れというレンズを通して、

それは余りにも美しく、余りにもなつかしい。40年余りの時代の変化はただ単なる歳月の移り変わりと共に、自らの内面の変化も想像できないほど大きなものがあることを痛感せずにはられない。

どれも共通して言えることだが、私の洪高時代は、とにかくにも、ただただ「耐えること」の時代だった。まともな衣類もなく、肌を刺す冷たく寒い名物の空っ風にも耐えて通った。炎天下の草いきれの暑さにも、ひたすら耐えて赤城の急な坂道を、家路を急ぐ以外になかった。とりわけ急な坂道の暑さはこたえた。

あのころは未だ食糧事情も悪く、成長盛り的高校生時代は空腹にも耐えるだけだった。肉や魚などめったに口にすることはなかった。今は、バナナはさつま芋より安いと笑うが、実際にバナナを手にとってみて、食べたのは昭和32年大学に入学してからしばらくしてのことだった。語り草である。

今、思い返してみるに、あの当時、美味しいものを食べた記憶は全くない。ただただ成長し、生きるために食べていたのだろうか。もはや、飽食の時代と言われて久しいが、わずか半世紀前は今では想像もできない貧しさだった。住む家とてもまさに雨露を凌ぐだけだったように思われる。寒さを防ぐ寝具とて、まともなものはない。家には、沢と尾根が交互に続く田畑での過酷な農作業に追われ通しだった。よく耐えたものだ、と今にして思う。だが不思議なもので、当時は耐えることはさほど苦痛でなかった。それが当たり前のことだったから。また、祖父の厳しいしつけにも耐えた。「勉強は何歳になってもできるが、身体は若いうちでなきやあ鍛えられねえんだ。野良仕事で、みっちり体を作っておけ。40、50になれば、よく分かるさ」と。祖父の言葉はその

通りの真実であり、今の心身の健康に心から感謝している、今日このごろである。

貧しいということ、厳しいということ、耐えるということは、思いやりの心を育むのだろうか。取り立てて楽しかった思い出もないが、小学、中学、高校を通じて、陰湿で冷酷ないじめを私は知らない。私はだれとも仲良くしていた。みんなあっけらかんとした明るさがあった。それこそ失ってはならない大切なことだと思う。

母校の先生方も、貧しさに耐えながらも淡々と、しかも情熱をもって教えてくれた。多分、強い使命感をもって生徒に夢を託していたのだろう。私たち一人ひとりに、差別することなく公平に接してくれていたのが強く印象に残っている。だから、恩師に対して思い出に濃淡がない。先生に口答えする生徒は全くいなかった。みんな、先生を尊敬していたように思われる。そこには、高校といえども強い道徳心、倫理観、自立心、責任感が支配していたように考えられてならない。

民主、自由（人権）、平和の崇高な理念に貫かれた新しい憲法が施行されて、ほぼ10年、民主主義の下での法制度がほぼ整備されたころだった。あの苛烈を極めた朝鮮動乱が終結して、サンフランシスコ体制が整って、敗戦の荒廃と虚脱を克服して日本中が新しい時代を築こうと生気に満ちた時代だった。少年の心にも民主主義にうなされてきたかのようにも思われてならない。洪高校歌にもはっきりと現れているのではないか。自由で豊かな生活や社会を目指して大きな希望をいただいていた。今静かに思えば、当時の日本人の知恵とエネルギーに圧倒される思いがする。私たち洪高生も強い向上心に燃えていたように思う。だからこそ、あの厳しい環境や条件の下でいとも当然のこととして耐え抜くことができたものだと、考える。そのころに思想も信念もほぼ形成されたのだろう。

青い空はどこまでも青く、夜空の星は降るように輝き、四季折々に美しい。迫り寄る四周の雄大な山々に囲まれて、利根川の悠久の流れを目にしなが、日増しに体力もついて、知識欲も旺盛で、感覚も鋭敏で、何事に対しても食欲なまでの好奇心をもっていた。清々しい青春の条件か、特権か。大自然に抱かれて成長した過去とはそんなものかも知れないが、誠にほほえましい郷愁にかられる。

こうして、母校の思い出を綴っているうちに、今まで、

とりたてて誇り得べきことはないが、何よりも誇るべきは、やはり母校渋川高校であり、母校を通して巡り合えた恩師であり、先輩であり、同窓の友人たちである。母校を後にして、神奈川に移り住み、はや40余年、少々起伏の激しい人生を走り抜けてきた者としては、星霜の移り変わりとともに、ふるさと群馬や母校への足は遠のいていくものの、予期もしない同郷の人々や同窓の人たちに接すると不思議なほど言葉にならないなつかしさがこみ上げてくる。それが、ふるさとであり、母校なのだと思う。理屈は全く無用なのだ。そこにこそ、ふるさとや母校の偉大さがある。とりわけ、夜を徹して口角泡を飛ばして白熱の議論をしたことは思い出深い。幼稚ながら民主主義、社会主義、共産主義など国家や体制をめぐる、さらには文明論、文化論、芸術論、恋愛論など話は尽きることがなかった。そうした議論のための理論武装とまではいかないまでも友人に負けじとばかりに小説や詩や評論など手当たり次第に本を読み漁った。それは今日まで生きる大切な糧になっていたように思われてならない。とてつもなく大きな夢を世界に馳せたこともあった。青年の特権とも言える可能性を限りなく拡げた時期でもあったのだろうか。理想を求め、理想を糧として成長したのだろうか。今年で、神奈川県議会議員から衆議院議員まで25年間、激しく変化する政治の現場で、権力にすり寄ることもなく、権威にすがることなく、特権を振りかざすこともなく、無節操な打算から体制ににじり寄ることもなく、自らの良心にしたがって、ひたすら庶民派、市民派を貫き通してこられたのも、洪高時代のこんなところに源流を発しているのかも知れない。

戦後の経済復興から高度成長期を経て、大量生産、大量消費、そして大量廃棄の時代に入り、暖衣飽食の時代と言われる今日、新人類、エイリアンなどと呼ばれる今の在校生の意識やライフスタイルは全く異質のものであろう。冬の寒さにも夏の暑さにも過酷な労働にも耐えることを求められることはない。価値観が多様化して、洪水のように流れ寄せる情報の中で、多感な青年時代を送ることの迷いと苦痛は計り知れないものがある。それに少子化の中で、家族や周囲の人びとの期待を一身に集めるのも耐え難い重さを感じているのかも知れない。過熱する受験地獄の重圧は想像に絶するものがある。

さらには、とめどもなく進む国際化、急速に広がる地球環境の悪化、迫り来る超少子高齢化、デジタルやバイ

オなどの先端技術の進歩による新しい文明社会などなど、将来に確たる展望も自信も持ち難い激動する時代背景に生きることの苦しさには同情を禁じ得ないものもある。人生の座標軸を定めるべき高校時代を生きる諸君にとっては辛いことだ。

はや還暦を過ぎた同窓の者としてこの機会に21世紀を生きる在校生に告げておきたいことがある。

まず、時代の変化に鋭敏でなければならないことである。即ち、時代を読むことの大切さを知るべきと思う。私のこれまでの、拙い人生の中で忘れられないのは、敗戦という激変であったことは間違いないのだが、さらに、1989年の激変であった。それは正に激動の昭和という時代に別れを告げて、平成という元号に変わったというだけのことではない。長期政権の中で繰り返されてきた政官財の疑獄事件として、リクルート事件が発生した。消費税という新しい税制が導入された。竹下、宇野、海部という三つの政権が消えては生まれ、生まれては消えた。この年の夏の参議院通常選挙で与野党の議席が初めて逆転した。労働界も統一されて、全日本労働組合総連合会が発足した。そして、その秋も深まった11月9日、ベルリンの壁が崩れ、年末にはマルタ島で米ソの首脳会談で東西の冷戦は終結した。そして、この年は、バブル経済が絶頂期にあって、翌年からそのバブルが崩壊過程に入った。

この年を境に世界も日本も異質の時代になって、今日の革命的な混乱期に突入した。あれから早くも10年余がたった。この10年の変化は、21世紀を迎える私たちに重要な示唆を与えている。

成績が悪い者ほど勉学に勤しむべき。苦手のことや苦痛から絶対に逃げてはならない。

最後に、自作の漢文を贈ることにする。

人生逆境十之八九

順境不能磨練人格

逆境可以鍛鍊人間

人生は辛いことが十中八九である。

調子よくいっている時には人格を磨けない。

辛い時にこそ人間は鍛えられる。若い時の辛いことや苦勞は金を出して買ってでもやれ。

知信知恩知分知足

信用、信頼、自信、信念の重要性をよく理解し、他人から寄せていただいたご恩を忘れることなく、身のほどを

良くわきまえて、自分が恵まれ、満たされていることを肝に銘じて感謝の念を持ち続けることが大切だ。

信為万事之本

無信不立故

自望信希誇

信は万事の本をなし、信が無ければ、何事も立ち行かず、自ら信を望み、誇りを強く求める。どんなに失意で苦しもうと、逆境に喘ごうとも常に希望と自信と誇りを持ちつづけることが、なによりも大切である、と力説したい。後悔は先に立たないのは分かり切っているのだが、今、この年になって、高校生のころ、もっと基礎的な勉強に励むべきだった。凡人の悲しさだがしきりに後悔している。高校時代は人生の中で大切な時期だ。だが、私にはもう帰らない。

懐かしき母校、忘れえぬ友垣

高校(全日制)8回卒 稲垣隆史



還暦を過ぎて早3年、孫も生まれ、れっきとした爺い(大袈裟か)になりはしても、心身共にどう一って事はなく、ただ、ついさっきまでかけていた眼鏡の置き場所を忘れ、ウロウロ捜したりする事が多くなったの

には参る。どうも最近物忘れに加速度が……。60を過ぎると30代のころからの記憶は徐々に薄れ、10代のころのそれが鮮明度を増すようである。

さりとして、勉強にいそむ洪高時代の自分の姿が全く見えてこない。もっとも、当時はピアニストをめざして、日本を代表するピアニスト豊増昇氏の元へ毎週レッスンに通っていたためでもあるのだが、なあに勉強嫌いの劣等生がその事を実態があいまいになっただけの話なのである。しかし、友人と授業をサボり、八幡裏の山や堤を歩きながら、政治や読んだ小説や映画や将来の夢などを楽しく語り合った思い出は、今なおおせせず、時折「もうあの日は絶対に戻らない」と考えただけで絶望に似た息が詰まる思いに駆られ、慌てて心のシャッターを下ろしたりするのである。とりわけ朝日新聞の敏腕記者となった飯塚眞之(以下敬称略)とは、カバンを麦畑の中に

隠し、前橋まで映画をよく見に行ったものである。

『ボリス・ゴドノフ』、『セールスマンの死』etc、映画を見終わった後、飯塚が熱く語った感想の内容は今でもありありと覚えている。

後年、そのアーサー・ミラーの名作『セールスマンの死』の舞台で、恩師滝沢修の息子役として出演する様なことになるなど夢にも思わぬ少年の日の、これまた忘れ得ぬ思い出である。

さて、そんなグウタラ高校生活も3年になったある日、突然「洪高に演劇部がないのはおかしいっ!」と思い立ち、親友の南雲武男と演劇部を創立したのはいいが、入部者が極端に少ない。しかし、とにかく秋の文化祭には何としてでも上演しなきゃと演出と役者を兼ね、現在国会議員である永井英慈、テレビ東京の元アナウンサー鳥山英二、中学時代からの親友田村勝の協力を得て、ようやく上演の運びとなった。結果は大成功!「隆史ちゃん、才能があるっ!」等言われてすっかり舞い上がり、以後、ピアノのレッスンで上京する度に劇場めぐりが始まり、遂にはピアノを捨て俳優養成所に。事後報告を受けた亡父の「じゃあ今後ピアノは止めるんだな」の真意などこ吹く風と、やはり養成所でもしよっちゅうサボって仲間と喫茶店で夢を語り合った。

やがて養成所から劇団民藝に入団、滝沢修、宇野重吉、小夜福子、等夜空に輝く星のような先輩たちに囲まれ、共演し、芝居の苦しさや恐ろしさの間をさ迷い続けて今日まで何とかやって来た。ここまで来れたのも「民藝」に入団したのも、洪高で培われた、つまり校歌で歌われている「自由の子、民主の民ぞ」精神のお陰だと心の底から感謝している。

さて、入団はしたものの、劇団の地方公演はせいぜい前橋、高崎止まり、故郷洪川は年々遠くなる思いであったが、10年ほど前、前記の親友田村勝から、洪高野球部OB会主催でチャリティー公演をしているのだが、お前もなにかやれないかと誘われた。劇団公演は予算が掛かりすぎてとても不可能。そこで数年前琵琶の半田淳子と私の語りで芸術祭参加公演の『雨月物語』を上演。続いて日本音楽集団との共演による『竹取物語』『八部物語』と続き、最近では、劇団の若手の協力を得て、ギリシャ悲劇の『砂漠に消えた王(オイディプスより)』を上演した。

思えば故郷の人々の温かいまなざしの中で協力させてい

ただいた事に対して、親友田村をはじめ洪高野球部OB会の皆様に対し心から感謝すると共に、お声を掛けて下さった事に対しても光栄に感じている次第である。

ピアニストは指が命と、体育の実習も免除させていただき、グローブもミットにも縁がなかった私が野球部OB会のボランティアに……。感無量である。しかし、野球は大好きで大阪公演の時など高校野球を観戦に連日甲子園まで出掛けたものである。帰るに家無く、日々遠くなる故郷をつなぐ洪高野球部OB会チャリティー公演には、これからもライフワークとして万難を排し協力させていただきたく所存である。

懐かしき祭りの笛や太鼓の音が遙か彼方に消えようとしても、榛名山の懐に抱かれた学舎洪川高等学校は、輝ける青春の思い出と共に私の心の中で永遠に生き続けているのである。

かかわった人々

高校(全日制)8回卒 田村勝

洪川高校80周年記念誌にかかわる執筆要請に、いとも簡単に承諾したものの何を書いてよいやら思案にくれました。と申すのも、元来体育系の私が入部して読んでいただけのものが書けるかどうか不安にかられながら、思いづくがままに綴りましたことをご容赦下さい。

体を動かすことの好きな私は3度のめしより好きな野球がしくて、進学校で文武両道を旨とする洪川高校へ、そして憧れでもある硬式野球部に入部することが願望であったのです。昭和29年晴れて洪川高校へ入学、念願の野球部へ入部したのです。

初めて手にした硬球ボールとの出会いは、捕球したグローブの感触、バットで打った打球音は今でも忘れることが出来ません。ラジオから流れる野球中継、「カーン」という打球音は私の心を震わせ、ヒットした選手がグラウンドを駆け抜ける様を自分とダブルせ聞き入るほど野球が好きな私だったので。選手は打ったり、捕ったりして打ち易いバット、捕り易いグローブを自然に学びます。グローブをばらばらに分解し、捕り易く改造したり、バットの握りがしっくりするまで削り取ったりして時間の経つのを忘れ没頭したものでした。野球の練習は他の

スポーツに比べても変わりありません。その基本は走ることから始まり、耐久力と敏捷性を養うのです。しいて異なる点をあげるとすればルールが沢山あることでしょう。それが野球を面白くし、多くのファンを持つ一つの理由でもあるのです。私は今年61歳に成ります。野球の魅力にとりつかれて50年、今も還暦野球チームに籍をおき楽しんでおります。

さて、私が入学した当時の県内高校野球界は、桐生高校を筆頭に、桐生工業高校、高崎商業高校と続き、あとは横一線のだんご状態でした。桐生高校にあっては抜群の強さを誇っていた、あの名物監督稲川東一郎氏を擁し、全国レベルのチームでした。その指導方法は当時としては実にユニークで、自宅に野球道場を開設し、遠方通学生と一緒に寝起きしながら野球を指導するという熱血監督として知られていました。今でいう管理野球の走りでした。

では本校のレベルはと言えば1、2回戦で勝ったり負けたりの一一般的なチームでした。桐生高校のように専任監督はおらず教師がその任にあたっていました。入部時の監督は今もご健在でおられる角田昭先生が部長を兼ね指導されていました。先生は公務の時間のあい間をみではグラウンドに顔を出され指導して下さいました。

弱小高校であっても目指すは甲子園です。その甲子園の第一回大会は大正4年に開催され、その5年後の大正9年関東大会に本県から前橋中学(現前橋高校)が初出場しています。これが群馬県中等野球の幕開けとされています。そして全国大会には大正14年同じ前橋中学が出場を果たしています。

本校野球部の創部は昭和22年、その年の甲子園群馬大会から出場しています。戦前より野球部は存在していたと聞いていましたが、故人となられた前同窓会長川崎富三氏によれば軟式野球部であったとか。ともかく夢のような甲子園を目指して練習に励みました。部員数が少なかったこともあって早くから各種大会に出場させていただきました。高校野球の大きなイベントと言えば夏に行われる甲子園大会です。6月の蒸し蒸しとした時期、期末試験を終え、1週間の合宿練習に入るのが恒例でした。早朝練習に始まり、授業、放課後練習と野球漬けの1日が始まるのです。夕食、入浴を終え床につくのが11時過ぎとなります。教科書を持つ合宿であったが本を開く時間もなく建前に終わりました。とにかく1年生の合

宿はきつかったことだけはよく記憶しています。

同期に入部した伊香保中学出身の飯塚猛美君（故人）とは良き相談相手でした。合宿期間中は励まし合いながら乗り切った事も思い出の一つです。彼は数年前より体の不調を訴え入退院を繰り返していたがついに帰らぬ人となってしまいました。夏の大会が来るたびに飯塚君の柔和な顔が思い出されてなりません。

入部1年目を過ごす2年目は慣れたもので何の苦もなく通過することが出来ました。そして2年の夏が終わると、3年生は退部し、部の運営は残された1、2年生に任されるのです。そのことはうれしいと言うよりむしろ、部の伝統と部員の統率に苦慮しました。野球部の悩みの一つは、少ない部費でした。ボール、バットは学校より支給されましたが、用具の高騰のためボールは週に数える程度、バットにいたっては月に二本の支給であったように記憶しています。それでもボールは自分たちで修理し、バットはこんにちのような金属バットは開発されておらず、木製バットでした。それも高価なため、代替えとして竹バットの使用が許されていました。ボール、バットを除くとそのほとんどが自前で、月の小遣いは用具に注ぎ込む始末でした。しかし夏の甲子園群馬大会だけは後援会のご援助を頂き、大型バスでの送迎はうれしかったです。部長を兼ねられていた角田先生は部の運営にご苦労されていたようで、しばしば母校OBの方々を訪問しては寄付のお願いに奔走されていました。

その部費捻出のため、私共2年生の秋、文化祭に便乗して野球部とその関係OBの方々のご協力でバザーを開催したのです。既に取り壊されているコンクリート校舎を使って、小竹さんの焼きまんじゅう店、いさごさんの寿司店を出店したのです。厨房には故人となられた狩野校長の奥様、角田先生の奥様をはじめとして私共の母たちがこれにあたりました。部員は全員で接客を務めたのです。あとで聞いた話が大成功だったとか。収益については私共の知るよしもありませんでしたが、この経験は学校では学ぶことの出来ない貴重な体験でした。

高校卒業後、縁あって昭和33年から2年間ではありましたが、当時の野球部長の元で部のお手伝いをさせて頂くことになりました。何から手をつけてよいのやら悩んだ末、私の信条でもありました「長ずる所を貴び、短なる所を忘れる」を取り入れ、従来の考え方を捨て、生徒

個人の適性を重じた野球に取り組むことにしたのでした。生徒たちは経験と理論から適切なアドバイスを待っていたのでした。少しずつですが力が付いてきたころ、根岸先生が桐生遠征を計画され、桐生工業高校、桐生商業高校と練習試合を行い2連勝して帰った翌日、桐生高校より試合の申し込みを受けたのでした。あの稲川東一郎氏ひきいる学校からのお呼びとあって私はもちろん、生徒たちは大感激したものでした。真の力がついたのですが、その年の秋、関東大会群馬予選では決勝まで進出、初出場をかけ高崎商業高校と対戦したのですが3対1で惜敗、初の関東大会出場は夢と消えたのでした。この大会の記録は毎年発行される夏の甲子園大会報に掲載され、当時の様子を知る唯一のもので、今でもその大会報を楽しみにしている1人なのです。その4年後の春の関東大会群馬予選でも決勝に進出していますが、桐生高校に出場の夢を断られています。

さて、母校からも傑出した選手がいたことに少々触れてみたいと思います。最初に紹介しておかなければならない人は、第4回卒業の池永作氏である。氏は母校唯一のプロ野球選手で、高校時代、公式戦1試合2本の本塁打は当時としては大変な快挙であり、県内屈指の長距離打者として知られた選手でした。卒業後は明治大学へ、そしてプロ球団阪急ブレーブスに入団したのです。当時のスポーツ誌ベースボールマガジンに「期待される新人」として大きく紹介されました。その後体調を崩されて退団、地元に戻られ、私共の在学中コーチをされていましたが、再びノンプロチーム全桐生、全足利で活躍されました。全足利時代、私も何度かお誘いをいただきましたが、ご一緒出来なかったことを今になって悔やんでおります。氏からは沢山のご指導を賜りました。静かな語りの中に誠実さと情熱を持ち合わせた素晴らしい人柄は、私共後輩に大きな影響をお与え下さった人として忘れられません。野球から離れた後は、足利市役所に勤められましたが、若くして他界されたのです。

その後次に次ぐノンプロ選手として、第12回卒業の石上敏孝氏（石川島）、同年卒業荒木和己氏（高鉄）、第14回卒業の斉藤万年氏（高鉄）、そして大学野球では、第3回卒業の池永梓氏（群大）、吉村博夫氏（中大）、平沢幸治氏（中大）、第9回卒業の佐々木誠量氏（法大）、第10回卒業の由利筆氏（日本医大）、第13回卒業の菊地理孔氏（亜細亜大）、第17回卒業の小菅隆夫氏（明大）、最後

になりましたが、神宮球場のスコアボードにその名を印した第28回卒業の富永武男氏（早大）です。無名校でありながら並み居る選手を押し退けレギュラーの座を勝ち取って神宮に登場した時、本人はもちろんのこと、高野球部関係者はどれほど驚きとうれしさを感じたことか。高校在籍のころから彼の守備には定評がありましたが、それにも増して人一倍練習好きな選手でした。そのことはスイッチヒッターとして研きをかけ、神宮球場にデビューしたことで証明されましよう。早大を卒業後は、ノンプロチーム富士重工に入社、社会人野球で活躍しました。現在は職場に復帰し、アメリカに赴任しています。いつだったか、アメリカより家族揃って撮った写真が届いたときは思わず「富永頑張れ」とつぶやいたことを思い出します。

文武両道を校訓とする母校にあって、地味ではあるがひたすら努力している野球部OBの仲間から拍手を送りたい。そして先輩に続く選手が出ることを心待ちにしている一人です。

最近の高校は、父母会や後援会が組織され、部活動の育成に力を入れられています。また野球部出身者で組織されるOB会も同様です。渋川高校野球部OB会も、昭和62年に旧制第25回卒業の須田達氏（故人）の音頭で発足しています。その趣旨は野球部の支援と会の発展を目的とするもので、毎年5月に総会を開催し、その年の行事を決定しています。現在の会長は第6回卒業の平沢幸治氏が就任され、会員数も400人を超える大所帯となっています。総会には学校側から学校長のほか、野球部関係者が出席し、会員との懇談を行っています。話題はその年のチームの状態や、有望選手の話になります。また会員同志の話になると、きまって学生時代の思い出話に花が咲き、時のたつのを忘れ野球談義が続くのです。会の終わりは「母校に栄えあれ」と全員で校歌を斉唱して幕となります。OB会の発足当初は新鮮味もあって活発に活動されるようですが、時間と共に消滅するか休会となるようです。私共OB会は今日まで順調に歩んできました。「継続は力なり」と申します。会が尻登りに終わることのないよう結束につとめてきました。

そして八年前から同窓会のご協力を戴きチャリティー公演を開催してきました。スポーツを志す青少年に「思いやりの心」を持ってもらうという趣旨の福祉活動で、既に4回を数えるほどになりました。出演者には渋川高

校出身の稲垣隆史氏と鳥山英二氏で、私共の考えをご理解いただきお願いしてまいりました。幸い両人とも第8回卒業で私の友人であったことも何かの縁でもありました。稲垣隆史氏は劇団民芸の俳優として活躍されており、私共が開催した過去3回の公演、「雨月物語」、「竹取物語」、「砂漠に消えた王」などすべて稲垣氏の演出でありました。鳥山英二氏はテレビ東京開局当初からアナウンサーとして活躍、後に製作部長時代にプロデュースした海老名香葉子さん書き下ろしの「うしろの正面だあれ」の映画と講演でありました。これら公演会は会場の手配からパンフレットの製作、入場券の販売、当日の場内整理に至るまでOB会会員による手作りの事業であったのです。その収益金は地域福祉事務所、雲仙災害、阪神淡路災害等の義援金として寄付を行ってまいりました。

この慈善事業は新聞等にも紹介されましたが、平成9年の夏の大会で高校野球解説者として知られた中川保氏（高崎高校出身、同校後援会長）が私共OB会が青少年への教範として慈善事業を行っていることに感心を持たれ、テレビ中継中に紹介されたのでした。この事業は、今後とも継続出来ますことを望むのであります。

最後になりましたが、あれこれと取り留めのないことを書いてまいりましたが、私が高校在籍した3年間、そしてその後の母校とのかかわりの思い出は、すべて出会った良き恩師、良き先輩、友人、後輩の皆さんのお陰だと深く感謝申し上げます。そして記念誌発行にあたり掲載の機会をお与え下さった同窓会の皆様へ厚くお礼を申し上げます。

—— 赤城山に魅せられて ——

高校（全日制）9回卒 飯塚 眞之

私は5年前の1995年5月に朝日新聞社をリタイアして、横浜から弟の住む赤城山麓・勢多郡大胡町に居を移した。実際には仕事の都合で、今でも横浜に多いが、それでも毎月、大胡町に帰っている。そこから見える赤城山の、長く裾野を引いた姿が好きだ。

終戦の年の1945（昭和20）年、9歳だった私は今の東京都杉並区永福町から、父の郷里の渋川市川島（当時は

金島村川島)に疎開した。この月、米軍による東京下町の大空襲があって、凄惨な被害が出た。永福町はこの時まだ被災していなかったが、引き続き空襲を恐れて、私は家族より一足早く、その数日後に疎開した。

疎開した私は4月から金島小学校に通った。4年生だった。通学の途中にはいつも利根川をはさんで、彼方に赤城山が遠望された。大きく身近に迫る大胡町からの赤城山とは違って遠く、夕暮れなどは金島村が日暮れているのに、赤城山は明るい夕日に照り映えている。その鮮やかな風景は疎開体験とともに、私のふるさと像の原型となった。

終戦2年後に父が肺結核で亡くなり、小学校6年生だった私は姉とともに、同じ病気で渋川の国立病院に入院した。まだ30代だった母は、幼い弟を背負って毎日、病院に通ってきた。旧制中学校生(後の高校)だった兄は、通学途中に近所の農家から山羊乳を買って、病院に届けてから学校へ通った。その話に感動した兄の担任教官が、病院まで見舞いにきてくれたこともある。

食べ物も薬もなかった当時は、大人も子供も、この不治の業病で死んでいった。少年の私は病院で、そういう死にたくさん出合うことになった。後年、新聞社の編集委員として高齢者の問題や、ひとの「生と死」のテーマに取り組み、アメリカやイギリスを中心に、ドイツ、カナダ、オーストラリアなど欧米各国のホスピスや医療現場を取材して、ホスピス哲学や新しい医療の理念を詳しく報道したのも、そうした体験が背景にあったためかもしれない。1990年ごろで、こうした問題の集中的なりポートは、わが国のマスコミとしては早い時期だった。

入院と自宅療養で中学校休学の2年間、私は家に閉じこもって、部屋の隅に積み上げられた父の蔵書を気が向くままに読んだ。夏目漱石全集や坪内逍遙訳のシェークスピア全集は、分からないものも含めて主な作品を大体読んだ。難解な漱石の大作『明暗』がなぜか好きで、ドラマチックな物語の展開に引き込まれるように読んだ。『吾輩は猫である』『虞美人草』『三四郎』『草枕』なども会話の面白さや話の筋の魅力にひかれて、分からないところは飛ばしながら愛読した。

トルストイの『復活』や徳富蘆花の『思い出の記』『不如帰(ほととぎす)』、河上肇の『第二貧乏物語』や『自叙伝』なども夢中になった本だ。とくに河上肇の文体が好きで、「河上二郎」というペンネームまでつくっ

たほどだ。

亡くなった父は、まだ東京にいたころから、子供たちに本を読み聞かせるのを楽しみにしていた。私たちの疎開後もひとり東京に残り、家族の疎開先に帰郷する際にはいつもみやげに本を買ってきて、よく読んでくれた。ヴィクトル・ユゴー著、豊島与志雄訳の『レ・ミゼラブル』の触りなどは、何度も聞かされて、そらんじられたほどだった。後年、イギリスの名プロデューサー、キャメロン・マッキントッシュ製作のミュージカル『レ・ミゼラブル』が世界中で上演されて話題になった時は、身内の出来事のようにうれしかった。私は取材先のニューヨーク・ブロードウェイやロンドンで舞台を見たが、その時私が、登場人物の悪漢テナルディエの仲間や革命派の青年の名前までよく知っているのに、同行者が驚いたほどだ。父の朗読のたまものだった。

漱石の『猫』や『虞美人草』、シートンの『動物記』やジャック・ロンドンの『ホワイト・ファンク(白い牙)』、大仏次郎の『赤穂浪士』なども、まず父の朗読で面白さを知った本だ。この朗読体験は、その後の私の本との関係を決定づけたように思う。

渋川中学校に復学した私は、2年年下の1年生のクラスに編入された。ここでその後も親しい交友の続く友人たちに出会う。思いつくままにあげてみると、劇団民芸の俳優稲垣隆史君や群馬大学医学部教授の鈴木庄亮君、東京・銀座で国際特許事務所を経営する弁理士の丸岡政彦君や小・中学校教諭だった南雲武男君、校長など東京の教育分野で活躍した青木優君や大谷武夫君、東京で個人タクシー運転手をする山口登志男君らがいる。かみそりのように繊細な秀才で早世した深堀洋二君や、早熟な文学青年で、破滅的に生き急いだ宮下優君らも忘れられない。

復学した中学1年生の教室で、休み時間にいつもオルガンを弾いている、おだやかな少年に出会った。稲垣君だった。私たちはいつか大の親友になった。2年年長の私は級友たちから「おじさん」というあだ名をもらったが、いつも一緒にいる彼は、「おばさん」と呼ばれた。私はよく彼の家に遊びに行っては、ピアノのある個室で、深夜まで話し込んだ。お母さんやお手伝いさんが紅茶やケーキを出してくれた。

彼は著名なピアニストの豊増昇氏に師事して、本格的にピアノを習っていた。しかし次第に演劇への欲求が募

り、武蔵野音大ピアノ科に合格したのに、家族に内緒で俳優養成所を受験して合格した。音楽をやめて俳優になる不安と期待を、私は近くの沼のほとりで聞いたものだ。

中学卒業間際に、もう一度病に倒れた私は、また1年休学して渋川高校に入学した。そこで赤城山西麓出身の永井英慈君や鳥山英二君を知った。永井君は衆院議員で民主党神奈川県総支部連合会代表をつとめる。鳥山君はテレビ東京のアナウンサーやキャスター、理事などで活躍していた。ほかに東京都中央区役所に勤務した元生徒会長長の松岡勇君らがいる。私たちは新聞部や文化部に所属し、稲垣君たちは演劇部にて、よく交流した。

永井君も鳥山君も落ち着いた印象の少年だった。永井君はそのころ、哲学者柳田謙十郎の著書などを愛読していて話が合い、よく論議したように思う。ふところが深く、ゆったりと歩く彼の雰囲気は、出身地・赤城山の大きな構えを連想させた。

2年前、永井君は自らの政治姿勢をまとめた著書『私の電車主義宣言』(プレジデント社)を出した。6年前の1994年以来、国会への登下院にはすべて電車を使い、自動車で行ったことは一度もないというのである。その一徹さには、庶民派議員という主張とともに、高校時代の面影が残る。

同書の後半で彼は、この時期の私たち、少年たちの交友を描いている。その文章の若々しい感受性に刺激されて、私はこれを書いている。これから先は、彼の一文の後追いである。

高校2年生の正月、私たちは赤城村の永井君宅に集まり、夕方から会食になった。例によって、哲学あり文学ありで、ロマンチックな夢を託した大議論が盛り上がった。彼のおかあさんは、高校生の会食にためらいもなく酒や肴を出してくれた。私たちは大いに酔い、ついに私は吐いて、恥ずかしいことに泣きはじめた。酒に慣れない若者の酔っ払い現象に過ぎないのだが、気持ちのどこかに、日ごろ感じている父亡き後の母の苦勞への思いがあって、それが突然込み上げてきたのだった。情けないくらいに涙が止まらなかった。おかあさんはいやな顔ひとつすることなく、吐いたものを片付けてくれた。彼の両親はじめ家族の静かな沈黙から、大人たちの大きな優しさを教えられたような気がする。懐かしい赤城山での一夜だった。

鈴木庄亮君との交友も長い。後年、彼が東京大学医学部保健学科助教授の時代、私は東京本社社会部で遊軍をしていて、遊びと取材を兼ねてよく本郷へ出かけた。ある時彼が、「大学院生の研究に記事になりそうな話がある」と教えてくれて、私はそれを社会面のトップに書いた。首都圏の団地をめぐる調査だったが、とたんに首都圏の支局から強い抗議がきた。その話題は支局管内の各社が、研究結果のまとまった時点で一斉に書こうと、地元で協定を結んでいたのだった。しかし朝日新聞に記事が載ったため、朝日の支局が抜け駆けをした形になってしまった。私は事情説明に支局に呼ばれ、その説明で、支局のえん罪は晴れた。支局には気の毒だったが、私も鈴木君も全く知らない次元での出来事だった。鈴木君のジャーナリスティックな感性の鋭さを示す挿話でもある。

最後に私の新聞記者時代の仕事について、二、三紹介させていただく。社会部遊軍時代には、『いま学校で』という当時話題になった教育問題の長期連載シリーズがあり、その「中学校編」の取材キャップを約2年、担当した。秋田支局長の時には、中部日本大地震と呼ばれる大地震があって、男鹿半島などで百人余りの人たちが津波に吞まれて死んだ。本社からの応援も加わり、すさまじい取材合戦だった。宇都宮支局長時代には、精神病院の看護人が患者二人を殴って死なせる事件があり、若い支局員を中心に約半年、調査報道取材をしてスクープした。1984年の「宇都宮病院事件」である。各社が一斉に後追いで、国会やジュネーブの国連人権小委員会などでも取り上げられ、ついに精神衛生法の改正にまでつながった、忘れられない取材だった。

編集委員の時には「こころ」のページを7年、編集長兼務で担当し、すでに触れた高齢者や「生と死」、ホスピスなどの問題を取り上げた。このテーマはいっそう重みを増しており、一種のライフワークとなってその後も執筆や講演などでかかわっている。

そしていま赤城山は、いよいよ身近な存在になった。私は大胡町に帰ると、赤城山麓にアトリエを持つ画家の東宮不二夫さんを訪ね、銅版画家の中林三恵さんや妻なども交え、一緒に荒山高原などを歩く。東宮さんは群馬の詩人、故東宮七男氏の次男で、第26回高橋元吉文化賞の受賞者だ。弟の哲哉氏は元読売新聞記者で、大学時代の親しい先輩である。ふるさとの象徴として仰いだ赤城

山は、こうして直接踏み込める身内のような存在となり、眼前に日々新しい顔を現して、力強く対峙している。

— オールド・シックスティーズ — ～カナダで唄いながら～

高校(全日制)9回卒 堀口靖之

渋川高校に入学してから46年になった。半世紀、直接間接にかかわってきた母校であり、関係を綴ることは私の人生のほとんどを語ることになる。範囲を学生時代の1960年代まで広げ、しかし歌にしぼって記してみるのも何かの参考になるかもしれないと思い、おぼろげな記憶をたどりつつ試みたい。

梅山先生時代は教科書の歌だけだった。3年間梅山先生を私は選択した。絵が不得意だったから。歌としては1953年くらいから小中高等学校テキストから小さなノートに書き写して自分の愛唱歌集を作って童謡と唱歌を歌っていた。当時ポケットに入る手ごろな愛唱歌集は売ってなかった。1955～6年以降に少々出回ってきてはいたが、中味がまだ物足りなかった。母は音楽好きだった。中学校の時に入ったボーイスカウトの歌は新鮮だった。母はそれを音符を見て歌ってくれた。「カッコが鳴くよ！」は母の声から覚えた。姉は大学のコーラスに入っていたので、時々ソ連・イタリアなど外国の新しい歌を渋川に持ってきてくれた。それらは耳新しく明るく聞こえた。歌声運動、うたごえ喫茶など懐かしく聞く方も多いだろう。

受験になって疎くなった。浪人中は謹慎であって、新しく覚えた歌はない。大学に合格して、晴れてレコードやラジオを聴き、歌の題名を初めて覚えたのが『南太平洋』だった。街にもラジオにもよく流れていた曲だが、歌の名前は知らなかった。魅惑の宵、バリハイは大変新鮮だった。後にカナダ留学したときに真っ先に楽譜を求めたのがこれだった。リチャード・ロジャースとオスカー・ハマースタイン2世のミュージカルシリーズの有名なナンバーである。

大学時代に京大男声合唱団に2～3年いた。作曲家多田武彦は先輩だったのでこのシリーズはよく歌った。白秋詩「柳川」のオランダ語、「月光とピエロ」など一部記憶にある。同期に文学部の鳥越俊太郎がいた。毎日新

聞からテレビ朝日に移りキャスターをまだやっている。大学時代は木曜会という街の混声合唱団に2年参加した。そこで習ったサリーマライズ(南アフリカの民謡)はフレデリック・フォーサイスのミステリ中に殺しの黒人が口ずさんでいた。それでその出自がわかった。

「夢であいましょう」の六八コンビが活躍していた。テレビはないからラジオで聞いていた。『こんにちは赤ちゃん』がはやり、また『見上げてごらん夜の星を』は拾った週刊誌の切れ端にあった譜面から読んで、工学実験しながら覚えた歌で忘れられない。九さんの声はその後聞いた。

カナダへ行くことになり、即製の英会話教室に3か月通った。教材として英語の歌が出て、それはむつかしくなく覚えられた。『My Bonnie』、『Michael』、『Row A Boat』、『Ashore』みなさんご存知の方が多いだろう。

1964年8月、横浜から貨客船ダント号(7000ト)で鹿島立ちした。そのころ外国行きは珍しく、1ドル360円、闇なら400円時代で外貨制限付きのころなので、家族親戚友人が船上まで見送りに来てくれた。何か別れの歌を合唱したが覚えていない。船出の時、米軍のトンキン湾爆撃事件が起こった。後から思えば、これがプロテストソングの素因だった。ミッドウェー、ハワイに寄り11日後、サンフランシスコに着いた。船中アメリカ人ジョンや小学校女先生ナンシーらとアメリカの歌を歌った。知っているのはフォスターくらいだった。彼らは歌ってはみたものの、そんな古くさいのと評価していなかったのが気になった。

ロサンゼルスのレストランの家を訪問した。高校生の娘が最近日本訪問から帰国したばかりであることが主な理由だった。こちらは言葉は不自由なので、向こうから歌が出た。『バラが咲いた』だった。驚いた。こっちはそれもしどろもどろだ。きれいなバラだった。メロディも歌詞もすばらしい歌だ、64年8月、アメリカで和製フォークソング第1号に出合った。浜口庫之助、作詞作曲の歌はそれからよく歌って楽しんだ。

カナダのオンタリオ州ウォータールー大学工学博士課程の生活が始まった。大学の歌は無かった。カレッジのソングも無かった。あるのは国歌だけで、それも演奏中起立して聴くだけで、声を出して斉唱はしなかった。カナダ国歌『オーカナダ』は英語とフランス語が正式だが、

意味が大変異なっているのが他国と違う。英式仏式と勝手に歌っている。

日本では高校にも大学にも校歌はあり、何か機会があれば、全員で声を上げて歌った。日本のロータリークラブは4種の歌を毎週会の冒頭に斉唱するが、北米ではそれもほとんど行わない。カナダでも何かあると初めに国歌を演奏するが、前述のようにハミングさえしない。脱帽して直立し静かに聞き入るのである。日本では校歌を歌えることが同窓生のおかしとしている面があり、歌でアイデンティティを維持しているといえよう。

飲み屋に関して、ウォータールーではパブが主流であり、たいていグラスのビールを飲むが、塩を入れて泡立ちを楽しみながら、つまみは全くなく雑談する。しかしここでは歌は禁じられていて、酔っても学生は大きな声を出さないし、出せば退店だ。皆の前で大きな声で歌わない。それが不思議だったし、物足りなかった。

大学寮生活で歌に関する持ち物は、車のラジオしかない生活であった。テープが出てきたのは大分後になってからである。音はラジオとLPそれに映画しかない。ラジオの音楽番組の曲名は全く聞き取れない。何曲か続けて早口で小さく言うものだから困った。日本の方が親切で、歌の作詞作曲ははっきり言ってくれる。DJは留学生泣かせである。流れる音楽はロック、ジャズなどテンポの早い成人用曲だ。だから訛りでもぐもぐする早口歌詞はわかるはずがなかった。楽器屋へ行って楽譜の注文をし始めた。日本で知っていたミュージカルからである。『オクラホマ』、『南太平洋』などから買っていった。

メノナイトの経営するコンラッド・グレーベル・カレッジ(CGC)は4年間生活したところだ。プロテスタント再洗礼派の一派でありそのもっとも保守的な派が有名なアーミッシュである。アーミッシュは文明の利器を拒否し、馬車を用い、学校も自前で持つ、保守的で一部では徴兵も忌避する信仰厚い宗派である。ドイツ系が多い。

そのラウンジから行ったすぐ後、『上を向いて歩こう』が流れてきた。日本では東京オリンピックが行われており、夜中に起きてフェーディングの衛星画面を見た。坂本九のこの曲は『スキヤキソング』で北米で有名になりつつあった。

当時『Try to remember』が流行っていた。英語がわかりやすくメロディがゆっくり、しかもセンチメンタル

なので私は大好きだった。この歌を口ずさみながら車を運転し、車中からカナダの広い広い紅葉を楽しんだ。

カレッジは2人1部屋だ。ウニベグのエリックには、レコードを買ってきた時に彼に聞いてもらい、歌詞を書いてももらった。歌詞がついてないのはレコード時代からの話で、今も輸入のCDにも歌詞がつかないので不便だ。エリックに何回も聞いてもらってもわからないところがあつた。トロントのHarry Belafonteの音楽会には友達とダブルデートで出かけた。私はジャッキー・バイザウェイだ。帰りは夜1時になるが、窓に石をぶつけて友人に中から開けてもらうのは玄関キーをまだもらえない1・2年生だ。

ベラホントの歌詞が欲しくて作ってもらったが、こちらの学生も一部間違えるくらい歌詞はむつかしいことがあるらしい。

CGCに入ってコーラス部に参加した。もちろん混声である。歌に英語は不要と思ったからだ。発声練習はドレミは全く用いなかったが、半分は同じだったので付いて行けた。しかし本番になると、譜面から初見で練習を始めた。ドレミをパスして、言葉をつけてパートに分かれてミサ曲を始める。とても付いて行けず諦めた。初見でスタートするコーラスはやはりカナダだからなのか、と感心したが当たっているのだろうか。

11月末12月になると1日中クリスマス曲になる。家の外飾りも月初めに終わり、ライトアップされてきれいになる。流れるものは聞き慣れた『きよしこの夜』、『ジングルベル』、『もろびとこぞりて』などなど日本でおなじみの曲のほか、初めての良い曲がいくつかあつた。『ルドルフ』、『リトルドラマーボーイ』。その他にもあつて歌詞を書いてもらって覚えた。いつまでも心に残る曲である。いまではその曲を日本でも聞くようになったが、当時は国内では一部にしか普及していなかったと感ずる。学生はギターで伴奏をよく歌った。北米では、楽器はギターが主である。ギターの音は落ち着く。低音がよく、大陸的でせわしくないのがよい。

教会の歌について一言述べたい。私の誕生日に友人のマーク・バンダー(数学修士)の家に元旦に泊めてもらった。ヒュウロン湖畔ズリック村だ。納屋で牛を飼う敬けんで典型的な農家で、両親ともに田舎の夫婦の風采だった。夕べの食事後の語らいの中で歌が出てきた。そし

たらそれが良くできた二部合唱だった。彼の兄弟姉妹と7人の二部コーラスとなり、私は西洋音楽の彼らへの浸透のしかたが群馬と違い、深く血となり肉となっているものを感じた。

Folk Songsは、日本とカナダ・アメリカと大分違っていた。歌はアメリカとカナダは一部違いがあるだけで大部分同じである。ケベックを除けば。物語調の、それこそ民謡フォークソングといったところで、歌の途中よく笑って朗らかにやっていた。日本では歌に笑いが入ることは考えたことがなかった。歌詞を読まないかわからないが、見ても文章からは笑う雰囲気は私は感じられなかった。私は彼らと悲しみ笑いが少し相違すると思わざるをえない。劇でも講演でも笑う箇所が異なることがよくあるというが、わたくしもなんども経験した。文化の違いと簡単に片付けてはいけない。昔から伝わっているソング、それはイギリスもスコットランドやアイルランド、アメリカ、ケベックからも英語および英語周辺国民のすべての民謡を受けついでいるので沢山種類が多く、曲がヴァリエティに富んでいる。歴史の古いものも少なくない。日本よりも恵まれている。カナダではフランス系の中に良い歌がもちろんある。『UN CANADIAN ERRANT (Once a Canadian Lad)』。1837年ごろの古い歌。ごく簡単に歌いやすく物寂しい曲だが、私はカナダに行ったら私の唯一のフレンチカナディアン歌として大事にしている。

66年になるとプロテストソングが学内外を問わず、カナダにも聞かれるようになった。初めはジョン・パエズである。「Voice, cool as rippling water, clear as a mountain stream (さざ波の水のように涼しく 山のせせらぎのように透き通っている声)」にうっとりしたのが昨日のようによみがえる。カナダにもヴェトナム戦争の影が押し寄せて、キャンパスにはアメリカからドラフトドジャーズ(徴兵忌避学生)が彼と彼がそうだと囁かれる時がきた。ボブ・ディランの『風に吹かれて (Blowing in the wind)』、また、『ウィシャルオーバーカム』などは一般的で内容もわかるし、歌いやすく好きなのでよく歌った。その直後から我が国でもよく歌われた。

最後になるが、私のカナダの一番好きなカナダらしい歌は『フォー ストロング ウィンズ (Four strong winds)』、イアン・タイソン作詞作曲で1963年ころのものである。ブラザーズ・フォーのナンバーに入っている。

英語に一部むつかしいところがあるが、覚えて歌えばプレイリーが浮かびカナダの境地に入ることに請け合いである。沖縄の例で言えば「芭蕉布」に相当する。

―― バレーボール部関東大会初出場 ――

高校(全日制)9回卒 飯野和建

狩野幸弘の打ったセカンドサーブ。ドライブのかかったボールがネットすれすれ、あわやネットインかと。次の瞬間、相手チーム高商のHC前に、ボトンと落ちた。主審の手が洪高ポイントを指している。

昭和30年5月、前橋敷島県営コート(当時は、現在と違って屋外コートでの試合が主流であった。)関東高校大会県予選会準決勝戦、ストレートで高商を破り、藤井清司監督率いる洪高の関東大会初出場が決まった。

今でも当時のことが、強烈に脳裏に残っている(上位4チームが出場)。

当時県内高校男子は、高商、前商、桐工、前高が四強で、内でも高商はその頂点にいた。

夢のような一瞬であった。決勝戦は、前商で、22対20、21対18で惜しくも敗れた。当時の監督藤井先生は、旧制洪中、群馬大学を卒業後、昭和28年4月母校洪高に就職し、若さと、情熱で、後輩生徒のわれわれの指導に当たり、その最初の成果であった。

当時も普通高校は学業優先で、運動部には理解が薄かった。そこへ県下実業高校の雄を破っての準優勝、全校挙げて祝福してくれた。それを実感したのが、10円カンパであった。部の予算はわずかで県外遠征(会場は東京)は大変であった。それを察して生徒会が、臨時総会を開催し、ひとり10円カンパを議決してくれたのである。(生徒数790余人)。喜びと同時に“好成績を”と、責任を感じたものだ。このような状況のため宿舎は、当時公仕の番場さんの世話で、東京五反田の天理教教会の寮にお世話になった。

朝5時ごろからの信者の方のお勤めが始まりゆっくり寝られなかったこと、練習に借りた近くの小学校の校庭が、舗装されていたので驚いたことを記憶している。

試合会場は、現在の小石川運動場(東京オリンピックサッカー会場)で、今は立派な施設であるが、当時は整

地も満足にされていないグラウンドに移動ポールを立てた仮設コートという状態であったが、われわれは、初の県外試合で胸をおどらせたものだ。

一回戦は埼玉県代表の春日部高校、初出場の田舎チーム、何も分からないというのは怖いもの、2対0のストレート勝ち。

試合が終わってから相手は関東の名門チームとわかり、驚いたり、喜んだり。二回戦で敗退したが、初戦を勝利したことで協力してくれた、全校生徒の皆には、むくいることが出来たと思った。全力をつくした結果だったので満足感と感動が残った。

洪高バレーボール部黄金時代の幕開けで、その後数年にわたり関東大会出場をはたしている。仲間と高校時代練習に明け暮れた、青春時代の良き思い出である。

当時の出場メンバー。

監督藤井清司、主将HC井上重吉、FL狩野幸弘、BL松岡二郎、BR小枝裕一、HR登坂剛宣、高橋英男、(3年)

FC反町貞昱、FR飯野和建、HL須永育英、BC阿部博行、今井茂、丸岡 武、(2年)、斉藤邦彦(1年)。

―― 洪高夢工房 ――

高校(全日制)10回卒 柴田精司

師そして友

ロング・ニコチン・パチ・トラ・熊・ギャング・タイガー・トッチン・オイセ……。これらは、昭和33年3月に卒業したわれら悪童連が敬愛の念をもって口にした先生方のニックネームである。いっばしの文学青年きどりであった私の、かなり脚色された“悩み事”に真剣に対応して下さった3年担任のギャング。どうしようもなかったであろう私の詩や文章に毎回朱をいれ、励まして下さった文芸部顧問の熊。私が高校の国語の教師になる契機となった、3年間連続して国語を教えていただいたタイガーの、学究的で迫力ある授業。「尾瀬に行ったこともないだろう君たちのために、私は罪人になった」と言って、大事そうに抱えてきた新聞紙の包みを解いて、小さな水芭蕉を見せて下さった生物のパチ。それぞれ個性的人間味のあるすばらしい先生方に恵まれた高校生

活であった。

40代前半のころ、洪高の同級生がよく私のところに泣きに来た。妻のこと、子のこと、父母のこと。男でも、女でも40代はつらい年代だ。家庭的にも社会的にも、時に崩れそうになる自分を励まして、何くわぬ顔してじっと立っていなければならないことがある。そんな時、自分の恥部をさらけ出して泣きに行ける友がいるのは心強い。卒業後40年を越えて家族ぐるみでつきあっているそんな友人が、私には5人いる。農家のH・県職のY・電器屋のI・高校教師のSとM。これまで私の人生を支え、励まし、慰め続けてくれたのはこの友人たちである。みんな、夜を徹し、口角泡を飛ばして、文学を、恋を、人生を青くさくも熱っぽくも語り合った洪高文芸部時代の友人である。この友を得なかったら、私の人生はどんなに淋しく、無味乾燥なものであったろうか。思うだにゾットとする。

この友人たちとの酒宴は、恩師の多少誇張されたエピソードを肴に(失礼!)、“自由の子、民主の民ぞ、われら生く若き命を”の母校の校歌で終わるのが常であった。酒精に冒された頭に、その歌声は、戦後の新しい時代への熱気と、時に自由を圧殺しようとする有象無象の権力にたいする抵抗と、時代を共有した者同士の連帯の……青春の賛歌のように響いてくる。私にとって洪高は、すばらしい先生方に導かれて人生の青写真を作成した夢工房であり、かけがえのない友人たちと巡り逢った“友情の城”(少しキザかな)である。耳朶に残響する“自由の子”は、還暦を過ぎた今でも抵抗と自省と挑戦の青春に私を駆り立てていく。

教え子Kのこと

昭和59年2月18日、京都は雪。南禅寺山門を背景に、私が担任した洪川高校2年5組の修学旅行記念写真に雪が舞っている。左手に松葉杖を持つKの顔が笑っている。

Kが群大病院で骨肉腫のため左膝上18cmの部位で切開手術を受けたのは、昭和58年12月5日。前夜私のもとに「同情の言葉はことわる。生きるための僕の決断を誉めて欲しい。クラスのみんなには修学旅行などでお世話になると思うから、これからの僕に力を貸して欲しい。当分は痛みになりながらみっともない姿をさらすことになるだろうから、見舞いはしばらくの間謝絶したい」旨

の電話があった。すでに11月8日から入院していたので、授業ノート・見舞いグループ等のできあがっていた支援態勢を再確認し強化すること、2月16日からの修学旅行には本人が希望するかぎり背負ってでも連れて行こうということなどを生徒たちがホームルームで確かめあった。

19日の嵯峨野は雪の里。15日に退院して16日の修学旅行列車に新しい義足をつけ、松葉杖と一緒に乗ったKも懸命に歩いていた。Kの父は医師の助言もあって、嫌がる息子に困惑しながら見え隠れに旅行団に同行していた。仏野念佛寺・祇王寺・落柿舎・野々宮神社などを見学して、嵯峨野巡りの帰着点天龍寺に着いた時にはKのもうひとつのスニーカーもぐっしり濡れ、まだ馴染むはずのない義足との接合部分は血を滴らせていた。宿にKと父のために小さな部屋を特別に用意したが、「できるだけ他の迷惑にならないようにするから皆と一緒に歩いてくれ」と言ってKは断固として父との同室を承知しなかった。そして最終日までの全旅程をKは級友と寝食を共にした。医師の判断、両親の願い、本人の意志、校長の理解、クラスの生徒の熱意があって行を共にしたが、担任としては帰着後が心配された。疲労はあるものの、旅行による病状の進展は認められないとの診断を得てはと胸をなでおろした。

暑い日であった。卒業した年の盆の16日、Kはこの世を去った。「お前を背負ってでもと考えたのは俺たちの思い上がりであった。俺たちはお前によって強く結ばれ、お前によって真剣に生きることの何たるか教えられた。お礼をいうのは俺たちの方だ」とクラスの仲間が弔辞を結んだ。教師として幾度か若い命の不幸に遭遇しなければならなかったが、Kのことを思う時、私の胸に今でも深い悲しみと共に、何かさわやかな風の通ってくるのを感じる。雪の古都、南禅寺山門、Kの笑顔、忘れ得ぬ母校の教え子たちとの旅である。

先輩古川功先生のこと

延べ8高校37年間の国語の教師生活の中で、私に大きな影響を与えてくださったのは、平成10年7月14日に逝かれた洪高の先輩 古川功先生である。

昭和50年4月、36歳、沼女から洪高転勤。母校洪高、国語の指導主事として事務局に転出された樽井哲先生の後任。古典輪読会もやり厳しい作問検討会を経て共通試

験問題を作るという洪高国語科。36歳といえば、世間的には教師として油ののり切った世代と目されるのだろうが、その時の私はまるで初任者のような緊張と不安をかかえて赴任した。当時の洪高は、教科も学年担任団も原則的には持ち上がり方式をとっていたこともあって、古川先生と組ませてもらうことが多かった。古川先生は気配りと思いやりの人であったが、こと国語のこと、生徒指導にかかわること、職員間の和にかかわることについては歯に衣を着せぬ直言の人でもあった。

試験問題は分担部分をすべてオリジナルで作成し、1週間前に解答も添えて持ち寄り検討するという申し合わせであった。他教科の先生方からまるで査問会のようなと言われた峻烈をきわめる検討会であった。多忙にことよせて少しでもいいかげんな作問をするとすぐに見破られ「この問いで、この解答を求めるのはムリだ。ここを問うなら、作品全体からして別の所を問うべきだ。発問そのものが曖昧で、意味が多様にとれてしまう、生徒に気の毒だ、もう一度作り直した方がいい」と指摘され、悔しい思いで持ち帰ったことも何度かあった。ある検討会で、私の出題した古文の助動詞の用法について、古川先生が「ゴメンこの問題は差し替えてくれ。生徒に間違えて教えてしまった。言われてみればそのとおりだ、生徒には授業で訂正するから、申し訳ないが引っ込めてくれ」と言われたことがあった。ほかの問題に差し替えたのはもちろんだが、私はその一言を聞いて、生徒のためには後輩の前でも自分の非を認める潔さに打たれ、この先生なら虚心に何でも相談できると思った。以来20有余年、古川先生は私の教師生活の半分以上にかかわり、デキの悪い弟に対する兄のように接してくれた。洪高の教え子の中から、多くの高校国語教師を出せたのも先生のおかげである。今、古川先生の不在感は埋めようもなく深く大きい。日常に狎れとかく惰性的になりがちだった教師生活の真ん中で、母校の先輩古川先生に巡り合えたことを神に感謝するばかりである。

おわりに

私は、平成11年3月沼女退職後、縁あって渋川市折原にある「群馬ガラス工芸美術館」に勤めることになった。7月のある日、洪高3年時の担任のギャングこと狩野博一先生が奥様とご一緒に美術館に来てくださった。ご覧

いただいた後、雑木林の見渡せる館のベランダでお茶をさしあげ、お話を伺う楽しい時が持てた。お帰りの時、先生は再度館内に立ち戻られ、そこに居合わせた孫のような20代の女性館員たちに「柴田先生のことよろしくお願ひします。」と頭をさげられた。館員たちはとっさには意味が飲み込めずどっちつかずのあいさつを返していたが、私には涙が出るほどありがたくもったいないお言葉であった。先生には長野原と沼女で教師としてお仕えし、ご薫陶をいただいた。私にとって先生は、母校の大先輩であり、恩師であり、人生の先達である。先生にとって私は、いつまでも心配の絶えない教え子である。

師・先輩・友・教え子、母校が私に与えてくれたものは私の人生の重要な大部分である。そしてまた、豚児2人、父子3人が洪高に学べたのも望外の幸せであった。わが青春の夢工房、洪高高校よ永遠なれ。感謝。

—— 歴史の転換点にあたって ——

高校（全日制）11回卒 入 澤 肇



21世紀を目前に控え、第2次大戦直後の世界中をおおった「不安」の概念とはまた違った意味での「不安感」が、世間一般をおおっているようである。戦後の不安は大戦争を終了した後の虚無的な感覚の中で実感されたものであるが、現在の不安は、物質的に満ち足りている中、地球的規模での環境破壊等を通じた人類生存への不安である。（昨今の不景気もこの風潮に寄与しているかもしれない）

特に日本は、戦後一本調子で発展してきた。「末は博士か大臣か」ではないが、官僚による支配体制の下、有名校への執着、会社における年功序列、資本主義体制を支える会社の大小による序列意識等々……。国全体がしなやかに発展し、市場が拡大し、国民の欲望、要望が曲がりなりにも端的に実現してきた時代は、これらのこともそれなりの評価を得てきたことも事実である。しかし、少子高齢化が一挙に進み日本一国の閉鎖的価値体系が崩れ、否定され、グローバリズムの旗の下に社会基盤が大きく変貌しようとしている今日、一体、我が国はどこへ

行こうとしているのか、心配の種は尽きない。

国会議員になって行政官の時以上に鮮烈に国の内外の変化を感じると同時に、それに対応しようとして、国全体がもがき苦しんでいる局面が見えるようになった。明治以来の日本の官僚制度は、戦後しばらくの間は国家目標がしっかりしていたためか、有効に機能していた。五十有余年を経た今日、誠に歴史の法則どおりに腐敗し、かつ無責任極まりないシステムと化しつつあるということを実感している。まさに、社会・経済全般にわたって、官主導から民主主導のシステムに変えることを基本に構造改革を急げ！——言葉を変えて言えば、民主革命を断行せよ、ということが叫ばれるゆえんである。

このような状況下で、これから社会へ出ようとする後輩諸兄にとって大事なことは何か、列挙してみると、1. 学生時代は、基礎学力をしっかり身につけること。2. 学科の中でも「自然科学」は言うに及ばず、「歴史」と「語学」をしっかり勉強すること。3. 何でもよい、「プロフェッショナル」な知識、能力を会得すべく努力すること。4. いたずらに有名校を志向することなく自分なりの生き方をしっかり身につけること。そのため伝統的、固定的な社会システムに拘わることなく、どんな道でもそれなりの存在理由があることを認識するよう努めることなどであると思う。

世の中は、これから大きく変わる。今まで価値の高かったものも、歴史の激しい変化の中でその価値が失せてゆくこともある。大事なことは、「本物」と「偽物」つまり万古不易なものか否かを識別する能力をしっかりと養うことなのだ。

21世紀の日本の進路は、このような努力を重ねる若人によってこそ開かれる、ということをはっきりと認識することが重要である。

—— 洪高時代の思い出 ——

高校（全日制）11回卒 石 坂 文 雄

洪高創立80周年おめでとうございます。私は昭和34年渋川高校を巣立った者ですが、当時の学舎はまだ木造で何か気持ちの落ちつく感じがしました。

戦後の復興をなすとげ、日本はこれから経済成長に向

かう初期にあった時でした。

また当時は消費財の三種の神器とよばれた電化製品(冷蔵庫、テレビ、洗濯機)が世に出まわり始めたころであったと思います。

国家の外交面ではロシアとの国交を樹立し、一人前の国として国際舞台への基礎を築き上げた時でもありました。

高校に入学してみると、中学時代と違って北毛各町村から通学してくるので、朝の登校時は大変にぎやかな光景が見られました。

吾妻方面からの電車通学、近村からの自転車通学、バス通学等がありました。私は市内からの徒歩通学でしたので、その点では大変楽でした。いつも近所の三人の友人と誘い合って通学しました。

昭和30年代前半のころ、渋高の様子を私の知る限りビデオ撮りのように回想してみたいと思います。

東側の正門を入ると、右側に木造2階建て校舎があり、1階東側に図書室、その隣に医務室があって、当時萩原さんという女性職員が担当しておりました。2階は畳敷きの大広間になっていて、運動部の合宿などに使用していたように思います。校舎の前にはテニスコートがあり、さらに奥に進んで右に折れると本校舎の玄関になっていて、玄関に入って左側に職員室がありました。その前に

廊下をはさんで売店があり、昼時はパンや牛乳を買い求めに人だかりが出来、太ったおばさんもなつかしく思い出されます。廊下を真っすぐ西へいくと体育館につきあたり、われわれの在学中に渋川市立工業高校の第1回生が校舎の完成がまにあわず、この体育館で仮教室を造って、半年程勉強していたのを、思い出します。

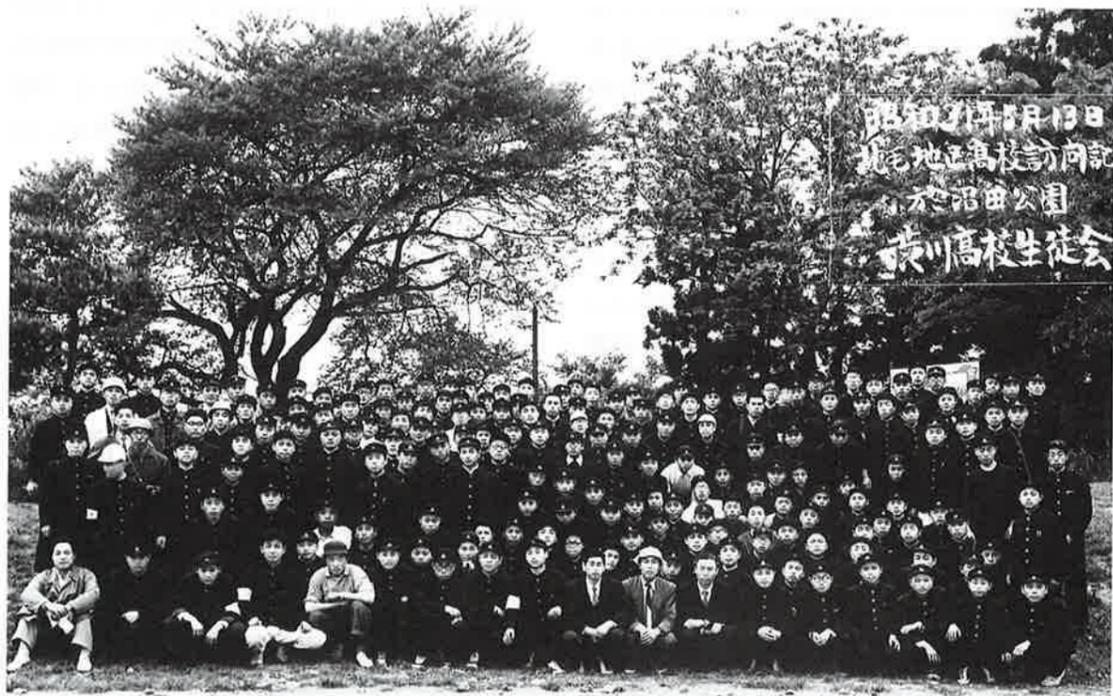
本校舎の北側に、渡り廊下をはさんで、モルタル二階建ての校舎が建っておりました。

一階東側には化学室があり、実験用の大きな机が並んでおり、私たち1年D組はこの二階でした。校庭は広く運動するには十分で、その片隅に堅固なコンクリートの校舎があり、音楽室では梅山先生という長身でスマートの先生に教えていただいた記憶があります。

校庭西側の隅にも門があり、伊香保や市内西部方面からの生徒たちが出入りしておりました。校庭の周囲には桜の木が沢山植えてあり、満開時にはすばらしい花見ができました。校庭から出て北へ行くと、校歌に歌われているように、悠々と大利根の清流を、西側には水沢山がそびえ、周囲の自然の恩恵は大なるものがありました。

高校時代の思い出としては何とんでも先生方の個性ある授業風景であろうと思います。

ここで印象に残ったいくつかを紹介したいと思います。



私の入学した年の校長先生は狩野道美先生、背が高く、スマートな英国型紳士という感じでした。入学式の挨拶の中で開口一番、我が校から大学へ何名入学できましたと誇らしくスピーチしたのが印象的でした。

次に井関保先生に変わりましたが、井関校長もどっしりとした重厚な感じが致しました。

世界史の小川先生、授業の始めから終わりまで黒板いっぱい内容を書きながら生徒は筆記していくのが精いっぱい、しかし筆記しながら頭に記憶されていくような授業でした。

数学の登坂先生、とにかく黒板に丁寧に図表を書く。図表のX軸、Y軸に矢印をつけて解答の図表が完成した時の御満悦の表情は今でも忘れられません。

英語の後藤先生、かなりの老齢であられたが、その発音とイントネーションが面白く、「ドンキエ」の発音などは今も時々口に出るほどです。

生物学の岸先生、老齢であられましたが、授業中の話ぶりはおだやかで、生徒を指名する指先は独特の重みがありました。目をぱちぱちとまばたきするところからかパチというあだ名がついておりました。

高校時代の行事として一番人気のあったのは、京都・奈良の修学旅行でした。

これまで関西方面の旅行の経験のない者にとっては、古い日本の文化にふれて古都の情緒をたっぷり味わうことが出来ました。

また生徒会主催の沼田公園への自転車旅行があり、総勢150人くらいいたでしょうか、渋高校庭より延々と列を組み持ち村沼田公園へ着いた時には息たえだえでした。

公園での記念写真を見ると、今でもなつかしく思い出されます。他の高校でも身体の耐久レースのような行事が、いろいろな形で催されますが、これも年をとってからの思い出としてはとても印象深いのではないのでしょうか。

高校時代は人生の歩みの多感な時代であり、子供の世界から大人の世界への好奇心があいまじり、その点では青春の一番大切な時でもあります。この青年期には自分の一生の過ごし方を決定するファクターをもっているわけですから、したがってゆっくり人生というものを思索する時間をもっとほしかったと思います。受験の試験試験に追われ通して、ゆっくりとした読書なり思索なりを

すべき時間が少なかった。そういう意味では戦後の新制高校学年制よりも、戦前の旧制高校教育制度の方がよかったような気がします。

デカンショデカンショで半年暮らすほどの余裕があって、友と語り合い読書、スポーツと、試験競争でない心の余裕教育を選択できたなら、もっと有意義に学校生活を過ごせたかとも思っております。

またこの青春時代の勉強のカリキュラムも、戦後教育は英数に偏重すぎて、その年代が今、日本の指導者層を形成している昨今を見ても官僚腐敗、学級崩壊等の現象、オウムの宗教家を見ても、何か戦後与えられた教育課目に不足があるような気がしてなりません。

私はそれは漢文の授業不足ではないかと思っております。上下の規律、徳の涵養、礼節を尊ぶ等を教える唯一の科目は国漢の授業ではないかと思えます。年輩の方々の学生時代の懐旧談を読んでも、漢文の先生に人間的影響を受けたと述べています。戦後の教科の中では人間の生き方を教えてくれない。今後高校生活を送られ、21世紀を担われる皆さんには教科書以外の書物を多読することを望みたいと思います。

ふりかえっていろいろと願望を述べましたが、質実剛健、文武両道をモットーとする渋高の校風は実によかったと思います。受験校の部類に所属したのでしょうか、私たちの時代でも運動部が県内で強いという部はなかったように記憶しますが、高校時代のスポーツは大変重要なものであり強化すべきであると思います。是非いつか渋高野球部が甲子園出場をはたす日が来ることを期待したい。

全日制11回生として昭和31年から昭和34年までお世話になった渋高時代を回想して、楽しい3年間を過ごさせていただき、感謝いたしております。

思 出

高校（全日制）13回卒 角 田 登



高校受験を控え、兄が卒業したので、当然渋川高校を志望しました。合格発表で自分の番号を見付け友達と大喜びし、憧れの校門をくぐったのが、42年前の昭和33年でした。1クラス50名。A～Eの5クラスで

した。

同時に、現在の渋川工業高校が渋川市立高校として開校したので、1期生は、同期となります。まだ、校舎も落成せず、渋高の体育館を間仕切りしスタートしました。

もちろん母校も木造校舎で、前の教室がコンクリート校舎でした。当時は渋川北中もなく、学校の裏から田圃と畑で、写生に行つて、タバコまで習った友人が、先生に見つかり停学になりました。

通学は、下駄をはき、学生服。手提げカバンをやっと買ってもらいました。

終戦後13年、高度経済成長の前で、経済的には豊かではありませんでしたが、将来への大きな夢と希望がいっぱいで、心は豊かでした。

敷島駅より列車で通学しました。電車ではなく電気機関車の列車で、1番前に乗り、発車すると電気機関車に乗り移るなど、大変危険でした。

入学後、たちまち親しい友人ができました。担任の中村先生は結婚したばかりの新婚ホヤホヤで、当時の流行歌「おーい中村君」を全員で大合唱。

開校記念全校マラソン大会は、渋高→渋川郵便局（当時）→四ツ角→阿久津→金井→（心臓破りの丘）→矢の頭→渋高のコースでした。順位は記憶がありません。

この全校マラソン大会に参加し、市民の皆さんの声援を受け、渋高生になった事を実感しました。正月の水沢山登山。修学旅行は、伊勢湾台風のため、コースの変更で、伊勢は中止となり、京都・奈良だけとなりました。

先輩の活躍ぶりに大学への進学を意識し、受験勉強を始めました。

いまは亡き地理の茂木先生、漢文の長尾先生、英語の後藤修治郎先生をはじめ多くの先生や高校時代の恩師や

同級生が走馬燈のように浮かんできます。

早大時代や、就職した埼玉銀行でも、渋高を卒業した誇りや精神を決して忘れはしませんでした。

帰郷後、昭和54年、県議会議員に当選しました。恩師の針塚先生や、唐沢先生又多くの先生が管理職として活躍されていました。昭和61年、文教治安常任委員長の時、副委員長が大林先輩、県教育委員長が佐藤直氏でした。群馬県の教育行政は渋高が中心だとも言われました。委員会の最初の視察先は渋高を選定しました。英語の石北富雄先生が、県教委の企画室長で、委員会の答弁の時「石北先生」と指せず「企画室長」と指し、答弁を求め、委員会終了後、先生に謝りに行ったら、同席の執行部の職員も大笑いをしたのが昨日のように思われます。

思い出ではありませんが、一つだけ残念なことがあります。それは狭い校庭のことであります。開校当時と殆ど同面積であります。スポーツの多種多様ななかで、他の運動部の心配なく活動ができる面積が必要なのですが、現状では拡張は全く不可能であります。広い校庭を得るために、新天地に移るチャンスが2回ありました。母校が移転することは、なつかしい郷愁のため、心情的には、賛成できかねないのですが、母校の後輩のため、発展のための教育環境の整備には、協力をしなければなりません。他の伝統校は、時代に合わせた移転の歴史であり、それに合わせて発展しています。

20世紀は物質文明、21世紀は精神文化の時代です。「質実剛健」、「堅忍持久」の渋高精神の時代であります。後輩の皆さん頑張って下さい。

母校渋川高校の益々の発展をお祈り申し上げます。

● 恩師との出会い 皆どこかでつながっていた 担任、副担任、科目の先生（忘れられない人々） ●

高校（全日制）15回卒 大 谷 勝 海

今から見れば、のんびりとした時代でした。利根川で水泳をしたり、渋高の北側にはグミがなっていて休み時間に取って食べたり、受験受験と言うような時代でもありませんでした。新幹線などまだなく、修学旅行も夜行列車で行きました。

現在の金融崩壊、リストラ、失業の拡大、お金を貸す方も借りるほうも先の見えない時代、日本経済の成長か

ら衰退を肌で感じているのがちょうど我々の世代です。物と金が先行しすぎました。もっと心にゆとりと休息が必要であったと思います。急ぎすぎでした。価値観が入れ替わる時代に突入しています。そんな時代から見ると昭和35年から38年は穏やかな時代でした。

楽しかった学生時代、充実した学園生活、それは同級生となる仲間との出会いもありますが、恩師との出会いも人生にとって大きなウエートを持ち、影響をあたえます。思い出しながらペンをすすめます。

一年の担任は狩野博一先生でした、化学の先生で大変お世話になりました。最近、歯科医院でお会いしたら昭和38年卒の私たちが先生の渋高、最後の生徒と話してました。私が倒れたこと（軽い脳卒中）を御存知で「大丈夫かまだ若いんだから健康に注意しろ」と言ってくださいました。素直に「ハイ」と答えました。学生時代、家に帰ると、親のポマードを頭に付けて色ズボンをはいて、渋川駅の方へ行って仲間とたむろしてました。心配した祖母が狩野先生に電話をして家に来てもらいました。そんな事は全然気付かずに家に戻ると狩野先生がおられるのです。頭はポマード、色ズボン、申し開きできません。柔道のように教育的指導、嚴重注意、長い時間に感じました。学生時代に心配をおかけし54歳になっても心配していただき、世の中で私が頭の上から先生の一入です。

それは英語の授業でした。後藤修次郎先生が我がクラスに来られて、お手本として英語を読みあげます。席順表を片手に「佐藤」と指名すると「わかりません」と言います。「金井」即座に「わかりません」「椛沢」「わかりません」さすが紳士のような先生が怒りました。

「安易に問題を放棄するな、考える事をしなさい」少し時間を置きました。すると「大谷」と私の名前が呼ばれました。

「少しは考えろ」と言われても元々荷物が入っていない倉庫と同じで、なかみはなしの私の頭少し考えるふりをして「やはりわかりません」と答えると、ちょっと雰囲気違うのです。

先生「大谷、家はどこだ」

私「渋川市辰巳町です」

ちょっと間を置いて、

先生「大谷正美を知ってるか」

私「私の父です」

後藤先生は急にニコニコして「座ってよろしい」と言いました。「なんだ、それは大谷はなぜ怒られねんだ」、「エコひいさだ」友達が騒ぎだしました。でも後藤先生は私の顔を見て、ニコニコしていました。私は原因がわかりました。先生は私の父と旧制渋川中学の同級生だったからです（渋高在職の島田要先生、狩野悠先生は私と同期です。やはり息子が教わりました。それと同じ状態、歴史はくり返しています）。

子供のころから先生はすごい秀才と父から聞いていました。うちの親とは月とスッポン、それが証拠に一度も父から成績のことで怒られたことがない。先生も大谷には荷が重いと判断したのでしょうか、だから「座れ」と言ったのです。鈍才の親でも役に立ちます。今は故人となってしまった思いやりのある先生にそんな思い出が残っています。

高校2年の時の担任は中澤一郎先生でした。高2の担任は誰になるか、我々には最重要問題です。

なぜなら高2は修学旅行があるからです。解放感を味わうめったにない機会、こわい先生が担任になるとすべての夢が消し飛んでしまうからです。ですからやさしい先生を……。

今日から2年というとき、まず生徒のクラスが先にわかります。我々はC組となりまして、次は担任発表A、B、「C組中澤一郎先生」「ワーワー万歳、万歳」手を取り合って握手「やったー」とか「ラッキーハッピー」等の言葉もなくただ騒いでいました。ところが中澤先生は何故生徒が騒ぐのか最後まで理解出来なかったようです。

おかげさまで良い思い出の旅行が出来ました。生徒というのは、小犬のように、こわい、やさしいを嗅ぎ分けてしまうのです。最近近くの幼稚園に中澤先生がお孫さんを迎えにきます。きっとやさしいお爺ちゃんになってお孫さんも幸福だと思います。

高校3年になって、担任 高宮正夫先生、副担任は早稲田を出たばかりの山出修司先生、我々と年がいくつも違わないので、先生と言うより、兄貴という感じでした。

町で偶然、会って新星座の近くで意外と若者に人気のあった「鈴屋」で焼きソバをごちそうしてくれました。

現金なもので、われわれは「なかなか見込みがあるよ、ヤマイデは」と評価上昇、そのころは影で先生のことセ

ンコーなんて言わずに名前かあだ名で呼んでいました。焼きソバのお礼ではないけれど先生は、私の家から100分くらい先の所に下宿していました。花の独身、一人住まい誰にも気がねがないから、よく遊びにいきました。遊びに行くけれど、ただちょっと欠点がありまして、それは部屋が散らかっていることです。

それはなまじっかな、散らかりではなく、NATO軍が空爆してからミサイル打ち込み銃を乱射した現場と表現しても言い過ぎでなく、座る所を確保するのに時間が必要でした。そんな独身の先生に私の母が縁談を持って行きました。数カ月経過して、お付き合いが始まり、めでたくゴールイン。私の母が紹介したのだから新婚家庭も天下御免、大崎の家へよく訪問しました。もう家の中は京都の寺、石庭、竜安寺のように掃き清められていました。女性の偉大さをその時感じました。

18歳から23歳まで5年間だけ東京生活しただけで、後はずっと渋川生活、商売柄（食堂）いろいろな会合に出るんですが、時々数学の恩師登坂忠夫先生に会うことがありました。定年になり公職についていました。数学の恩師と云って、私の頭は受け付けられない科目が多く、特に数学は駄目でした。ところが登坂先生は生徒に問題を答えさせるのに、「ジャーヒトツキテミルカー」と言うのが特徴で私も何度か指されました。その恐怖感が卒業して10年もたっているのにになにかの会で同席すると「ジャーヒトツキテミルカー」がよみがえり、そわそわする、自分が情けなかったです。

クラブ活動はバレー部に入りましたが、なぜ入ったかと言うと、入部の誘いが背が伸びる、渋女と交流ができるというものだったからでした。背は伸びませんでした。渋女へは連れて行ってもらい、交流試合に私も出たのですが、短パンの下から下着のパンツがはみ出ている、先輩がみっともないといって二度と連れて行ってくれませんでした。三年の時、北毛地区大会というのがあって、渋高バレー部は一度も負けたことがありませんでした。それが初めて私たちが負けました。いまだにOBに会うと「だらしねえ、負けやがって」と言われ肩身の狭い思いをしています。

しかしバレーボールは団体スポーツなので、チームワークが必要で皆の協力がないと勝利出来ません。その後、商売を継いだ時にずいぶん役にたちました。指導してくれたのは藤井清司先生でした。

少しも勉強しないで遊んでばかりいた高校生活でしたが、いよいよ最後、卒業式が終わり、それなりの大学へ進めました。いろいろ迷惑、お手をわずらわせた高宮正夫先生にお礼の挨拶に行きました。すると私の顔を見ると「大谷、君ほど学園生活を楽しんだ生徒はいない、もうこの高校からは君のような生徒はでない」という送る言葉をいただきました。今思うと「幸福だったな、暗い青春でなくて、」と感謝しています。その後私たちの結婚披露宴には高宮先生に来ていただき、お祝いの言葉をいただきました。そして縁あって人文地理の恩師南雲喜作先生御夫妻が私たちの仲人となってくれたのです。すべて渋高のつながりでした。

人生は舞台だ、そんな言葉を聞きますが、いい役ばかりきません、損な役、悲しい役、いろいろ場面が変わります。私たちと先生は昭和35年から38年という舞台で共演しました。

同じ太陽に照らされ、わき出た同じ水を飲んで、先生という役と生徒という役で同じ舞台を踏みました。二度と演じられない日々でした。それが御縁でいい思い出が獲得出来ました。誰にも邪魔されることのない追想の時間を頂きました。温かい心を受け継ぎました。次なる世代に渡そうと思っています。それは人に対してやさしくすることです。人に対しては真剣に取り組むことです。

そんな気持ちにさせるのだから、友人たちはよく「同窓会をやれと言います」。どうも学生時代、早退したり遅刻したり授業を抜け出した連中がやりたがります。純真だった子供のころに戻りたい。師弟交流理解できます。それが同窓会のいいところです。

高校時代に習った国語の平家物語、方丈記、徒然草、奥の細道の出だし文を読んでもこんないいことが書いてあったのかと思いました。郷土史と仏教に最近興味があるので漢文、古文をもっと勉強しておけば良かったなというのが反省点といえば反省点です。

甘えに通じた3年間

高校（全日制）15回卒 中田 秀太郎

創立80周年おめでとうございます。

思えば38、9年前の春に私は親に内緒で渋川高校を受

験しました。合格の喜びを両親に話すと、親父は「勝手に受けたのだから」と月謝に見合うアルバイトを探してきてくれたのをつい最近の事のように思い出します。

そういうわけで私の3年間の高校生活は学校が終わってから夜遅くまで、近くの酒屋でアルバイトをしながら高校へ通いました。そのため勉強がろくにできず先生に迷惑をかけた思い出ばかりです。

1年生の時の担任の上原先生は英語の先生です。先生の授業で思い出すのは最後に必ず宿題を出し、次の授業の初めに必ず私と隣の小板橋君を指してその答えを聞きました。ですから初めのころは英語の宿題だけは一生懸命調べていきました。ある日うっかり宿題を忘れてしまい「忘れました」と答えると、先生は別に私をとがめるでもなく平然と「次、小板橋君……」。これが度重なって私は宿題をまるっきりしなくなりました。それでも上原先生は相変わらず私と小板橋君をさし続け、1年生が終わるまでこの事は続きました。私とは反対に小板橋君は一度も宿題を忘れた事はありませんでした。いうまでもなく彼の成績はぐんぐん上がり私はどんどん落ちていったのを覚えています。

2年生の担任は世界史の中村先生でした。

夏休みの少し前だと思いますが私は放課後一人教室に残されて先生に「お前は働きながら学校に通っていると言う事に甘えている」と1時間近くお説教されたことがあります。当時、自分では苦勞して働いて高校へ通っていると思っていたので、とても自分が甘えているとは思えず、必死に反論しました。しかしなんとなく納得させられて帰って来たのを思い出します。

思えば上原先生の授業も「宿題を忘れても自分だけは怒られない」という甘えからでたことすし、ほかにも「中田は夜遅くまで働いているのだから」ということで、遅刻をしたり授業中に居眠りをしているほとんどの先生に注意される事なく3年間過ごしました。まだまだ思い当たる事が数多く在るのですが、それらがすべて甘えから出た事だと気が付いたのは卒業してから何年もたってからです。

このように甘え通じた3年間でしたが、ほとんどの先生方が私を叱らなかったのは、当時教師になるのに苦學をしながら大学を出た方が多かったのでしょうか。それで同じ苦勞をしている私に同情してくれたのだと思いますが、そういう先生方より私を叱ってくれた中村先生のこ

とが忘れられず、懐かしく思うのはなぜだろうと考えさせられます。

最後に遅刻をし、欠席し、授業に出て居眠りばかりしていたのに、私が無事卒業できたのは2年と3年の夏休みと春休みにお忙しいなか何度も何度も補習授業をしてもらい、追試も合格点を取れるまで何度も受けさせてもらったお陰だと、迷惑をかけた当時の先生方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

（3年の通知表が最近見付かりました。行動の特徴という欄に、要領が良い、態度が粗暴である、怠慢である自己に恥じる事は無い、と書かれています） 汗顔

母校との絆

高校（全日制）19回卒 中野 具昭

この度、渋川高校創立80周年記念誌の執筆の機会をいただきました事、感謝申し上げます。本校は「質実剛健・堅忍持久」の校訓のもと、大正9年4月20日の開校以来、80周年を迎え心からお祝い申し上げます。

私は、昭和42年3月に卒業して以来、二度と渋川高校の門をくぐる機会が無いと思っておりました。幸いにも子供一男一女に恵まれ、長男が平成5年4月に渋川高校に入学致しました。また、父も旧制21回（4年制）の卒業生であり親・子・孫の3代に渡ってお世話になりました。平成5年度同窓会の懇親会の席においては、三代栄誉賞を頂く事が出来ました。長男の入学と同時にPTA本部役員を仰せ付かり、26年ぶりに母校の門をくぐりました。久しぶりの校舎や校庭の変化には驚き、在学当時の1学年の生徒数は350人の7学級であったのに対して、平成5年度には1学年の総生徒数は同一でありながら8学級の少人数制教育になり、時代の流れを感じました。父からよく聞かされておりました旧制校歌の「炎の山」も入学した当時には「自由の子」に変化しており、長男の時代にも受け継がれている現在の校歌を聞いた時には大変うれしく思った記憶があります。平成5年度PTA副会長、さらに平成7年度にはPTA会長の大役をお引き受けいたしました。3年間のPTA活動に従事いたしましたが、何分にも精いっぱい努力いたしましたつもりでも、終わって見ますと一体何が出来たのかとの反省の

繰り返しばかりです。役員になってから印象に残る出来事は、平成7年1月17日未明に発生した阪神・淡路大震災であります。1月20日には「渋川高校の修学旅行が中止された」との新聞報道がありました。渋川高校では2月14日から18日まで2年生約350人が広島市や岡山市、神戸市などへの修学旅行を予定していました。しかし地震の被害の大きさが明らかになるにつれ学校側から「余震や二次災害が心配されるため、生徒の安全が確保できないと判断し、19日に中止を決めて生徒に伝えました」と報告を受けました。当日役員の方々と何とかそれに代わる救済措置を学校側にお願いに上がり、スキー旅行を学校側から配慮していただき、生徒たちの思い出の1ページを作ることが出来ました。おそらく修学旅行が中止になった事は渋川高校始まって以来のことと思います。役員を仰せ付かってからさまざまな方と巡り会え、多くの教訓を得られたことは、今後の私の人生にとって大いに役立つものと思っております。平成8年5月18日のPTA懇親会を無事終了し伝統ある渋川高校PTA会長を終了致しました。私がまだPTA会長時代に元同窓会長の大塚修平様にお会いする機会を何度かいただき、大変お世話になりました。そのお計らいもございまして平成8年6月1日、同窓会の総会にて計らずも同窓会副会長の大役をお引き受けいたしました。何分、能力も器も無いため大変戸惑いました。先輩、同窓会役員の皆様の御指導・御鞭達を賜り現在に至っております。70有余年の歴史の中で、政官、経学界に多くの人材を輩出し、1万有余の卒業生を持つ伝統校渋川高校との「絆」が出来たことを誇りに思い深く感謝しております。最後となりましたが、卒業生、関係者の80年間の御努力、御協力に敬意を表する次第でございます。創立80周年を契機に渋川高校が益々発展されますように祈念申し上げます。

—— 私にとってはちょっと前のこと ——

高校（全日制）22回卒 梅 澤 明

いつも時代の真ん中にいると思っていたのに、いつのまにか流行を追うこともなく30年前の歌を自然と口ずさんでいる。「駆け抜ける青春」などという歌の文句がありました。まさにその通り、先日落語を聞いていたら

嘶家が言っていました。

「客さん今が一番若いんですよ、今この今なんですよ……」

あたりまえのことに妙にうなずいてしまう。

今から30年前、群馬県で高校総体が開催された。いわゆる44総体が渋高3年の年でした。運動に縁の無い自分は、その何年か前から計画していた自転車旅行の実現に思いを馳せていた。アルバイトで当時としては高額なツーリング用の自転車を買ひ、高校3年とはいえ最後のチャンスと思い、高校総体開会式の日を出発の日と決めた。

仲間と同じ美術部の浦野礼三君。彼は芸術全般にわたりすごい才能を持っていた。彼自身も受験を控えた大事な時期によく付き合ってくれたと今でも感謝している、二人にとっては不安と期待の入り混じった大イベントだった。

朝5時出発、1日目は約150^{km}を走り、多摩川べりでキャンプ。通りかかったおばさんが家の井戸を使わせてくれた。見ず知らずの人の親切が身にしみた。それにしても東京でもポンプの井戸があるのには驚いた。小田原までは箱根駅伝のコースと同じ国道1号線を進む。2日目は熱海の駅前の地下道で夜を明かす。3日目は下田へ。ここで我々は伊豆半島1周へのこだわりを捨てた。はじめて自分の足で実感した日本の地形によくよく疲れてしまった。まして伊豆半島に入ってから山ばかり、やっとのことで登りきり下りかと思いきや南からの強い向かい風でペダルをこがなければとても前へ進まない。絶対の自信があったのに足はむくみ、尻はすりきれんばかりに痛い。そして選んだ楽な道は、東海汽船に乗り伊豆大島に渡ることだった。大島を周遊し再び船で直接東京へ、そして渋川へと1週間ほどの旅行であったが、いまでも忘れ得ぬ思い出である。

30年前と今とを考えると、もしも今同じ旅行をしたとしたらなにが違うだろうかと考える。今ならきっと携帯電話を持ち、もしかしたらモバイラーなんかも持っている人と会話を楽しみ、情報交換をしながらコンビニを便利に使っているかもしれない。当時あの大塚のボンカレーが出たででカップヌードルはまだ無かったと記憶している。固形燃料で飯を炊きボンカレーを食べ、時には缶詰とインスタントラーメン、これがほとんどであった。

恐らく今でも変わらないのは自転車で走れる道かもしれない。高速道路を走れない自転車にとっては多少のバイパスは出来ても相変わらず国道を走らなければならず、現在の交通量を考えると、もしかしたら当時よりも時間がかかり、そして危険が増しているかもしれない。

「進歩」と「変化」、時として同義語のように感じるがそうではないようだ。まして個人の感情の中にあっちはまさにその個人だけの思い入れへの「心境」と「感慨」に対する捉え方次第ではないだろうか。

あの時、なぜ自転車旅行だったのか。ちょうど70年安保のころ、学生と思想のかかわりが地方の高校生にまで大きな影響をもたらしていた。「大学無用論」、「ベ平連」、「三無主義」等々。そんな言葉の氾濫の中で、社会とは、そして自分らしさとは何だろう。そんなことを本気で考えながら我々を支配する一般的な風潮には迎合できず、「だったら俺は」といったささやかな抵抗であったかもしれない。

卒業以来30年、息子の渋高入学を機にPTAとのかかわりを持たせていただき、忘れかけていた高校時代あの青春が蘇ってきた。渋高の3年間から人生が始まったのかもしれない。母校に学ぶ息子に重なる自分の高校のころ。今改めて渋高に限りない思い入れを感じる。

80周年の会議の折に見た『創立70周年記念誌』に、懐かしい当時の美術部員の写真が掲載されていた。全員が現在にいたるも元気に活躍している。嶋田、浦野、石坂（現金井）山田、持木。ありきたりに酒でも飲み、まだまだ夢など語り会いながら、あと50年くらい一生懸命生きて行こう。

—— 回想そして今 ——

高校（全日制）22回卒 志 村 菊 雄

渋高創立80周年、誠におめでとうございます。

このたび思いがけず記念誌発行の寄稿依頼をいただき、いろいろと思い悩んだ末に引き受けてはみたものの、いざ机に向かうも思うようにペンが進まず、試行錯誤しているうちに、提出期限になってしまいました。

粗末な文章で恐縮ですが、思いつくままに書かせていただきました。

渋高を卒業した昭和45年がちょうど創立50周年に当たりました。あれからはや30年の歳月が経ち、我が子の大学、高校生になった姿を目のあたりにして、自分のことが懐かしく思い出される今日このごろです。

当時は振り返ってみると、昭和42年に入学した時は、まだ木造校舎から現在の鉄筋校舎に改築中で、3年生になってやっと全クラスが新校舎に入れるようになりました。

私のクラスはG組で、選択課目（美術・音楽、各1年）の関係で、2年間クラス替えがなかったこともあって、とてもまとまりがよく活発でした。1年の時には学級新聞を発行し、2年では全員の寄せ書きを添えた、各自筆の文集も発行しました。1年生当時、新聞委員会に所属していたので、発行責任者に選ばれた関係上、いまだに大切に保存している資料を開いて見ると、記憶がよみがえってきます。

また、クラブ活動では写真部に所属し、カメラは肌身離さず持ち歩いて、チャンスがあればシャッターを切りまくり、学校の部室にこもってはフィルムを現像して、作品を作っていました。

3年の時は、群馬県で開催された「全国高等学校総合体育大会」の写真班や卒業アルバムの編集委員を担当することになって、受験勉強よりもまだ写真に熱中していました。当時の記録写真は、高校生活の思い出を語る大切な宝物の一つになっています。

そして、写真における高校生活最大の思い出は、何と言っても応募作品が県写真展で、入賞・入選出来たことです。

クラブ活動など、勉強以外のことでは、自分なりに充実した高校生活を謳歌したのですが、勉強と両立させることが出来ず、もう少し勉強をしておけばと、当時後悔したことが、はずかしながら、今さらのように思い出されます。

幸い就職においては、公務員という希望の職業に就くことが出来て、今日まで健康で、無事に勤めてこられたことを感謝しております。

群馬県職員約6,000人という大きな組織の中で、渋高の同窓生は300人を超え、年に一度県庁支部の同窓会を開催し、親睦・交流を図っています。そして、貴重な助言指導をいただいたり、情報交換等、幅広くより密接・円滑に行えることも多々あり、心強く、また有り難く思

っています。これからも県庁支部、同窓生のますますの発展と活躍を念じている次第です。

仕事面では、行事等における記録（撮影）を任せられる機会が多く、また若い時は、結婚式に招かれると必ずと言って良いほど、写真を依頼されました。当時のカメラは、まだ大半がマニュアル操作のため、ピント合わせ、露出、シャッター速度調整等が大変で、失敗が出来ないだけに緊張の連続でした。しかし、数をこなして行くうちにだんだん慣れて度胸もついてきて、思いきった写真も撮れるようになってきました。それなりに撮れた時は、自分もうれしくなり、趣味で始めた写真が思わぬところで役に立つことが出来て、写真をやっていたよかったですという満足感に浸ったこともありました。

結婚して子供ができてからは、子供の成長記録写真を撮るのが主になり、撮影会やイベントなど、写真を撮り歩く元気、意欲が薄れてきて、カメラを持ち歩くことも少なくなりました。昨年職場が替わり、広報記録写真を撮ることが一つの業務になったことを契機に、仕事と趣味を兼ねて、また新たな気持ちで写真を始める意欲が沸いてきました。そして、いつの日かまた、写真コンテストに入賞（入選）出来るような作品を撮ってみたいと思っています。

昨年久し振りに同窓会の総会に出席しました。20代のころに出席した時は、同世代の仲間や話相手もいなかったもので、以来ご無沙汰していたのですが、今回何人かの同期生に会い、そろそろ皆も同窓会を懐かしく思う年になったのかと思いました。しかし、出席者はほとんど40代以上であり、若い世代の出席者がいない傾向は今も変わっていないので、せつかくの機会なのに残念に思いました。

同窓会総会行事の一つに親子孫3代の顕彰がありますが、少子化時代において、男子の家系が続くというのも難しく、なおかつ入試合格が必要条件のなか、とても意義ある素晴らしい行事だと思います。

同窓会で残念に思っていることは、私が住んでいる地域（町）には、同窓会の支部がないことです。現在は学区制が出来た関係で、渋川地区などへの進学はより難しくなり、通学者は大分少なくなったということですが、それまでの渋高への進学者は多く、同窓生は当地域（町）にも相当数居住していると思います。差し出がましいようですが、同志がいればぜひ設立、運営のお手伝いをさ

せていただきたいと思っています。

人生80年と呼ばれて久しい長寿社会において、私もはや折り返し地点を過ぎて、50代に届く年ごろになりました。当面の目標は、3人の娘たちの成長を見守りながら、無事に定年まで勤め上げることです。

余暇活動としては、写真はもとより、ボランティア活動がきっかけで、20代から習い始めたフォークダンスです。現在、地域のフォークダンスサークルの事務局を担当し、県フォークダンス協会や町文化協議会にも加入して、県・町ならびに団体の関係行事等、積極的に参加して、各種団体の人達と親睦・交流を図りながら、より地域に根差したサークル活動に励んでいます。

今年の10月に本県で開催される「全国レクリエーション大会」、そして来年の「国民文化祭」と、何かと忙しくなりそうですが、これからも自分のライフワークとして、足腰の動く限り、頑張っ続けてたいと思っています。

そして、20年後の記念すべき「渋高創立100周年」も、同窓生の一員として、共に祝うことが出来るよう、健康で長生きしたいと思っています。

何だかとりとめのない文章になってしまい、掲載していただくのもお恥ずかしい次第ですが、渋川高校そして同窓会の限らない発展を心より祈念して、ペンをおかせていただきます。

—— 渋川高校創立80周年に寄せて ——

高校（全日制）28回卒 川 島 理

渋川高校卒業生の皆様、創立80周年おめでとうございます。私も、昭和51年3月に卒業して、早いもので25年が経つことになります。

卒業して25年も経ってしまうと、いざ原稿を書こうとしても、その時の記憶があやふやなことに気づきました。

そこで、私が在学した当時の世相をまず振り返ってみました。

昭和47年：浅間山荘事件

日本赤軍「テルアビブ事件」

元日本兵 横井庄一さん保護

札幌冬季オリンピック

沖縄県発足

田中角栄『日本列島改造論』

「日中国交回復」

昭和48年：「オイルショック」によるトイレットペーパー騒動

金大中拉致事件

ベトナム駐留米軍の撤退完了

上野—新橋「歩行者天国」

巨人V9達成

小松左京『日本沈没』

老人の医療費無料化

コインロッカーへの嬰兒死体遺棄事件多発

江川 卓、ハイセイコー、山口百恵

昭和49年：ニクソン大統領

「ウォーターゲート事件」で辞任

田中角栄「金脈問題」で辞任

ルバング島 小野田寛郎下山

セブンイレブン1号店開店

高度成長から省エネルギーへ戦後初のマイナス成長

昭和50年：日本赤軍「クアラルンプール事件」超法規的措置

米「アポロ」、ソ連「ソユーズ」ドッキング

サイゴン陥落、ベトナム戦争終決へ

沖縄国際海洋博覧会

山陽新幹線：岡山—博多開通

広島東洋カープ初優勝

『ジョーズ』

『およげ！たいやきくん』

「使い捨てライター」

昭和51年：「ロッキード事件」発覚—田中角栄逮捕

「宅急便」営業開始

毛沢東死去

ピンクレディー

こうして改めて私の高校時代の世相を振り返ってみると、この時代は、ここ数年の日本の社会と似通っているような気がします。

高度成長も終わり、世界的にも第2次大戦の後始末もひと段落したこの時代は、25年経った今、バブルの崩壊、戦後決められた枠組みからの民族の独立、と似た状態と

なっています。また、老人医療費を無料化したものの、25年間に急速に進んだ高齢化社会の到来で、無料どころか新しい「介護保険」導入へと変わってきています。

25年を経て、日本自体がひとつの節目にきているのかもしれない。

私の学生時代は、クラブ活動よりも生徒会活動の方が主でありました。生徒会長も務めさせていただきました。今でも覚えているのは、生徒会長に立候補するにあたり、先生方から「進学のことがあるので良く考えろ」と助言を受けたことを良く覚えています。結果的には、なんとか現役で大学進学を果たしたわけですし、今になって振り返って見ると、生徒会長をしたことが、いろいろ勉強になってよかったと思っています。

私の学生時代と今の生徒の学校生活はかなり違っているようです。

まず、物の量が違います。私の高校時代は、コンビニなどありませんでした。昭和49年にセブンイレブンができたようですが、それも東京での話。しかし今は、市内のいたるところにコンビニが乱立し、24時間いつでも好きな時間に買い物ができます。私たちのころでは、考えられないことです。

次に、皆さんどの家庭も金銭的に余裕ができた事です。私が生徒会長を務めたとき、「校内に清涼飲料水の自販機を置くかどうか」考えたことがあります。この当時は、「生徒によっては、買えない子もいるので、やめよう」と言うことになって見送られました。今の学生さんには、信じられないことではないでしょうか。

私は、卒業後、順天堂大学医学部に進学。卒業後は大学に残り、現在は父の跡をついで開業医となりました。父が、渋高の耳鼻咽喉科学校医をしていたことから、私も引き続き校医をさせていただいています。

校医をしていますが気が付くことは、生徒数の減少です。特にここ数年は著しく減少し、私の在学当時は、1学年に45人×8クラスで360人いた生徒数も、少子化と高校数の増加の影響で年々減少し、現在は、40人×7クラスの280人となっています。定時制の生徒募集も打ち切りとなりましたし、まだまだ、減少していく傾向にあります。あまり少なくなりますと、自由なそして多彩な活動ができなくなってしまうのが心配です。

先年、51年卒全クラス合同のクラス会を卒後20周年と

して開催しました。それまでクラス単位では同窓会を開催していたところもあったようですが、全クラス合同は初めてでした。開催のきっかけとなったのは、同級生の山本一太君が急逝されたお父上の跡をついで参議院選挙に急遽出馬することになった事です。選挙応援で近隣に在住する同級生で集まり、選挙後話が進み、合同クラス会の開催となりました。卒後20年ともなると、実家の住所も変わってしまい、所在のわからない同級生も何人かおりましたが、当時の先生方を含め、約100人の合同クラス会を開催できました。この原稿が皆さんのお手元に届くころには、卒後25周年の全クラス合同のクラス会を開く予定となっております。

最後に私の近況活動ですが、最近では、診療だけでなく、医師会の理事をはじめとしてさまざまな活動に参加しております。

特に最近では、パソコンの普及に伴い、インターネット関係の仕事が増えてきました。インターネットを使うことで、自宅にいながら日本国内のみならず海外からも種々の情報を得ることが可能となります。また、電子メールを使うことで、地域のネットワークを組むことも簡単にできるようになりました。私自身、ホームページを開設し、適切な医療情報の発信をしていますし、電子メールを使った医療ネットワークの構築をめざしております。

渋高もホームページを開設したようですが、普通高校の場合商業高校に比べ、学校のインターネット関連の導入が遅れているように思われます。

私たち同級生の中にも電子メールアドレスを持っている人が増えており、最近では電話より電子メールでのやり取りが増えていきます。今後同窓会としても、こちらの方面への対応もお願いしたいと思っています。

今を生きる

高校(全日制)30回卒 大塚隆平

亡父、大塚修平三回忌によせて。

過日、1999年9月30日、亡父修平の三回忌を無事済ませることができました。父は一昨年9月30日、突然この世を去りましたが、それまで渋川高等学校同窓会長を務め

させていただき多くの関係者の皆様にお世話になっておりました。責任なかばでの急逝で、多くの関係者の皆様にご迷惑をお掛けし、父も草葉の陰とやらでさぞかし申し訳なく思っていることと思います。

このたび、母校渋高の創立80周年記念誌への寄稿依頼がまいりました時も、何かのご縁を感じ、お引き受けをした次第です。父との思い出も、その日以降は続くこともなく、時を経るごとに風化してしまうような気も致します。父との思い出を書き残せませう機会をいただけましたことに深く感謝申し上げます。

「父親としての厳しさ・学生編」

私の人生において、その重要と思われる岐路においては、必ず父の厳しい考え方が存在しておりました。今となっては、その時々々の厳しさが私にとって大きな支えとなっていることは言うまでもありません。

大学進学の際、高校時代熱中しておりましたスピードスケートを続けたいあまり、早稲田大学教育学部を受験し合格しました。もう一校武蔵大学経済学部にも合格していましたので、どちらかへ進学という選択の段階の時でした。私と云えば好きなスケートを続けたい一心で早稲田への進学を両親に望んだのですが、父は頑として聞き入れてはくれませんでした。後日、母から聞いたところでは町議会の開期中にもかかわらず、毎日、夜中まで入学手続き締め切りまでの約2週間の間、私の進学について父の考えを話し続けたのでした。最後には、毎日のように顔を泣き腫らして父に懇願する私の姿を見かねて、祖父母と母の3人も父を説得する形となりました。

しかし、父は「大学には、将来の問題解決の方法を勉強するために」という信念を曲げることはありませんでした。会社経営においては決してワンマンというわけではなく、役員、スタッフからの提案を良く取り入れた父でしたが息子の進路については、「これだけは俺のわがままを通させてくれ。」と言って母と祖父母の三人を説得したそうです。

私自身も現在2男の父親ですが、彼らの将来のため適切な進路指導の必要性を感じています。今の私の考え方があるのも父の教育指導のお陰であることを認識した上で、子供たちには将来どのような人間になって欲しいかを自分自身の中で明確にして、指導をして行きたいと思っております。

「父親としての厳しさ・社会人編」

私は、大学卒業後東京で就職をしました。家業とは全く関係の無い業界でした。就職に関しては、父親は全く口をはさむことはありませんでした。自営業の長男ということで、就職活動は、困難をきわめました何とか職を得ることができました。営業職でありました。就職後五年、長男が満1歳を数えた昭和63年夏、父から伊香保へ戻るようにと話がありました。長年取り組んできた保安林の解除申請に目鼻が付き、駐車場と旅館を結ぶケーブルカーを中心とした増改築工事の計画が具体的になったからでした。父は私をすぐに旅館に入れず、東京の総合案内所に半年間旅館の営業として派遣したのです。重いパンフレットを持ち歩き、東京、埼玉、千葉、神奈川の旅行業者やバス会社を案内所の営業マンと同行セールスをして歩く毎日でした。

ある日、以前にかのうやへ送客したことがあるという旅行業者を訪問した時でした。その時の顧客からのクレームをいやというほど聞かされたことがありました。料理のこと、部屋のこと、駐車場のこと、お風呂のこと、一つの悪い所があると全部が悪くなるような印象を受けたことを覚えています。その時は、深くおわび申し上げ、自分が跡継ぎであることをお伝えして帰りました。

その後何度かそこにお伺いをするうちに、私が伊香保に戻り改装なったあかつきには、送客すると言っていただけでした。しかし、送客実績のある他館との商品力の差や企画力の差、そして営業力の差が歴然としてあることに気付かされるまでにはさほどの時間を必要としませんでした。

私の派遣された東京の総合案内所というのは新橋にあり、全国各地の旅館ホテルが50軒あまりと20軒ほどのドライブインが加盟している総合案内所と呼ばれるところでした。加盟している全国各地の旅館ホテルのパンフレットやチラシは、いやでも目に付きましたし、他館の営業マンが毎日のように出入りをしておりました。いきおい自館との比較情報が、好むと好まざるとにかかわらず私に入ってくるのでした。従って、自館の増改築計画に対する希望、期待が日に日に大きくなっていったのもこの時期であったと思います。

今にして思えば、父からの帰郷話があった時、私はす

ぐに承諾をせず反発をしたのでした。就職をして五年目、やっとな営業職としてのいろはを覚え、取引先の担当者との信頼関係をもとに、売り上げノルマを達成することの喜びやそれに伴う収入のアップなど、さあこれからだという時期だったのです。また、週休二日制も私の勤めていた会社にまで浸透してきていました。サラリーマン生活にどっぷりと漬かり始めた時期だったともいえます。

その時期に父は、長年の夢であった駐車場と旅館本体をつなぐケーブルカーの計画とそれに伴う旅館の増改築計画の必要性を私に諄々^{じゅんじゅん}と説いたのです。そして家業継承をさせるに当たり、案内所への派遣を通して自館を外から見させ、比較させ、私の旅館経営への参画意識が高揚することを期待していたのかもしれない。

「父親としての厳しさ・経営者編」

平成元年5月、まだ少し肌寒さの残る新緑の故郷へ、その年の1月に生まれた次男を加えた一家4人で引っ越して来ました。

まず最初の仕事は、取引銀行へのあいさつと融資交渉への同行でした。決算書類や設計図、見積書などの書類を持ち、父の後について回る日がしばらく続きました。時はバブル景気の真っ只中ではありましたが、立地条件や設備の老朽化に伴い当館は、決して経営内容の良い旅館ではありませんでした。そのため、融資交渉は難航しました。前橋にある政府系の金融機関に、やんわりと融資をことわられた時など父は、はっきりと提出した書類の返却を求めていました。書類にだって金が掛かっている。必要のない書類は返してもらおう。そんな父の媚びのない態度が、妙にすがすがしかったのを思い出します。

ケーブルカーを付けただけでは、とても商品価値が足りない。フロントロビー、大浴場、宴会場といったバブリック施設の改装が、今回の計画には不可欠でした。その計画を実行するには、今までの年間売上の約2倍の融資をうける必要がありました。あと1億5,000万どうしても足りません。当時の環衛公庫の資金を扱ってくれる窓口の金融機関を当たることになりました。この資金は、政府出資ということで書類関係の提出が非常に多く、父に指導を受けながら書類を書いたのを覚えています。結局、先代からのおつきあいだった東和銀行と、父の渋高時代の同級生が役員をやっておられたかみつけ信用組合の2行にご理解いただき、念願の改装計画が進むこと

になったのです。

伊香保へ戻って最初の1年間、私に課せられた事は、旅館の現場を覚えることでした。朝6時半にはフロントへ出て事務所の掃除、お客様の応対、送迎、会計、予約の受け付け、客室の準備手伝い、ボイラー関係見回り、お客様のお出迎え。料理の配送、布団引き、宴会片付けから食器洗浄。風呂清掃から宿直までありとあらゆる旅館の現場を体験させられました。未経験なのは、板前とルーム係の客室料理出しくらいでしょうか。

朝、出社して来るとすぐにお茶の時間となる当時のベテラン社員たちを横目に、旅館の経営者とは、家業とは、お客様商売とは、と悩む毎日でした。そうしたなか、増改築計画が進み私に新たな仕事加わりました。設計士との打ち合わせでした。計画の大筋は社長との間で決まっていたのですが、内装等の細部の打ち合わせが残っていたのでした。社内の諸問題に悩む毎日でしたが、新しい旅館になるという希望と夢のある設計士との打ち合わせ作業に一服の清涼剤を求めることができたのです。

平成元年10月20日、工事は遅れ気味ではありましたが、備品等多少の納品を残すのみで、かのうやの増改築工事は完成しました。館名を「かのうや旅館」から「景風流(ケーブル)の宿」へ変更したことが、父はいたく気に入った様子で、ケーブルカーが出来た当時、毎日のように試乗しておりました。段違いに存在する旅館と駐車場を何とかつなぎたいという父の執念が、ゴルフ場のケーブルカーを利用した時に「これだ」と閃かせたことでした。またこのケーブルカーは、旅館と駐車場の段差という集客上の弱点を見事に旅館の特長に変えてしまったのでした。バブル景気の影響はあったものの、このケーブルカーのおかげでオープン初年度の売り上げは、改装前の2倍半にハネ上がったのでした。

父の執念が、夢を実現させ、それまでの経営不振を払拭した時期でありました。その後も平成3年には、社員寮の建設に着手しました。当時、慢性の人手不足の状態でも人手の確保のためには社員寮が必要であるとの結論になったのでした。私自身も、徐々に新生活と旅館商売に慣れ営業に出掛けるようになると、新しいパブリックと古い客室のアンバランスを、営業先で指摘されることが多くなりました。父に報告をして、古い部屋の手直しを考えてもらいたいと要望しました。父は、バブルの崩壊後客の減少を見越し、一部屋当たりの改装予算を示して

許可してくれました。当時はバブルの余波もあり、金融機関は融資に対して協力的だったのですが、父はそれに対し全面的にたよろうとする私にブレーキを掛けたのでした。

今思えば、調子に乗って金融機関のすすめるがままに借財を増やさなくて正解であったと思っています。父の中長期的な展望に立った経営方針、金の使い方、金融機関とのつきあい方、私の中に生きています。

「父との思い出から……今を生きる」

いつだったか、「全人事興信録・全国編」なる分厚い本から父の名前を見つけました。信条のところに「平凡・円満」と私にはチョット首を傾げたいような文字が並んでいました。業界組合では、役職を歴任し、町議会議長、そして母校渋高の同窓会長。その就いた役職を考えれば、とても平凡だとは思えないのです。正義感の強い人でしたので、不正は大嫌い。その上権威とか権力とかの強さ大きさには、平気で反発する人でした。とても円満なんて縁遠い人だと思っていました。あれは、信条ではなく父の理想とする姿であったと思います。父の強い願望だったのだと感じます。

読書が好きな父でした。時間があれば一日中でも自室に閉じこもり、本を読んでいた。酒が強い父でした。胃の手術をしてからは大事を取り、飲みすぎないように注意している様子でした。弟が帰郷すると、よく私を入れて3人で飲みました。町へ飲みに出ることもありました。飲み屋のママさんに、息子たちと飲めることをうらやましがられると、口では何とか言いながらもうれしそうでした。ゴルフの話が好きな父でした。晩年は忙しくなかなかできませんでしたが、家族4人で年に1回コースに出ていました。「ゴルフは脳球と書くんだ頭が良くないと上達しない」が口ぐせでした。思えば父親としては平凡だったのかもしれない。

母と隠居する家をさがしていた父でした。小さな家で、日当たりが良く、静かに読書ができる家。物件の情報が入ると、母の運転でいそいそと出掛けて行く父でした。旅館業の現場は女将である母にほとんど任せきりだったので、これから少し女房孝行でもと考えていたのでしょうか。思えば夫婦としては円満だったのかもしれない。

平成9年2月10日、最初で最後になった親子旅行をし

ました。父と母と私の3人で日光へ行って来ました。次の改装計画を任せるプランナーの作品の旅館を見て来る旅でした。翌日、東武線で浅草へ出てプランナーの事務所立ち寄りしました。その帰途ポツリと一言「おまえに任せる」。父は、社長を私に任せることを決断していたようでした。

平成大不況の真っ只中、親父が生きていたら「かのうや」の舵取りをどのようにして行くだらうなどと考えます。毎朝、仏壇に合掌するたびに。仏間の親父の写真は、やさしく(?)微笑んでいるだけです。

「勉強しろよ。頭を使え」、「子孫に美田を残さず」、「いつまでもあると思うな親と金」……。親父の口ぐせが頭をめぐります。

——「押忍!! 正座!!」の思い出——

高校(全日制)38回卒 太田浩嗣

「記憶は、若い娘のように、気まぐれなお天気屋である。いままで100回も与えてくれたものを、まったく不意に拒んだりするかと思えば、思いがけない時に、まったくひとりで持ち出してきてくれたりする」(ショーペンハウアー『知性について他四篇』)

人が生まれて行くまでには数えきれないほどの出会いがあり、別れがある。そんなことはあたり前のことであるのに、忙しい日々を追われ忘れてしまっている。仕事が終わり、家に帰り、子どもがようやく寝静まった夜、ボーッとした頭でテレビをみていると、ふと学生時代の一夜漬けの試験のことなどを思い出したりもする。「昔は良かった」という過去を懐かしむ発言というのは老人の口癖として一蹴されるといのが世の常であるので、口にしないだけである。

けれどもやっぱり年をとったせいなのか、それとも何か別の理由でもあるのか、同じ時間を与えられながら迎えた朝の気分がどうしてこうも違うのか不思議でなりません。

今回、記念誌への寄稿依頼をいただいた際、ひとつ返事で快く受けさせていただきましたが、大学卒業後は文章というものを全く書いていなかったためか、なかなか筆が進みません。国立国会図書館まで行って、全国の高

校の記念誌を読みあさったりもしました。結果、大層なことは書けないし、気の利いたことも書けないので、「文章は簡単ならざるべからず。最も簡単な文章が最も面白きものなり」(正岡子規『筆まかせ抄』)にならない、今の私の記憶にも鮮烈に覚えている思い出を素直にぶつけさせていただきます。

思い起こせば今から16年前、1983年4月当時、新入生350人強で入学しました。胸をときめかせて入学式を終えた翌日の上級生との対面式、即ち新入生歓迎会で15歳の少年の心を激震させる出来事がおこったのです。対面式は体育館でフロアの前に1年生、後ろに2、3年生、壁際に先生という形で、椅子に座って、生徒会役員の司会でおこなわれました。対面式が始まるまでの間、小学校・中学校入学時にしてもらった合唱や劇などを思い出し、高校生というのはどのような方法で私たちを歓迎してくれるのだらうとワクワクしておりました。いよいよ対面式が始まりました。生徒会長のお祝いの言葉が終わり壇上を降りた後、体育館がしばらくシーンと静まりました。すると突然「ガラガラ」と重い体育館の鉄扉を開ける音が響き、鉄扉の前には、頭はリーゼント学生服は長ランにボンタン、手には竹刀を持った3年生が立っていました。「押忍!!」鉄扉の前の3年生は手を後ろに組み叫びました。私たち1年生は何が起こっているのかわからず黙っていました。フロア後ろの700人余の2、3年生から「先輩が挨拶しているのに、お前らは挨拶もできないのか」とか、「おらおら、正座しろ、正座」などと罵声がとびはじめ、1年生全員正座をさせられ「押忍!!」と叫びました。次は「声が小せえんだよ」の罵声。鉄扉の前の3年生が再び「押忍!!」1年生全員で「押忍!!」何回か繰り返して叫ばせて、鉄扉の3年生は体育館の中に入ってきました。次もまた別の3年生らしき人が鉄扉の前に立って「押忍!!」1年生全員で「押忍!!」こんな状態で10人くらいの3年生(2年生もいたと思う)が体育館の前に一列に並び、正座している私たち1年生を睨みつけた。頭はリーゼントオールバック・ゆるいパンチ、学生服は長ラン・短ラン・ボンタン、手には竹刀に木刀、はちまきをしている人もいた。ここでリーダー格らしき3年生がでてきて、竹刀で体育館のフロアをバシバシたたきながら「お前ら1年生のくせに生意気なんだよ。先輩が挨拶しているのに、お前らは挨拶もできねえのか」などと話しはじめた。話をしている間、生徒会

役員の方を見た。誰も止める気はなさそうだ。先生の方を見た。平然とした顔の先生もいれば、幾分こわばった顔で事態を見守っている先生もいた。しかし誰も止めなかった。正直なところ、私は入学2日目にして、渋川高校に幻滅した。「なぜ誰も止めない。止めようとしな。この行為は先生も黙認しているのか」ということは大人の社会ではこういった行為は許されるのか」などいろいろ考えているうちに、今度は1年生に挨拶の仕方を教えるということで、体育館の前に一列に並んだ3年生の「押忍!!」のあとにつづいて、1年生全員で、「押忍!!」と何十回も叫ばされた。私は何度か立ちあがって「こんなことをするのはやめて下さい」と、大声で叫びたかったかわからない。私の心の中の少しの正義感、そして15年間生きてきて身につけてきた常識とのギャップがそうさせたかったのだろう。しかし、しなかった。そうすることによってさらなる混乱を避けようとしたのである。昨日の入学式で、偉い方々が言っていた、渋川高校の校風の「質実剛健」とは口だけだったのかとか、「堅忍持久」とは今の自分たちの状態をいうのかとか、挙句の果てには、自慢だといっていた校歌の歌詞「自由の子、民主の民ぞ」とは、何でも自由にさせて非常識なことでも学生にやらせてしまう、無規律なことなのか、恐ろしいなどと思っているうちに1年生全員がまわれ右をして、2、3年生に「よろしく願います」と言って対面式は終わった。

このような対面式は、私が2年生の時にも同じくおこなわれた。

対面式に改革がおこなわれたのは、私が生徒会長をしていた、2年生の3月ごろからだ。当時の、生徒会執行部の顧問をしていた先生と、4月の対面式での、正座・挨拶の問題等について、体育教官室で話し合い、正座・挨拶の廃止ということで互いの考えが一致した。私は正座・挨拶を擁護する先生方が一部いるのを知っていたので、顧問の先生に先生方間の意思統一をお願いした。それからこの問題を生徒会執行部でとりあげた。私の代の生徒会執行部は、血気盛んな人物が多く、擁護派と廃止派に分かれ、廃止にもっていくことに決まると、強く擁護していた役員数名は以後任期中、会議等にも姿を見せなくなった。今考えてみると、やられたら、やりかえす的発想があったように見える。仕方ないので残った役員で、ビラを作って、正座・挨拶=脅しの不要性

を訴えたりした。容易に推測できると思うが、学生の中での正座・挨拶の擁護派というのは、容姿・発言ともに目立つ学生が多かった。結局、正座・挨拶を廃止するのに、対面式の前日まで一部の学生を先生に説得していただいた。

このように経緯して、対面式がはじまった。私の挨拶が終わると、体育館の鉄扉が開き、「押忍!!」の声。「押忍!!」への返答や正座の強要はなし。次から次へと「押忍!!」の声と共に3年生が入ってきたが、その後も脅し的な事はなく、無事対面式終了と思ったら、事件は起きた。1年生全員がまわれ右をして2、3年生の方を向いた時、事もあろうに、1年生の集団の中に3年生が1個の生卵を投げ入れ、生卵が1人の1年生に命中して割れてしまったのだ。対面式終了後、緊急で生徒会執行部で会議がもたれ、1年生の集団に卵を投げ入れたことへの問題提起と謝罪をビラにして配った。最終的には生卵を投げ入れた3年生が命中した1年生に謝り解決した。

私は渋川高校を卒業してから私より若い卒業生に会うと必ずこの話をしてみる。近年我が社（太田物産株式会社）にも渋川高校の卒業生が入社してくるようになり、話をすると「そんなことが本当に渋川高校でおこなわれていたなんて信じられない」と私が作り話をしているように思われる。ただ真面目に話をしているうちに「昔は個性のある学生が多かったのかもしれないね。今はその時代と比べるとおとなしい学生が多いのかもしれないね」とぼつりと言った後輩がいたことを覚えている。

私の生徒会会長時代、生徒会執行部から生徒への実行課題として①盗難問題の解決②校内美化③外出防止④交流行事の実施が挙げられ、生徒から生徒会執行部への要望課題として①文化祭の毎年の実施②交流会の実施が挙げられた。どの課題ひとつとっても満足なことができなかったかもしれないが、私の時代に悪しき伝統を断ち切ったことで、こんな私を生徒会長に推薦してくれた友人に報いることができたと思う。私を生徒会会長に推薦してくれた友人に14年越しの感謝を申し上げたい。どうもありがとう。

そんなことがあったからではないが、卒業以来、ついに1度も母校の門をくぐっていない。もう14年になる。渋川市内は在校当時と随分変わってしまったので、きっと校内も相当変わってしまったことだろう。4年に1度

オリンピックイヤーに開催される同窓会ではこの対面式の話は既に若気の至りとして、懐かしくほろ苦い思い出となっている。そうそう、オリンピックイヤーに同窓会を開く規定をつくってくれた友人の結婚式に今週呼ばれている。当時の暴れん坊たちも集合するらしい。さてさて、どんな話に花が咲きますやら。

最後になりましたが、創立80周年を迎えた母校での学生時代がより一層充実したものとなりますよう在校生の皆様には期待するとともに、先生方はじめ、関係各位、同窓生の皆様のますますのご活躍とご健勝を祈念申し上げます。

何物にも代え難い宝物

高校（全日制）45回卒 高橋 卓

群馬県立渋川高等学校合格!! 北毛の雄、あこがれの渋高に合格し、親戚一同がとても喜んでくれたり、母校の中之条中の進学説明会に呼ばれて後輩に受験のアドバイスをしたりと優越感のような自信がもてるようになっていた。そして入学式!! 誇らしい晴れ晴れとした気持ちで渋高の校門をくぐった。入学式では、周りの同級生が知的に、真面目そうに見え、私も彼らに負けまいと気を引き締めて、気合を入れ直して高校生活をスタートさせた。しかし、いざ渋高での高校生活が始まってみると、のんびりした雰囲気と男臭く雑然とした校舎内など、まるでそこだけゆったり時が流れているような空間がそこにあった。渋高に入学したらしっかり授業を受けて、予習復習を欠かさず、通信教育や進学塾に通って学習するなど、一日最低でも四、五時間以上は勉強しないとアツという間に周りの学力レベルからおいていかれてしまうという強い危機感を持ち、勉強に真剣に打ち込まなければならぬと覚悟をしていた私にとっては驚きを感じ、いささか拍子抜けしてしまった。

「なんだ、こういうもんなんだ」

私は、進学校というと補習や補講を強制的に受けさせて、徹底的に生徒を管理して学力の向上を図るというイメージをもっていたが、実際に渋高に入学してみると生徒の自主性を重視する校風だったので、「自分のやりたいようにやればいいんだ」

と考え直すことができた。そうすると、「高校生になっても野球がしたい。硬式野球部に入りたい」

という以前からの気持ちが急速に、どんどん大きくなっていった。そして放課後に野球部の練習を見学すると、活気にあふれ中学レベルとは段違いのスピードと技術でプレーしている物凄く格好いい先輩たちの姿を目の当たりにして、もうどうしても野球部に入りたくなくなってしまった。その日の夜に両親に入部したいと相談すると猛反対され、特に渋高出身で昔堅気な父親は、「お前は、何のために渋高に入ったんだ。勉強するためだろう」

と怒りをあらわにした。入部の許可を得ることができないまま翌朝を迎えたが、両親には内緒で練習着と野球道具を持って登校し、小中学校時代からの野球仲間とともに練習に参加した。両親には、「毎日の練習は5時までしかやらないから」

と嘘をついて、なんとか入部の許しを得ることができた。

それからの毎日は大好きな野球の事を何よりも第一に考え、一生懸命練習に打ち込めるとも充実した日々が続いた。入学当初は皮靴を履き、皮の学生鞆を持ち、その鞆の中には教科書とノートのほかに、あまり開くことのない参考書などの学習道具を詰め込んで登校していたが、野球部に入部してからは、つばの長い学生帽を目深に被って坊主頭を覆い、名前入りの黒い野球バッグの中に大きな弁当箱と練習着を入れて登校するようになった。

学校では放課後の練習のために授業中に居眠りをして充電することが多かったが、先生方がとても親切丁寧で、中間、期末テストの前にいつもテスト範囲の復習やまとめをしっかりと行ってくださったので、普段の授業をおろそかにしていた私にとっては、テスト前に集中的に授業に臨めばよかったので本当に有り難かった。また授業中に、学習に関連して先生方はユニークな話を聞かせてくださったり、私たちに興味があった性についてのエッチな話をしてくださったりして、私たちが楽しく興味をもちながら学習できるように心がけてくださっていた。さらに先生方は、いい加減な授業態度の私がテスト前にピンチになって分からない事を質問しても、嫌な顔をせず熱心に指導をしてくださった。今は、しっかり授業

を受けようとしていなかった自分を反省し、それでも親切に指導して下さった諸先生方に感謝の気持ちでいっぱいである。

少し話が横にそれるが、こんなエピソードがあった。剣道部の友達が授業中に居眠りをしている稽古の夢を見ていた。面を打たれそうになったのを素早くかわそうとして目を覚ましたが、急に動いたので自分の机を横にひっくり返してしまい、みんなをびっくりさせた。また空手部の友達も授業中に夢の中で対戦して、座りながらいきなり蹴りを繰り出し、机を真上に蹴り上げたこともあった。これらのエピソードから言いたいことは、部活動に熱心になり過ぎるあまり授業中に居眠りをしたり、勉強をおろそかにしてしまったりすることは本末転倒であり良くないということだ。しかし当時部活動に励んでいた人たちは、文武両道の精神を重んじ、本当に一生懸命に練習に打ち込み、大会では素晴らしい結果を出していた。そして私たちが三年生の時の高校総体では、多くの部活が大活躍して、公立高校でトップ、総合でも第2位という輝かしい成績をおさめ、文武両道、質実剛健の渋高魂を存分に発揮することができた。

当時の野球部は高橋部長、佐久間秀人監督、岩田真二コーチ、茂手木コーチの4人の先生が指導して下さっていた。高橋部長は公式戦でベンチに入って私たちの試合を見守って下さったが、私たちの進路指導にも熱心に細かく面倒をみて下さった。佐久間監督は指導者としてはもちろんのこと、プレーヤーのころから実績を残されている先生であり、われわれ高校球児のあこがれの人でもあった。理論的で、バッティングや守備の技術を分かりやすく指導して下さった。また常々私たちに精神的にも強くなるように、「相手チームに気持ちで負けるな、自分にプライドをもて」

と指導して下さった。私はその時は、「気持ちでは負けていないのに」と思っていたが、高校を卒業してサッカーに転身し、県内のトップレベルに身を置く立場になってようやく今までの気持ちが十分でなかったことに気づき、いかに自分にプライドをもってプレーすることが大事なかが分かるようになった。岩田コーチも同様に一球入魂の魂を私たちに伝えようと、「気持ちだよーッ。気持ちで負けたら駄目なんだよーッ」

と熱く指導して下さった。茂手木コーチは守備練習で強烈な球足の外野ノックをして下さり、手の皮がベロンベロンにむけて手袋が血でにじんでも何百本とノックを打ち続け、私たちの、

「ノックもう一本お願いします」

の声に何度も何度もこたえて下さった。

野球部の活動は、4月から10月までのシーズン中と11月から3月のオフシーズンで内容が違っていた。シーズン中は毎週日曜日に試合が行われていたが、公式戦以外のゲームの時は、試合会場まで電車やバス、タクシーなどを乗り継いで行った。渋高の校庭では狭くて試合が出来なかったため、試合はいつも相手の高校のグラウンドを使用して行われた。県内のいろいろな高校と対戦したので、自然と交通アクセスには詳しくなった。またシーズン中には榛嶺会館に泊まり合宿を行ったが、1年生の時は改築前だったのでまだ古く部屋は2段ベッドが通路の両側に4組あるだけで、扉もついていない狭くて暗い部屋が続いていた。

試合のない冬場のオフシーズンは専らランニングとウエイトトレーニングで、特に足腰の強化を図るランニングのメニューは豊富だった。そのメニューは、渋高から水沢観音を折り返して帰ってくるという距離も高低差もあるコースのほか、マラソン大会のコースを通る6^{km}コース、渋高の周りを走る外周コース、さらに学校北の坂道をダッシュで上るコースなど多彩だった。

3年間甲子園出場を目指して一生懸命に練習に励んだが、3年生の夏の大会では惜しくも1回戦で敗れてしまい、私たちの高校野球は早々に幕を閉じた。その夏休みに野球部の仲間とキャンプに出掛け、川で釣りをしたり泳いだりして楽しく過ごした。卒業後は、野球部の仲間一人一人が自分の目標に向かって別々の道を歩み出し、みんなが離れ離れになってしまったが、キャプテンを中心に仲間が集まる機会をつくってくれている。現在でも夏は釣りやバーベキュー、冬にはスキーや競馬に出掛けるなど、みんなが都合をつけて集まり、とても楽しく幸せな時間を過ごすことができている。素敵な人と結婚して子宝にも恵まれ、一家の大黒柱としてしっかりと自立している仲間もいて、その仲間に出会う度に、「オレも頑張らないと」

とヤル気と勇気がわいてくる。

渋高の3年間は真剣に野球に打ち込み、毎日が充実し

た日々だった。今まで仲間が集まると、

「あの時こうしておけば」

と話すこともあるが、それも青春の思い出の1ページとして心に残っている。そして何よりも素晴らしい指導者の先生方とかけがえのない仲間に出会うことができたこと、そして今でもその仲間に出会うことができることに大きな喜びと幸せを感じている。これからも出来る限りみんなで都合をつけて集まり、酒をくみ交わしながら話ができれば幸せである。あの渋高での高校生活は二度と戻っては来ない。しかし、そこで出会えた仲間や経験したことなどは一生忘れることのない、何物にも代え難い宝物になっている。

私は現在、孺恋の小学校で教員をしているが、子どもたちには何かに本気で取り組んで欲しい。それがたとえ成功しなくてもそこから何かを学んで欲しい。そして一生の仲間と出会って欲しいと願っている。

—— 高校で得たもの ——

高校(全日制)50回卒 松岡 紘史

私が渋川高校を卒業してはやくも2年がたとうとしています。現在は新潟大学に通っています。大学に入り、ますます時間のたつのがはやく感じます。2年になり、より専門的な講義も増え、忙しい毎日です。大学に入って当初は、高校とのあまりの違いに戸惑いました。自分の時間が多く持てるようになり、自分の気持ち次第で何にでも挑戦できます。だからこそ何をやっていいのかわかりませんが、現在は多くのことを経験し、たくさんの思い出を作ることを意識しています。教授からの誘いによって、最近ボランティアに参加することになりましたが、それもこういう考えが原因です。実際のところ、高校のころでは行かなかったと思います。今は実際に行ってみてその難しさを感じています。ダイケアに通ってくる精神分裂病の方と、どうコミュニケーションを取ればいいのか全く分かりません。はやく慣れ、少しでも役に立てるようになりたいです。また大学には行ったらどうしてもやりたかった一人旅をこの夏やってきました。行き先は北海道でした。宿から移動手段まで全て自分で決めた、本当の一人旅です。旅先での出会いもあり、良

い思い出が出来ました。また一人旅がしたい、そう思わせてくれる旅になりました。この旅を通していつも誰かに頼っていた自分が少しは変わったことを願っています。ほかにも大学ではたくさんのことをやろうと心がけています。先日もみんなで福島までドライブに行ってきました。最高に楽しい旅行で、その後帰ってきてからやった飲み会もとても楽しかったです。旅行も飲み会も、見る人によってはくだらないことかもしれませんが、しかし私にとってはすべてが財産であり、大切な思い出です。大学でしか出来ないこと、将来振り返って笑ってしまうくだらないことを大学の仲間とするのが、今の目標です。

こうして忙しく生活していると2年前大学進学を目指し勉強していたことが、ずっと以前のこのように思います。高校時代、私はとにかく部活に打ちこみました。それしかなかったといっても過言ではないかもしれませんが。ほとんど休みというものではなく、毎日サッカーをやっていました。時には雪の日さえ、学校にきて雪かきをし、部活をしていました。疲れて家に帰り、すぐに寝てしまい勉強すら出来ないような生活でしたが、今思えばそれだけに充実もしていました。もちろん、練習は楽ではなく辛いものでした。正直行きたくないと思ったことがなかったわけではありません。また試合でうまくいかなかったとき、本当にやめたかった時期もあります。試合に出ることが出来るのか不安で不安でしょうがない時もありました。それでもやめることなく部活を続けられたことが私の自信になっています。今の生活の中で辛いことがあっても、自分は部活を3年間やりきれたという支えによって救われます。今になってあのころの苦しさが私の中でかけがえのない経験になっているのです。本当に3年間やり通して良かったと思います。それに部活で遠征に行ったことも印象的です。東京や横浜、新潟などにも行きました。強い高校や大学生との試合で、自分たちの力の無さが分かり、よりいっそうがんばることが出来ました。夜更かしをし、翌日の試合が辛かったことも覚えています。どの遠征も旅行に行っているようで楽しかったです。すべてが私の中で良い思い出になっています。今大学で、出来るだけ思い出をつくっていかうとしているのも、これらの良い思い出に影響されていることだと思います。

また私は部活を通して、生涯の友を得ることが出来ま

した。何年先になっても忘れることのない奴らです。3年間も一緒に活動していれば、もちろんめ事も少なからずありました。多かったといったほうが正確かもしれませんが、些細な理由から口を利かない日が続いたり、口論をしたり、みんなそれだけサッカーに対して一生懸命であったのだと思います。だからこそ大会で勝った時などは本当にみんな素直に喜ぶことも出来ました。ぶつかり合い、喜び合ったからこそ、分かり合えたのだと思います。今でも、みんなサッカーを多分やっているのではないのでしょうか。私自身、大学でサークルに入り、サッカーを続けています。サッカーを忘れない限り、私たちはすぐにあのころへ戻れるような気がします。ですから私たちはいつまでも良き友でいられる気がするのです。正月にはまたみんなでOB戦に行きます。今から再会が楽しみです。

ほかにも高校では多くの思い出があります。普通の授業でのことや修学旅行のことマラソン大会、大学受験などなど、数え上げたら切りがありません。今思い出しながら、高校3年間が内容の濃いものだったと改めて気づいています。苦しかったこともうれしかったこともすべてが、私の高校生活の一部として思い出されます。どの経験もこれからの人生の糧になるものであり、決して忘れられないものばかりです。

私はこうして洪高で、かけがえの無い経験と友を得ることが出来ました。ですから、在校生、そしてこれから洪高に入学し学んでいく人たちにも、高校での3年間だからこそ出来る経験と出会いを大切にしたいと思えます。私は80年という長い伝統のある洪川高校の卒業生であることに誇りを持ち、その名に恥じることなくこれからもがんばっていかうと思えます。

—— われ托鉢僧のごとく ——

高校（定時制）5回卒 小山 宏

「六三制」という言葉は、今ではやや死語になりつつあって、高等学校からまた何らかの学業に進むのがあたり前のように、誰もがそういう感じにいるらしい。

全国都道府県、市町村にも教育委員会という組織があって、この方面の行政の議決は委員会、執行の責任者は

教育長である。

昭和30年代（1955）のある時、渋川市教育委員会の課長（後、助役）がある話し合いの席上で、「市役所なんかじゃ大学出は必要ない」、「高校だっていらなくらいだ」といい放ったことがあった。

もちろん、学歴と人格や実力は、また、別の視点からの評価であろうが、果たしてそれは全部妥当なのかどうか、今日までも通用することだろうか。

夜学の生徒は勤務先の雇い主に大変気を使い、あるいは、家庭内での無理解と経済的な理由から在籍がままならず、1割以上の生徒がゴールを迎えられないで、一人欠け二人欠けしても、だれも、その先を追究したり、口に出して言う者はなかった。そして、妙なことに進学する者も、何か申し訳ないことでもするかの如く、遠慮がちでこっそり受験し、合格しても他人に話をしたり、まして、声をあげて喜ぶ、飛び跳ねることなどは全然なかったのであった。

私が同窓会にかかわったのは、生徒としての在学中、3年生のときからだった。1学年下級生に、後に高崎高等学校長になった古川功氏がいて、彼が同窓会の席上「在学中に同窓会費を徴収するのはおかしいのでは」というような発言があった。そして、その同窓会が一瞬しりゃムードになった。

同様の立場である生徒の私が、変に大人じみた事を発言して、その場は過ぎた思い出がある。

以後、私も工業高校職員となって群馬県下の高校の組織、校長、教頭、事務長の三役会議にも出席したりした中で、必ずしもじっくりゆかずにいたのは、あの時のわだかまりがあったせいかも知れない。

実際、こうした理由で、洪高校内での騒動は、時をへだてて、同様の内容のことが幾度か問題視されてきたように思う。

その時の理屈に私はこんな事を言った覚えがある。「皆が普段何気なく使っている建物や施設は、群馬のものだけでなく、先輩の多くの人たちが年々にわたり同窓生の方々の貴い寄贈や芳志によって充実されてきたことによるものである」

また、「学び舎を与えてくれた周囲に感謝しつつ、また、後の学生にも何がしかを残してゆく、在校生にもその気持ちや支援を表わす気持ちがあって当然では……」と言い、その当然というのが気に入らないとか少しもめ

たが、尻つぼみでその時は荒波にはならなかった。

ところが歴史はめぐると、竹園一校長の代にはこれが再燃してさすがの名校長も「サジ投げたといってイスにのけぞった」。同窓会の強者、土屋、田部井、牧の諸先輩、私なども卒業式の会場で学校側の応援団としてはせ参じ、随分と大きい声の応酬も二、三あった。

思えば同窓会の役員と言うのは、寄付金の徴収役員とも言えるか、常にそんな役務が主任務であった様な気がする。

私ごとき軽輩な者でも、四ツ角中心にして上部と南が寄付金徴収区域であったり、重ねて職場単位では地元として就職した人数の多い市役所と農協とか、これに学年割りの区分が入ると地域割り、職種割り、学年割りの三重分担となって大変なグラウンドを駆けめぐることとなった。現在の様な学年割りが定形化してから、まだ日が浅いのである。

個人のお宅へ行くと、会社へ行けという。会社へ行くと、個人宅へ行け、さらに昼間はダメだとか。人によっては、「オレは洪高は出たが、洪高に世話になった覚えはない！」といった高僧のお言葉もいただいたり、医者になった人から「一応先輩だから」なんて、あたかも乞食への投げ銭のようなお金もまずはいただき、熱い気分を抑えに抑えて持ち帰って学校へ納めたこともある。

市役所の中は取りに歩くとほとんどの者が終始黙って一言も言わず金をだした。とても気分が良い感じではない。「オレはいいよ！」と言う人もいた。意味はよく分からないが、総じて仕方ないからというのが顔に書いてあるように思えた。

昔、だれかが私に教えてくれる人があった。「人は金を払う時に素顔を見せるものだ」と。なる程、学校では決して教わらなかった数々を学んだ。

中には、「うちの倅は洪高へ入学できて大変に世話になった。高崎や前橋へ通ったら大変な出費ですからネ、少しの金では替えられない、学校の雰囲気も良いし」と一辺に秋晴れの感触を受けたが、これはたった一度の印象であった。大方は母親の方が経済的な面でも現実的なのだとも感じた。

古来、幾多の高僧がその人徳と、強要しない布施によって自らを養い、他人の救いの場として寺や施設の建立にまで実力をみせた。その努力が少しは伝わってくる。

私は、旧群馬郡誌の原稿を活字化した『北群馬渋川の

歴史』の編集の余力で、洪高の校誌編纂と聞くや八方を飛びまわり、随分と資料調査に昼夜の時間をさいた。仕上がりしてみると、同窓会員のだれその功績みたいなものには表敬されていなくて、収集の基礎資料の所在も後学に引き継ぎされてないようだ。極めてはり合いのない無念な感じだけでなく資料性が問われる。なかなか同窓会の正体はとらえどころのないものである。

つい先だって、医療団体の顧問弁護士などの集まる会合で「患者」と言う言葉が問題になった。「患者」というのは差別用語だからだという。大きな病院の医院長に聞いたならば「うちでは患者様といっている」という。あまり持ちあげて過剰医療になっては、などと大爆笑。

しかし、前記の一応先輩ということ不可解のまま胸に秘めていて、地域医療功労賞の対象選考の折に、世評とはまるで違って、私らが市の意向として推挙したら賛成が得られなかった。このことと、あるいは共通するのかも知れない。

どうして今時くどく書くのかと言えば、去る六月、私は昨年に続いて全国博物館館長会議（H11・6・29、東京大学）の通知を受けて今年も出席した。ドイツの教育実践者ヨッヘン・ボーベルグ氏（ベルリン博物館）の基調講演の中で、彼は、「人は試行錯誤を繰り返しながらでしか、ものが分からない」のだと強調する。

日本流でいえば「温故知新」ということだが、当世ではこれも死語になりつつある。しかし、定年後まで群馬の社会運動をしている井上輝雄氏によると、隣国である韓国の「日帝侵略館」とか「独立記念館」には歴史資料館として日本が侵したさまざまな事実が展示公開されていて、同国の学校の全生徒が見ており、ほとんどの一般国民が見ているという。

これを聞くと、自己に都合のよいことは忘れてしまったり、あるいは半世紀も昔のことだとか、「既に戦後ではない」などとはとても言えない。しかし、自分や自国が受けた苦汁は、海のはるか彼方のことでも決して忘却した目で許してもらってはいない。日本が今日あること、そのいまわしい過去は、現実問題と意識され続けていることに思いつかねばならないようだ。

つまり学校の校誌も、同窓会の足跡も全く同じであろう、救国の英才が続出する洪高に希望を託して、同窓会の末席を汚している。

——卒業記念の約束を前に——

高校（定時制）6回卒 松下秀夫

原稿依頼を受け一旦はお断りしたものの、良く考えてみると、同級生の古川功君が存命なら多分投稿したであろう。が、残念なことに平成10年7月14日、60歳の若さで余りにも早過ぎた無念の旅立ちにつき、私があこのクラス委員をしていたこともあり乱文は承知で引き受けることにした。

私の家は農家で、畑六反田圃は無く、両親は毎日芋と麦の草むしりに明け暮れていた。学用品を買う金欲しさに朝は5時に起き草むしりを7時ごろまで手伝い、それから麦飯を食べ3キロ離れた山道を走って通学した。帰ってくれば休む暇もなく籠を背負って草刈りに出掛けた。夜は疲れてぐったり、これでは勉強する間がない。なんとかしてその時間を生み出さなければと考えた末、中学一年の夏休みの研究として「古き畑の改良」と題しレポートを学校に提出した。

天気の良い日は良く下の堤に水浴びに出掛けた。その辺りは田圃に稲が青々としていた。水さえあれば堤の上の方でも田圃が出来るのでは、と考えた。幸い裏の小川にはいつも水が流れていた。第1ステップとして畑の片隅に1坪ほど粘土を少し入れ、堆肥を入れ毎日風呂の捨て水をバケツでくみ出して運び、6月には苗を少しもらって植えた。ノートに成長記録を毎日書き留めた。半年



程研究したところ普通の田とは比較にならないが、それでも秋には稲穂が垂れ下がりますますの出来であった。

翌年第2ステップとして裏の川から水を引き30坪の畑を改良した。秋には30^{kg}の米が取れた。畑の場合草むしりを何度もしなければならぬが、田圃では1回程度で済み大分楽であった。翌々年は1反歩に増やしたところ川の水が綺麗なせいか蛍が数匹飛ぶのが見られ、秋には米が6俵出来計画していた勉強の時間が取れるようになった。

初めは笑って相手にしなかった近所の人たちも、このころになると段々と田圃に変えていった。4年目、私の家も2反歩に増やし現在も続いている。

昭和27年、豊中を卒業すると同時に近くにある大同製鋼へ入社。この2年前朝鮮動乱が勃発したが休戦協定と共に鉄鋼需要が減少し不況となり本採用になれず1年間臨時工の雑役であった。3カ月毎に契約書を書くのが辛

く、会社では150人の人員整理等も行われ、ストライキも続いた。このままでは将来が不安となってきた。考えて1年遅れで夜間の高校へ通うことにして受験した。200人も人が受けたのにびっくり。半ば諦めていたところなんとか120人の合格の中に入れた。クラスは60人の2クラスでぎゅうぎゅう詰めである。昼働き夜学ぶことは大変である。作業現場からまっすぐ地下足袋や印半纏を羽織ったまま登校する者もいた。早く学校に行かないと売店のパンが売切れてしまう。またお金がないので毎日買うことも出来な



かった。自宅、会社、学校と8^{km}の道を中古の自転車で通うのは天気の良い日はいいが、雨の日は辛かった。

理科の担当は針塚友三郎先生、夏の暑い実験室で急に大きな声で「松下!!」と怒鳴られた。なぜかすぐには分からなかった。仕事は1年過ぎたので高熱作業の測熱係で現場作業のため、疲れとやっと買って食べたパンの満腹感でついうとうととやってしまったのだ。先生とはこれが縁で長滞まで自転車旅行をした。行きは良かったが帰りは風でこげどもこげども自転車は進まず、腰が痛くなりやっとの思いで帰って来た。

昭和31年、修学旅行は奈良に行った。私も含め6人の旅行委員が中心となり行先、見学地、日程等の計画を自主的に立てた。引率は化学の池田、社会の田浦、体育の藤井先生たちと女性の事務員が1人付いてくれた。2泊3日の連泊の予定だったが、2泊目にハプニングが起きた。宿の方の手違いでだぶって予約を受けてしまったというのだ!! 女将から土下座をされなんとかほかに宿を見つけるから移ってくれとのことでいろいろとすったもんだの末旅行委員で討議の結果、結局私たちが宿替えをした。やはり上州人は人が良いと思った。今まで何度も旅行をしたが、旅行中に宿替えをさせられたのは初めてで、今でも思い出すと懐かしい。

体育は塩原先生、夏は明るいので外で鉄棒を使って蹴上がりの特訓、冬は暗い電灯の旧体育館であった。それでも入学後一年もすると慣れてクラブ活動にも目を向けるようになった。部活ではバレーボールが中心で、藤井清司先生が担当、ジャンプの練習をする度に床がガタピシ音がして時々穴を開けた。決まって私が、書道担当で主事のヤギ先生こと小松恭己先生に謝りにいった。いつも先生はニコニコして話を聞いてくれた。温顔で山形なまりの張りのある声は温かく、懐かしさがあった。後で聞いた話だが、あの暗い体育館の電灯も先生が中心となり夜学生のために北群馬、勢多を含む近隣に何度も訪問され、基金を募りやっとのことで点灯したのだと聞き、あの時は暗いなどと言って申し訳なかったと反省している。

昭和32年、卒業を記念して恒例の元旦水沢登山を実施、下から竹竿や旗を持って登り、山頂で旗を上げ、初日の出を拝み全員で寄せ書きをし、瓶に詰め土中に埋めた。21世紀の元旦に元気な人は集まろうと約束して下山した。

第6回卒業生は定期的に親睦を図り、55年、奥利根観光ホテルに小松先生夫妻をお呼びして謝恩の会をにぎやかに持ち、その翌年に先生は御他界された。1年後、有志で北橋村の玉泉院に墓碑を造り、先生を偲ぶ書物の刊行がなされた。5月27日の命日を雅号の「千峡」にちなんで千峡忌と名付けられた。

定時制も平成10年3月で閉校となり、なんだか淋しさがこみ上げてきます。

私は、平成9年3月、定年を迎え、体調を崩し翌年1月、甲状腺の手術を受けた。今までただ突っ走るだけだったが、病気を通し静かに人生を見つめ直すゆとりを持つことが出来た。

現在は、無農薬で自給自足をめざして農業を一から勉強し、また合間に妻と車で坂東、秩父の札所巡りを楽しむ毎日である。



——創立80周年に寄せて——

関東電化支部
高校（全日制）8回卒 田子賢二

県立渋川高校創立80周年記念誌の発行をお祝い申し上げます、ご依頼に合わせ、寄稿致します。

渋高の同窓会の中で、関東電化工業(株)渋川工場が単独の支部として認められたのは、何時ごろのことでしょうか？あまりはっきりとした記録がありません。

しかし、会社の創立60周年を迎えた関東電化の歴史の中で、地元の渋川中学、渋川高校から、数多くの人材が就職し、活躍して、会社の業績に大きく寄与したことは明白であり、改めて記述するまでもありません。



同じ学校を出て、同じ会社に就職したとの連帯感が、仕事の上で大いに役立ちました。悪く言えば学閥ですが、そんな雰囲気のカケラも見られない、真面目な支部でありました。

ほとんどの支部が、出身の支町村、就職後の住所単位である中、異色な支部であったと言えます。

数字で言えば、会社創立以来2000名が従業員として名を連ねた中で（戦時中もあり、数字は不明確）、およそ100名が洪中、洪高の卒業生であり、会社でも一大勢力を占めていました。支部として独立したいゆえんでもありません。

支部の会合は、懇親会を兼ねた春の新入社員や定年者の歓送迎会、暮れの忘年会などであり、毎年定期的開催されました。

20年～30年前はバスを仕立てて県内の温泉に繰り込み、バスの中ではビール、酒を充分堪能し、旅館へ到着した時にはかなり酔っ払って、懇親会になだれ込む。あとは何だかんだか分からず時間がたつてのち解散、落花浪籍のていたらくでした。

最近はおとなしく、現代風に各自現地集合して、懇親会は少しにぎやかに、羽目も外します。

歌は昔からいつも決まっておき、洪中・洪高の校歌を、会の終わりに全員で輪を作り、肩を組みあって高らかに青春時代に戻った気持ちで歌ったものでした。

関東電化支部として、若干、会社の紹介を致します。

関東電化工業(株)は、洪川の地に、昭和13年9月、佐久発電所（当時、関東水力発電）の電力を活用するため、また第二次世界大戦の折から、戦闘機の材料、マグネシウムを生産する目的で設立されました。

戦後、平和産業として衣替えし、塩水電解で生成する苛性ソーダ、塩素、水素を製品に変え、再生致しました。

現在ではエレクトロニクス、医薬、農薬、情報産業分野で、大きく成長、発展を遂げています。

画期的なフッ酸電解技術の確立による6フッ化硫黄、4フッ化炭素、3フッ化窒素、6フッ化エチレン等の半導体製造用ガスをはじめ、世界に先駆けて開発された、オーディオ、ビデオテープ用の磁性合金粉「MAP」、複写機用キャリアー、現在主力製品として展開しているファイン製品の数々は、独創の技術開発を自負する当社ならではの研究成果です。

また、品質管理の維持、向上を目指して、品質管理の国際規格ISO9001の認証を取得し、ユーザーの要望に逸早く対応出来る体制を整えております。

そして環境問題が日に日に高まりを見せる中、企業にとって環境対策は、今や、最重要テーマです。

特に、ある種の化学物質は、オゾン層破壊、地球温暖化の一因とみなされており、化学会社としてそれらへの対策は急務であると同時に、責任ある行動が求められます。当社は環境問題にいち早く取り組み、国連環境開発会議で採択された行動計画「アジェンダ21」に賛同、化学物質の総合安全対策を実行し、改善を図る自主活動「レスポンスブルケア」を推進する会社であることを宣言しています。

具体的な活動は、洪川、水島両工場ではISO14001の認証を取得し、環境対策を掲げて第三者による評価を受けることと致しました。

さらに生産過程への細心の配慮はもちろん、大気中へ排出される有害なガスを無害化する「排ガス処理装置」をはじめ、産業廃棄物処理設備を世に送り出すなどユーザーへの啓蒙も含め、地球環境、自然との調和を実践しています。

さて、ここで我が先輩の中で印象の深い、方々を紹介しておきましょう（敬称略）。

関代五郎 いつもここにこ、穏やかな、しかし仕事はきちんとかなす人。今は市内の某自治会で活躍。

田中米二 工場の電気関係を一手に引き受けた、偉大な方。温厚で、物静か、勉強熱心。

佐藤威雄 経理のベテラン酒豪と言うより、酒仙。酒の席で割り箸を袋から出さないのが有名。

石関壯之 原料購入、製品出荷関連に従事。人の面倒見は誠によいが、瞬間湯沸器と言われるほど怒りっぽい人。

桜井信雄 市政に関心を持ち、市議員を2期を務めた。酒も強く、酒豪として社の内外になりひびく。

千木良要 お酒を飲むとメチャにぎやかになる。倉敷のデパートの屋上で、八木節を踊ったのは有名。

井田保之 経理で活躍。酒が強く食べるにも強い。いくら食べても太らない幸せな体質。スポーツ万能。親父さん、子供と3代で関東電化に奉仕。

戦後のお酒のなかったころは、酒好きの方々は、酒の入手に苦勞して、実験用のエチルアルコールまで飲んだとのこと。先輩方で酒の強かった人も多かったが、中には酔って平沢川に落ちたとの噂もあり。

反町貞彦 市議員、2期。山口鶴男氏の秘書も務めた。バレーボールでも活躍。

後藤和令、小池忠彦 ゴルフのシングルプレイヤー。都市対抗で活躍。

木暮 滋 野球では投手で活躍。洪川市の県大会予選で完全試合を達成した。

今は進学校になって、洪高から高卒で就職する若者は極めて少なくなりました。

進学して、大学卒での入社にはありますが、出身地へのUターンに魅力がないのか、地元の企業のPR不足なのかですが、これも数少なく、県内の他校（群馬高専、洪川工業、洪川青翠高、前橋工業、高崎工業など）に人数では負けています。

会員も35人程度、高齢化が進んで、10年もたつと半減しかねません。

日本の国として、また群馬県、近くは洪川市周辺でも、製造業、ものづくりの発展が不可欠です。必要条件です。

最近ものづくりに関して、基本法案が国会でも成立しましたが、国を、県を、町や村を興すには、資源の少ない島国の宿命で、外国から資源を購入して、付加価値の

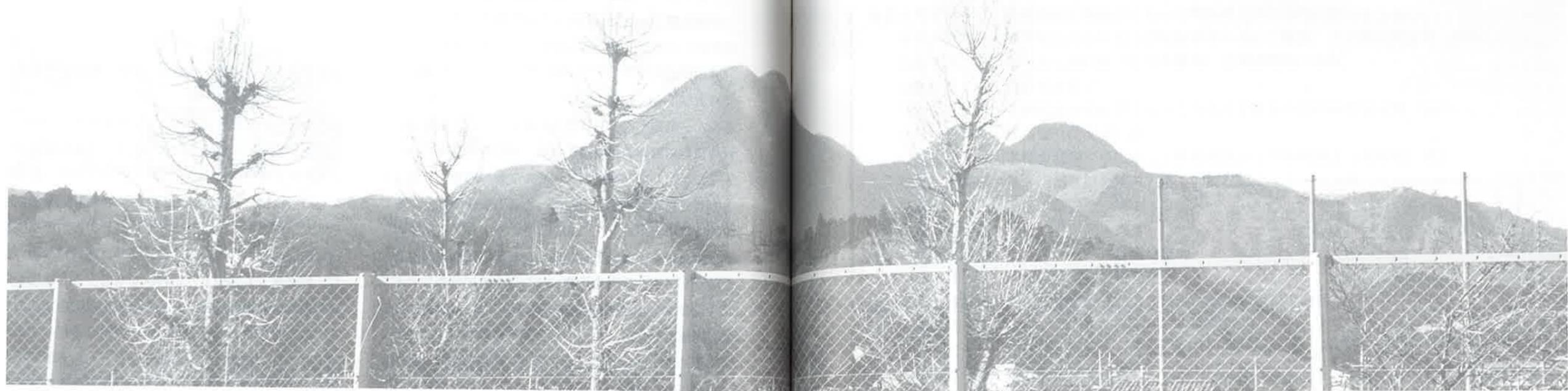
高い製品に加工して、利益を得る方法しかありません。そして、関東電化はその製造業の一翼を担っているつもりです。

洪川中学、洪川高校は創立以来80年にわたって、洪川市およびその周辺の広域圏の、さらに群馬県への発展に寄与してきました。

その歴史と伝統を誇りとして、胸を張っているいろいろな分野で活躍してもらいたいものです。3Kを嫌って、単にきれいで華やかな仕事に憧れ、興味を示し、勉強の出来ない子供は、仕事のきつい3K職場の製造業に従事するしかないとの誤った人生観をもつPTAの母親族的考えに翻弄されてはいけません。科学、理科系へ関心を持ち、製造業、ものづくりに興味をもち、3K職場なら改善し、働き易い職場に変えようとの、前向きな気力を示していただきたいものです。

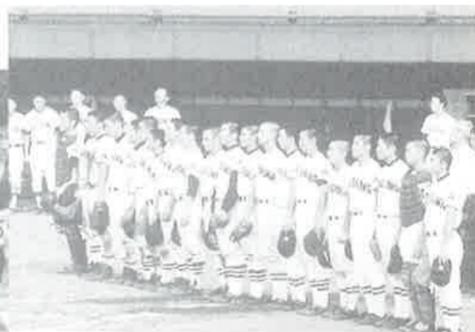
そして日本の国力を挙げようと、また世界で一流と言われる国を維持していこうと考えておられる卒業生並びに生徒の諸君並びに製造業に関心の高い若者の皆さん。当社を目指すよう希望し、また、その気概に大いに期待致します。





北毛の雄

この10年間の歩み



学校の沿革

- 大正9年3月5日 群馬県告示第54号をもって群馬県立渋川中学校設立を公布
9年4月20日 群馬県渋川市渋川小学校仮校舎において開校 5学級生徒定員 250人
10年4月27日 本校舎生徒控室（雨天体操場）附属建物竣工移転
10年12月2日 校長官舎竣工
11年3月29日 群馬県告示第81号をもって大正11年度から10学級生徒定員 500人
11年11月15日 寄宿舍（済美寮）竣工
12年4月2日 本校舎西側に平屋建て1教室増築および特別教室（理科室）竣工
12年4月20日 第3回創立記念式典 第1回開校記念マラソン大会
12年5月30日 講堂（奉安殿）竣工
13年4月19日 開校5周年記念式典
13年6月24日 テニスコート、野球場整地
14年3月2日 第1回卒業証書授与式
昭和3年1月23日 特別教室2教室および雨天体操場西側70坪増築
3年3月5日 スギ、カシワ、ケヤキ 1,000本植樹
3年11月5日 校旗制定 校歌『炎焔の山』（川窪千峰作詞 平岡均之作曲）制定
5年4月6日 創立10周年記念式典
10年3月24日 特別教室（図画教室）増築
10年7月24日 佐藤次郎胸像除幕式
11年3月6日 本校舎補強
15年3月31日 群馬県告示第160号をもって昭和15年度から15学級生徒定員 750人
15年11月26日 本校舎東側2階建て4教室、西側2階1教室増築
23年4月1日 学制改革により新制高等学校に移行し、新制中学校を併設
23年4月25日 校章制定（長野 萬制作）
23年10月1日 高等学校定時制開校 8学級生徒定員 400人
24年3月14日 高等学校第1回卒業証書授与式
25年10月6日 創立30周年記念式典
25年10月21日 寄宿舍の大半を図書館、集会室に改築
26年3月31日 全日制12学級生徒定員 600人
27年1月15日 校歌『自由の子』（佐藤春夫作詞 信時 潔作曲）制定
28年3月23日 校舎および渡り廊下（325.25坪）増改築
28年3月31日 玄関（7.5坪）増改築 校庭（1,200坪）拡張
28年4月1日 全日制15学級生徒定員 750人
29年5月31日 校庭整地（テニスコート4面）
29年11月7日 佐藤次郎胸像再建除幕式
32年4月9日 新校旗制定
32年7月16日 体育館（210坪）増改築
33年2月3日 生徒用便所（18坪）竣工
36年7月21日 講堂および渡り廊下（266.87坪）増改築
36年11月10日 創立40周年記念式典
36年11月23日 音楽教室移転
36年12月4日 宿直室（4.625坪）増築
37年4月1日 全日制18学級生徒定員 900人
38年3月31日 本校舎3階建て6教室（735m²）竣工

- 昭和38年4月1日 全日制21学級生徒定員 1,050人
- 39年10月24日 音楽教室を講堂南側に移転
- 41年3月31日 本校舎(1,060㎡)増築(第1期)
- 42年3月20日 本校舎(1,149㎡)増築(第2期)
- 42年9月18日 南部室3戸(63㎡)竣工
- 43年3月30日 本校舎(1,015㎡)増築(第3期) 柔道場(284㎡)竣工
- 43年4月1日 全日制生徒定員 1,029人 定時制1学級減、4学級生徒定員 192人
- 43年8月3日 図書館移転
- 44年3月31日 本校舎(433㎡)増築(第4期)
生徒昇降口(87㎡)、公仕室・宿直室(80㎡)増築
- 44年4月1日 全日制生徒定員 1,008人、定時制生徒定員 184人
- 44年10月6日 校庭整地および植樹
- 45年4月1日 全日制生徒定員 987人、定時制生徒定員 176人
- 45年10月31日 創立50周年記念式典
セミナーハウス<記念会館>(451㎡)竣工、第2グラウンド竣工
- 46年4月1日 全日制生徒定員 966人、定時制生徒定員 168人
- 47年3月31日 中庭部室(79㎡)竣工
- 47年4月1日 全日制1学級増、24学級生徒定員 1,080人、定時制生徒定員 160人
- 49年3月30日 本校舎4階(1,085㎡)増築
- 50年1月30日 『渋高五十年史・上』発行
- 50年2月25日 『渋高五十年史・下』発行
- 52年2月25日 女子更衣室(14㎡)、女子便所(18㎡)、定時制保健室(12㎡)竣工
- 54年4月1日 定時制男女共学に移行
- 54年10月27日 創立60周年記念式典
- 56年3月5日 北校舎(730㎡)、北部室(90㎡)竣工
- 58年3月31日 講堂兼体育館(2,127㎡)、音楽教室棟(432㎡)竣工
- 59年3月28日 中庭部室(210㎡)、自転車置場竣工
- 59年12月25日 本校舎改修(第1期)
- 60年9月30日 本校舎改修(第2期)
- 61年2月10日 南部室改修
- 61年7月12日 佐藤次郎胸像移設除幕式
- 61年12月24日 格技場(534㎡)竣工
- 63年4月20日 第1回開校記念講演会
- 63年8月31日 正門移設
- 平成2年12月1日 創立70周年記念式典
- 2年12月1日 セミナーハウス<榛嶺会館>(688㎡)改修・増築
- 6年3月10日 校舎新築<1F 公仕室・生徒昇降口、2F 会議室、3F コンピュータ実習室>(787㎡)
校庭改修整備
- 6年3月27日 「渋中・渋高校歌の碑」除幕式
- 7年3月27日 家庭科教室改修
- 7年4月1日 定時制課程生徒募集停止
- 8年4月1日 全日制1学級減
- 10年3月14日 定時制課程閉校式 「働学修己の碑」除幕
- 10年4月1日 全日制21学級、生徒定員 840人
- 12年11月4日 創立80周年記念式典

年表(70周年以降)

平成2年(1990年)

- 2. 1 大雪のため第3限で生徒放課
- 2. 26 2年生の志望校検討会(初の試み)
- 3. 1 卒業式
- 3. 24 終業式
- 4. 7 始業式、入学式
- 4. 20 開校記念日
開校記念講演会「数学、歴史、経済学」
(東大教授 馬場 宏二氏)
- 5. 12 県高校総体で総合4位
- ~14 卓球個人優勝(本多輝行選手)
- 5. 19 P T A総会
- 5. 23 関東大会壮行会(レスリング、バレーボール、ソフトテニス、卓球、剣道、空手道、山岳)
- 6. 2 同窓会総会(於 上州物産館)
- 6. 8 記念会館増改築に伴う荷物の搬出開始
- 6. 23 榛嶺祭
- ~24
- 7. 2 対沼高定期戦(職員戦)
- 7. 7 対沼高定期戦(部戦)本校V6達成
- 9. 6 音楽教室(渋川市民会館)
- 9. 22 座談会「同窓の恩師は語る」(14:00~会議室)
- 9. 27 座談会「同窓校長は語る」(10:00~図書館)
- 11. 14 スキー部ヨーロッパ遠征(松本和也選手)
- ~12. 7
- 11. 15 開校記念マラソン大会
- 12. 1 創立70周年記念式典

▼国内外の動き

- 2. 11 南アフリカ共和国の黒人解放指導者ネルソン・マンデラ、28年ぶりに釈放される
- 2. 27 第2次海部内閣発足
- 3. 13 ソ連、ゴルバチョフを初代大統領に選出
- 6. 10 ベルーの大統領選で日系のフジモリ当選(7. 1来日)
- 6. 29 礼宮親王と川嶋紀子さんが結婚、秋篠宮に
- 8. 30 ソ連サハリン州のコンスタンチン君(3歳)が大火傷、札幌医大で緊急手術
- 9. 2 子どもの権利条約が発効
- 10. 3 東西ドイツが統一される
- 11. 12 天皇陛下、即位の礼
- 12. 2 T B Sの秋山豊寛が日本人初の宇宙飛行

平成3年(1991年)

- 1. 30 予餞会
- 2. 13 修学旅行
- ~18
- 3. 1 卒業式
- 3. 23 終業式
- 4. 8 始業式、入学式
- 4. 20 開講記念式典
開校記念講演会「戦中・戦後から技術大国日本へ」
(東海大工学部教授 青木 三策氏)
- 5. 11 県高校総体(総合5位)
- ~12
- 5. 18 P T A総会
- 5. 21 関東大会壮行会(ソフトテニス、テニス、卓球、剣道、空手道、山岳)
- 6. 1 同窓会総会
- 6. 8 対沼高定期戦(部戦<野球>)
- 6. 22 対沼高定期戦(実行委員戦)
- 7. 6 対沼高定期戦(部戦)
- 7. 8 ドイツからの留学生2名
- ~10
- 7. 9 音楽教室(渋川市民会館)
- 7. 17 対沼高定期戦(一般戦)
- 7. 20 全国大会壮行会
- 10. 2 体育祭
- ~4
- 10. 14 渋高・渋女合同写真展(東電渋川営業所)

- 1. 16 米軍を中心とする多国籍軍、イラク空爆を開始、「砂漠の嵐」作戦と命名(湾岸戦争勃発)
- 1. 24 政府、湾岸戦争支援策として多国籍軍に90億ドルの追加支出と自衛隊輸送機の派遣を決定
- 4. 1 東京・新宿に新都庁舎開庁(高さ243m)、総工費1570億円
- 5. 14 滋賀県・信楽高原鉄道で普通列車と臨時列車が正面衝突(42人死亡、負傷者614人)
- 6. 3 長崎県・雲仙普賢岳噴火で大規模な火砕流が発生、集落を焼き住民が避難(消防・報道関係者ら死者37人、行方不明4人)
- 6. 17 南アフリカ、アパルトヘイト体制を終結宣言
- 8. 24 ソ連・ゴルバチョフ大統領、共産党の解散を勧告し、書記長を辞任(74年の共産党支配に幕)
- 8. 27 経企庁が8月の月例経済報告、景気拡大は57カ月となり、過去最長の「いざなぎ景気」と並ぶ
- 9. 17 国連総会、南北朝鮮の国連一括加盟を承認

～31
11. 14 開校記念マラソン大会

平成4年(1992年)

1. 29 予餞会
2. 13 修学旅行
～17
2. 4 留学生マシュー・ワイ・ポイ君帰国
2. 20 1年生スキー教室
3. 2 卒業式
3. 24 終業式
4. 7 始業式、入学式
4. 20 開校記念日
開校記念講演会「私、海運、そして客船」
(商船三井客船KK社長 相崎 幸二氏)
5. 16 県高校総体で総合2位
～18
5. 19 P T A総会
5. 26 関東大会壮行会(ソフトテニス、テニス、空手道、卓球)
6. 6 同窓会総会
6. 12 榛嶺祭仮装行列
6. 13 榛嶺祭
～14
6. 19 柔道留学生トミー・ヒューラー君来校(～7. 4)
7. 2 対沼高定期戦(職員戦)
7. 11 対沼高定期戦(部戦)
9. 11 演劇教室
10. 6 体育祭
～7
11. 18 開校記念マラソン大会
11. 21 クリーンハイク

平成5年(1993年)

1. 29 予餞会
2. 15 修学旅行
～19
2. 23 1年生スキー教室
3. 1 卒業式
3. 24 終業式
4. 7 始業式、入学式
4. 20 開校記念日
開校記念講演会「医学における最近の話題」
(帝京大学医学部教授 木野内 喬氏)
5. 15 県高校総体(総合8位)
～17
5. 22 P T A総会
5. 25 関東大会壮行会(ソフトテニス、テニス、剣道、空手道、卓球)
6. 5 同窓会総会
6. 26 対沼高定期戦(部戦)
7. 9 音楽教室(澁川市民会館)
7. 1 対沼高定期戦(職員戦)
7. 15 対沼高定期戦(一般戦)
9. 1 英語指導助手ゴードン・マックバーニ氏着任
9. 9 台風14号による影響で午後は放課

11. 5 臨時国会、宮沢喜一を首班指名(宮沢内閣)
12. 25 ソ連・ゴルバチョフ大統領が辞任を表明、最高会議共和国会議がソ連邦消滅を宣言

2. 8 第16回アルペールビル冬季五輪開幕
日本チームはスキーノルディック複合団体で優勝
3. 14 東海道新幹線に「のぞみ」登場
4. 6 ユーゴスラビアのボスニア・ヘルツェゴビナ共和国が非常事態宣言、民族衝突で内戦状態に
7. 25 第25回五輪・バルセロナ大会開幕、女子200m平泳ぎで岩崎恭子(13歳)が優勝
日本は金3、銀8、銅11の計22個のメダルを獲得
8. 18 東証平均株価終値が1万4309円、6年5カ月ぶりの低水準(バブル景気の終焉)
9. 12 米スペースシャトル「エンデバー」打ち上げ、日本人初の毛利衛が搭乗(9. 20帰還)
9. 17 P K Oによる自衛隊のカンボジア派遣部隊第1陣が出発(10. 13本隊が出発)
10. 23 天皇・皇后両陛下が中国を御訪問
11. 3 米大統領選で民主党ビル・クリントンが当選

1. 1 E C統合市場が発足、12カ国が単一市場
3. 27 中国共産党・江沢民総書記が国家首班に就任
4. 23 天皇・皇后両陛下、初めて沖縄を御訪問
5. 15 日本初のプロサッカー「Jリーグ」が開幕
6. 9 皇太子殿下、小和田雅子さんと結婚の儀
6. 21 新生党結成、自民党から44人参加
6. 29 東京地検、ゼネコン汚職で石井亨仙台市長、ハザマ会長らゼネコン4社の幹部らを逮捕(その後も竹内藤男茨城県知事、清水建設会長、本間俊太郎宮城県知事、大成建設副社長、鹿島副社長、斉藤英了大昭和製紙名誉会長ら逮捕続く)
7. 7 先進国首脳会議(東京サミット)開催、エリツィン・ロシア大統領を協議に加える
7. 12 北海道南西沖地震が発生(マグニチュード7.8、死亡・行方不明231人)
7. 18 第40回総選挙(自民過半数割れ、社会

10. 6 体育祭
～7
11. 17 開校記念マラソン大会
11. 20 渋高・渋女合同クリーンハイク

平成6年(1994年)

1. 27 予餞会
1. 31 バレーボール県新人大会ベスト4
2. 12 修学旅行
～16
2. 14 「校歌の碑」完成
2. 22 1年生スキー教室
3. 1 卒業式
3. 24 終業式
4. 7 始業式、入学式
4. 20 開校記念日
開校記念講演会「道心の中に衣食あり」
(深大寺住職 谷 玄昭氏)
5. 13 県高校総体(総合8位)
～15
5. 21 P T A総会
5. 25 関東大会壮行会(空手道)
6. 4 同窓会総会
6. 17 榛嶺祭仮装行列
6. 18 榛嶺祭(ティーチャーズショー終了間際、体育館ステージ前の床が陥没)
7. 7 英語指導助手ゴードン・マックバーニ氏離任
7. 9 対沼高定期戦
7. 9 体育祭
～5
10. 15 澁川地区4校合同クリーンハイク
11. 16 開校記念マラソン大会
11. 19 クリーンハイク
11. 23 ソフトテニス部団体選抜県予選2位

平成7年(1995年)

1. 13 北校舎改修工事開始
1. 17 インターハイ壮行会(スケート高野 正樹君)
1. 27 予餞会
2. 14 阪神大震災のため修学旅行中止し、スキー旅行を実施
～16
2. 21 1年生スキー教室
3. 1 卒業式
3. 12 ラグビー部県7人制大会3位
3. 24 終業式
4. 7 始業式、入学式
4. 20 開校記念日
開校記念講演会「理想を高く掲げて人生を歩もう」
(横浜市立大学医学部教授 松本 昭彦氏)
4. 25 1年生宿泊ホームルーム(榛嶺会館)(～5. 1)
5. 12 県高校総体
～14 (総合8位、体操2位、空手道・山岳・ソフトテニス3位)

8. 6 は歴史的惨敗、「55年体制」の崩壊
特別国会、細川護熙・日本新党代表を首班指名、衆議院議長に土井たか子を選出
1993 この年冷夏と6つの台風上陸により戦後最悪のコメ凶作、200万トンの緊急輸入決定

2. 12 冬季五輪・リレハンメル大会開幕
ノルディックスキー複合団体で日本チーム2連覇
2. 16 インドネシアのスマトラ島でマグニチュード6.5の地震が発生、死者180人、負傷者1500人以上
4. 26 中華航空のエアバス機が名古屋空港で着陸に失敗、墜落・炎上(264人死亡、生存者7人)
4. 28 衆参両院、羽田孜・新生党党首を首班指名(羽田内閣発足)
5. 9 南アフリカ共和国、ネルソン・マンデラを大統領に選出
6. 27 オウム真理教、松本でサリンを噴霧(7人死亡、58人が重軽症=松本サリン事件)
6. 29 自・社・さきがけ3党が村山富市・社会党委員長を擁立、首班に指名(村山内閣発足)
7. 8 日本人女性初の宇宙飛行士・向井千秋を乗せたスペースシャトル・コロンビア打ち上げ成功
7. 8 北朝鮮・金日成主席(82)死去
9. 4 関西国際空港が開港
10. 4 北海道東方沖でマグニチュード7.9の地震が発生
10. 13 94年度ノーベル文学賞に大江健三郎が受賞決定、日本人受賞者は8人目
12. 7 新進党発足(新生、公明新、民社で結成)

1. 17 午前5時46分、阪神・淡路大地震が発生(マグニチュード7.2、震度7)
1. 31 警察庁発表、死者5102人、行方不明12人、家屋損壊10万5564棟(12. 27消防庁発表、死者総数は6308人)
3. 20 オウム真理教が共謀して東京の地下鉄5本の電車内で同時多発的にサリンを撒く(死者10人、重軽症者5500人=地下鉄サリン事件)
4. 3 東京外為市場で円が急騰、一時79円75銭に
4. 9 第13回統一地方選で、東京で青島幸男、大阪で横山ノックの両知事が誕生
5. 7 仏大統領選でシラクが当選
5. 7 警視庁、オウム真理教教祖・麻原彰

- 5. 20 P T A総会
- 5. 25 関東大会壮行会 (空手道、ソフトテニス、陸上競技)
- 6. 3 同窓会総会
- 7. 12 対沼高定期戦 (部対抗戦)
- 7. 14 インターハイ結団式 (ソフトテニス)
- 9. 28 体育祭
- ~29
- 10. 16 篠原和隆選手国体ソフトテニス7位
- ~17
- 10. 21 修学旅行
- ~25
- 11. 15 開校記念マラソン大会
- 11. 18 クリーンハイク
- 11. 27 エイズ講演会

平成8年(1996年)

- 2. 15 1年生スキー教室
- 2. 16 国体壮行会 (スキー、スケート)
- 3. 1 卒業式
- 3. 22 終業式
- 4. 8 始業式、入学式
- 4. 20 開校記念日
開校記念講演会「多様な価値観と不動の価値観」
(第一生命副社長 山口 隆氏)
- 4. 23 1年生宿泊ホームルーム (榛嶺会館) (~5. 1)
- 5. 10 県高校総体 (総合8位)
- ~12
- 5. 18 P T A総会
- 5. 22 関東大会壮行会(ソフトテニス、空手道、体操、レスリング)
- 6. 1 同窓会総会 (於 ホワイトパーク)
- 6. 8 ソフトテニスインターハイ予選個人優勝・準優勝
- ~9
- 6. 14 榛嶺祭仮装行列
- 6. 15 榛嶺祭
- ~16
- 7. 19 インターハイ・関東大会壮行会
インターハイソフトテニスダブルス準優勝
(篠原和隆・中島太郎ペア)
- 8. 7 第1回開校記念事業実行委員会
- 10. 2 体育祭
- ~3
- 10. 3 国体壮行会 (ソフトテニス)
- 10. 19 渋川地区4校合同クリーンハイク
- 10. 25 国体ソフトテニス団体準優勝 (群馬県チームメンバーに篠原和隆・中島太郎・保科陽介の3選手)
- 11. 7 開校記念マラソン大会
- 11. 13 修学旅行
- ~18

平成9年(1997年)

- 1. 17 阪神淡路大震災犠牲者追悼のために黙祷(正午1分間)
- 3. 1 卒業式
- 3. 15 第2回開校記念事業実行委員会
- 3. 24 終業式
- 4. 7 始業式、入学式
- 4. 16 1年生宿泊ホームルーム (榛嶺会館) (~4. 24)
- 4. 19 開校記念日
- 11. 1 国会、橋本龍太郎自民党総裁を首班指名 (橋本連立内閣が発足)
- 2. 14 将棋の羽生善治が、史上初の7冠独占を達成
- 7. 20 大阪・堺市で発生した病原性大腸菌O-157による集団食中毒患者が6031人、死者7人に
- 7. 20 第26回五輪・アトランタ大会が開幕、日本のメダル獲得数は金3、銀6、銅5に終わった
- 8. 4 俳優の渥美清が死去 (68)
- 9. 28 民主党結成 (さきがけ、社民など57人参加)
- 10. 20 第41回総選挙 (小選挙区・比例代表並立制による初の選挙、投票率59.65%は戦後最低)
- 11. 7 第2次橋本内閣発足 (自民単独政権)
- 12. 18 リマの在ベルー日本大使公邸が左翼ゲリラに襲撃され、レセプション出席中の外交団ら多数を監禁、次々解放するが、人質81人が越年
- 2. 20 中国の最高実力者、鄧小平が死去 (92)
- 4. 23 リマの日本大使公邸人質事件で、ベルー政府は警察の特殊部隊と軍を強行突入、71人の人質を救出、ゲリラ14人を全員射殺
- 5. 1 英国総選挙で労働党が圧勝 (ブレア

- 開校記念講演会「アジアと日本」
(アジア開発銀行総裁 佐藤 光夫氏)
- 5. 9 県高校総体 (総合8位、山岳部・ソフトテニス部2位、体操部3位、卓球部5位)
- ~11
- 5. 17 P T A総会
- 5. 23 関東大会壮行会 (ソフトテニス、体操、山岳)
- 6. 7 同窓会総会 (於 プリオパレス)
- 6. 12 音楽教室 (渋川市民会館)
- 7. 5 対沼高定期戦 (実行委員戦)
- 7. 9 対沼高定期戦 沼田100周年の迫力に大敗を喫す
- 7. 19 第3回開校記念事業実行委員会
- 10. 1 体育祭
- ~2
- 10. 18 渋川地区4校合同クリーンハイク
- 10. 30 開校記念マラソン大会
- 11. 13 九州へ初めての修学旅行
- ~17
- 5. 18 第50回カンヌ映画祭で「うなぎ」がグランプリ
- 6. 17 臓器移植法が成立 (10. 16施行)
- 6. 28 土師淳君殺害事件で、兵庫県警は近くに住む市立中学3年の男子生徒(14)を逮捕 (7. 15女児4人が殺傷された事件についても再逮捕)
- 7. 1 香港が155年ぶりに英国から中国に返還
- 8. 31 ダイアナ元英皇太子妃がパリで交通事故死(36)
- 10. 1 長野新幹線「あさま」が開業
- 12. 18 東京湾アクアラインが開通
- 12. 18 韓国大統領選で金大中が当選

平成10年(1998年)

- 1. 17 阪神淡路大震災犠牲者追悼のために黙祷(正午1分間)
- 1. 31 第4回開校記念事業実行委員会
- 2. 2 渡辺靖彦選手全国高校スキー大会回転2位
- 2. 4 渡辺靖彦選手インターハイスキー回転7位
- 3. 2 卒業式
- 3. 14 定時制開校記念式典
- 3. 24 終業式
- 4. 7 始業式、入学式
- 4. 20 開校記念日
開校記念講演会「温泉と環境」
(国際温泉気候連合(FITEC)副会長 木暮 金太夫氏)
- 5. 16 県高校総体 (総合7位)
- ~17
- 6. 1 関東大会壮行会 (ソフトテニス、体操)
- 5. 30 P T A総会
- 6. 6 同窓会総会 (於 ホワイトパーク)
- 6. 10 創立80周年記念事業検討委員会
- 6. 19 榛嶺祭仮装行列
- 6. 20 榛嶺祭
- ~21
- 9. 5 第1回創立80周年記念事業実行委員会及び各部会
- 9. 28 体育祭
- ~29
- 10. 3 第2回創立80周年記念事業実行委員会
- 10. 17 渋川地区4校合同クリーンハイク
- 10. 20 開校記念マラソン大会
- 10. 29 北群馬信用金庫よりマイクロバスを寄贈
- 11. 12 修学旅行
- ~16
- 12. 7 3年生特別編成授業スタート (~2. 10)
- 2. 7 第18回冬季五輪・長野大会開幕、スピードスケート500mで清水宏保が、女子モーグルで里谷多英が優勝するなど、日本勢が大活躍
- 4. 27 民主党が旗揚げ (民主、民政、新党友愛、民主改革連合の4党が合流)
- 5. 11 インドが地下核実験実施 (5. 28パキスタンも)
- 5. 12 インドネシアで学生らのデモと軍隊が衝突、約500人死亡 (5. 21スハルト大統領辞任)
- 6. 14 サッカーW杯フランス大会に日本が初出場、1次リーグで3戦全敗
- 7. 25 和歌山市の夏祭りで、自治会がつくったカレーライスを食べた住民66人が嘔吐、4人が死亡 (10. 4元保険外交員林真須美を別の殺人未遂、夫の健治を保険金詐欺容疑で逮捕)
- 7. 30 小淵恵三内閣が発足 (蔵相に宮沢喜一元首相、経企庁長官に作家の堺屋太一を起用)
- 9. 8 米大リーグ、マーク・マグワイア選手が62号本塁打を打ち新記録を更新 (9. 13ソーサ選手も62号本塁打を放つ)
- 1. 4 欧州連合の単一通貨「ユーロ」が11カ国に導入され、米国に並ぶ巨大市場が誕生
- 1. 14 自民党・自由党連立の小淵改造内閣

平成11年(1999年)

- 2. 20 第2回創立80周年記念誌部会
- 3. 1 卒業式
- 3. 23 進路講演会「テレビコマーシャルで時代がわかる」
(株)電通ネットワーク営業推進局地域事業部局長兼地域業

- 3. 24 務部長 狩野 勇夫氏)
- 3. 25 終業式
- 3. 25 渡辺靖彦選手全国高校選抜スキー大会総合3位
(スーパー大回転優勝、回転準優勝)
- 4. 7 始業式、入学式
- 4. 20 開校記念日
開校記念講演会「母校の恩と私の半生」
(農業技術協会会長 岸 國平氏)
- 5. 7 第2回創立80周年記念事業部会
- 5. 15 県高校総体(総合13位)
~17
- 5. 28 関東大会壮行会(ソフトテニス、体操、山岳)
- 5. 29 P T A 総会
- 6. 5 同窓会総会(於 ホワイトパーク)
- 7. 1 対沼高定期戦(職員戦)
- 7. 3 対沼高定期戦(実行委員戦)
- 7. 7 対沼高定期戦勝利
- 9. 8 学校紹介ビデオ試写会
(新井 悟教諭、生徒会長 小澤広海の共同制作)
- 9. 11 学校説明会
- 9. 28 体育祭
~29
- 10. 21 開校記念マラソン大会
- 11. 11 修学旅行(九州)
~15
- 12. 14 進路講演会「新時代の企業経営と若い人達の進路」
(株)プロネート社長 狩野 征次氏)

平成12年(2000年)

- 3. 1 卒業式
- 3. 24 終業式
- 4. 7 始業式、入学式
- 4. 20 開校記念日
開校記念講演会「人間とコミュニケーション」
(フリーライター 江時 久氏)
- 5. 12 県高校総体(総合20位)
~14
- 5. 20 P T A 総会
- 5. 31 関東大会壮行会(ソフトテニス、体操)
- 6. 3 同窓会総会
- 7. 14 第1回学校評議員会
- 7. 22 第3回創立80周年記念式典部会
- 9. 9 学校説明会
- 9. 28 体育祭
~29
- 9. 28 関東大会壮行会(山岳)
- 10. 19 開校記念マラソン大会
- 10. 20 音楽教室(群馬交響楽団)
- 11. 4 創立80周年記念式典
- 11. 28 創立80周年記念講演会(予定)
(群馬大学医学部附属病院長 小林 功氏)

- が発足
- 1. 29 地域振興券の交付が島根県浜田市を皮切りに始まる
- 2. 28 高知赤十字病院で脳死と判定された男性患者の臓器が大阪大、信州大付属病院に運ばれ、国内初の脳死臓器移植手術が行われた
- 4. 11 石原慎太郎・東京都知事が誕生
- 7. 30 6月の完全失業率が4.9%(7月も4.9%)と最悪の記録を更新
- 8. 17 トルコで大地震、死者約18,000人、負傷者4200人以上
- 8. 30 東ティモールのインドネシアからの独立を問う住民投票が行われ、独立派が78.5%を占める。反独立派の武装蜂起、平和維持軍の派遣などに発展
- 9. 21 台湾中部で大地震、建物3万棟が倒壊、死者2109人、負傷者7484人
- 9. 30 茨城県東海村のJCOで国内初の臨界事故、被曝した作業員3人のうち2人が死亡。半径10⁴mの住民31万人が屋内退避
- 12. 20 ポルトガル領のマカオが中国に返還される
この年コンピューターの2000年問題が話題になった
- 3. 26 ロシア大統領にプーチンが当選
- 3. 31 北海道・有珠山が噴火
- 4. 1 介護保険制度スタート
- 4. 2 小淵首相が脳こうそくで緊急入院
- 4. 5 森喜郎内閣発足、自民・公明・保守3党が連立
- 6. 13 南北朝鮮首脳が歴史的な初会談
- 6. 16 皇太后・良子さまが逝去
- 6. 25 三宅島に緊急火山情報(島民の7割、約21,600人が避難)
その後伊豆諸島で強い地震が頻発。
7. 8に三宅島・雄山噴火
- 6. 25 第42回総選挙(自民・公明・保守の与党激減するが絶対安定多数は確保)
- 6. 29 「雪印乳業」大阪工場製造の加工乳で1200人が食中毒(その後1万人以上に異常)
- 7. 4 第2次森内閣
- 7. 19 新2千円札発行

進路の記録

(1) 進路状況

	上級学校合格者数				就職者数
	現役生		浪人生		
	進学者実数	進学率(%)	進学者実数	進学率(%)	
平成2年度	178	52	146	61	14
平成3年度	179	52	151	64	16
平成4年度	193	55	132	61	10
平成5年度	172	49	143	68	7
平成6年度	209	61	147	80	2
平成7年度	212	61	122	67	6
平成8年度	201	62	129	73	5
平成9年度	202	66	108	79	6
平成10年度	192	70	101	80	6
平成11年度	176	66	76	66	3

※平成9年度まで8クラス、平成10年度から7クラス

進路の記録

(2) 年度別上級学校合格状況

国立大学

大学名	年度	平成11年		平成10年		平成9年		平成8年		平成7年		平成6年		平成5年		平成4年		平成3年		平成2年	
		現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒
北海道大学			1					1	①			②	2	1	①	1	②				
北海道教育大学						1															
北見工業大学			①								①	1									
室蘭工業大学			1								1	①									
弘前大学			①									①								1	①
岩手大学						2	1										①				
東北大学		6	①	2	1	3	1	1	①	4	②	3	2	1	①						
秋田大学		2	2	1	1		1	1							①	1					
山形大学		1	2	1	2	①	1	②	1	②	2	①	③	②	1	①					
福島大学						①								1	①						
茨城大学		1	①	1	3		②		2	3	①	1	3	2	②						
筑波大学		1	3	1	1			2	1					3	1						
図書館情報大学					1																
宇都宮大学		1	①	1	②	1	①		1	①		①				1	②				
群馬大学	社会情部	2		②		4	①		①	②	2										
	教育学部	2	①	4	①	3	④	6		1	②	4	②	4	③	5	③	6	⑥	5	①
	工学部	12	①	24	③	15	④	16	③	18	④	18	⑧	11	⑤	18	③	8	⑥	16	⑥
	医学部	1	①			1	①			①				1	1						
埼玉大学		2	①	2	②	3	①	4		1	①	2	①	①	1	②	1	②		③	
千葉大学		1			①	2		1		2	②	1	①	2	①	2	③	1			
東京大学			①	2		1	①						1	①							
東京外国語大学								1		①											
東京学芸大学		②			③	①	1		①	①											
東京農工大学			1								①	2	1	②	②						
東京芸術大学								1					①								
東京商船大学				1					①					1	②						
東京工業大学		①	1		①	①		1	1	①	1				②						
東京水産大学							1	①													
電気通信大学		1	①	2							1				①						
一橋大学															①						
横浜国立大学		1		1	3		①	2		②	3	①			1						
新潟大学		4	②	6	③	9	3	2	②	7	②	8	④	5	5	③	2	②			
上越教育大学								①	1					①							
長岡技術科学大学			1			1															
富山大学		1	①	1	1		①				1			1							

※ ○囲み数字は旧卒です。

大学名	年度	平成11年		平成10年		平成9年		平成8年		平成7年		平成6年		平成5年		平成4年		平成3年		平成2年	
		現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒
富山医科薬科大学		①		①				①		①				①		①					
金沢大学		1		①		1		1				①	2			②		②			
福井大学				1				1													
福井医科大学																					①
山梨大学		2				①															①
山梨医科大学																		①			
信州大学		1		4	①	4	①			1		3	①	④		2		2	①		
岐阜大学																					1
静岡大学						1							②		1						①
浜松医科大学																					1
名古屋大学												1	1			1					
三重大学																		1			
滋賀大学						①															
京都大学		①																			1
和歌山大学																					1
鳥取大学																					
島根大学																①					1
島根医科大学													①		①						
広島大学																①	1				
香川大学														①	①						
香川医科大学																					①
九州大学																					
佐賀大学											1										
熊本大学		1																			
鹿児島大学																	①				
鹿屋体育大学																					1
小計		44	⑯	60	⑲	51	⑲	53	⑬	33	⑱	47	⑳	45	㉑	46	㉒	43	㉓	41	㉔

公立大学

釧路公立大学																					①
会津大学						①															
前橋工科大学		①		①		1	②	③													
高崎経済大学		16	①	10		2	⑤	4	④	8	③	5	⑥	6	②	3	③	4	④	6	④
東京都立大学						1							2			①					
都立科学技術大学																					①
横浜市立大学				①						1		①	1								
都留文科大学												1	①	1							
富山県立大学																					
岐阜薬科大学																					①

※ ○囲み数字は旧卒です。

年度 大学名	平成11年		平成10年		平成9年		平成8年		平成7年		平成6年		平成5年		平成4年		平成3年		平成2年	
	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒
静岡県立大学							1													
名古屋市立大学									①											
愛知県立大学															1	1				
大阪府立大学																				
神戸市外国語大学															1					
北九州大学							1													
長崎県立大学																	①	1		
九州歯科大学																①	①			
小計	16	②	10	②	4	⑨	6	⑦	9	④	5	⑦	10	④	6	④	5	⑥	7	⑦

私立大学

青森大学	1		1	1	①	1						3									
愛知大学		1																			
愛知学院大学	2	2		1		①	1						①	②	①						
愛知工業大学														①						①	
愛知淑徳大学				2																	
青山学院大学	4	④	3	4	②	3	③	2	④	1	⑩	7	②	1	③	1	②			⑥	
秋田経法大学																				④	
朝日大学																				①	
重細重大学	1	2	①		④			2	④		①	5		1	2					2	②
足利工業大学	5	5		5	②	9	①	5	③	12	⑦	6	⑥	5	③	2	⑥			4	④
麻布大学				1			①													①	
石巻専修大学																				①	
いわき明星大学					②						①				①					②	①
岩手医科大学			①	①	1																
江戸川大学				1				1													
桜美林大学	1			1		2	①		②	2	③		①	1	1	②				③	
大阪芸術大学								1				1									
大阪学院大学				1								1								①	
大阪経法大学			①	1																①	
大阪工業大学																				①	
大阪産業大学				2																	
奥羽大学													①	①	1					1	
沖縄国際大学																				①	
大谷大学										1											②
岡山理科大学		①	①																		①
学習院大学	2	②	3	①	1	③	4	⑥	1	②	1	①	1	②	1	①	1			1	①
鹿児島経済大学																					①
神奈川大学	8	⑥	4	②	8	④	4	⑤	6	④	6	⑩	3	⑤	6	⑥	3	②		1	⑤

年度 大学名	平成11年		平成10年		平成9年		平成8年		平成7年		平成6年		平成5年		平成4年		平成3年		平成2年		
	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	
神奈川工科大学	3		6	③	1	①	7		6	③	1	⑤	2		3	①	1		3	①	
金沢学院大学							①				①										
金沢経済大学													1				①		1		
金沢工業大学	6		5	②	14		5	①	6	①	2	③	1	⑤	7	③	3	③	4	①	
神田外語大学															1					②	
関西大学	1									①					3						
関西学院大学									②			①									
関西外国語大学												1	①		1		1				
関東学院大学	2		2	①	1	①	7	③		①	1	⑦	1	⑧	4	⑦	2	③	1	③	
関東学園大学	1		1		4	②	1	①	4		6	③			①					③	
北里大学		③			1	②		①	1		1	②	2		3	①	2			②	
国立音楽大学													1								
九州共立大学																					
九州国際大学											①										
九州東海大学											①		①	②	1	①				①	
杏林大学	1		4	①		①	2	②	2	①	1	②	1	②		①				①	
京都学園大学													2	②		①				①	
京都外国語大学														①					1	①	
京都産業大学																			②	①	
近畿大学																			1	①	
熊本工業大学																					
倉敷芸術科学大学																				①	
敬愛大学																					①
慶應義塾大学	2	②		⑤		②		①		②					3	②	3	②		②	①
敬和学園大学	1																				
神戸学院大学																				①	
工学院大学	4	①	3		2	⑤	1	①	2	①		③	1	④	1	④	1	②		3	④
甲南大学																					①
高野山大学																					1
国学院大学	10	①	2	③	6	③		⑤	2	③	1	⑧	1	④	3	②	5	②		3	⑦
国際医療福祉大学	2	①		①																	
国際武道大学																					①
国際基督教大学																					1
国士館大学	8		3		5	④	3	⑥	1	⑦	1	⑤	1	⑩	3	⑧	1	③		1	④
駒沢大学	8		4	⑥	4	⑦	4	⑦	2	⑦	3	⑧	4	⑥	3	⑥	1	⑤		4	⑩
埼玉工業大学	1	①	2	③	10	①	8	①	5	①	4	⑥	2	①	1	③			③	2	
埼玉医科大学																					①
湘南工科大学			2	④	4	①	1						1	②	2					①	1

※ ○囲み数字は旧卒です。

大学名	平成11年		平成10年		平成9年		平成8年		平成7年		平成6年		平成5年		平成4年		平成3年		平成2年	
	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒
昭和大学	①		①		1	①	1		2		①		②		②					
昭和音楽大学													1							
昭和薬科大学					1	①														
四国学院大学									①											
札幌大学											①						③			
札幌学院大学			③		1							①		②		②				
産能大学	1										1	①							1	⑥
聖アリアンナ医科大学			①																	
静岡理工科大学	1															1	①			
芝浦工業大学	3	②	4	⑤	2	③	4		1	②	3	②	3	⑥	6	②	1			②
秀明大学	①																			
淑徳大学	①		1		2	①					1									
順天堂大学					1	②					①	6	①	1	①	2				①
城西大学	2	①	12	②	2		4	②	4	④	⑤	3	⑩	4	③	4	⑨	1		⑩
城西国際大学					2		1		②		1	①	②							
上智大学			3	①	②		①				1	②	3	②	2	②				
尚美学園大学	1																			
上武大学	1		1	①					2	①	1	①	①			1				②
常葉学園大学					①															
駿河台大学	3	①	3	①	4		1	①	10	④	4		2	⑤	①	1	②	2		②
成蹊大学	2	①			2	②	5	①	1		1		③	2						③
成城大学	1		③		①		①		①		①					1		1		①
清和大学			1				①				①									
聖学院大学											1		②							
摂南大学					1								①							
専修大学	10	③	6	④	8	④	6	⑧	8	⑥	6	⑤	4	⑦	2	④	4	⑥	2	⑬
仙台大学					1	①							①							
洗足学園大学							①													
創価大学			4		4				1			1		1		1		1		1
大正大学	1		1	①					1	②	1	①	①		④	2				①
皇學館大学							①													
第一経済大学																				①
第一工業大学	①				1															1
第一薬科大学											①									①
大東文化大学	10	①	13	③	8	⑤	7	⑩	11	⑩	8	⑪	8	⑭	3	⑩	6	⑭	3	⑱
高岡法科大学			①																	
高千穂商科大学			2		①				①			1	1		②					①
拓殖大学	3	①	3	②	2	③	2		3	①	7	⑩	5	⑤	3	①	4	⑤	3	④

大学名	平成11年		平成10年		平成9年		平成8年		平成7年		平成6年		平成5年		平成4年		平成3年		平成2年		
	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	
玉川大学	2	①	4		1		1	②	3		③					②			1	①	
多摩大学			①						1			①									
多摩美術大学					1	①						①	1							②	
千葉経済大学																				①	
千葉工業大学	2	⑤	11	②	4	②	7	②	7	②	3	⑧	3	⑥	15	②	5	③	3	③	
千葉商科大学	1		1		1		2		1	③	②			1	①	①				①	
中央大学	6	⑤	9	⑥	5	⑬	6	⑨	4	⑦	3	⑥	5	⑧	7	④	4	⑥	8	⑥	
中央学院大学					②		①		2	②	1	③	③		①		③			③	
中京大学	1	①	2		②						①	1	①			②				①	
つくば国際大学	1						1		1												
帝京大学	3		3	②	5	①	5	⑥	7	④	7	⑨	5	⑪	4	⑨	2	⑩	8	④	
帝京平成大学			①		2		1		2	①	1	①									
帝京科学大学	1				①		①														
帝京技術科学大学												3	①	1	①					1	
天理大学			2		1															①	
東亜大学											①										
東海大学	8	②	12	③	3	④	11	⑧	5		13	⑨	7	⑧	11	⑪	4	⑦	6	⑧	
東京医科大学	①		①																		
東京経済大学	2	②	8	②	3	⑤	5	①	③		1	④	③		⑧				1	⑦	
東京工科大学	3	①	2	②	3	②	1	②	1		1		2	②	3	②	1		1	①	
東京工芸大学	①		2		1	①	3				1	⑤			1	①					
東京国際大学	4		1	③	7		6	②	②		5	⑤	2	④	2	⑥	4	⑧		③	
東京慈恵会医科大学											1				①						
東京情報大学											1		②	1	②	1		①			
東京造形大学					①							①						①			
東京電機大学	5	⑥	3	⑧	4	⑨	3	②	2	③	4	②	4	⑤	5	⑤	2	②	5	⑥	
東京農業大学			3		②		1		1	③	2	②	②	5		2	①	2		①	
東京福祉大学	1																				
東京薬科大学			1												①					1	①
東京理科大学	9	⑤	5	⑥	6	②	6	③	2	⑦	7	⑩	6	④	6	②	4	⑧	1	⑧	
東京歯科大学	1						①														
同志社大学					①		①		①		②		①	1	1	①	1			1	
東邦大学	1	②	2				①				①									②	
東北学院大学	2		1									①	2	①	2	④				2	①
東北工業大学			1						1	①	1		①	1		②	②			1	③
東北福祉大学	3				4	①	3				1	①			2					2	
東北薬科大学	1				①				1		①						①				
桐蔭横浜大学			1		1							1									①

※ ○囲み数字は旧卒です。

年度 大学名	平成11年		平成10年		平成9年		平成8年		平成7年		平成6年		平成5年		平成4年		平成3年		平成2年	
	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒
東洋大学	20	⑥	5	⑩	16	⑭	6	⑭	5	⑧	4	⑮	5	⑲	6	⑧	4	⑦	6	⑨
道都大学															1					
常磐大学							1			1					1					
徳島文理大学								1			①									
獨協大学	3	③		②	4	②	3		3	③	2	⑦		③	1	⑤	1	①		③
獨協医科大学				①																
東北芸術工科大学							1													
長岡造形大学					①			1		2	①		①							
長野大学			2		1		①		1	①		①		1	②		1	①		
名古屋経済大学						①														
名古屋学院大学																1				
名古屋外国語大学							1													
名古屋商科大学																1				
奈良大学	1	①			1			1		1			①							
南山大学						①														
新潟国際情報大学												①								
新潟工科大学				②	3	①	2		2		②									
新潟産業大学					1		1	①	1	②					②		②		2	⑦
新潟薬科大学						①								①		1				
西日本工業大学								1		①										
西東京科学大学									①		①									
二松学舎大学				②			①					1	①		④		①			
日本医科大学		①		①																
日本大学	25	⑬	25	⑪	15	⑮	17	⑬	22	⑬	18	⑳	21	㉓	19	⑬	12	⑬	11	㉔
日本歯科大学						①						1								
日本社会事業大学	1				1															
日本獣医畜産大学									2											
日本体育大学			2		①		2		1				1				1		1	
日本文化大学						1														
日本文理大学								1		1		1								
日本福祉大学					1			①		1	①	2		1	①					
日本工業大学							1													
白鷗大学	1			①	1	①	3	①	2	③	1	①		③	2	①	2	⑥	1	②
函館大学															①					
八戸工業大学			1											①		1				
花園大学					1															
浜松大学	1																			
福井工業大学						1				①					①					

年度 大学名	平成11年		平成10年		平成9年		平成8年		平成7年		平成6年		平成5年		平成4年		平成3年		平成2年		
	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	
仏教大学								1								①					
福岡大学	1						1									①					
文教大学	6		3	①	2	②	1	②		⑤	3	②	1	②	3	①		③			
法政大学	8	⑦	4	⑤	4	⑪	4	⑧	2	⑥	3	⑨	2	⑫	2	④	3	⑨	2	⑧	
北陸大学							1		①	1		②	1							①	
北海学園北見大学																					
北海道医療大学	1							1	②			②									
北海道情報大学								1									1				
北海道東海大学													1					①			
北海道薬科大学																①			1		
北星学園大学										1											
星薬科大学	1																				
前橋国際大学	1	①		②																	
松坂大学										1					①					①	
松山大学											①										
松本歯科大学											①										
武蔵大学	1									①	3	①		①		①			1	②	
武蔵音楽大学										①											
武蔵工業大学	2	①	4	②	2	①	3		1	①	2		③	2		2		2		2	
武蔵野美術大学	1														①					②	
名城大学										①			1		①					1	
明治大学	14	⑧	6	⑦	6	⑭	6	⑧	7	⑤	5	⑰	4	⑤	3	③	7	⑫	7	⑨	
明治学院大学	2	⑤								②	③	⑥	1	③	2	⑥	1	②	1	①	
明治薬科大学											1				①						
明海大学													3				1	①	②		
明星大学	1			③	1	①		①	3	②	2	④	1	③	1		③		③	2	①
山梨学院大学		①					2		2	②	3	①	1	⑥		②	2	②	⑥	②	
横浜商科大学										②	①	1	②	1	①		1	①	1	1	
四日市大学																				①	
桃山学院大学													1								
平成国際大学											①										
酪農学園大学												①		②					①	①	
立教大学	2	①	3	④	3		1	④	3		2		1	②	1	①	2	②	5	①	
立正大学	12	④	6	⑦	5	③	3	③	1	⑨	3	⑥	2	④	5	⑦	5	⑦	1	⑤	
立命館大学	1	①	1	③	1	③	2	④	3	④	3	④	3	③	4	③	4	①	4	①	
龍谷大学	1											1	②	1		1	①				
流通経済大学			1			①		①				①	1	②			1	②		②	
麗澤大学									2	①			2	1				②		①	

※ ○囲み数字は旧卒です。

年度 大学名	平成11年		平成10年		平成9年		平成8年		平成7年		平成6年		平成5年		平成4年		平成3年		平成2年	
	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒	現役	旧卒
和光大学									①	1	1			③		①				
早稲田大学	7	⑧	7	⑩	2	⑨	4	⑥	3	③	2	⑩	5	⑦	1	②	3	⑥	8	⑨
小計	285	⑫	250	⑮	262	⑳	230	㉑	213	㉒	203	㉓	181	㉔	211	㉕	142	㉖	144	㉗

その他

短期大学	3	4	10	①	1	3	④	5	②	5	②	6	④	6	①	6	⑤			
専門・各種学校等	22	⑦	24	⑥	29	⑩	24	⑬	29	③	21	②	15	①	29	③	28	⑤	33	⑤
防衛大学校	1								①											①
航空保安大学校																				①
小計	26	⑦	28	⑥	39	⑪	25	⑬	32	⑦	26	⑤	20	③	35	⑦	34	⑥	39	⑫

合計	371	⑮	348	⑳	356	㉑	314	㉒	287	㉓	281	㉔	256	㉕	298	㉖	224	㉗	231	㉘
----	-----	---	-----	---	-----	---	-----	---	-----	---	-----	---	-----	---	-----	---	-----	---	-----	---

特別活動の顕著な成果

平成2年度

部活動(種目)	名称(大会名)	団体	個人 ※()内の数字は学年
	県高校総体	学校対抗総合第4位	
(国語)	ぐんま生涯学習奨励賞		県知事賞 安部 英助 (3)
	群馬県高校作文コンクール		課題作文の部佳作 信沢 和彦 (2) 群馬の文学の部第2位 高橋 大輔 (1)
美術	県高校芸術祭美術部門展	優秀学校賞	優良賞 桜井 剛 (1) 奨励賞 矢島 将之 (1)
	吹奏楽アンサンブルコンテスト県大会	金賞	
	同関東大会	銀賞	
剣道	全国高校総体県予選		優勝 田中 一好 (3)
	関東大会	出場	
空手道	関東大会	型、組手出場	
卓球	県高校総体		優勝 本多 輝行 (2)
	関東大会		ベスト16 本多 輝行 (2)
	全国高校総体県予選	準優勝	
	全日本選手権県予選		優勝 本多 輝行 (2)
	東京選手権		ベスト8 本多 輝行 (2)
バレーボール	関東大会	出場	
レスリング	関東大会		フリースタイル 88kg級 小池 満重 (2)
軟式テニス	関東大会		須田・新保組 (3)
スキー	関東高校県予選		回転第2位 松本 和也 (2) 大回転第2位 松本 和也 (2)
	県高校総体		大回転第2位 松本 和也 (2)
	関東大会		大回転第3位 松本 和也 (2)
	全国高校総体		松本 和也 (2)
	国民体育大会		松本 和也 (2)
	県春季スキー選手権		回転第2位 松本 和也 (2) 大回転優勝 松本 和也 (2)
	スケート	全国高校総体	
山岳	関東大会	出場	

平成3年度

	県高校総体	学校対抗総合第5位	
(国語)	緑の作文コンクール		県教育長賞 近藤 雅行 (2)
	青少年読書感想文全国コンクール		佳作 岩瀧 大樹 (2)
美術	県高校芸術祭美術部門展	優秀学校賞	優良賞 桜井 剛 (2) 奨励賞 小林 智 (2) 奨励賞 間仁田将之 (3)
	吹奏楽	金賞	
	空手道	関東大会	団体型出場 組手 斉藤 健 (2)

部活動(種目)	名称(大会名)	団体	個人 ※()内の数字は学年
空手道	県高校空手道新人大会	準優勝	型優勝 大林 基樹 (2)
			組手優勝 斉藤 健 (2)
卓球	関東大会		本多 輝行 (3)
			綿貫 尚久 (2)
			優勝 本多 輝行 (3)
	全国高校県予選		優勝 本多 輝行 (3)
	東京選手権 (日本オープン)		ベスト8 本多 輝行 (3)
軟式庭球	関東大会		小沢・小山組 (2)
	県新人大会	準優勝	
スキー	県高校総体		大回転優勝 松本 和也 (3)
	関東高校スキー大会県予選		大回転優勝 松本 和也 (3)
	関東高校スキー大会		大回転2位 松本 和也 (3)
			回転 2位 松本 和也 (3)
			総合 5位 松本 和也 (3)
国民体育大会		9位 松本 和也 (3)	
スケート	全国高校総体		真下 光宏 (2)
山岳	県高校総体	優勝	
	全国大会	出場	
	国体予選		2位 山本 豊 (3)
	県高校新人戦		優勝 高橋 正人 (2)
硬式テニス	関東大会	出場	
	県新人戦		シングルス優勝 佐治 祥先 (1)
			ダブルス 2位 佐治 (1)・中沢 (2)
	関東選抜テニス大会	出場	

	県高校総体	学校対抗総合第2位	
(国語)	作文コンクール(国語部会)		奨励賞 岩瀧 大樹 (3)
	ぐんま生涯学習奨励論文		実行委員長賞 柴山 昭仁 (2)
	青少年読書感想文県コンクール		佳作 佐藤 剛広 (1)
			佳作 坂口 勝信 (2)
			入選 狩野 貴行 (1)
	緑の作文コンクール		会長賞 土田 仁史 (1)
	高校生交通安全ポスター・標語作品		ポスターの部最優秀作品 長田 亮 (3)
美術	県高校芸術祭美術部門	優秀学校賞	優秀賞 桜井 剛 (3)
			優良賞 福井 論史 (1)
			奨励賞 水野 暁 (3)
スキー	関東大会		出場 田山 裕章 (2)
ソフトテニス	県高校総体		ダブルス2位 保科 (2)・岩崎 (2)
	全国大会県予選	準優勝	
	関東大会		ダブルス 保科 (2)・岩崎 (2)
			須永 (3)・篠原 (3)
全国大会		ダブルス 須永 (3)・篠原 (3)	

部活動(種目)	名称(大会名)	団体	個人 ※()内の数字は学年
ソフトテニス	県高校新人大会		ダブルス2位 保科 (2)・岩崎 (2)
卓球	関東大会		ダブルス 宮崎 孝之 (2) 綿貫 尚久 (3)
	県高校新人大会	準優勝	
空手道	県高校空手道選手権大会		2位 大林 基樹 (3)
	関東高校空手道大会	型 出場	大林 基樹 (3)
			斉藤 健 (3)
全国高校総体		大林 基樹 (3)	
山岳	高校総体	優勝	星野 勝行 (2)
	国体2部		
水泳	関東大会		出場 福島 大介 (1)
			出場 青木 教朗 (1)
	県高校新人大会		100M自由型優勝 深井 泰州 (1)
テニス	県高校総体		シングルス優勝 佐治 祥先 (2)
			ダブルス優勝 佐治 祥先 (2)
			中沢 亨 (3)
	関東大会		シングルスベスト8 佐治 祥先 (2)
			ダブルス出場 佐治 (2)・中沢 (3)
			全国大会
	県高校新人大会		シングルス優勝 佐治 祥先 (2)
	県秋季ジュニアテニス大会		シングルス優勝 佐治 祥先 (2)
ウィンブルドンジュニア県予選		シングルス優勝 佐治 祥先 (2)	

	県高校総体	学校対抗総合第8位	
(国語)	作文コンクール(国語部会)		佳作 竹淵 史幸 (2)
			奨励賞 伊東 英一 (3)
	国民年金小論文コンクール		県教育長賞 村田 智昭 (3)
	ぐんま生涯学習奨励論文		県商工会議所連合会会長賞 田村 佳久 (3)
	平和と人権を考える読書感想文コンクール		2席 竹淵 浩幸 (2)
	全国高校生読書体験コンクール		奨励賞 新井 辰則 (3)
	青少年読書感想文コンクール		優秀賞 早川 允規 (2)
	緑の作文コンクール		県議会議長賞 小池 祐樹 (3)
			緑の連絡会会長賞 奈良 繁寿 (3)
			県子育連会長賞 保科 康弘 (3)
美術	第6回『子どもに無煙環境を！』 ポスターコンクール(高校以上一般の部)		最優秀賞(厚生大臣賞) 田村 吉康 (1)
			最優秀賞 田村 吉康 (1)
	非行防止ポスター		佳作 石田 幸一 (1)
	群馬青年ビエンナーレ展		入選 山田守破離 (2)
	群馬県美術展		入選 山田守破離 (2)
	高校生国際芸術コンクール		入選 狩野 浩 (2)

平成4年度

平成5年度

部活動(種目)	名 称(大会名)	団 体	個 人 ※()内の数字は学年
美 術	県高校芸術祭美術部門展	優秀学校賞	優秀賞(全国高校芸術祭群馬県代表) 山田守破離 (2)
			優秀賞(全国高校芸術祭群馬県代表) 狩野 浩 (2)
			優良賞 福井 諭史 (2)
			奨励賞 関 一成 (1)
将 棋	高校将棋竜王戦県予選		優勝 大友 裕登 (2)
	高校将棋竜王戦全国大会		出場 大友 裕登 (2)
ソフトテニス	全国高校総体県予選	準 優 勝	
	関東大会		ダブルス優勝 保科 (3)・岩崎 (3)
	全国高校総体		ダブルスベスト8位 保科 (3)・岩崎 (3) ダブルス3回戦 保科 (3)・岩崎 (3)
空 手 道	県高校総体	型 4 位	
	関東大会	型 3 位	
	高校空手道選手権	型 3 位	
剣 道	県高校総体	3 位	
	関東大会	出 場	
	全国高校総体県予選	優 勝	
	全国高校総体	出 場	
水 泳	関東高校県予選		100mバタフライ 優勝 福島 大介 (2)
	群馬県選手権		100mバタフライ 優勝 福島 大介 (2)
	関東大会		100m/200mバタフライ 福島 大介 (2)
			200m平泳ぎ 青木 教朗 (2)
山 岳	県高校総体	5 位	
	関東大会	出 場	
	国体予選		2 位 高梨 恒彦 (3)
	国体(少年の部)	総合 5 位	県代表 高梨 恒彦 (3)
バレーボール	県高校春季大会	3 位	
卓 球	県高校総体	4 位	
	全日本卓球選手権県予選		3 位 森下 亜紀 (2)
	県高校新人大会	3・ 位	
テ ニ ス	県高校総体		シングルス優勝 佐治 祥先 (3)
			ダブルス優勝 佐治 (3)・森 (1)
	関東大会		出場
	全国高校総体県予選	3 位	シングルス優勝 佐治 祥先 (3)
			ダブルス 3 位 佐治 (3)・森 (1)
	関東ジュニア大会		シングルスベスト4 佐治 祥先 (3)
	全日本ジュニア大会	3 位	シングルスベスト16 佐治 祥先 (3)
	国体(少年の部)		佐治 祥先 (3)
県高校新人大会	3 位		
ス キ ー	関東大会		鶴沢 篤史・飯塚 裕也 (2)

平成6年度

部活動(種目)	名 称(大会名)	団 体	個 人 ※()内の数字は学年
	県高校総体	学校対抗総合第8位	
(国 語)	国語部会作文コンクール		奨励賞 早川 允規 (3)
	ぐんま生涯学習奨励論文		実行委員長賞 野口 尚重 (3)
	緑の作文コンクール		県知事賞 五十嵐康幸 (3)
			県議会議長賞 萩原 康久 (3)
		県教育長賞 今井 幸範 (3)	
		会長賞 新井 圭一 (3)	
		県子育連会長賞 鈴木 敬一 (3)	
美 術	非行防止ポスター		最優秀賞 田村 吉康 (2)
	群馬県美術展		教育長賞 山田守破離 (3)
	高校芸術祭美術展	優秀学校賞	優秀賞 関 一成 (2)
			優秀賞 田村 吉康 (2)
			優良賞 飯田慎一郎 (2)
		優良賞 富沢 信一 (2)	
	全国高等学校総合文化祭美術展		県代表参加 山田守破離 (3)
演 劇	県高校芸術祭演劇部門	優 勝	
	群馬県大会	優 良 賞	
ソフトテニス	県高校総体	4 位	ベスト8 山本 (3)・関 (3)
			ベスト8 森田 (3)・高橋 (3)
			ベスト8 新木 (3)・狩野 (3)
	関東大会	出 場	
空 手 道	県高校総体	型 4 位 組手 2 位 総合 2 位	個人型 大林 俊樹 (2)
水 泳 部	県高校総体		100mバタフライ 2位 福島 大介 (3)
			200mバタフライ 2位 福島 大介 (3)
山 岳 部	県高校総体	7 位	
	関東大会	出 場	
卓 球 部	インターハイ予選		ベスト4 森下 亜紀 (3)
	インターハイ	出 場	森下 亜紀 (3)
体 操 部	県高校総体	3 位	
スケート部	全国高校総体スケート競技会	出 場	高野 正樹 (1)
ス キ ー 部	関東高校スキー大会		SL第3位 渡辺 一彦 (1)

平成7年度

部活動(種目)	名 称(大会名)	団 体	個 人 ※()内の数字は学年
	県高校総体	学校対抗総合第8位	
(国 語)	高校生の税の作文コンクール		高崎税務署長賞 小林 賢 (2)
	ぐんま生涯学習奨励賞		実行委員長賞 唐澤 宏次 (3)
			努力賞 今成 義昭 (2)
	全国高校生読書体験記コンクール		入選 福島 敦 (3)
	県高校作文コンクール		入選 柳澤 隼人 (1)
	高校生交通安全作文コンクール		優秀賞 狩野 浩之 (2)

部活動(種目)	名 称(大会名)	団 体	個 人 ※()内の数字は学年
美 術	第1回群馬県高等学校総合文化祭		ポスターの部 最優秀賞 田村 吉康 (3)
			テーマの部 優秀賞 佐々木 将 (1)
			テーマの部 優秀賞 糸井 智彦 (1)
	全国総合文化祭		参 加 飯田慎一郎 (3)
			参 加 関 一成 (3)
	高校芸術祭美術展 (96年度全国総合文化祭県代表)	優秀学校賞(8年連続)	最優秀賞 田村 吉康 (3)
			最優秀賞 小山 尚之 (2)
			優秀賞 古藤 智之 (1)
	非行防止ポスター		銀 賞 唐沢 宣宏 (1)
			佳 作 古藤 智之 (1)
	人権尊重ポスター		奨励賞 佐々木 将 (1)
			努力賞 萩原 喬史 (1)
ソフトテニス	県高校総体	3 位	
	関東大会	出 場	篠原 (2)・中島 (2) 新保 (1)・中林 (1)
	全国高校総体県予選	3 位	
	全国高校総体		篠原 (2)・中島 (2)
	国民体育大会	7 位	篠原 和隆 (2)
	県高校新人大会	3 位	新保 (1)・青木 (2)
	空 手 道	県高校総体	総合 3 位 型 4 位 組手 3 位
関東大会		出 場	
全国高校総体県予選		総合 3 位 組手 3 位	個人型 4 位 大林 俊樹 (3)
新人大会		型 4 位	
体 操	県高校総体	2 位	
ラ グ ビ ー	県7人制大会	準 優 勝	
ス ケ ー ト	県高校総体		10,000m 3 位 高野 正樹 (2)
			5,000m 4 位 高野 正樹 (2)
	関東大会		1,500m 11位 高野 正樹 (2)
	全国高校総体		出場 高野 正樹 (2)
	新人大会		5,000m 2 位 高野 正樹 (2)
ス ケ ー ト	新人大会		3,000m 4 位 高野 正樹 (2)
山 岳	県高校総体	3 位	
	関東大会	出 場	
ス キ ー	県高校総体	総合 4 位	SL 2 位 渡辺 一彦 (2)
			GSL 2 位 渡辺 一彦 (2)
	全国高校総体		SL・GSL 出場 渡辺 一彦 (2)
	国民体育大会		GSL 出場 渡辺 一彦 (2)

部活動(種目)	名 称(大会名)	団 体	個 人 ※()内の数字は学年
(国 語)	県高校総体	学校対抗総合第8位	
	ぐんま生涯学習奨励賞		実行委員長賞 今成 義昭 (3)
	高校生交通安全作文コンクール		佳作 糸井 智彦 (2)
	全国高校生読書体験記コンクール		奨励賞 宮崎 有志 (1)
	青少年読書感想文全国コンクール		佳作 木暮 敦 (2)
(新聞委員会)	県高校新聞コンクール	優 秀 賞	
	美 術	県高校芸術祭	優秀学校賞(9年連続)
優秀賞 唐沢 宣宏 (2)			
優秀賞 古藤 智之 (2)			
ソフトテニス	オリオン杯	優勝(関東大会出場)	
	県高校総体	2 位	優勝 篠原 (3)・中島 (3)
	関東大会	ベ ス ト 16	ベスト32 新保 (2)・青木 (3)
	インターハイ予選	2 位	優勝 保科 (3)・岩崎 (3)
			2 位 篠原 (3)・中島 (3)
	インターハイ		準優勝 篠原 (3)・中島 (3)
			ベスト64 保科 (3)・岩崎 (3)
	国民体育大会	準 優 勝	(篠原(3)・中島(3)・保科(3))
	新人戦		3 位 新保 (2)・田村 (1)
	全国選抜県予選	2 位	
ラ グ ビ ー	7人制大会	2 位	
山 岳	新人戦		3 位 齋藤 大輔 (2)
器 械 体 操	県高校総体	3 位	
ス キ ー	関東大会県予選		SL 2 位 渡辺 靖彦 (1)
			GS 3 位 渡辺 一彦 (3)
	高校総体	総合 4 位	SL 3 位 渡辺 一彦 (3)
			GS 3 位 渡辺 一彦 (3)
	県スキー選手権		大回転優勝 渡辺 靖彦 (1)
	関東大会		GS 1 位 渡辺 一彦 (3)
			GS 2 位 渡辺 靖彦 (1)
	インターハイ		SL 2 位 渡辺 一彦 (3)
			GS 26位 渡辺 一彦 (3)
	国民体育大会		SL 31位 渡辺 一彦 (3)
			渡辺 一彦 (3)
			渡辺 靖彦 (1)
剣 道	インターハイ予選		準優勝(全国大会出場) 小野 敦 (3)
水 泳	関東予選		1,500m 3 位 田中 純一 (1)
	県総体		1,500m 2 位 田中 純一 (1)
			400m 4 位 田中 純一 (1)
水 泳	新人戦		200m個人メドレー 3 位 荒井 元気 (2)
レスリング	関東大会		出 場 角田 伊志 (3)

平成9年度

部活動(種目)	名 称 (大会名)	団 体	個 人 ※()内の数字は学年
スケート	県高校総体		1,000m 2位 高野 正樹 (3)
			500m 2位 高野 正樹 (3)
	インターハイ		1,000m 出場 高野 正樹 (3)
			500m 出場 高野 正樹 (3)
			1,000m 出場 星野 聡 (1)
	500m 出場 星野 聡 (1)		
関東大会		1,500m 11位 高野 正樹 (3)	

	県高校総体	学校対抗総合第8位	
(国 語)	地方自治法施行50周年記念小論文		最優秀(県知事賞) 三浦 和久 (3)
	全国高校生読書体験記コンクール		県入選 堀口 弘之 (1)
	青少年読書感想文全国コンクール		県内佳作 島田 聖 (1)
ソフトテニス	県高校総体	2 位	
	関東大会		ベスト32 新保 (3)・田村 (2)
	インターハイ予選	3 位	3位 新保 (3)・田村 (2)
	インターハイ		出場 新保 (3)・田村 (2)
	新人戦	3 位	3位 木暮 (2)・田村 (2)
	インドア	3 位	
山 岳	県高校総体	準 優 勝	
	国体予選(少年男子)		3位 斎藤 大輔 (3)
水 泳	県高校総体		1,500m自由形 1位 田中 純一 (2)
	新人戦		100mバタフライ 1位 笠井 太雅 (1)
			200mバタフライ 1位 笠井 太雅 (1)
			200m自由形 3位 森木 重利 (1)
			400m自由形 1位 森木 重利 (1)
器 械 体 操	県高校総体	3 位	7位(関東大会出場) 坂田 杏見 (3)
	新人戦		個人総合 3位 小田原雄治 (1)
			鉄棒 3位 小田原雄治 (1)
卓 球	新人戦	ベスト4	
	関東大会	出 場	
ス キ ー	県高校総体	2 位	GS 1位 渡辺 靖彦 (2)
ス キ ー	県高校総体		SL 1位 渡辺 靖彦 (2)
			関東大会
			SL 1位 渡辺 靖彦 (2)
			CC 出場 小野 雅弘 (1)
			インターハイ
			SL 7位 渡辺 靖彦 (2)
			国体スキー競技会群馬県大会(少年)
	県スキー選手権大会		GS 1位 渡辺 靖彦 (2)
ス キ ー	全国高校選抜スキー大会		GS 4位 渡辺 靖彦 (2)
	全国Jr.オリンピック		GS 4位 渡辺 靖彦 (2)

平成10年度

部活動(種目)	名 称 (大会名)	団 体	個 人 ※()内の数字は学年
スケート	県高校総体	3 位	
	インターハイ	出 場	
美 術	県総合文化祭		
	ポスター部門		最優秀賞 長塩 篤史 (1)
	テーマ部門		優秀賞 磯貝 紀明 (1)
	全国高校生ビジュアル表現コンクール		佳 作 山田 修平 (2)
	高校芸術祭	最優秀学校賞	最優秀賞 山田 修平 (2)
			優秀賞 永井 祐也 (2)
	全国高校生芸術コンクール		入選 唐沢 宣宏 (3)
非行防止ポスター		優秀賞 磯貝 紀明 (1)	

	県高校総体	学校対抗総合第7位	
(国 語)	県作文コンクール		課題作文の部第1位 佐藤 雄志 (1)
	青少年読書作文コンクール		県奨励賞 小林 素 (1)
ソフトテニス	県高校総体	3 位	3位 木暮 (3)・田村組 (3)
	関東大会	出 場	木暮(3)・田村(3)組 田村(3)・富沢(3)組
	新人戦	3 位	
	全国選抜大会県予選	3 位	
卓 球	あかぎ国体記念大会		準優勝 春山 聡 (2)
体 操	県新人戦		総合3位 小田原雄治 (2)
			総合6位 小山 貴洋 (2)
			種目別鉄棒3位 小田原雄治 (2)
水 泳	関東予選		800mフリーリレー5位(関東出場) 佐藤(2)・青木(2)・森木(2)・笠井(2)
吹 奏 楽	県吹奏楽コンクール高校B組	銀 賞	
	県アンサンブルコンテスト(サクソフォン四重奏)		金 賞 福田・飯塚・茂木・中野
美 術	高校芸術祭美術展	優秀学校賞	最優秀賞 萩原 裕介 (2)
			優秀賞 磯貝 紀明 (2)
ス キ ー	県高校総体	3 位	CC(クラシカル)2位 小野 雅弘 (1)
			CC(フリー)2位 小野 雅弘 (1)
	関東大会		SL優勝 渡辺 靖彦 (3)
			CC(クラシカル)6位 小野 雅弘 (1)
			GS4位 渡辺 靖彦 (3)
	インターハイ		SL7位 渡辺 靖彦 (3)
			CC(クラシカル)・CC(フリー)出場 小野 雅弘 (1)
			SGS優勝 渡辺 靖彦 (3)
			SL 2位 渡辺 靖彦 (3)
	全国高校選抜スキー		総合3位 渡辺 靖彦 (3)
GS 10位 渡辺 靖彦 (3)			
スケート	県高校総体	4 位	出場 星野(3)・大塚(2)・山崎(2)
	インターハイ	学校対抗27位	

部活動(種目)	名称(大会名)	団体	個人 ※()内の数字は学年
	県高校総体	学校対抗総合第13位	
(国語)	平和と人権作文コンクール		優秀作 根津 嘉徳 (1)
	読書感想文コンクール		優秀賞 木暮 武文 (1)
	国語部会作文コンクール		奨励賞 石北 靖洋 (2)
陸上競技	強化大会		3000mSC 3位 高野健太郎 (1)
ソフトテニス	県高校総体	4位	
体操	県高校総体	3位	総合3位 小田原雄治 (3)
	関東大会		出場 小田原雄治 (3)
水泳	県高校総体		100mバタフライ 2位 笠井 太雅 (3)
			200mバタフライ 3位 笠井 太雅 (3)
			400mメドレーリレー 3位 笠井 太雅 (3)・青木 篤志 (3) 狩野 智彦 (1)・武居 悠太 (1)
	学校対抗	5位	
美術	全国高等学校総合文化祭		県代表 萩原 裕介 (3)
	県総合文化祭		ポスター部門最優秀賞 磯貝 紀明 (3)
			ポスター部門優秀賞 長 靖順 (3)
	高校芸術祭		優秀賞 萩原 裕介 (3) 優秀賞 高津 和明 (1) 優秀賞 大谷 正英 (2)
吹奏楽	県吹奏楽コンクール高校B組	金賞	

新聞記事・写真で見る渋高の活躍

多数ある記事等の中から一部を抜粋しました。

同窓会関係
同窓会の活動

1988年6月16日付上毛新聞
渋高同窓会が総会
美術・資料維持財団設立へ

美術・資料維持財団設立へ

渋川高同窓会が総会

3代の同窓生表彰も



懇親会で初めて行われた親・子・孫3代渋高生の表彰

渋川高同窓会(川崎富三会長)は、改進黨への援助を止め、長きこの後、渋川市石原の「出雲」で本年度の総会を開き、創立七十周年(六十五年)記念事業として、渋高美術・資料維持財団(理事長・荒井英一)の設立や正門の七十周年記念事業として、

活動を強化すること、近い将来これらを一室に集めた記念館や資料館の建設を目的とする。PTAや地元の有志者も賛同し、校長が理事長、同窓会長、PTA会長が副理事長を務める。維持費は毎年同窓会から十数万円、PTAから五万円を充て、その他の寄付金でまかなう。寄付金はすでに百万円に達している。同校の収蔵品は現在校長室や応接室、会議室、図書室に分散されているが、当面は額の膨大な資料の整理を進め、行っていく方針。

「榛領会館」が完成

渋川高、あす70周年式典

1990年11月30日付上毛新聞
渋高あす70周年式典
「榛領会館」が完成

今春創立七十周年を迎えた渋川高(中村英一校長、千百校。これまでに一万六千三百七十一人の記念式典が一日、十四人の卒業生を送り出し、同校体育館で開かれ、榛領会館十年に記念式典を開催し、館増改築工事を目玉に、同窓会(川崎富三会長)が中心となって進めてきた二連の記念事業が終了する。

同校は大正九年四月の開校を記念し、本年度は榛領会館の工事と記念誌「榛領」目録の発行と「渋高七十年」の発行作業を進めてきた。榛領会館は創立五十周年事業で建てられた記念会館。部活動などの合宿、食堂に使われているが、手狭なうえに老朽化したため、同窓生の寄付と県予算の合わせて約八千五百万円で増改築、名称変更を



完成した榛領会館

が広がり、同窓生寄贈の絵画や書など二十点を収蔵、展示する展示室も設置、式典後にオープンさせる。記念誌はB5判百六十ページ、写真集九十六ページ、年表七十六ページ、二百部作製し、式典で在校生や来賓に配布する。式典は同校と、同窓会、PTAで組織する記念事業実行委員会(委員長・川崎会長)の共催。教職員と在校生に加え、来賓としてOBの代表、旧教職員二百人が参加し、長年の足跡を振り返りながら七十周年を祝う。国語担当の武井民部教諭が作詞した記念応援歌も披露されることになっている。

豪華客船に揺られて 洪高東京同窓会が納涼会



1993年9月1日付上毛新聞
東京同窓会納涼会

洪川高校東京同窓会（本郷区）の夏納涼会が三十日夜、東京・晴海ふ頭の前で開かれ、同窓生やその家族ら約百二十人が、音楽やゲームなどを楽しみながら親交を深めた。

納涼会は、家族ぐるみで同窓生の交流を図ろうと、昨年より開催している。今回は、同窓生で商船三井客船前社長

客船の船上で開かれた洪川高校東京同窓会の納涼会

で、同社の外洋豪華客船「ふじ丸」をチャーター。ラウンジを借りきり、音楽家の清水信治さんらの演奏を交えながら「船と音楽とグルメの夕べ」と題した船上パーティーを開いた。

本郷会長が「夏の夜の一時を存分に楽しんでください」とあいさつ。来賓の川崎富三同窓会長が「海上でのパーティーは洪川ではやりたくてもできない。今日は楽しみにして出掛けてきた」とスピーチした。

この後、参加者らは一流シェフの料理に舌鼓を打ちながら歓談。ビンゴゲームなども行い、豪華客船の華やいだムードを満喫していた。

1994年4月6日付上毛新聞
75周年で校歌碑
「しのぶ会」

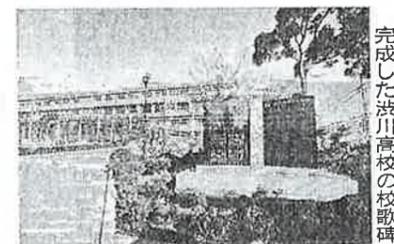
75周年で校歌碑

洪川高の同窓会が建てる

洪川高校同窓会（川崎富三会長）は、同校創立七十五周年を記念して旧制洪川中学校の校歌も合わせて刻んだ「校歌碑」を建設した。

建設したのは、戦前から戦後にかけて、同校の教壇に立っていた故・小松恭三さんをしのぶ会。小松さんは、定時制教育に情熱を燃やし、教え子から慕われてきたが、昭和五十六年に亡くなった。教え

子たちは「しのぶ会」を結成し、回想集の刊行や墓石の建設のために募金をした。この募金の残金の使い道を「しのぶ会」で話し合った結果、同窓会の七十五周年事業として、小松さんゆかりの洪川高校に校歌碑を建設することになった。



の校歌、左側に旧制洪川中学校の校歌が楽譜とともに刻まれている。

完成した洪川高校の校歌碑

輝く伝統さらに発展を 洪川高校で70周年記念式典



式辞を述べる中村校長

洪川高校（中村英一校長）は、創立七十周年記念式典が一日、同校体育館で開かれ、教職員と在校生、来賓の約百二十人が、旧教職員ら約四百人が七十周年を祝った。

同校は大正九年四月の開校、これまでに一万六千三百十四人の卒業生を送り出している。式典では、中村校長が「わが校は輝ける伝統の中で、国内外で活躍する多くの人材を輩出してきた。生徒諸君は、

式辞を述べる中村校長

1990年12月2日付上毛新聞
70周年記念式典が開催される

小松教諭の 法要に60人

洪川・炎焔の会

旧制洪川中第十四回卒業生と、洪川高校第一回卒業生の同級会「炎焔（ほのお）の会」（鈴木文男世話人）は、勢多郡北橋村下箱田の玉泉院で、恩師である小松恭三教諭と同級生二十五人の法要を行い、恩師をしのんだ。

恩師の人柄しのぶ

小松教諭は、戦中戦後を通じて旧制洪川中、洪川高で国語の教師として教壇に立ち、その温かい人柄から多くの学生たちに慕われ、恩師をしのんだ。

1993年5月30日付上毛新聞
炎焔の会
小松教諭の法要

ンバーのほか、教えを受けたい学生ら合わせて六十人が参加した。

法要は、同会の会員で玉泉院住職の戸部経三さんに

よって、しめやかに執り行われ、戦中戦後の厳しい時代をともに過ごした青春の思い出を語り合った。



朗読劇でチャリティー

市役所を訪れた平沢会長らは後藤善雄助役に、「福祉事業に役立てほしい」と収益金を寄付。同市はこの寄付金を福祉事業基金に積み立て、福祉の充実のために幅広く活用していく。

朗読劇でチャリティー
市役所を訪れた平沢会長らは後藤善雄助役に、「福祉事業に役立てほしい」と収益金を寄付。同市はこの寄付金を福祉事業基金に積み立て、福祉の充実のために幅広く活用していく。



後藤助役に寄付金を手渡す平沢会長(中)

1997年11月27日付上毛新聞
野球部OB会
朗読劇でチャリティー

戦争の悲惨さを伝えたい

都所さん遺族 特攻隊員遺品を寄贈



第二次世界大戦末期に海軍一九四五年一月十二日、志願特別攻撃隊員として太平洋に特攻した都所善之助の遺品が七日、母校の渋川高校に寄贈された。遺族から遺品を預かった都所氏の同級生が同校を訪れ、板倉校長や下副校長に直接手渡した。同校は同窓会「都所善之助」に都所コトコトを設置して遺品を展示、戦争の悲惨さや平和の尊厳を生徒たちに訴えていくこととしている。

都所さんは、吾妻町釜井の出身。旧制渋川中(現渋川高校)の五年次に海軍機関学校に合格して入学。終戦間近に

遺品は勲章や下副品の短刀、遺髪、辞世の短冊、写真など十九点。東京都世田谷区在住の都所さんの兄弟が持っているが、高齢となって保管が困難になったため、同窓会に展示してほしいと、都所さん(現年八十七)の同級生の旧制渋川中十七回生を通じて都所さん(現年八十七)の同級生から遺品を預かってきた在京の同級生ら六人が出席。板倉校長や右原副行同窓会代理、川崎富三(元同

1998年4月8日付上毛新聞
都所さん遺族特攻隊員遺品を寄贈

板倉校長は「先輩の思いのこもった遺品の数々を個人で預かり、後輩の生徒たちに戦争の悲惨さや都所先輩の思いを伝えるべき」と語り、以前から保管していた都所さん関連の資料と一掃に公開している。

親子孫3代9組を顕彰

渋川高同窓会(川崎富三)は、親子孫三代同窓生の顕彰の機会を捉え、渋川市のプレオパレスで開かれた川高同窓会が総会



渋川市のプレオパレスで開かれた渋川高同窓会が総会

1994年6月17日付上毛新聞
渋高同窓会が総会
親子孫3代9組を顕彰

計集計、新年度の事業計画の審議などが行われた。親子孫三代同窓生の顕彰は昭和六十二年から行われており、今回で四十五組が顕彰されているが、今年も九組が顕彰された。また懇親会では同窓生で落語家の三遊亭左四郎さんが落語を演じた。

戦時中の青春つづる

旧制渋川中 卒業50周年記念し文集



卒業から50年の記念に発行された久遠会の冊子「卒業から50年」

旧制渋川中(現渋川高校)の二十二年卒業生である久遠会(大塚昌之会長)は、今年で卒業五十周年になるのを記念して、同窓の文集「於波飛天(おもひ)」「B50判(六十)」を発行した。太平洋戦争は三発の年に入學し、終戦と同時に上り卒業した同窓生たちの青春を戦争とともに通した日々の思いが込められている。二十五日には伊香保町の旅館で二年ぶりに同窓会を開催予定。文集内に収めた卒業当時の写真

1995年6月25日付上毛新聞
久遠会
卒業50周年記念文集

真に並べ、当時の同窓会の写真や、ほぼ大塚会長の元にも集まった。寄稿したのは四十六人で、幹事の人数がワープロで打ちながら三月がかりで仕上げた。文集には学生活動時代の空想感を訴えたもの、戦時中の県下中学校の駅伝大会の模様を記したものが目立っている。

文集は、東京の印刷会社を経営する後輩に頼み、校正を重ね三刷印刷した。表紙の題字は、同窓の田中一徳さんが直筆し、文字のかすれ具合も見事に再現してある。

大塚会長は「東京の会員もおり、思い出の詰まった文集ができる。二十五日には多くの会員と談話したい」と話している。

1995年9月7日付上毛新聞
佐藤次郎遺品展

愛用のラケットやカメラ展示

渋川で多すぎた佐藤次郎の遺品や資料などを展示する「佐藤次郎遺品展」が八日、渋川市役所のロビーで開かれた。

佐藤次郎は子持村出身。旧制渋川中(現渋川高校)から早稲田へ進学。昭和六年から八年にかけて、ウィンブルドン全米選手権全英選手権で四回優勝した。四回優勝した後も、ベスト4に入るといった活躍をした。昭和九年には佐藤次郎の事業をたて、本業で佐藤次郎杯大会が開催された。戦争で途切れたが、戦後の昭和二十一年に復活し、今年で五十回目を迎える。

遺品展は、十に渋川市総合公園(現津田)で開催。五十回大会を記念して、佐藤次郎の遺業を知ってもらうと開催された。会場には、渋川高校の同窓会に保管されているラケット、カメラ、トランプ、カメラなどのほか、写真や資料が展示されており、同窓生を訪れた人たちが興味深そうに見入っている。



渋川市役所ロビーで開かれた「佐藤次郎遺品展」

同窓会の活動

定期総会に80人
旧交温める
渋川高校東京同窓会
三策会長)の定例総会が東京
千代田区の東海大学校友会
館で開かれ、約八十人が出席
した。



1999年3月28日付上毛新聞
東京同窓会定期総会に80人

青木会長は「前身の旧制渋川中学が一九二〇年に創立されて以来、二〇〇年で八十年を迎える。記念事業に向けた取り組みも進んでいる」と、母校の歴史を紹介。出席者らは九九年事業計画や役員改選案などを承認した後、懇親会で旧交を温めた。

同校OBで東京同窓会顧問の木暮剛平(電通相談役)や沢藤参院議員も出席したほか、母校から石原副同窓会長や板倉美知久校長らが駆け付け、出席者と楽しいひとときを過ごした。

絆深めて
在京県人会の今

渋川高校 東京同窓会

青木会長

役員は、今年三年目の青木三策会長(中二十回卒、県工)として一話す。三月の総会と懇親会には約八十人、顧問には木暮剛平(電通相談役)や沢藤参院議員も出席する。若い世代にも気軽に参加してもら

役員は、今年三年目の青木三策会長(中二十回卒、県工)として一話す。三月の総会と懇親会には約八十人、顧問には木暮剛平(電通相談役)や沢藤参院議員も出席する。若い世代にも気軽に参加してもら

渋女OGとも交流



3月に開かれた総会・懇親会で乾杯する会員ら

い懇親を深めようと、会員のことが多く、落語家、三遊亭家も参加する。季節限定の「高十五回卒」や「高十五回卒」が納涼祭で同窓会を務め、会場を盛り上げた。四月の母校開校記念日の記念講演会には毎年、各界で活躍する会員らを講師として推薦。後輩たちのために熱心な支援を続けている。母校創立七十周年の際は東京から大学として古里を訪れ、記念事業の成功に協力し懇親を深めた。

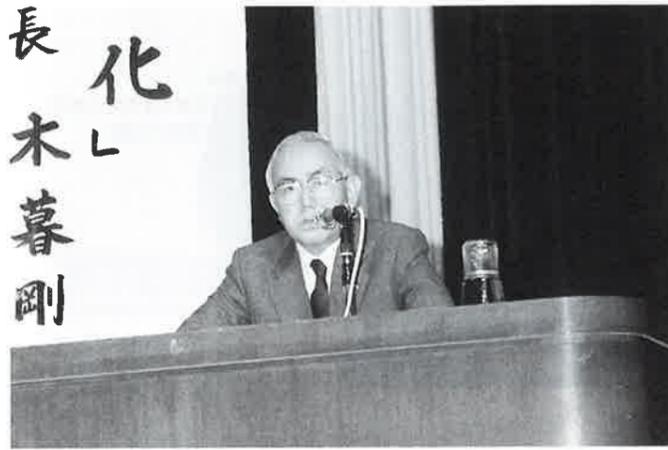
青木会長は、東京周辺の渋川女子高同窓会との交流も深め、互いの行事に会員が参加し合うなど、従来の同窓会の枠を超えた積極的な活動を展開している。「このまま長く仲の良い同窓会を続けていきたい。(二〇〇〇年)創立八十周年に向け、会を挙げてできる限りの努力をしたい」と意気込んでいる。

この七日、東京・晴海埠頭の豪華船上で納涼祭が開かれ、百六十人が参加する盛況ぶりだった。

問い合わせは、渋川高校東京同窓会事務局(☎03・5303・7525)へ。

1999年8月12日付上毛新聞
絆深めて
渋高東京同窓会

同窓会関係
開校記念講演会



1988年度講師
木暮剛平氏(電通社長)
「これからの社会の変化」



1991年度講師
青木三策氏(東海大学工学部教授)
「戦中・戦後から技術大国」



1992年度講師
相崎幸二氏(商船三井客船社長)
「私、海運、そして客船」

※肩書きは講演会当時のものです



1989年度講師
永井恒司氏(星薬科大学薬学部教授)
「体に良く効く薬にする」



1990年度講師
馬場宏二氏(東京大学経済学部教授)
「数学、歴史、経済学」



1993年度講師
木之内高氏（帝京大学医学部教授）
「医学における最近の話題」

1994年度講師
谷玄昭氏（深大寺住職）
「道心の中に衣食あり」



1995年度講師
松本昭彦氏（横浜市立大学医学部教授）
「理想を高く掲げて人生を歩もう」

1996年度講師
山口隆氏（第一生命副社長）
「多様な価値観と不動産の価値観」



※肩書きは講演会当時のものです



1997年度講師
佐藤光夫氏（アジア開発銀行総裁）
「アジアと日本」



1998年度講師
木暮金太夫氏
（国際温泉気候連合・FITEC副会長）
「温泉と環境」



1999年度講師
岸國平氏（農業技術協会会長）
「母校の恩と私の半生」



2000年度講師
江時久氏（フリーライター）
「人間とコミュニケーション」

※肩書きは講演会当時のものです

公共施設で ごみ拾い

洪川高校生徒会（宇佐美胤会長）は十八日、同学校周辺の環境美化活動「グリーンハイク」を実施、参加した生徒八十人がごみや空き缶拾いなどをを行った。

グリーンハイクは、日ごろから学校周辺で利用している通学路や公共施設などの環境美化で社会奉仕しようと、十



年前から行われている。同学校生徒の環境への関心は高

1995年11月19日付上毛新聞
グリーンハイク

く、今年秋には、県環境教育で奨励賞を受賞した。

この日は、近くの真光寺や公園、通学路など四つの班に別れて空き缶やごみなどを拾い集めた。宇佐美生徒会長は「一年に一回と言わずに、もっと回数を増やしていきたい。また、洪川市内四つの高校で一緒に取り組む機会をもっと設けたい」と話している。

学校周辺の環境美化に取り組み洪川高校の生徒たち

「工学の楽しさ知って」

洪川高で 1年生対象に出前授業

工学の楽しさ、魅力を知っている子供たちの工学離れが懸念され、群大工学部は、生物化学工学科の四人の教授が二十五日、洪川市並木町の洪川高校で「出前授業」を行い、今年で二回目となった。

出前授業は、最近指摘されている子供たちの工学離れが懸念され、群大工学部に生物化学工学科の四人の教授が二十五日、洪川市並木町の洪川高校で「出前授業」を行い、今年で二回目となった。

出前授業は、最近指摘さ



洪川高校で行われた群大工学部の教授による出前授業

の時間を利用し、「新しいダイヤモンド合成法」や「生物ものまね材料」などをテーマに、各専門分野を中心に最新の研究成果を織りまぜながら講義した。

宝田教授は生徒の反応について「とても視線を感じた。大学生よりも熱心に聞いてくれた」と話していた。

1996年9月26日付上毛新聞
洪高で群大・工学部教授の出前授業

洪川高が修学旅行中止

各校に 富岡はコース変更

兵庫県南部地震の影響で、来月修学旅行を予定していた県内の高校で、旅行を取りやめたり計画を変更するところが出てくる。広島県や京都府など関西・中国地方への旅行を計画していた洪川が十九日、中止を決定したほか、中

兵庫県南部地震の影響で、来月修学旅行を予定していた県内の高校で、旅行を取りやめたり計画を変更するところが出てくる。広島県や京都府など関西・中国地方への旅行を計画していた洪川が十九日、中止を決定したほか、中

兵庫県南部地震の影響で、来月修学旅行を予定していた県内の高校で、旅行を取りやめたり計画を変更するところが出てくる。広島県や京都府など関西・中国地方への旅行を計画していた洪川が十九日、中止を決定したほか、中

しみにしていたが、理解してもらった」と話す。

富岡（同二十一日）は、中央（同四十八日）も広島一京都市だが、富岡は日程は変更せずに大阪以西のコースを取りやめた。出発日の最も早い中央は「予定日は事実上、不可能」としており、四月以降を含めた延期を検討、二十日に結論を出す。

高崎（同二十一日）は奈良・京都中心の計画。しかし、三日目に大阪や神戸の見学を組み入れていたクラスがほとんどだったため、京都中心の

1995年1月20日付上毛新聞
洪高が修学旅行中止

学校関係

1994年10月3日付上毛新聞
定時制来年度の募集停止

来年度の募集停止

正式決定 今後とも統廃合検討

県教委は、定時制課程の募集停止を決定した。これは、定時制課程の統廃合を進めることによるものである。定時制課程の募集停止は、今後とも統廃合を検討することになる。

定時制課程の募集停止は、今後とも統廃合を検討することになる。これは、定時制課程の統廃合を進めることによるものである。

定時制課程の募集停止は、今後とも統廃合を検討することになる。これは、定時制課程の統廃合を進めることによるものである。

定時制課程の募集停止は、今後とも統廃合を検討することになる。これは、定時制課程の統廃合を進めることによるものである。

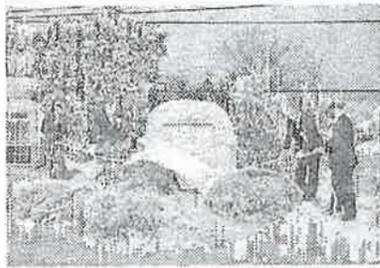
定時制課程の募集停止は、今後とも統廃合を検討することになる。これは、定時制課程の統廃合を進めることによるものである。

定時制課程の募集停止は、今後とも統廃合を検討することになる。これは、定時制課程の統廃合を進めることによるものである。

50年の歴史に幕

1460人送り出す

県立渋川高校（板倉美知久校長）で十四日、同校定時制の閉校記念式典が行われ、多くの参加者に見守られながら五十年の歴史に幕を閉じた。同校定時制は、一九四八年に定員四百人（八学級）で設置された。七九年に男女共学



県立渋川高校定時制の閉校記念式典で行われた記念碑除幕式

1998年3月15日付上毛新聞
定時制50年の歴史に幕

業生や同校関係者、県や近隣市町村関係者など約五百十人が訪れた。
板倉校長は「働きながら学ぶ青少年の教育機関として、使命を立派に果たしたと満足している。生徒の努力と先生方の指導、県や地域関係者の支援により多くの優れた人材を社会に送り出したことは本校の誇り」とあいさつ。謝辞として、第一期生の山崎恒男さん（右）が「五十年間、数多くの人たちの協力をいただき、卒業生全員心から感謝している。本校で学んだことを自分自身を高める」という定時制生徒の思いを込めた記念碑生きていきたい」と話した。「働学修己」の除幕式も行った。また、「働きながら学び自

ち。同市上郷の小野池公園に集合し、市内をまんべんなくきれいにしようと、あらかじめ設定しておいた四つのコースに分かれて公園を出発。他校の生徒と親しくを深めながら、それぞれのルートで駅前公園まで市内を清掃して歩いた。

渋川4高校が合同清掃活動

渋川、渋川西、渋川工、渋川女の四高校合同クリーンハイクが十八日、渋川市内で行われ、約九十人の生徒がコースに分かれて空き缶やごみを拾って歩いた。

合同クリーンハイクは、環境美化活動に生徒が自主的に参加して、環境問題や奉仕活動への関心を高めてもらい、併せて他の高校との交流を進めるのが狙い。

渋川高校が十一年以上前から毎年、生徒会主体で独自に実施しており、昨年からの趣旨の徹底を図ろうと、市内四校の生徒会が持ち回りで幹事校を決めて本格的に行っている。



今年も渋川西高が幹事校。参加したのは各校生徒会の呼びかけで集まった生徒たち。ごみを拾って歩く4高校の生徒

1997年10月20日付上毛新聞
渋川4校合同クリーンハイク

渋川高定時制最後の卒業式

10人が巣立つ

1998年3月3日付上毛新聞
定時制最後の卒業式

県立渋川高校（板倉美知久校長）の卒業式で二日、本年度限りで閉校となる定時制の最後の卒業生が学びやを巣立った。十四日に閉校記念式典が開かれる。

同校定時制は一九四八年に設置され、七一年に渋川女子高校定時制の廃止に伴い、男女共学に移行。生徒

数の減少で、定時制の統廃合を進める県教委は九五年から生徒募集を停止。本年度で五十年の歴史を終えることになった。卒業生は計千四百六十人に上る。

最後の卒業生は男女五人ずつの計十人。全日制と合同で行われた式で、一人ひとりの名前が呼ばれた後、代表して斎藤知恵子さんが卒業証書を受け取った。最後に阿久沢明美さんが答辞を述べ「後輩がいないため、進級するたびに教室が減っていった。定時制が姿を消すのは寂しいが、最後の卒業生として胸を張って今後の人生を歩みたい」と飛躍を誓った。



大回転少年男子 松本 快走9位

天皇杯は9位

本県アルペン界久々の新星
山形スキー国体
「松本和也」
山形県立GS高等学校の松本和也選手が、山形国体スキー大会の大回転少年男子で9位入賞を果たした。松本選手は、この大会で個人総合でも9位入賞を果たし、県代表として天皇杯に出場した。松本選手は、この大会で個人総合でも9位入賞を果たし、県代表として天皇杯に出場した。

1992年3月3日付上毛新聞
松本和也 山形国体GS少年男子9位

育英(男)群女(女)総合優勝

陸上学校対抗
▽男子 ①慶大107点②青英61点③関学附25・5点④前橋商⑤桐生工⑥桐生第一
▽女子 ①群女短附53点②伊勢崎女36点③桐生女20点④関学附⑤富岡東⑥太田商
学校対抗総合成績
【男子】①青英90点②渋川79点③前橋商77点④慶大73点⑤桐生73点⑥桐生工77点⑦太田54・5点⑧前橋53点⑨桐生50・5点⑩前橋

1992年5月25日付上毛新聞
県高校総体総合2位

総合2位 山岳・硬式テニス優勝

平成4年度高校総体



前日8年目にして初優勝の硬式テニス部

山岳
硬式テニス
空手2位・軟式庭球3位・卓球4位

渋高新聞

発行所
印刷所
発行所
印刷所

1992年7月20日付渋高新聞
県高校総体総合2位

順位	学校名	種目	得点	順位
1	前橋	山岳	17.5	1
2	前橋	山岳	17.5	2
3	前橋	山岳	17.5	3
4	前橋	山岳	17.5	4
5	前橋	山岳	17.5	5
6	前橋	山岳	17.5	6
7	前橋	山岳	17.5	7
8	前橋	山岳	17.5	8
9	前橋	山岳	17.5	9
10	前橋	山岳	17.5	10
11	前橋	山岳	17.5	11
12	前橋	山岳	17.5	12
13	前橋	山岳	17.5	13
14	前橋	山岳	17.5	14
15	前橋	山岳	17.5	15
16	前橋	山岳	17.5	16
17	前橋	山岳	17.5	17
18	前橋	山岳	17.5	18
19	前橋	山岳	17.5	19
20	前橋	山岳	17.5	20

インターハイ出場選手紹介

頑張れ! 渋高健児!!



若くもみれる55歳

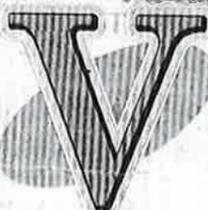
1994年12月24日付上毛新聞
美術部作品展

あすまで作品展
今年度は、美術部が主催する美術部作品展が、12月24日(土)から25日(日)まで、本校体育館で開催された。今年度は、美術部員15名が、それぞれ個性あふれる作品を発表した。中でも、油絵の分野では、大活躍をみせた。また、水彩画や版画の分野でも、力作が数多く発表された。今回の作品展は、美術部員たちの努力の結晶であり、観客の目を惹きつけた。また、美術部員たちの成長も、この作品展から窺える。今後も、美術部員たちは、さらなる活躍を期す。

渡辺

全国高校選抜スキー

男子 スーパー大回転

第十一回全国高校選抜スキー大会（アルペン種目は二十四日、長野県・穂高高原スキー場で男女のスーパー大回転が行われ、渡辺はスーパー大回転、大回転、回転の三種目で総勢初優勝を挙げた。渡辺は「優勝はうれしいが、来年はもっと高い目標を掲げたい」と意気込みを語った。

渡辺は、今年度のスキー大会で、大回転、スーパー大回転、回転の三種目で優勝し、初の三種目優勝を果たした。渡辺は「優勝はうれしいが、来年はもっと高い目標を掲げたい」と意気込みを語った。

渡辺は、今年度のスキー大会で、大回転、スーパー大回転、回転の三種目で優勝し、初の三種目優勝を果たした。渡辺は「優勝はうれしいが、来年はもっと高い目標を掲げたい」と意気込みを語った。

1999年3月25日付上毛新聞
渡辺靖彦 全国高校選抜スキーSGでV

1999年9月7日付上毛新聞
トライアスロン全国高校大会でV 狩野

狩野

夢は五輪出場



トライアスロン全国高校大会でV

競技人口年々増加
小中学生部門も

まだ成長過程
获原健が理想

「夢は五輪出場」を掲げる狩野は、今年度のトライアスロン全国高校大会で優勝を果たした。狩野は「優勝はうれしいが、来年はもっと高い目標を掲げたい」と意気込みを語った。



資料編
学校概況等

現教職員名簿

職名	氏名	教科	職名	氏名	教科
校長	富田 祥男		教諭	春山 宜紀	国語
教頭	横堀 剛毅		教諭	野村 健司	数学
教諭	木村 喜良	体育	教諭	高橋 正樹	理科
教諭	石田 洋	英語	教諭	岡田 典子	家庭
教諭	狩野 悠	国語	教諭	市川 仁	英語
教諭	下田 紀史	美術	教諭	池田 賢一	地・公
教諭	島田 要	数学	教諭	細矢 瑞紀	国語
教諭	木暮 満	数学	教諭	島田 利夫	体育
教諭	石津 和俊	理科	教諭	佐藤 治彦	数学
教諭	高野 敏子	家庭	教諭	中谷 賢一	理科
教諭	鍋木 澄雄	国語	教諭	遠藤 考之臣	英語
教諭	田村 吉廣	理科	教諭	市村 直子	英語
教諭	保科 昇	地・公	教諭	成田 京子	英語
教諭	小林 俊文	体育	教諭	真藤 克裕	体育
教諭	永森 順久	数学	養護教諭	川田 理恵子	
教諭	藤井 巧	英語	主任実習助手	田中 順子	
教諭	蛇石 和則	英語	総括事務長	小泉 邦昭	
教諭	小澤 秀雄	国語	主幹兼事務長代理	小金井 勉	
教諭	小川 俊行	理科	事務主任	谷 美由紀	
教諭	廣澤 秀伸	音楽	事務主任	吉水 孝彦	
教諭	小島 淳暢	数学	学校司書	高橋 利恵子	
教諭	原澤 弘子	国語	特任助手	番場 幸作	
教諭	上原 弘充	数学	特任助手	浅見 芳弘	
教諭	細川 隆一	地・公	日直代行員	青木 義男	
教諭	阿久澤 毅	体育	日直代行員	松下 秀夫	
教諭	高橋 靖	英語	(非)講師	須田 幸秀	地・公
教諭	小菅 正登	英語	(非)講師	小竹 恵子	理科
教諭	高橋 敏之	地・公	(非)講師	原田 克彦	体育
教諭	山田 直樹	国語	校医	高井 淳	内科
教諭	田中 隆裕	理科	校医	川島 理	耳鼻科
教諭	中村 一広	数学	校医	平形 義人	眼科
教諭	岩崎 尚樹	数学	校医	干川 栄二	歯科
教諭	内藤 隆	地・公	学校薬剤師	宮前 明	

卒業生数

卒業年	回数	人数	卒業年	全日制		定時制		計	
				回数	人数	回数	人数		
大正14年	中学1	33	昭和24年	高校 1	94			94	
15年	2	34	25年	2	146			146	
昭和 2年	3	73	26年	3	181			181	
3年	4	67	27年	4	256	高校 1	41	297	
4年	5	69	28年	5	192	2	80	272	
5年	6	70	29年	6	206	3	75	281	
6年	7	83	30年	7	261	4	84	345	
7年	8	75	31年	8	262	5	70	332	
8年	9	67	32年	9	263	6	76	339	
9年	10	81	33年	10	262	7	58	320	
10年	11	84	34年	11	250	8	66	316	
11年	12	67	35年	12	254	9	60	314	
12年	13	77	36年	13	253	10	51	304	
13年	14	80	37年	14	242	11	47	289	
14年	15	72	38年	15	243	12	51	294	
15年	16	81	39年	16	243	13	48	291	
16年	17	87	40年	17	301	14	36	337	
17年	18	95	41年	18	375	15	69	444	
18年	19	95	42年	19	359	16	60	419	
19年	20	93	43年	20	357	17	39	396	
20年	21	5年122 4年167	44年	21	349	18	43	392	
21年	22	52	45年	22	335	19	34	369	
22年	23	114	46年	23	335	20	19	354	
23年	24	189	47年	24	325	21	21	346	
24年	25	19	48年	25	327	22	16	343	
			49年	26	314	23	9	323	
			50年	27	347	24	11	358	
			51年	28	361	25	16	377	
			52年	29	372	26	11	383	
			53年	30	360	27	10	370	
			54年	31	355	28	11	366	
			55年	32	360	29	14	374	
			56年	33	354	30	12	366	
			57年	34	342	31	17	359	
			58年	35	356	32	6	365	
			59年	36	356	33	12	370	
			60年	37	351	34	3	357	
			61年	38	342	35	5	348	
			62年	39	357	36	5	366	
			63年	40	349	37	14	367	
			平成元年	41	359	38	13	378	
			2年	42	346	39	11	360	
			3年	43	359	40	15	377	
			4年	44	362	41	18	381	
			5年	45	360	42	16	381	
			6年	46	358	43	12	373	
			7年	47	343	44	8	354	
			8年	48	353	45	7	360	
			9年	49	329	46	8	338	
			10年	50	312	47	5	322	
			11年	51	276			276	
			12年	52	271			271	
計	—	2,146	計	—	15,975	—	1,413	47	17,435
総計				19,581					

学校現況

指導方針

1 校訓

質実剛健 堅忍持久

2 教育方針

教育基本法、学校教育法に示された事項及び精神に基づき、平和的、民主的、文化的社会の形成者として、また、真に国際社会の発展に貢献できる者として、心身共に健全な国民の育成を目指す。

3 教育目標

- (1) 校訓「質実剛健」「堅忍持久」
- (2) 豊かな教養に根ざした均衡のとれた判断力と高い学力を身につけるとともに、たくましい実践力を養う。
- (3) 理解と愛情をもって自立的集団生活を営むことのできる能力を養う。
- (4) 積極的・自発的な学習態度の確立に努め、深く豊かな知性を養う。
- (5) スポーツを奨励し、健康の増進を図り、明朗・健全な心身を養う。
- (6) 道義心を培い、気品高き校風を厳守し、洗練された情操を養う。

4 運営方針

- (1) 組織として十分機能するため、信頼と秩序ある学校作りに努める。
 - 教育が成り立つ上で大切なことは、教職員と生徒が“啐啄同時”の関係にあることである。学校全体で良好な師弟関係、好学進取の雰囲気づくりに努める。
 - 学校の教育方針の具体化や指導過程において、分掌・学年・教科間の連携を十分に図る。
- (2) 組織体としての学校が活性化するため、教職員が使命感や目的意識を共有するとともに、組織の一員として役割と責任を果たし相互理解を図る。
 - 共通理解や集団の和は、共通の目標に対する具体的な実践と他者の立場や意見を尊重し思いやるところに培われる。
 - 人が人を理解し、つながりをもって指導することは、人間を望ましい方向に変化させる教育活動に結びつき、仕事に活力とやりがい生まれる。

5 本年度の重点目標

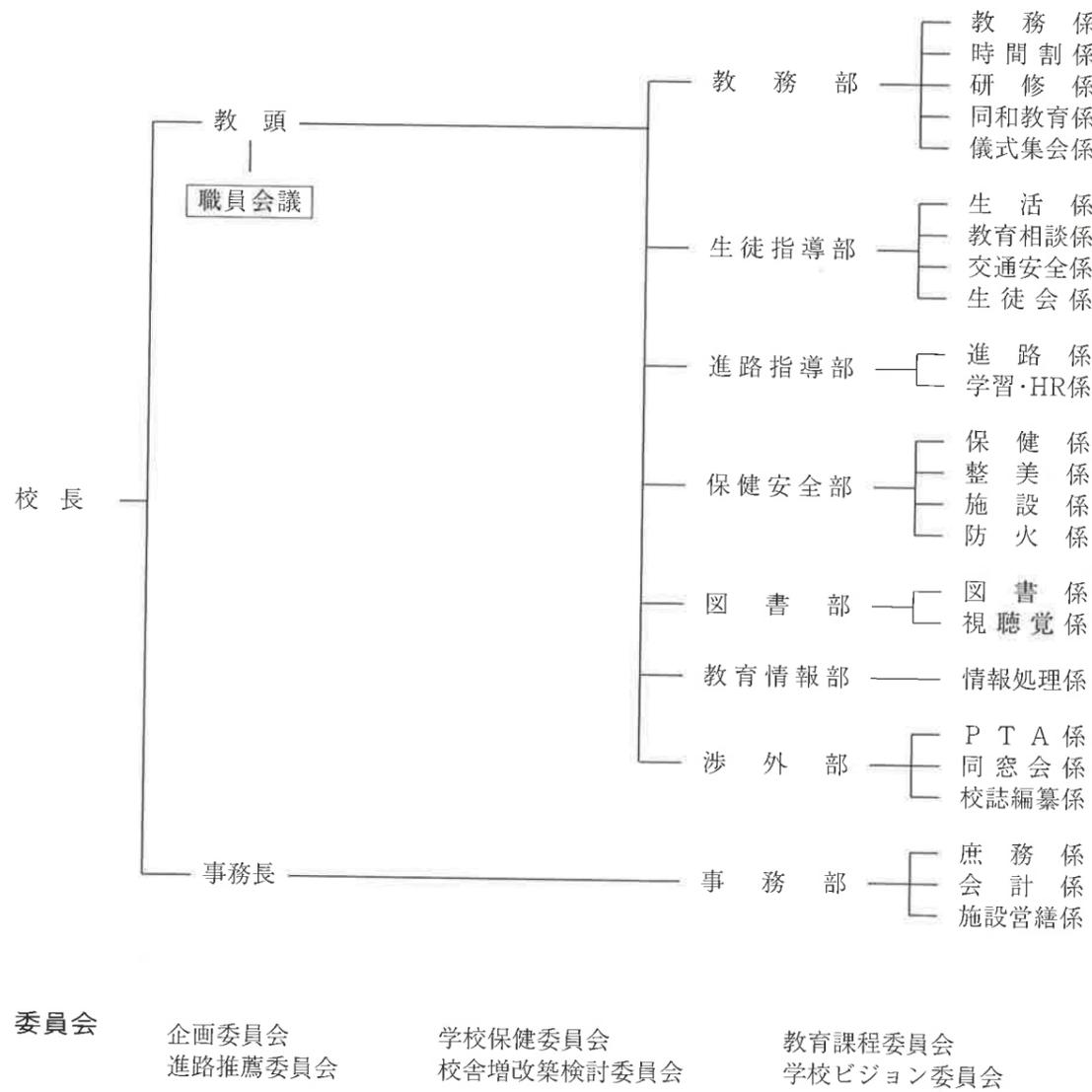
- (1) 学力向上と現役での進路目標の達成
 - 授業時数の確保と、密度の高い授業の展開を図る。その実現のため、研究授業等の校内研修会の充実を目指す。
 - 個に応じた指導の推進と、家庭学習時間（学年＋2時間）の定着化を目指す。
 - 新学習指導要領に基づき、生徒の興味・関心を広く生かせる教育課程の編成を研究する。
 - 補習授業の計画的・組織的实施と、特別編成授業の拡充を期する。
 - 適切な進路情報等の提供と、“入れる大学”よりも“入りたい大学”への合格指導を徹底する。
- (2) 生徒指導の充実
 - 基本的生活習慣の確立—特に挨拶の励行及び遅刻・欠席の防止に努める。
 - 規律ある充実した集団生活を目指す。
 - 交通安全指導を徹底する。
 - 他への思いやりの心の育成を醸成する。
 - ボランティア活動への積極的な参加を期する。
- (3) 部活動等の振興による心身共に健全で、粘り強い生徒の育成
- (4) 学習環境の整備と美化
 - 施設・設備の改善・整備を期する。
 - 校舎内外の清掃を徹底する。

職員組織

教職員数等

課程	校長	教頭	教諭	養護教諭	事務職員	学校司書	実習助手	公仕	合計	非常勤講師	学校医	学校歯科医	学校薬剤師	備考
全日制	1	1	45	1	4	1	1	2	56	3	3	1	1	

学校運営組織〔校務分掌組織図〕



生徒の状況

出身中学校別生徒数 (平成12年9月末現在)

部・同好会

中学校名	1年	2年	3年	合計		
洪川市	洪川	18	14	21	53	
	洪川北	23	30	21	74	
	金島	11	12	8	31	
	古巻	18	23	19	60	
北群馬郡	子持	14	14	20	48	
	小野上	1	2	0	3	
	伊香保	3	2	7	12	
	榛東	15	16	14	45	
	吉岡	31	22	30	83	
	中之条	18	14	19	51	
	中之条西	4	2	5	11	
吾妻郡	東	2	3	5	10	
	原町	6	5	10	21	
	太田	4	5	5	14	
	岩島	3	4	6	13	
	坂上	5	6	4	15	
	長野原東	2	5	3	10	
	長野原西	2	2	0	4	
	嬭恋東	0	3	2	5	
	嬭恋西	5	3	3	11	
	草津	2	5	4	11	
	六合	0	1	0	1	
	高山	1	4	1	6	
	勢多郡	北橋	19	18	17	54
		赤城南	13	12	5	30
赤城北		4	2	4	10	
富士見		14	9	5	28	
第一		0	0	1	1	
前橋市	第三	2	1	3	6	
	第六	10	6	8	24	
	元総社	3	1	0	4	
	東	2	5	4	11	
	箱田	0	4	3	7	
	南橋	17	13	10	40	
	鎌倉	0	0	2	2	
	桂萱	1	0	0	1	
	群大附属	0	0	2	2	
	沼田市	沼田	0	0	1	1
沼田西		0	2	0	2	
沼田東		0	0	1	1	
利根郡	川場	1	0	0	1	
	片品	0	1	1	2	
	月夜野	1	0	1	2	
	水上	0	1	1	2	
群馬郡	新治	0	3	0	3	
	群馬中央	4	0	0	4	
高崎市	群馬南	1	0	0	1	
	長野郷	0	0	1	1	
合計	280	275	277	832		

文化部	社	会
	吹奏楽	会
	美術	会
	文芸	会
	物理	会
	化学	会
	生物	会
	演劇	会
	数学	会
	将棋	会
運動部	スキー	部
	スケート	部
	陸上競技	部
	サッカー	部
	バレーボール	部
	ソフトテニス	部
	バスケットボール	部
	卓球	部
	野球	部
	柔道	部
	剣道	部
	体操	部
	空手道	部
	山岳	部
	水泳	部
ラグビー	部	
テニス	部	
バドミントン	部	
同好会	フォーク研究会	
	クイズ研究会	
	漫画研究会	
	コーラス愛好会	
	映画研究会	
	J R C	
	占い研究会	
英語研究会		
鉄道研究会		

歴代生徒会長

渋川高等学校		氏名	卒業回数
代	在職期間		
20	1965年～1966年	山田 泉	全19回卒
21	1966年～1967年	割田 恒志	全20回卒
22	1967年～1968年	高橋 秀俊	全21回卒
23	1968年～1969年	田村 元喜	全22回卒
24	1969年～1970年	堀込 秀次	全23回卒
25	1970年～1971年	佐久間 正直	全24回卒
26	1971年～1972年	佐藤 明	全25回卒
27	1972年～1973年	富沢 美昭	全26回卒
28	1973年～1974年	橋爪 一也	全27回卒
29	1974年～1975年	川島 理	全28回卒
30	1975年～1976年	齊藤 茂	全29回卒
31	1976年～1977年	安達 哲朗	全30回卒
32	1977年～1978年	間 匡弘	全31回卒
33	1978年～1979年	松下 秀之	全32回卒
34	1979年～1980年	高橋 仁	全33回卒
35	1980年～1981年	高橋 養広	全34回卒
36	1981年～1982年	石塚 博文	全35回卒
37	1982年～1983年	柴田 琢磨	全36回卒
38	1983年～1984年	高橋 宗明	全37回卒
39	1984年～1985年	太田 浩嗣	全38回卒
40	1985年～1986年	宇津木 洋一	全39回卒
41	1986年～1987年	埴田 裕之	全40回卒
42	1987年～1988年	剣持 貴行	全41回卒
43	1988年～1989年	荒井 健吾	全42回卒
44	1989年～1990年	関上 哲也	全43回卒
45	1990年～1991年	田子 達也	全44回卒
46	1991年～1992年	高橋 大輔	全45回卒
47	1992年～1993年	鎗木 拓実	全46回卒
48	1993年～1994年	大沢 功一	全47回卒
49	1994年～1995年	関 芳和	全48回卒
50	1995年～1996年	宇佐美 胤	全49回卒
51	1996年～1997年	唐沢 和之	全50回卒
52	1997年～1998年	阿部 直人	全51回卒
53	1998年～1999年	小沢 広海	全52回卒
54	1999年～2000年	青木 澄人	
55	2000年～	木暮 智幸	

現存する渋中、渋高の自治会誌や生徒会誌を元に調査して判明したものです。創立90、100周年に向けて調査を続けたいと思いますので、ご存じの方は同窓会事務局(渋高内)にご一報ください。

学校施設

施設の概要

- (1) 校地面積 ——— 28,521m²
 (2) 校舎面積 ——— 11,161m²
 (3) 運動場敷地面積 ——— 15,807m²

校舎面積 内 訳	棟名	区分	棟数	面積	摘 要
		本 校 舎		1	6,236m ²
	北 校 舎		1	730m ²	被服実習室 食物実習室 図書館
	音 楽 室		1	432m ²	音楽室 天体観測室
	体 育 館		1	2,127m ²	体育場 卓球場
	格 技 場		1	534m ²	柔道場 剣道場
	部 室		3	349m ²	
	セミナーハウス		1	686m ²	食堂 合宿場 展示室(榛嶺会館)
	倉 庫		3	67m ²	
	計		12	11,161m ²	

年間行事予定

4月	始業式 入学式 新任式 大掃除 対面式 離任式 生徒会紹介 部・サークル紹介及び編成 進路希望調査 家庭学習時間調査 図書館オリエンテーション 追認試験 群数研テスト(1・2年) ミニマナーアップ運動 身体計測 内科・眼科・耳鼻科検診 心臓検診(1年) 開校記念式典及び記念講演会 交通安全教室 1年オリエンテーション 通学用自転車登録・更新及び安全点検	9月	始業式 大掃除 校内模試(3年) 校内実力テスト(1・2年) 追認試験 学校説明会(学校開放) 貧血検査(1年) 進路別集会(3年) 進路希望調査 類型選択説明会(1年) マナーアップ運動 体育祭
	5月		教職員検診 結核検診(1年・教職員) 生徒総会 公務員模試(3年) 小論文模試 校内模試(3年) 尿検査歯科検診 高校総体 家庭学習時間調査 PTA・教育振興会総会 防火訓練 中間試験 救急法講習会 教育実習(～6月中旬) 下宿生指導訪問 交通安全街頭指導
6月		衣替え 同窓会総会 漢字検定 英語検定 公務員模試(3年) 進路講演会(3年) 献血 榛嶺祭 教育実習生を囲んで エイズアンケート(3年) 職員健康相談 (榛嶺祭と隔年で対沼高定期戦)	11月
	7月	期末試験 保護者面談(3年) 進路講演会(2年) 生徒会本部役員立会演説会・投票・開票 成績会議 終業式 大掃除 生徒会役員認証式 生徒会新聞発行 夏季補習(1・2・3年) 志望校検討会(3年) 地区図書委員研修会	12月
8月		除草作業(1年) 各部合宿(榛嶺会館他) 北毛地区特活研 サマースクール 夏季補習(3年) ステップアップ補習(1・2年) オープンキャンパス見学(2年) 全国PTA連合大会	1月
		2月	英語検定 進路講演会(2年) 家庭学習時間調査(1・2年) 高校入試(前期選抜) 卒業認定会議
		3月	卒業式 学年末試験(1・2年) 高校入試(後期選抜) 志望校検討会(2年) 成績会議(1・2年) 終業式 大掃除 「榛嶺」及び生徒会新聞発行 入学説明会

入学者教育課程表

平成10年度		課程名/全日課程 学科・類型名/普通科 対象学級数/1学年7学級(男子)						単位数の合計
教科名	科目名	単 位 数						
		1年	2年(文系)	2年(理系)	3年(文Ⅰ系)	3年(文Ⅱ系)	3年(理系)	
国 語	国 語 Ⅰ	5						5
	現 代 文		2	2	3	3	2	4・5
	古 典 Ⅰ		3	2				2・3
	古 典 Ⅱ				5	3	2	2・3・5
	古 典 講 読				2			0・2
地 理 歴 史	世 界 史 A			2				0・2
	世 界 史 B		3					3・8
	日 本 史 B				⑤	⑤	④	0・3・6・8
	地 理 B		③	②				0・3・6・8
公 民	倫 理	2						2
	政 治・経 済	2						2
数 学	数 学 Ⅰ	4						4
	数 学 Ⅱ		3	4		4		3・4・7
	数 学 Ⅲ						5	0・5
	数 学 A	2						2
	数 学 B		2	2				2
	数 学 C						2	0・2
理 科	物 理 Ⅰ B			④				0・4
	物 理 Ⅱ						③	0・3
	化 学 Ⅰ B	4						4
	化 学 Ⅱ			2			2	0・4
	生 物 Ⅰ B		4	④				0・4
	生 物 Ⅱ					④	③	0・3
保 健 体 育	地 学 Ⅰ B							0・4
	体 育	3	3	3	3	3	3	9
芸 術	保 健	1	1	1				2
	音 楽 Ⅰ							0・2
	美 術 Ⅰ	②						0・2
	音 楽 Ⅱ							0・2
外 国 語	美 術 Ⅱ				②	②	②	0・2
	英 語 Ⅰ	4						4
	英 語 Ⅱ		3	3	②			3・5
	Oral C.B	2						2
家 庭	Reading				6	4	3	3・4・6
	Writing		2	2	2	2	2	4
	生 活 一 般		2	2	2	2	2	4
学 校 間 連 携 開 設 科 目	書 道 Ⅰ				②			0・2
	情 報 処 理				②			0・2
	工 業 基 礎				②			0・2
小 計		31	31	31	32	32	32	94
特 別 活 動	ホ ー ム ル ー ム	1	1	1	1	1	1	3
	ク ラ ブ 活 動	1	1	1	0	0	0	2
合 計		33	33	33	33	33	33	99

クラブ活動(1単位) 1年国語クラブ(全員) 2年英語クラブ(全員)

平成11年度

課程名/全日制課程 学科・類型名/普通科 対象学級数/1学年7学級(男子)

教科名	科目名	単位数						単位数の合計
		1年	2年(文系)	2年(理系)	3年(文I系)	3年(文II系)	3年(理系)	
国語	国語 I	5						5
	現代文		2	2	3	3	2	4・5
	古典 I		3	2				2・3
	古典 II				5	3	2	2・3・5
	古典講読				2			0・2
地理歴史	世界史 A			2				0・2
	世界史 B		3					3・8
	日本史 B				⑤	⑤		0・3・6・8
	地理 B		③	②			④	0・3・6・8
公民	倫理	2						2
	政治・経済	2						2
数学	数学 I	4						4
	数学 II		3	4		4		3・4・7
	数学 III						5	0・5
	数学 A	2						2
	数学 B		2	2				2
	数学 C						2	0・2
理科	物理 I B			④				0・4
	物理 II						③	0・3
	化学 I B	4						4
	化学 II			2			2	0・4
	生物 I B		4	④				0・4
	生物 II						③	0・3
	地学 I B					④		0・4
保健体育	体育	3	3	3	3	3	3	9
	保健	1	1	1				2
芸術	音楽 I							0・2
	美術 I	②						0・2
	音楽 II						②	0・2
	美術 II				②	②	②	0・2
外国語	英語 I	4						4
	英語 II		4	4	②			4・6
	Oral C.B	2						2
	Reading				6	4	3	3・4・6
	Writing		2	2	2	2	2	4
家庭	生活一般		2	2	2	2	2	4
学校間連携 開設科目	書道 I				②			0・2
	情報処理				②			0・2
	工業基礎				②			0・2
小計		31	32	32	32	32	32	95
特別活動	ホームルーム	1	1	1	1	1	1	3
	クラブ活動	1	0	0	0	0	0	1
合計		33	33	33	33	33	33	99

クラブ活動(1単位) 1年国語クラブ(全員)

平成12年度

課程名/全日制課程 学科・類型名/普通科 対象学級数/1学年7学級(男子)

教科名	科目名	単位数						単位数の合計
		1年	2年(文系)	2年(理系)	3年(文I系)	3年(文II系)	3年(理系)	
国語	国語 I	6						6
	現代文		2	2	3	3	2	4・5
	古典 I		3	2				2・3
	古典 II				5	3	2	2・3・5
	古典講読				2			0・2
	地理歴史	世界史 A			2			
世界史 B			3					0・3・8
日本史 B					⑤	⑤		0・6・8
地理 B			③	②			④	0・6・8
公民		倫理	2					
	政治・経済	2						2
数学	数学 I	4						4
	数学 II		3	4		4		3・4・7
	数学 III						5	0・5
	数学 A	2						2
	数学 B		2	2				2
	数学 C						2	0・2
理科	物理 I B			④				0・4
	物理 II						③	0・3
	化学 I B	4						4
	化学 II			2			2	0・4
	生物 I B		4	④				0・4
	生物 II						③	0・3・4
	地学 I B					④		0・4
保健体育	体育	3	3	3	3	3	3	9
	保健	1	1	1				2
芸術	音楽 I							0・2
	美術 I	②						0・2
	音楽 II						②	0・2
	美術 II				②	②	②	0・2
外国語	英語 I	4						4
	英語 II		4	4	②			4・6
	Oral C.A	2						2
	Reading				6	4	3	3・4・6
	Writing		2	2	2	2	2	4
	生活一般		2	2	2	2	2	4
学校間連携 開設科目	書道 I				②			0・2
	情報処理				②			0・2
	工業基礎				②			0・2
小計		32	32	32	32	32	32	96
特別活動	ホームルーム	1	1	1	1	1	1	3
	クラブ活動							
合計		33	33	33	33	33	33	99

(ただし、3年次の単位数については、若干の変更があり得ます。)

創立80周年記念事業実行委員会名簿

事業部会

正副委員長

役職	氏名	備考
実行委員長	堀江 明朗	同窓会長
実行副委員長	松村 一輝	同窓会副会長
実行副委員長	群馬 信一郎	同窓会副会長
実行副委員長	今井 孝一	同窓会副会長
実行副委員長	堀口 靖之	同窓会副会長
実行副委員長	中野 具昭	同窓会副会長
実行副委員長	青木 三策	洪高東京同窓会代表
実行副委員長	中村 勉	P T A 会長

監査及び顧問

役職	氏名	備考
監査	阿部 功	同窓会監査
監査	池原 透	同窓会監査
監査	高塚 茂	同窓会監査
顧問	堀口 吉七	同窓会顧問
顧問	北村 英吾	同窓会顧問
顧問	登坂 秀	同窓会顧問
顧問	神保 俊二郎	同窓会顧問
顧問	木暮 剛平	同窓会顧問
顧問	後藤 喜久男	同窓会顧問
顧問	深井 正昭	同窓会顧問
顧問	狩野 文二	同窓会顧問
顧問	石原 尉行	同窓会顧問
顧問	大林 喬任	同窓会顧問
顧問	小淵 光平	同窓会顧問
顧問	烏田 卓爾	同窓会顧問
顧問	今井 郁男	同窓会顧問
顧問	大川原 源三	同窓会顧問
顧問	板倉 美知久	同窓会顧問
顧問	真下 誠治	同窓会顧問
顧問	角田 登	同窓会顧問
顧問	秋月 保教	同窓会顧問
顧問	永井 英慈	同窓会顧問
顧問	入澤 肇	同窓会顧問
顧問	山本 一太	同窓会顧問

役職	氏名	備考
部長	松村 一輝	同窓会副会長
副部長	群馬 信一郎	同窓会副会長
副部長	堀口 靖之	同窓会副会長
委員	深井 正昭	伊香保支部長
委員	浅見 和三郎	榛東支部長
委員	高橋 賢次	吉岡支部長
委員	轟木 昇	子持支部長
委員	佐藤 寛道	小野上支部長
委員	岡部 久雄	利根沼田支部長
委員	狩野 晃男	赤城北支部長
委員	都丸 和栄	赤城南支部長
委員	神田 義治	富士見支部長
委員	嶋村 忠夫	北橋支部長
委員	藤井 満	南橋支部長
委員	田中 利政	吾妻東支部長
委員	川越 文雄	中之条支部長
委員	斉藤 昌久	吾妻支部長
委員	宮崎 昭央	長野原支部長
委員	安斎 洋信	嬭恋支部長
委員	中澤 宏衛	六合支部長
委員	飯野 彰	榛名倉淵支部長
委員	藍沢 忠	箕郷支部長
委員	伊藤 正男	高崎支部長
委員	伊藤 光雄	渋川市役所支部長
委員	増田 健次郎	関東電化支部長
委員	清水 靖夫	北群馬信用金庫支部長
委員	根岸 治彦	群馬銀行支部長
委員	後藤 稔	東和銀行支部長
委員	大谷 輝治	前橋市役所支部長
委員	青木 茂一	県庁支部長
委員	永井 公一	神奈川代表
委員	田村 勝	野球部OB会代表
委員	神田 吉彦	剣道部OB会代表
委員	小菅 博行	サッカー部OB会代表
委員	神保 顕二	ラグビー部OB会代表
委員	桜澤 功	P T A 副会長・ 教育振興会長
委員	須佐 斎	P T A 副会長
委員	大林 美秋	P T A 監査
委員	三ツ井 孝元	P T A 会計
委員	横堀 剛毅	教頭
委員	小泉 邦明	事務長
事務局	狩野 悠	同窓会事務局
事務局・担当	高橋 靖	同窓会事務局
事務局	山田 直樹	同窓会事務局長
事務局	佐藤 治彦	同窓会事務局

記念誌部会

役職	氏名	備考
部長	今井 孝一	同窓会副会長
副部長	青木 三策	洪高東京同窓会代表
委員	阿部 光	同窓会理事
委員	牧 守	同窓会理事
委員	田中 正一	同窓会理事
委員	本木 康夫	同窓会理事
委員	唐沢 虎雄	同窓会理事
委員	松村 利二	同窓会理事
委員	吉田 喜一	同窓会理事
委員	羽仁 素道	同窓会理事
委員	飯塚 初男	同窓会理事
委員	松村 貞夫	同窓会理事
委員	山下 隆二	同窓会理事
委員	田村 茂	同窓会理事
委員	田子 正幸	P T A 副会長
委員	高橋 宏輔	P T A 監査
委員	佐藤 優	P T A 会計
事務局	烏田 要	同窓会事務局
事務局	木暮 満	同窓会事務局
事務局	広沢 秀伸	同窓会事務局
事務局	山田 直樹	同窓会事務局
事務局・担当	中村 一広	同窓会事務局
事務局	佐藤 治彦	同窓会事務局

式典部会

役職	氏名	備考
部長	中村 勉	P T A 会長
副部長	中野 具昭	同窓会副会長
委員	田部井 祿郎	同窓会理事
委員	浅見 四郎	同窓会理事
委員	大塚 昌之	同窓会理事
委員	水出 照雄	同窓会理事
委員	中野 卓也	同窓会理事
委員	横手 希芳	同窓会理事
委員	仙田 一夫	同窓会理事
委員	石田 兵庫	同窓会理事
委員	小山 宏	同窓会理事
委員	奥泉 利次	同窓会理事
委員	柴田 精司	同窓会理事
委員	桜井 直紀	同窓会理事
委員	石北 誠	P T A 副会長
事務局	木暮 満	同窓会事務局
事務局	保科 昇	同窓会事務局
事務局	広沢 秀伸	同窓会事務局
事務局	山田 直樹	同窓会事務局
事務局・担当	岩崎 尚樹	同窓会事務局
事務局	番場 幸作	同窓会事務局
事務局	吉水 孝彦	同窓会事務局

編集後記

ここに、群馬県渋川高等学校創立80周年記念事業の一環として『榛嶺—創立80周年記念誌—』を発行することができました。

すでにご覧のように、この記念誌は大きく分けると2部構成になっており、I部は同窓生の寄稿文集、II部は70周年以降の渋高の歩みや活躍をまとめた資料です。

I部については、同窓会の本部役員と期別役員を中心に約350人の方々に寄稿文を依頼し、そのうち寄稿していただいた51人の方の文集となっています。母校への熱い想いを十分に感じていただけたのではないかと思います。

II部については、創立100周年に向けて、70周年以降の10年間の資料を残そうという考えに基づいています。年表や進路の記録、部活動等の記録等は「教務日誌」・「学校要覧」・「進路要覧」を再構成しました。新聞記事等は主にこの記念誌の出版社、上毛新聞社のデータベースを利用しました。

題名を『榛嶺』とした理由ですが、同名の70周年記念誌の編集後記に記されている「榛嶺」への想いをそのまま引き継ぎたいと考えたからです。

編集者の力不足で、寄稿についてはより多くの同窓生に声をかけられなかったこと、新聞記事からの抜粋では、紙数の関係もあり、数多くの活躍の記事をごく一部しか載せられなかったことが残念でなりません。その一方で、歴代同窓会長のお写真と旧制渋川中学校第1回卒業記念写真をご家族や関係者のご協力のおかげで掲載できたことは誠にうれしい限りです。

最後になりましたが、寄稿してくださった方々や(有)イワモト写真を始めとする資料写真を提供・貸与してくださった方々に本誌の完成をここにご報告すると共に深く感謝申し上げます。また、原稿の遅れや度重なる紙面の変更と校正に辛抱強く付き合ってください、本誌の発行に尽力してくださった上毛新聞社出版局とその関係の方々に感謝の意を表したいと思います。

平成12年(2000年)9月29日

群馬県立渋川高等学校創立80周年記念誌編集委員

島田 要 (全15回) 木暮 満 (全18回) 廣澤 秀伸 (全29回)
山田 直樹 (全32回) 中村 一広 (全33回) 佐藤 治彦 (全36回)

榛嶺 — 創立80周年記念誌 —

発行日 平成12年11月4日

編集 群馬県立渋川高等学校創立80周年
記念事業実行委員会記念誌部会

発行 群馬県立渋川高等学校
群馬県立渋川高等学校創立80周年記念事業実行委員会
〒377-0033 渋川市並木町678-3
TEL 0279-22-4120(代)

制作 上毛新聞社出版局
〒371-8666 前橋市古市町1-50-21
TEL 027-254-9964

©群馬県立渋川高等学校

